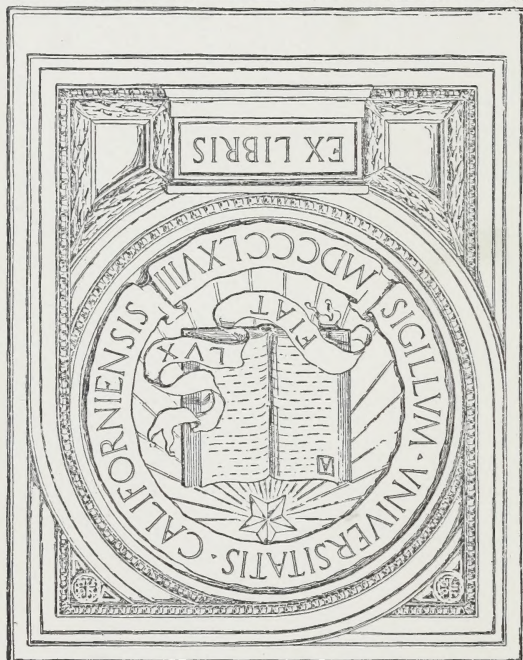




ORIENTAL
COLLECTION



UNIVERSITY OF CALIFORNIA
MEDICAL CENTER LIBRARY
SAN FRANCISCO

春陽堂藏版

註頭
國譯本草綱目
第十二冊

12, Shih-chen.

E-4147

春陽堂藏版

第十二冊

國譯本草綱目

註頭

日-4147

Li, Shih-chen.

譯文
 考定
 考定
 考定
 考定
 考定
 考定
 考定
 顧問
 監修・校註
 原著

鈴木 木矢岡 脇水鐵五郎 牧野村昭 木白井光太郎 鈴木 木村野田 信利 海一幹宗 眞康 眞海
 李時珍
 明
 醫學博士
 醫學博士
 醫學博士

Digitized by the Internet Archive
in 2012

0.0.
V12
55A
L6933R
A82
R122.1

頭註國譯本草綱目第二十冊例

- 一、 卷二十冊には本草綱目獸部第五十卷上下畜類第五十二卷上下獸類鼠類萬類怪類類第
定校正の都合都上刊行に際して屢前考の業は本冊を以てその成を告げたる考が考
李時珍本草綱目十五卷二國譯した。いづれも署名して責任を明にした。
一、 頭註の和名・學名・生産に關する異同の考證はすべて木村農學士の執筆に成り
重氏之に參じ、その木村氏の考定に係るものもは皆その姓名を署して責任を明
一、 藥名・標目・下の和名・學名・科名・考定は、岡田信利氏主として之に任じ、農學士木村
一、 及び字・解・音・訓等の分は譯者の註記である。
一、 一、 校訂・竝・病名・術語の註解は凡て監修白井光太郎博士親ら擔當された。地理、
一、 五十冊には本草綱目獸部第五十卷上下畜類第五十二卷上下獸類鼠類萬類怪類類第

戲部第五十一卷目錄

本草綱目獸部第五十一卷上

解諸肉毒.....五〇二

諸肉有毒.....
CCII.....

六零心裏.....10米

六畜爪甲蹄

.....

敗鼓皮.....三〇二

震肉.....11011

諸朽骨

二〇二

底野加.....100

..... 鳥

五九

本草綱目獸部第五十卷下

畜類下

牛	五十一
黃	五十一
黃明膠	五十一
阿膠	五十一
乳腐	五十一
醍醐	五十一
酥	五十一
酪	五十一
駝	五十一
驢	五十一
驘	五十一
驢	五十一
馬	五十一
牛	五十一

野豬.....四〇

野馬.....五五

牦牛.....七五

犏牛 牦牛 海牛 月支牛 山牛

摩牛.....四二

犀.....四四

象.....五三

犀 犏 狓 狓 狓

獐.....三三

豹.....三八

耳 駝 馬 渠 搜 黃 腰

虎.....三二

獅.....一一

獸類 上

五二.....黃鼠

三二.....貂鼠

二二.....土撥鼠

一四.....竹鼠

九一.....鼯鼠

七一.....隱鼠

五一.....鼯鼠

鼯鼠 鼯鼠 鼯鼠 鼯鼠 鼯鼠 鼯鼠 鼯鼠

〇〇四.....鼠

鼠類

九三.....滑

五三.....膾肭獸

四三.....海獺

七三.....水獺

六八三.....山獺

五八三.....敗筆

四七三.....兔

〇七三.....狼

八六三.....豺

七六三.....木狗

五六三.....獐

三六三.....獬

一六三.....貉

三三三.....狐

獸類下

本草綱目獸部第五十一卷下

一五三.....風狸

六四三.....狸

小兒胎尿.....四八七

人尿.....一八四

牙齒.....四六八

爪甲.....四七五

膝頭垢.....四七五

耳塞.....四七四

頭垢.....一七四

亂髮.....四六五

髮髮.....一六四

人部第五十二卷目錄.....三一

本草綱目人部第五十二卷

封.....四九五

彭侯.....四四八

罔兩.....四七七

山 獐 客 山 獐 山 部

一五..... 狒 狒

野 女

八四..... 猩 猩

蒙 頤 獅

五四..... 果 然

發 獨

二四..... 狻 狻

獾 康

八三..... 獼 猴

寓 類 怪 類

〇三四..... 狔 狔

食 蛇 鼠

〇三四..... 鼯 鼠

鼯 鼠 (鼠 狻)

七二.....

人槐.....五十四

方民.....一五

木乃伊.....〇五

人肉.....五十四

人膽.....七四

人勢.....五十四

初生臍帶.....五十四

胞衣水.....五十四

人胞.....七三

天靈蓋.....五三

人骨.....一三五

陰毛.....一三五

髻鬚.....〇三五

人龍.....九三五

人氣	六二五
人眼淚	五二五
人汗	五二五
人齒塗	五二四
口津唾	三二五
人精	〇二五
人血	八二五
人婦月水	四一五
乳汁	九〇五
人癰石	七〇五
人淋石	六〇五
人秋石	七九四
人溺白塗(人中白)	五九四
人尿	七八四

本草綱目獸部第五十卷上

[illegible]

名醫別錄十二種
梁の陶弘景註。

本草拾遺十五種
唐の陳藏器。

蜀本草一種蜀の韓保昇。

嘉祐本草一種 宋の掌禹錫。

種一草本類豆

日用本草一種元の吳瑞。

食鹽本草一種の明の蔡原。

一 福類二十八種

五

(本經下品)

和名

Sus cerfa, var. *domestica*, Briss.

科名 動物

名
樓

續言は眞○

○ ちあてん

猪(木)經(

豚回

三

精實

川(カ)であゐる。

癸酉は(無事)でである。

種 目 は (メ) 填 で あ る。

く、按ずるに、許氏の説文に『家の字は、毛あり足

A black and white illustration of a dog lying on its back. The dog's front paws are raised towards its chest, and its hind legs are also raised. The dog's head is turned slightly to the right, showing its eye and ear. The illustration is simple and appears to be a woodcut or a similar print style.

—いさ小は豚—
〔家〕

[五]

坎^{カン}を家^カとす。水畜であつて性は下に居^イる。穢^{タイ}を家^カとす。穢^{タイ}を食ふものだ。『家は不潔を食ふものだ。』

むものた。壯を鍛といひ、牙といひ、此を疑といひ、

——(山口県)——
——(山口県)——

[illegible]

野の日のひとも影のふり

六畜爪甲蹄木經目

敗鼓皮別錄

諸肉有毒拾遺

解毒諸肉毒目

右附方舊一百五十六、新五百三十七。

徐、時の、唯、足が短いは、遼東に産するもの、頭が白いは、豫州に産するものは、味が短い。
 梁、雍に産する。燕、冀に産するものは、皮が厚い。梁、雍に産する。青、兗、

を食ふに至つて、甚だ衰弱し、甚だ息をいふのもな。

集解 頤曰、凡そ緒は、骨細く、筋多く、高大にして重量百餘斤あり、物

集解

○ 車工の事。

種のものだ。とあらわす。禮記には、これを暴（はつ）つゝある。崔豹の古今注に、これを

では麋といひ、或は豕といふ。南楚では麋といひ、吳揚では豕といふ。その實は一

頌曰、按ずるに、揚雄の方言には「燕(四)、朝鮮地方では猪を蝦と呼ぶ、(五)、關東、

『ふて』——『ふて』である。

[illegible]

目を宗といふとある。何承天の纂文には『(二)梁州では纂音は撫(フ)と』といふ。

三子みこををと、いひ、未子みこををと、いひ、生れて三月のものををと、いひ、六月

[illegible]

冀省ノ北東省、山東省、西充、江蘇ハ
 河一北省、指ス。安徽、江蘇ハ
 南、指ス。安徽、江蘇ハ

二
十
七
日

北 部 手 指 入。吳 揚 入。

ヲ指入。南楚ハ今ノ

(五) 國東面與國以

[illegible]

二五六一地子時。

(三) 齊徐八山東青歷

草花豆類。草類。草類。草類。

頭、平、安、地、力、。漁、後、湯、

(二) 吳楚計入今江

(一) 梁州、石部、特生

【禁口痢疾】禁口五、新十五。 禁口痢疾。臘肉肺を煨くわいして食ふが妙である。(李機寄方)

方附

習慣性となつてゐるために生じた特殊現象だ。

韓。志。曰。凡そ肉には補の功があるが、ただ猪肉には補がない。これは一般に

血が衰へ、顔面に黒くろいなるを發するといつてゐる。

諸種の病證が發するものだ。諺に『猪は薑で食はねば大風を發し、中年にしては氣

蓋し肉性は胃に入れば濕熱しつねつを作し、熱痰を生じ、痰が生ずれば氣が降らずして

陰に就いていふのであつて、肉を以て陰を補するは火を以て水を濟きふところである。

ただ陽を補するだけのものだ。ここにいふ場合の虚損は陽に就いていふのではなく

震。曰。亨く、猪肉の氣に就いて世俗に補するといふその考へ方は誤つてゐる。

入をし暴はつに肥こらしめ蓋し、虚風からの結果である。

○。弘。曰。猪は使用することの最も多いものだが、ただ肉は多食してはならぬ。

のやうだ。

その意味は、蓋し猪は水に屬して氣は寒であり、能く火熱を去る點を利用したもの

て丸にし、猪肝湯で服し、或は猪肉湯、或は燂たぎ猪湯じつとうで服するのであつて、

ニ陰字チス脱ス。補下
字ニ四火。虚風所致
字ニ四火。虚風所致
字ニ四火。虚風所致

發明

時珍曰、按ずるに、錢乙の小兒の疳病を治するは麝香丸は猪膽で和し

たるを療す【日華】

の人が食ふに宜し【拾遺】腎氣虚竭を補す【千金】水銀風、并に土坑の惡氣に中り

主治

【狂病の久し】癰をぬき瘰癧を療す【別錄】丹石を壓し、熱毒を解す。肥熱

風氣を發せぬ。舊い雞を焚けば熱し易い。桑白皮、高良薑、黃臘を配合すれば
れば人體を傷める。凡そ猪肉を煮るに皂莢子、食合せれば滯氣する。龜肉と食合せ
れば蟲を生ずる。羊肝、雞子、鰾魚、豆黃と食合せれば滯氣する。牛肉と食合
吳茱萸と食合せれば痔疾を發する。胡荽と食合せれば人の臍を爛す。麥と食合
蕎麥と食合せれば毛髮が落ち、病風を患ふ。葵菜と食合せれば少氣する。百合花菜、
耳を犯せば人をして風を動ぜしめる。生薑と食合せれば面を生じ、風を發する。
○烏梅、桔梗、黃連、胡黃連と反す。これをして犯せば人をして瀉利せしめ、瘡
周禮に『豕の盲を視て交捷するは星なり』とあるは、いつれを指したのだ。
なり、米猪は肉中に米がある。説文に『豕が星下に食すれば息を生ず』とあり、
猪、牡猪、病猪、黃臘はいつれも食つてはならぬ。黃臘は煮れば汁が黄に

[illegible]

ス
病。刮腸。
瀉血。下

關
節。白。癰。腫。
風。病。急。性

石の毒を解す【】發熱し、衰弱し、危篤なるには、肥豬肉五斤、葱、薤半斤を煮てて食
切つて膾にしして食ひ、或は羹粥、炒して任意に服す。（食醫心鏡）【丹】
ある。（近效）【風狂】風狂して歌ひ笑ふもの。行走して休まぬには、鞞豬肉一斤を煮熟し、
呪文を唱へ病處に向けて相州の張如意、張得興、是れ汝虎の本師、急に『
虎病病猪串三串を用ゐ、大麻子一合、酒生薑を相和して口に入れて喫さ、肉
に刮き、患部に貼つて連うに換へる。三片にしてその腫が立ちに消く。（簡便）【白（二）】
これは外國の方である。（張文仲方）【破傷風腫】新たに屠殺した猪肉を熱に乗じて片
洗つて壓して乾し、切つて膾にして蒸、薤で食ふ。一日三回。氣を下し、風を去る。
肉一雙を切り、生薤で食ふ。（心鏡）【身腫】心腫して食ふ。（心鏡）【浮腫】浮腫脹満
切つて鉤子にし、猪脂で煎熟して食ふ。（心鏡）【食ふ】食ふ。（心鏡）【煩満】煩満するは、猪肉を
自然にそれれを食ふ欲望を起すものだ。（活幼口占）【嗽】嗽。氣。上。【上氣】上氣。嗽。煩満するは、猪肉を
香く炙き、膩粉末半錢を上に鋪いて食はせる。或は鼻頭に置いて香を聞かせれば
【小兒の（二）】刮腸。病疾で禁口し閉目し、至つて重きには、精猪肉兩を薄く切つて

位ノ地イノノカ
(五)亥トハノ方

(四)大觀ニハ防ニ作
ノ病中ヲ生ハ飲
ノ腹ヲスハ酒家

る。これを臘ロウと名ける。一升毎に雞子トリノコ四十箇を入れるが更に良し。

恭キョウ曰く、十二月の上の亥五ノミの日に取つて新瓶フラスコに入れば百日間ミナモト亥ミナモトの地に埋めて用ゐ

もの。をば膏といひ、油といふ。臘ロウ月に煉淨リョウジヨウして貯藏チヨウザウしたものを用ゐる。

釋シヤクけつた。脂シといひ、肪ホウといひ、肪ホウをば肪ホウといひ、脂シといふ。釋シヤクけつ

修治

(時珍)記載は膏ロウに濟キにある。

紙シで裏んで香しく煨ヒき、それを食つて酒で送ソウする。酒布袋リウブツを利用するものだ

積シキの面黄メンワウ、腹ハク腹ハクは、一兩を切つて泥ドロの如ゴトシにし、廿ニ遂ス末マツ錢センを合カフせて丸マダラに作り、

項コウ肉ニク俗ソコに槽頭肉サウドニクと名けるもので、肥ヒせてカハてカハ能く風フウを動ユルずる。主主治

瘰癧ロウリの意味ある物だ。

臘ロウ猪耳シヤウジを梁リヤウ上に懸ケルければ何足なきナク豐トウな生活シヤクホが出来るが、これはやはり厭イヤ

る。又、圖纂トザンに『五月の戊辰ボウシンの日に猪頭シヤウドでヒ祀ヒツをヒツれば求モトむることコトの意イになる。

るに臘猪頭ロウシヤウドの焼ヤクがカ雞卵キダン白ハクで調テウへて傅フけるカあるが、このものモノ「だ」といふたカとあ

向ムカフにそれを知チるものモノがカなかつたが、名醫メイイ都ト尤トウといふが、聖方セイホウに、この病ヤマイを治ナゲルす

味ミだけだ。といつた。そこで任ニは雪ユキなるものに就ツキいて、諸方シヨホウの人ヒトに訓ツケねても、一

一に數回易へせざる瘰癧をた。その處方を懇望すると、王通は「それはた雪玄の
 なつてかやな状態の瘡が生ずるものだから」といつて、ある奇異なる散藥を傳け、
 結^{けつ}が因となり、二は氣血の凝滯が因となり、三には誤つていふもの、一は風毒の蘊^{うん}
 因が、因となり、按ずるに、名醫錄に、『聖元任道が黒く腫れて狭く長い

發明

○紅
○紫

臘猪頭

【焼灰は魚臍瘡を治す】

U. N. C. 25. 1

し、驚瀾、五痔を去り、丹石を下す。また風氣を發する【食療】

五味と共に煮て食へば、虚乏の氣力を補

【寒熱、五癰、鬼毒】(千金)

吳王

これれを食へば風を生じ、
(三) 疾を發するのだ『とある。

【し時珍曰く、按ずるに、生肉を『猪肉の毒』はただ首に在る。故に病あるものか。】
 氣味

氣味

寶曆

年の煙肉を切片して包裏すれば出る。救急方(

461

2
2
2
2

人の足に著ければ肌を穿ち、肉中に入つて人體を害する。【竹刺】の肉に入つたところ【タム】多

6725

(千金方)

邪、毒

C

二痰字アリ。要二痰上

【赤、白、下】煉猪脂三合、酒五合煎服する。(千金方) 【小便不通】

猪脂一斤を溫熱にして服す。一日一回、利して療えらるものなり。時

す。(肘後方)【五種の瘡疾】黃疸、黧疸、酒疸、黑疸、女勞疸である。黃蘗汁わうびゃくじゅうのやう

舊五、新二、十八。【傷寒時氣】豬膏彈丸。溫水に溶かして一日三回服。

(別錄)

酒で多く服するが佳し【徐之才】○【麝香】として用ゐれば、髪を生じ、面を脱くすくする

【恭】皮膚を悦よろこび、しく手てとして用もちひては、（イ）【イ】転まひ（イ）ば、（イ）【イ】胎産衣の下にひきは、

主效がある【蘇頌】
 蠱を殺し、皮膚風を治す。
 惡瘡に塗る【日華】
 癰疽を治す【蘇頌】

瘧血を散す【孫思邈】
 血脈を利し、風熱を散じ、肺を潤す。膏藥に入れば諸瘡に

腸、胃を利し、小便を通じ、五疸、水腫を除き、毛髮を生ず【時珍】冷結を破り、

藥は斑人毒を解す【別録】地、長、野、毒、肝の毒を解す、

氣味 【甘し、微寒にして毒なし】 烏梅、梅子と反す。主 沿

膏は負革肪と名け、道家で五金を煉るに使用する。

弘景○曰く、水を入れてはならぬ。臘月のものは幾年経つて腐敗しない。項下

【氣味】甘し、寒にして毒なし【主治】撲損、惡瘡【小兒の解

薑、醋を入れて喫へば瘰癧を癒する。(並齊方)

【附方】新二。喉痺の已に破れたるもの、酒に溶かして洗ひ、猪腦を蒸熱し、

けば易へる。手、足の皸裂出血を治するには、酒に溶かして洗ひ、併に塗る(時珍)

【主治】風眩、嘔、寒、腫、腫に主效があり、紙上に塗つて貼り、乾

酒で猪腦を食ふが、これは自ら腹を引くものだ(とある)。

【氣味】甘し、寒にして毒あり(時珍)【主治】延壽には『今一般に鹽

を去る』とあり、孫真人の食忌には『猪腦は男子の陽道を損じ、房事をして臨んで事を

【氣味】甘し、寒にして毒あり(時珍)【主治】延壽には『今一般に鹽

日に四十片易へる。甚だ妙である(意救方)

【氣味】甘し、寒にして毒あり(時珍)【主治】延壽には『今一般に鹽

【氣味】甘し、寒にして毒あり(時珍)【主治】延壽には『今一般に鹽

【氣味】甘し、寒にして毒あり(時珍)【主治】延壽には『今一般に鹽

【氣味】甘し、寒にして毒あり(時珍)【主治】延壽には『今一般に鹽

風眩ハ陰陰連。

字アリ。大觀ニ防下肉

水の著かぬ緒血を漉して水分を去り、晒乾して末にし、酒で服用す。液を取つて甚だに和して飲む。附後。【中】潮腹脹は食事振るが暮に食事は不能なるは、鹽、酒に和して乗じて熱を殺す。

方

新五。

【交接陰毒】腹痛して死せんとするは、

は血腥を得れば飽きて伏するものだ。

これも確に一説であるが、しかした蛇蟲があるため雑を作すものもあり、蟲食へば癰えるといつた。蓋し血を以て導いて原に歸せしめる意味であつて、食が變じて痰となるもので、或はこれを血嘈といふ。多く緒血を炒つて汗が發するに、按ずるに、陳日明は婦人の雑難はいづれも血液、汗

發明

時珍曰く、

(吳瑞)

【清酒で炒つて食へば嘈雜の蟲あるものを治す】時珍【丹】右を解す

眩運、及び淋瀝【蘇】卒に下血して止まぬには、清酒を和して炒つて食ふ【愚】

主治

カノ其ノ心經衰弱云々

【生】血は、實脈暴氣、及び海外瘴氣を療す【日華】中風、絶傷、頭風、

黃豆と共に食へば滯氣する

地黃、何首烏の諸補藥を服するものはこれを忌む。能く陽を損するといふことだ。

(三)瘡一名陰疽。
(三)瘡一名濃瘡。

血

氣味

【思】平にして毒なし。

曰。時珍。

た(三)肥瘡の汗の出るものを治す。(三)瘡方。

を和して劑とし、火中で香く燻いて研末し、先づ鹽水洗淨してかみ敷く。

碎き炙いて髓を出し、熱し取つて塗る。(小品)【小兒の頭瘡】猪鬃中の髓で(三)膩粉を

待つて末にし、麻油で調へて塗る。【小兒の瘡】小兒の錢を共に銅器に入れて熬稠し、冷えるを

【小兒の眉瘡】猪鬃六七箇、白膠香二錢を共に銅器に入れて熬稠し、冷えるを

傳ける。(千金方)【小兒の腫】猪鬃二錢、杏仁半兩を研つて傳ける。(千金)

の效神の如きものだ。(瑞竹堂方)【小兒の腫】猪鬃二錢、杏仁半兩を研つて傳ける。(千金)

胡黃連、烏梅各一錢、韭白七根を共に七分に煎じて服する。三服に過ぎずしてそ

附方新七。【骨蒸勞傷】猪鬃一條、猪膽汁一箇、葶藶一箇、柴胡、前胡、

補するに在る。

わて和して丸にする。その目的は腎、命に通じ、骨を以て骨に入り、髓を以て髓を

發明

時珍。曰。按ずるに、丹溪の虚損を治する補陰丸は、多く猪鬃を用

劉完素曰、猪は水畜である。故に心は恍惚を鎮めるのだ。

發明

主效がある【蘇恭】

後の中風、血氣驚恐【魚隱】血不足、虚勞を補す【蘇頌】五臓は小兒の驚搐出汗、畏寒、逆氣、婦人産

主治

吳茱萸と食ひ合せてはならぬ。

氣味

【味甘く鹹し、平にして毒なし】頭曰く、多く食へば心氣を耗する。

【心後方】蛇が七孔に入つたと、母猪尾を割いて、血を滴し入れれば出る【千金方】

て枕すれば活さる。これは桑君が扁鵲に授けた法として、魏夫人傳に記載がある。

附方

【中惡卒死】猪尾を断つて、血を取つて、飲み、并に豚を縛つ

惡卒死を治す【時珍】

【主治】痘瘡倒壓には、一匙で龍腦少量を調へて新汲水で服す。又、中

尾血 一匙で龍腦少量を調へて新汲水で服す。又、中

に向つて酒で一丸を吞む。下らぬと、きき再服する【婦人良方】

の催生【生】開骨膏——猪心血で乳香末を和し、梔子の丸にして、硃砂を衣にかき、東

須臾にして紅を活血する神效がある。乾血のい場合、生血を用ゐる【婦人良方】

猪心血を瓶に取り、乾し、一錢づつ、龍腦少量を入り、研り、勻せて酒で服す。

鏡ノ大ノ大ニ此ヲ。心
後方大ニ此ニ
ニ此ニ此ニ此ニ

【中】支太醫の秘方で、猪肝一

合水、米一撮、陳皮、四葉、

【風】毒脚氣、猪肝を生

用、醋を入れたて、洗ひ、

【卒】腫、面、生、猪肝一具を細切して、

【葱】、薑、豉、葱、切り、

【金】、手、食、つ、取、それ、同、一、日、

【猪】肝、一具を切し、

【疾】、猪肝一具を切し、

【目】、肝、血、を、藏、する、こ、と、を、主、る、も、の、だ、

【猪】肝、一具を切し、

【猪】肝、一具を切し、

【猪】肝、一具を切し、

【猪】肝、一具を切し、

【猪】肝、一具を切し、

ノ字アリ。觀ニ下ニ之

誤。或ハ恐クハ劑ノ

洩久滑、赤、白帶下を治す。一箇を薄く批いて、詞子末を搗き、著けて炙き、再び搗
微し洩するものだ。先に利しつゝあるものは服してはならぬ【（器）】冷勞、虚、冷
【（器）】主效がある。

主 治

必ず人を傷める、とある。

【（器）】小兒驚風、【（器）】切つて生じて、薑、醋で食へば脚氣に主效がある。
【（器）】絶氣が肝に歸するものだ。いつれも多く食つてはならぬ。
合せれば人の神を傷める。【（器）】鵲合せれば面を【（器）】延壽に書は殺され
く、服薬中は食つてはならぬ。魚鱸と食合せれば癰疽を生ずる。鯉魚腸子と食
【（器）】肝薬に入れるには子肝を用ゐる。【（器）】氣味【（器）】苦し、温にして毒なし【（器）】時珍曰

一粒を入れた酒と共に煮て食ふ。【（器）】心【（器）】猪心一箇を豆豉汁で煮て食ふ。【（器）】猪心一箇を、每歲胡椒
には、猪心一箇を、【（器）】産後の邪風【（器）】驚悸する
して包んで煨熟し、半夏を去つて食ふ。【（器）】證治要訣【（器）】半夏七箇を猪心中に入れ、小便で紙を濕
せる。【（器）】心虚嗽血【（器）】沈香末一錢、【（器）】煮熱して、藥を去つて食ふ。【（器）】數服、紙を濕
破開し、人參、當歸各二兩を入れ、煮熱して、藥を去つて食ふ。【（器）】數服、紙を濕
【（器）】附方【（器）】心虚自汗【（器）】睡らぬには、猪心一箇、猪血を帶びたものを

て食は冬になつて痘を發する。【肺】肺を郁す【蘇頌】肺虚嗽を療する

主治

白花菜と食合せることは人をして氣滯せしめ、霍亂を發せしめる。八月に館を和し

【味甘】甘し、微寒にして毒なし【頤頤】大廉仁配合するが良し、

味氣肺

寶方

し、藥のあるものをば吞み、藥のないものをば嚥み下す。一服にして效がある。【衛生

半は藥末を滾ぜ、一生には滾ぜず、靈で兩者を標記し、いづれも餽飭にして煮熟

【癰】胡椒、吳茱萸、高良、各錢二、錢を末にし、猪脾一條を附にして炒熟し、その

【不定時に發する。】五錢以下は二錢、十錢以下は三錢、一服は三服。【保壽堂方】

子七錢と共に搗いて末にし、空心に無灰酒で調へて服す。一一年以下は病は一服で瘥

錢をつつを擦り、七錢を共に瓷器に盛つて七日間置いて鐵器で焙じ乾し、又、水紅花

【附方】脾積塊に煮て食ふ【蘇頌】猪脾七錢を用ゐ、各錢を新針で刺し爛して皮硝一

生薑、葱白、陳米、陳米、煮て食ふ【蘇頌】脾、胃の虚熱には、陳橘紅、人參、

【主 治】脾、胃の虚熱には、陳橘紅、人參、

脾は味が泥のやうである。土に屬するものだから、いふことが明だ。思、凡そ六

字、煮、下、如、米、水
リ、字、煮、下、如、米、水

脾

俗に脾貼アツクと名ける。

氣味

【氣】澀し、平にしして毒なし【味】時珍。諸獸の

次三十九アツク丸まで増加して米飲で服す。（聖惠方）人の手で梧子大の丸にし、空心に二十九丸から漸武火で煮乾し、熨き爛らし、幾重にも重ねて米の盡るまでし、童尿五升で文に肝を一重布フいて甘草末をミ掺り、幾重にも重ねて米の盡るまでし、童尿五升で文に驚悸し、煩渴するは、猪肝一具を糸に切り、生甘草（生）末五兩を用ゐ、中し、來るものだ。（附後）【打撲の青腫】猪肝を炙いて貼る。（千金）【急勞疾悴】朝夕寒熱散二三貼を服すれば效がある。（附要）【婦人の陰痒】猪肝を炙いて納れる。蟲が出胃食（醫心鏡）【牙疳危急】猪肝一具を煮熟し、赤芍藥をミ麤けて任意に食ひ、後平胃【方】肝熱目赤（赤白）一握と鼓汁で煮し、熟するを待つ。子三箇を投じて食ふ。して皮膜を去り、白（葱）一握と鼓汁で煮し、熟するを待つ。子三箇を投じて食ふ。心に五十九丸飲を下する。（心鏡）【遠視力の乏しきも】肝虚である。猪肝一具を細切末にし、白粥を煮て布で絞つた汁で多く人の手で梧子大の丸にし、一日五回、空と汗出るもの。これは脾、胃の虚である。猪肝一斤を薄く切つて瓦で焙じ乾して具、蜜一升を共に煎し、二十回に分服する。或は丸にして服用す。（附後）【食事を攝る

後字ニ
○大ニ
○方ノ上ニ

三錢を中に入れ、荷葉で包んで煨いて食ひ酒で飲下す。（本草難度）【閃脇痛】

猪積、肥水を去つて杜仲末

に、猪積、肥水を去つて煮て食ふ。

【腎虛腰痛】猪腰子一、胡椒、鹽、葱、薑、椒、酒、以、之、煮、令、爛、服、之、。

【腎虛腰痛】猪腰子一、胡椒、鹽、葱、薑、椒、酒、以、之、煮、令、爛、服、之、。

【腎虛腰痛】猪腰子一、胡椒、鹽、葱、薑、椒、酒、以、之、煮、令、爛、服、之、。

附方

【腎虛遺精】汗多、夜中鬼物と交接するに、は、猪腰一箇

を用いて煮、羊腎の煮湯で、藥を煎じて、服す。

【腎虛腰痛】猪腰子一、胡椒、鹽、葱、薑、椒、酒、以、之、煮、令、爛、服、之、。

【腎虛腰痛】猪腰子一、胡椒、鹽、葱、薑、椒、酒、以、之、煮、令、爛、服、之、。

【腎虛腰痛】猪腰子一、胡椒、鹽、葱、薑、椒、酒、以、之、煮、令、爛、服、之、。

【腎虛腰痛】猪腰子一、胡椒、鹽、葱、薑、椒、酒、以、之、煮、令、爛、服、之、。

【腎虛腰痛】猪腰子一、胡椒、鹽、葱、薑、椒、酒、以、之、煮、令、爛、服、之、。

【腎虛腰痛】猪腰子一、胡椒、鹽、葱、薑、椒、酒、以、之、煮、令、爛、服、之、。

故であるか。蓋し豬腎は性寒であつて命門の精氣を補することは不能なのだ。方
 食へば人をして腎虛せしめる『といひ、いづれのかやうに矛盾するは何
 のであるか、久しく食へば人をして子少をからしめる『といひ、孟詵はまたた久
 とはいひ、日華はまたた久しく食へば人をして子少をからしめる『といひ、又『腎を補するも
 といひ、又『腎氣を理し、膀胱を通ずるもの』の

【消渴を止め、産勞の虚汗、下痢、崩中を治す】（珍時）

【毒】ドク 【治】チ 【華】H 【塵】チン 【補】ボ 【壯】チヤウ 【積】チキ 【消】シヨウ 【痰】タン 【順】ジュン 【除】チヨ 【利】リ 【痰】タン 【魚】イサ 【鱗】リン

主治 腎氣を理し、膀胱を通ずる【別録】膀胱を補し、膝を暖め、耳を

人の眞氣を損じ、兼ねて虚運（ウツロイ）を發する。

[illegible]

に、煮て薺菜仁末を醃けて食ふ【時珍】記載は要訣の諸方にある。

一、眞竹刀で切片し、麻油で炒めて共煮し食ふ。又、肺虚嗽血を治す。

手^て批^ひで六塊にし、空心に喫つて米湯で送下する。（聖濟總錄）【久泄の止まぬもの】
 猪腰子^{しよ}一箇を七刀に批開し、葛根粉^{かこん}一、麝^{しゃ}錢^{せん}をそれに掺^まつて合定し、一邊毎に三回半炙^あきぬきと^は滓^しと共に丸にして服す。（百選方）【酒積面黃】（腹が脹つて消かぬには、
 碎^{くだ}き、人參^{じんじん}、當歸^{たうき}各半兩を入れて八分に煮取り、一箇を水腰子^{すいようし}を喫つて汁で送下する。）
 水で煮て^く喫^くふ。（心氣虚損）【久嗽の瘥えぬ】（猪腰子一箇を水腰子で一一碗で汁で送下して煮て切
 しつゝ服して汗を取る。（肘後方）【久嗽の瘥えぬ】（猪腰子二箇、水七升を二升に煮て少
 に分服する。（肘後方）【卒^そに起つた嗽】（猪腰子二箇、乾薑三兩、水七升を二升に煮て少
 しは再服する。（肘後方）【肘傷冷痛】（猪腰子一箇、桂心二兩、水八升を三升に煮て三回
 錢を入れ、紙で裏んで煨^わ熱して食ふ。（小便の利するが効果のある。利せぬと
 粳米と共に粥に煮て食ふ。（卒然の腫満）【猪腰子を批開して甘遂末、
 氣^き嘔^{おう}逆する^は、猪腰子一對を醋^{すゐ}、五味で調理して一日一回食ふ。（或は葱白、
 薤^{わい}白^{はく}根^{こん}、人參^{じんじん}二分、防風^{ぼうふう}一分を末にし、共に粥に煮て食ふ。（奉親養老方）【老人の脚
 飲^{いん}下^かす。（備門事親）【老人の耳^{みみ}聾^{そう}】（猪腰子一對を膜を去つて切り、粳米二合、葱白二根、
 腎一箇を批片して鹽^{しほ}、胡椒^{こしょう}で淹^ひけ、甘遂^{かんすい}末^{まつ}三錢を入れ、荷葉で包んで煨^わいて食ひ酒で

[illegible]

す。養老方【胎氣の溫養】胎が九个月に達した證候の兄をとさ、猪肚一箇を五味で洗つて布で絞乾し、蒜、椒、醋、五味を和して常に食ふ。また熱勢を治す。三十九つづの米を米飲で服す。食鹽心鏡（食鹽心鏡）【老人の脚氣】猪肚一箇を洗淨して片に切り、四兩、知母三兩、麥門冬二兩を入れて縫合し、蒸熟して搗いて梧子大ほどの丸にし、各○仲景の猪肚黃連丸——清濁を治す。雄猪肚一箇に黃連末五兩、桔槎根（桔槎根）白梁米各一取、少量の豉を入れ、湯するとき飲む。肚を食つてもよし、粥に煮てもよし。汁を、消渴飲【水】晝夜に數斗の水を飲むものには、心鏡では、雄猪肚一箇を煮てて汁が、この方に平胃散三兩を入れて丸にして服して平安を得た』といつてある。飲で服す。丁必卿は『毎日五更に必ず一回水瀉し、あらゆる藥も效がなかつた【猪肚一箇に蒜を入れて煮爛し、膏に搗いて梧子大の丸にし、二十九つづの米を半、葱白七箇、粳米半升を納れて密縫し、煮熱してて食ふ。金實（金實）】水瀉の止まぬもあて虚を補するは胃を以て胃を治するのだ。

附方

舊 新 二 九
【虚風の補益】猪肚一具に人參五兩、蜀椒兩、乾薑兩

發明

時。曰く、猪は水畜であつて胃は土に屬する。故に方藥ではこれを用

(最)

一、

味と共に煮て食ふ。（醫林集要）【産後の尿床】【方法は上に同じ。】

【猪脬】猪脬各一箇を用ゐ、糯米半升、尿の中に入れ、更にその脬をその脬の中に入れ、

【産後の遺尿】【産後の遺尿】（千金）炙いて食ふ。炙ひ、猪脬を洗ひ、

附方

は存外少だが、まことに巧みな思ひのきの方法である。

尿が出た病が癒えた。この法は羅天益の衛生寶鑑に記載されてある。それを知る者

の一端に、数月に死に垂たる姦女が、轉尿を病んで小便が不通となり、腹が鼓のやうに脹

る。この數月に死に垂たる姦女が、轉尿を病んで小便が不通となり、腹が鼓のやうに脹

從ふ。【發明】時珍曰く、猪脬の主が、いづれも下焦の病にあるは、やがて類を以て

遺尿、疝氣痛、陰囊濕痒、玉莖に生じた瘡

【治主】夢中

【治主】夢中

【治主】夢中

【治主】夢中

【治主】夢中

膀胱。即チ

麥二ノ荒花ト胡
物。麥。荒花。胡。

米飲で服す。○又ある方では、猪臟に槐花末を満てて縛定し、醋で煮爛して梧椰子を奇效では、猪臟に黄連末を納れて煮爛し、搗いて梧子大の丸にし、三十九つをつを○麥を煮れて納れて食ふ。

附方

新三

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

【麥風腸毒】救急では、大腸一條に荒花(荒花)を納れて食ふ。

がある。

汪機曰、朱奉議が傷寒五六日にして癰出するを治するものに猪膽雞子湯といふ

つぎふは

ぬやうになるのである。

へたのであって、苦は心に入つて脈を通じて、寒は肝を補して陰を和するから格拒せ
陽薬を與へては陰氣が拒するために入ることを得ないが、故に猪膽汁を加
のを主として用ゐた。蓋し陽氣が非常に虚にして陰氣だけ獨り勝つものには、純は
肝が厥急し、脈が微にして絶えんとするものには、通脈に逆湯に猪膽汁を加へたも
なからしめる所以である。又曰く、霍亂病で、吐が已に斷え、汗が出て、格拒の患
鹹、苦の物を白通の熱劑中に和した理由であつて、その氣をして相從つて拒格の
去つてから熱の性が發する。故に病氣が自ら癒えるのである。それが尿、猪膽の
熱を並行すへきものである。そこで熱物を冷服すれば、さむは下つて後に冷に體が消し
湯に猪膽汁を加へたものを主として用ゐた。蓋し寒の逆なるものを調へるには、白
又、少陰下痢が止まずして厥逆くわいつして脈がなくなき、乾燥を潤しほして便を瀉するものである。

發明

成。已。曰。仲景は猪膽汁に醋少量を和して、殺道中に灌ぎ、大便秘を通

に入れた髪を沐すれば、臍を去つて光澤にする【時珍】

に、目赤、目翳を治し、目を明にし、心臓を清し、肝、脾を涼す。湯

を、疳疔を殺し、下部に三寸納れて灌ぐ。立ちろに下る【藏器】

消渴。小兒五疳に蟲を殺す【蘇頌】小兒の頭瘡に敷く。大便秘を治するに、

【主 治】傷寒熱渴【別錄】骨熱勞極、

【氣 味】苦、し、寒にして毒なし【治】

に、猪胞で熱に乗じて裏む。蟲を引き出すものである【奇效方】白朮瘡洗ひ刮つて清淨

豫め葱湯で洗つてから用うへきものである【白朮瘡洗ひ刮つて清淨

紅く煨いた新磚で焙じ乾して末にし、黄錢を入られ、三五回それとを摻れば瘡を癒する。

【玉 莖】生じたり【瘡】臭腐するに、猪胞の中の一、二を去つて生を留め、

つを温酒で服す【聖濟總錄】腎氣瘡【猪胞を火で炙き、鹽、酒で吃ふ】救急

の度なきもの【乾猪胞十箇を剪破して帶に、焼いて性を存して末にし、一

し、酒で煮熟して食ひ、酒で飲下し、その薬をば焙じ搗いて丸にして服す。【消渴

箇を洗つて小茴香、大茴香、川椒子等分を填満し、青鹽を入れて縛定

[illegible]

ノ如クナルヲ云フ。
 上ニ顯出スル皮膚。風膚。
 (三)假性風疹。
 (三)風疹ハ猩紅熱又

願(七三)願、一名殊願。

羊麝の條下を見よ。

發明

(時珍)

【主 治】項下の癭氣には、互で焙じて研末し、毎夜錢一つの酒で服す。

【主 治】王璽は猪の喉系下に在る内閣（さいかく）で、一箇の大いさ葉ほどで微（かく）し、色は紅い。

【主 治】音は掩（エン）である。俗に咽舌と名けるもの、これとまた猪子（たぐ）と名ける。

【主 治】汁に煮て食ふ（孟詵）

【主 治】舌 脾を健にし、不足を補し、人を能く食せしめる。五味と和し

を水で服す【主 治】時珍 記載は千金にある。

【主 治】鼻 鼻は目中の風翳を治す。灰に燒き、一、二、三、回、方寸匕

服すれば盜汗を治す【主 治】宗爽 蜀椒（しやくわ）末半錢を調へて夜

【主 治】上唇は凍瘡痛痒を治す【主 治】無憂 湯に煎じ、多く食へば風を動する。

【主 治】耳垢 蛇傷、狗咬（くわう）に塗る【主 治】別錄

【主 治】益し、利（た）つたものである。

【主 治】少陰の客熱を解す。白蜜を加へるは燥を潤ほし、し、し、し、し、白粉を加へるは氣

母猪乳。時珍曰、く、排取法は、馴れた猪が乳を飲ませる時を待てて後脚を提

撻を細切し、常歸二、分と三、酒一、升に煮て分服する。(普濟)

附方 新。一。驚癇中風【驚癇、熱し、吐き、沫を出すに、は、豚卵一

する。其散中に用ゐてある。

病、少腹急痛を治す。二、箇を熱酒で吞めば瘥える。(時珍) 又、古今錄驗の五癰を治

を除く。實豚、五癰、邪氣、【本經】驚癇、癰疾、鬼疰、瘰癧、寒熱

氣味

【甘し、溫にして毒なし】主

治

たのは誤だ。

にある右子養湯、産後の瘵勞を治する右子湯に、いづれも猪腎を用ゐてて右子とし

に豚卵といふ。濟生方猪右子といつてあるそのものだ。三因の消渴を治する方故

時珍曰、く、豚卵とは猪の牡外腎のことだ。牡猪は小なることと多きこととを去る。情去する。故

藏する。頭、く、豚卵は猪子のこととであらう。

豚卵

釋名

豚卵(本經) 猪石子

別錄に曰く、陰乾して敗壞せぬやうに貯

を温酒で調へて服す。

ル。合、婦、陰、陽、易、病、入、熱、染、病、云、云、ヲ、云、フ。

情去ハハ去ハハ情去。

め、熱に乗じて、塗る。（聖濟方）【下痢紅白】臘猪骨を焼いて性存して研末し、三錢

を、飲む。（三。四方）【浸淫諸瘡】猪牙車骨の年久しきものを椎破し、焼いて脂を出さ

し、蓮肉四十九粒、炙甘草二兩、西木香一錢、水五椀と共に煎じて汁を取り、濁する

新。【消渴疾を治す】猪脊湯——猪脊骨一尺二寸、大棗四十九箇、新

附方

新三。

しを服す。頰骨は、焼灰は痘陷を治し、煎汁を服すれば丹藥の毒を解す。（時珍）

主治

骨

錢を服す。又、痘瘡倒陷を治す。（時珍）

一、燒いて服す。（別錄）又、蛇咬を治す。（日華）【牛肉中毒には、灰に焼いて水で

氣味

主治

【甘し、平なり】

の料で癰える。十二月末日に調する。酸、鹹、油（油）。灑氣物を忌む。

四錢を末にし、就寝時に二錢つづを冷酒で徐徐に服す。五服で效が現れる。重きも

猪麝を焙じて四十九箇、沈香二錢、眞珠を砂罐で煨いて四十九粒、沈香二錢、紅

夜露し、取出して炙いて食ふ。二服にして效がある。○○醫林集要では、開結散

附方

新二。

【氣】杏林摘要では、猪鬃七箇、酒麝三錢を水瓶中に入れて

滓^{すじ}三兩、水三升を汁半升に煮て、冷えてと取出し、粉を傅ける。(外癰)

やうにし、夜顔に塗り曉方洗ひ去る。千金要方【蛇頭】蛇頭陰を損じたるもの。猪蹄具、

れて漬ける。(母後)【老】老人の顔を光澤ならしめる。母猪蹄具を漿に煮て膠の

んとするに、母猪蹄具を毛を去り、水一斗、葱白一握と煮た汁に少量の鹽を入

ふ。(毒師)【乳發の初期】方は上と同じ。【天行熱毒】手足を攻めて腫痛し、

ぬとと再び試みる。【癰疽發背】母猪蹄一雙、通草六分を綿に裹み、羹に煮て食

れて粥にし、或は羹にして食ふ。或は身體微熱し、少汗が出れば佳し。なほ通

に煮取り、土瓜根、通草、漏蘆各三兩を入り、再び六升に煮、滓を去り、葱、豉を納

六升に煮て飲む。或は通草六分を加へる。【外臺】母猪蹄具を水二斗で

【附方】新、五、三婦人の乳無きもの。外臺では、母猪蹄具を水二斗で

を用ゐ、油を去つて種種の藥を煎して洗ふのである。

肉を去るに有効な【時珍】外科要にある癰疽を洗ふ猪蹄湯の數方は、猪蹄の煮汁

癰疽を托し、丹石を壓す。煮た清汁で癰疽を洗ひ、熱毒を漬ければ毒氣消し、惡

を洗入【別錄】肌膚を滑にし、寒熱を去る【蘇頌】羹に煮て用ゐれば乳脈を通し、

【主 治】煮汁を服用すれば乳汁を下し、あつらゆるるる毒薬を解毒す。傷の癰疽の諸敗毒を瘡に下し、乳を服用すれば乳汁を下し、あつらゆるるる毒薬を解毒す。傷の癰疽の諸敗毒を瘡に下し、乳を服用すれば乳汁を下し、あつらゆるるる毒薬を解毒す。

247

なにか、手に抹するが甚だしい。一ヶ月以内の初生児の胎驚には用ゐることを認められてゐる。東宮觀察の子がこの病のときこれを用ゐて奏効した。口の中に抹するが甚だしい。一ヶ月以内の初生児の胎驚には、牛乳少量と共ともにせられ、楊土瀉は小児の口嚙かみして開かせれば驚癇、痘疹の患を免れ、やうになる。『いと、小児は乳を代用する。一ヶ月以上飲ませれば驚癇、ひ、張煥は小児初生に乳を満一ヶ月まで乳を以て熱を治すのである。これを正治といふ。故に錢乙は『初生小児は、この場合は寒を以て純陽に屬し、その驚癇もまた風熱を生ずる。』

【氣味】甘く鹹し、寒にして毒なし【主治】小児の驚癇、及び鬼毒の去

【發明】時珍曰く、小児の體は純陽に屬し、その驚癇もまた風熱を生ずる。大人の猪雞癇病【日華】

【氣味】甘く鹹し、寒にして毒なし【主治】小児の驚癇、及び鬼毒の去

り、各、その方に随つて用ゐた。猪苓とはその形が衆として零落として下
 南行猪苓を取つて太乙丹を合はせる。時珍曰く、古方は猪屎を用ゐたものもあ
 尿一名猪苓。日華曰く、東行猪苓のものを良しとす。頤曰く、今一般にはまた

煮て調へて服す。

附方

【赤白崩中】猪毛の焼灰三錢を、黑豆一椀、好酒一椀半を一一碗に

出せば痕がなくなることなく【時珍】記載は袖珍にある。

毛

【灰に焼いて麻油で調へて湯火傷に塗り、残を置いて置いて毒を

赤髮落に塗る【時珍】記載は千金にある。

主 治

【臘月のもの灰を焼いて水で服すれば喉痺を治す。猪脂で和して

研末し、輕粉を入れ麻油で調へて揉む。五回に過ぎずして癰を癒さる。

【小兒の白禿粉を各筒を各筒に白麝一錢、塊、東兒一錢を入れて焼いて性存して

病兒には一字づつ、三歳已上は三錢づつ、温水で調へて服す。一三日服す。錢小兒力

せぬ。猪懸蹄三兩を互瓶で固濟して服す。蟬蛻一兩、蛤粉一分を末にし、一歳の

て醫の生ずるもの【半年已上のものは一ヶ月にして效を取る。一ヶ月のものは治癒

灰に燒き、臘月臘月猪膏猪膏で和して敷く。瘰癧瘰癧が出るものだ。(千金方)【赤泥丹】母猪尿を

し、米泔米泔で洗淨洗淨して搽る。立ちに效がある。(簡便方)【雀糞雀糞】瘰癧瘰癧あるもの母猪尿を

效效があつた。(千金方)【男・女の下】母猪糞猪糞を黄泥黄泥で包んで煨煨いて性性を存存して末末上

ける。惡肉惡肉があるところを再再び蝕蝕し去去つてに腐腐ける。平平癰癰する。煨煨いて期期とする。實實に傳

效效がある。猪尿猪尿を燒いては、研末研末し、瘡孔瘡孔に満満てて納納れ、白汁白汁の出出るを吮吮ひ去去つて更に傳

瘰癧瘰癧を蝕蝕する。先先に藥で惡肉惡肉を蝕蝕し去去つて後後に猪尿猪尿を散散る用用ゐるが甚甚だ

瘰癧瘰癧となつて青黑色青黑色を呈呈し、健全健全な肉が腐腐し、あゆる藥を用用ゐても瘰癧瘰癧をす、或

瘰癧瘰癧【肝疽肝疽】肝肝の青爛青爛、膈膈の間に生生じし、惡水惡水淋瀝淋瀝として年年を経経て瘰癧瘰癧が冷敗冷敗し、深

消蝕消蝕する。(臘月臘月猪膏猪膏を燒いて性性を存存して一一兩兩雄黃雄黃、樟柳樟柳各各一一錢錢を末末にして敷く。

に瘰癧瘰癧を蝕蝕する。(聖惠方)【十年十年】惡瘡惡瘡の母猪尿猪尿を燒燒いて性性を存存して一一握握ける。(外臺方)【惡肉惡肉を

後後行行瘡瘡の腹腹に入入りたるもの、牡猪尿猪尿に水水を和和して汁汁を絞絞り、三合三合を服服すれば立立る

もの。(猪尿猪尿の汁汁を絞絞つて温温する。)【白堊白堊】臘月臘月猪尿猪尿の燒灰燒灰を敷く。

時に抛抛下下した糞糞を日光日光で乾乾して末末にし、白湯白湯へて調調へて服服す。口唇口唇に核核を生生じたる

【一切一切】解毒解毒【母猪尿猪尿を水水に和和して一一錢錢服服す。)【瘰癧瘰癧】瘰癧瘰癧【母猪尿猪尿を生生む

方寸匕を水で服す。外囊（婦人の血崩）【老母猪尿を灰に焼き、三錢を酒で服す。】
 二升、酒一升の絞汁を暖服して汗を取れば瘡を癒せる。（千金）【猪肉の中【毒に猪尿の焼灰を少量を服す。】】
 少量を服す。聖惠方【小兒の陰腫【猪尿五升を煮熱し、袋に盛つて腫上に置く。并に絞った汁を温めて溶する。】小兒の夜啼【猪尿の焼灰で淋取した汁で兒を溶し、并に絞った汁を温めて溶する。】小兒の客忤【偃啼し、顔の青きには、猪尿二升を水で

附方

舊、新十六。

【小兒の客忤】偃啼し、

猪尿二升を水で

ものだ。

治する惺惺丸にいづれもこれを用てある。その熱を除き毒を解する功を取りつた
 時。曰く、御藥院方の痘黒陷を治する無價散、錢仲陽の急驚風癰を

發明

は、新尿を取つて壓する【吳瑞】

を發し、驚癰を治し、熱を除き、毒を解し、血溜、出血止まぬ瘡に
 熱病に主效がある。いづれも一升を取つて浸した汁を頓服する【日華】
 燒灰は瘡行氣味】寒にして毒なし【主 治】寒熱、黃疸、濕痺【別錄】蠱毒、天行

つてゐるからだ。

良に屬し、禽に在つては妻星に應ずる。豺はこれを見れば脆き、虎はこれを食べへば
はみな食大である。犬は三個月を以て生れ、畜に在つては木に屬し、卦にあつては
特長があり、食大といふは體が肥えたもので食料に供する。凡そ本草に用ゐるもの
は喙の長いもので獵に特長があり、吠といふは喙の短いもので、守り番をするに
時珍曰く、狗は種類が甚だ多い。その用途に三種あつて、田犬といふ

集解

三子子ついでといふと『とある。

——といひ、いひ、一子を生ずるをう、音は其きといひ、二子にを獅といひ、

いひ、去勢せうせるをう、高たかさ四尺なるを熬あうといひ、狂犬きやうけんをう、音は折せつといひ、

敏みん（みん）——といひ、喙短くわいたんをう、音は獸しよく（しよく）——といひ、

氏の説文には『毛多もうたきをう、音は長ちやうをう、音は

に龍りゆうをつけて呼よび、鳥龍りゆう、白龍はくりゆうなどの呼名がある。許

【狗】



は地ちと名ける。俗間ではまたこれを啼なみ、狗を稱する
狗を畫いたやうに見える『といふたのである。齊地方で
はその形を象したものだ。故に孔子は『犬の字を視ると

荷にとあるがそれだともいふ。尾が巻いてゐて懸蹄のあるものを犬といふ。犬の字
 うな節がある。或はその性質が且なものだから犬と謂ふので、『韓非かんひ』の蠅あぶ、
 犬いぬ、時珍ときしん曰く、狗は叩たたであつて、吠える聲に物を叩たたくや

釋名

犬いぬ 説文

地 羊

狗

本經中品

科名 和名 名 科名
 いぬ 犬 科名
 いぬ 犬 科名

Canis familiaris, Linne.

量を水で服す【臓器】

猪を縛つた繩

主治

【小兒驚啼の發歇不定なるには、臘月のもの焼灰少

に安やすく【日華】

猪鬣中草

主治

【小兒の夜啼には、密かに母に知らしめぬやうにしてして下

して飲ませる。又、諸瘡を洗ふが良し【時珍】

一、盞を温する【正機】消渴を治するには、濃淨して一一碗を病人に知らしめず

得猪湯

主治

【諸毒虫鼠を解す】【蘇頌】

【産後の血刺心痛で死せんとするに

水で絞つてその汁を服し、并に傳ける。外臺】

に入れる病は多くは陰虚である。陽が果して虚するならば死に何の造作はない。手震。曰く、世間では、犬は能く勞損、陽虚の疾を治すといふが、しかしそれを藥

いものが多い。

るが、服して見れば結局は益がある。但しこの動物は穢物を食ふところから食はなは『喜養は涼にして能く補し、犬肉は暖にして補せぬ』といつた。といつた。はいつた。

大明。曰く、黄犬は大いに人を補するが、他の種のものは補の力が微弱だ。古に

肉が中勝れてゐる。

發明

弘景曰く、白狗、烏狗を藥に入れる。黄狗肉は大いに虚勞を補す。吐

少けて人を益せぬ【孟詵】味を和して空心に食ふ。凡そ犬を食ふには血を去つてはならぬ。血を去つては力が五補し、陽事益し、血脈を補し、腸、胃、脾を厚くし、下焦を實し、精髓を填てゐる。【五勞、七傷を

【主 治】五臟を安し、絶傷を補し、氣を益す【別錄】腎に宜し

ものはいづれも食つてはならぬ。

有毒であり、懸蹄犬は人を傷め、赤股にして躁くもの氣が躁である。犬の目の赤
犬を食つてはならぬ。神を傷める。○瘦犬には病があり、犬は發狂し、自死犬は
聲が出なくなる。熱病後に食へば死ぬ。死ぬ。服食をなす人は食ふことを忌む。○九月に
て食つてはならぬ。人を消渴せしめるものだ。妊婦がこれを食べれば生れずが
時珍曰く、鮑は小魚である。道家では犬を地厭といつて食はない。凡そ犬は炙い
思。鰥曰く、白犬と海鮑を合せれば必ず病に罹る。

ば癩を生ずる。

て毒なし【商陸と反し、杏仁を畏れる。赤と共に食へば人を損ずる。菱と共に食へ
肉黄犬を上とする。黒犬、白犬はこれに次ぐ。氣味】鹹く酸し、温し

名、烹て食へる。無情有情に變化したたもので、精靈の變化である。彭候と
鷹の條に詳記してある。又、老木の精に黒狗のやうで尾なきものがあつて、
犬となるのであつて、禽が獸を乳むといふことは古より未だ聞かぬところだが、
に鷹背鷹は三卵を産み、一は鷹となり、一は鴈となり、一は蓬東犬は番木鼈を食へば死ぬ。物の性にはかうした制伏の關係がある。又、蓬東

で發狂して鬼を見るもの、及び鬼撃を病を治し、諸邪魅を辟ける【時珍】

治し、又、射罔の毒を解す。點眼すれば瘡の目に入りたるを治す。又、傷寒熱病

を治す。酒に和して服す【別錄】五臟を補し安する【日華】熱飲すれば虚勞吐血を

治す。白狗血は癩疾の發作を治す。烏狗血は産難、横産で血が上に心を捨く

主 治

せ。時珍曰く、黒犬血を蠲に灌いで焼けば鼠瘻が集まる。

は、白雞肉、烏雞肉、白雞肝、白羊肉、蒲子^{ハス}等と和して食へばいづれ人も人を病ま

血 白狗のもの良し。【氣味】鹹し、溫にして毒なし【弘景曰く、白狗血

氣 味

【酸し、平なり

主 治

【煮た汁は能く汁乳を下す【別錄】

は、熟犬肉に鹽汁を空に食ふ。七日にして效がある。

の蟲あるもの【方々】は、狗肉の煮汁を空腹に服す。能く蟲を引出す。○○危氏で

空腹に食ふ。【中惡の卒死】白狗を破つて心上に指すれば活る【時珍】時漏て

斤を切り、米を和し粥に煮て空腹に食ふ。【浮腫】尿屎を食ふ。【靈】肥狗肉五斤を熟蒸して

食ふ。【虚寒瘵】黄狗肉を臘に煮て五味を入れて食ふ。【氣水鼓】氣水鼓に一

鹿冷【腹滿し、刺痛するに、は、肥狗肉半斤、水でで、鹽鼓と共に粥に煮、頻りに二一頓

【主 治】頭風痺、鼻中の瘰癧肉、下部の腫痛【別錄】（癰疽）【大傷】は、その

る。五金に柔にする【時珍】

脂并に腫白犬のものが良し。【主 治】手足の皸皺而脂に入れば、脂を去

服す。千金

【附 方】

新二。【白髪を抜く】白乳を塗る。千金【白乳を酒で

】赤髮落には、頻りに塗るが甚だ妙である【時珍】

の開かぬ時の乳を取つて頻りに點ける。【主 治】十年の青盲には、白犬が子を生んでまだ目

五回、五丸つづつて服す【時珍】記載は附後にある。

【主 治】

心痺、心痛には、取つて蜀椒末を和して梧子大の丸にし、口

に塗るが有效だ【時珍】

【兩脚の癰瘡】白犬血を塗れば立ちに瘰癧を有【奇效】

に起つた瘡【常時】に兩脚の間に生ずるには、白犬血を塗れば立ちに瘰癧を有【奇效】

【卒】小兒の卒瘵【白犬を刺してその血一升を飲む】并に身に塗る【時珍】

(四) 註チ 雄ノ見 譯サベ
(三) 註チ 雄ノ見 譯サベ
(三) 註チ 雄ノ見 譯サベ

吐血し、衄血し、下血する。一名鬼排といふ。白犬の頭から熱血一升を取つて飲む。吐きはただ純色のもつちを用ゐてもよし。【鬼撃の病】(時後方)腸腹絞痛し、或は直ちにきに攤し、冷えれば去る。これは垂死のものゝ治療にも用ゐて活きる。白犬が無いと發狂し、鬼を見、走らんとするに、白狗を背から破つて血を取、熱に乗じて胸で血を用ゐたのはその血の腥でその蟲を引き出したのだ。【熱病發狂】時氣溫病で、六七日にして極度の熱であつた。七日にして病が癒えた『とある。これはまた異常なる病證だが、狗の皮中に一條の蛇がゐて動き出したのを鉤かぎで引き出した。長さ三尺ばかりの須臾に五十里走らせてから、その犬の頭を斷つて患部の痛い部分へ合はせた。合はせると馬をずかつたのだ。又、華佗別傳(三)に『瑯琊(四)のある女子が右股に瘡を病み、痒い痛みがつかつた。史記に、秦の時、狗を殺して四門に磔はりけて災を禦ぎ、血犬を殺して按ずるに、時珍曰く、術家では犬を地壓(五)といひ、能く一切の邪魅、妖術を禳辟する。

附方

舊三新四

それのやうだ。故に人が土上を夜行すると肝氣が動する。蓋し相感するのだ』『とある

肝時。珍。曰く、按ずるに、沈周の難記に『狗肝は色が泥土のやうで臭味もやはり

人の體熱するに猪腎を用ゐ、體冷なるには大腎を用ゐる【藏器】

とあるは人に利あらぬためだ。【婦人産後の瘧の如きもの。その婦人】

主治

腎氣味平にして微毒あり【時珍。曰く、内則に犬を食ふには腎を去る『

咬傷を治す【日華

主治

心【憂悲の氣、邪を除く【別錄】風痺、鼻衄、及び下部の瘡、狂犬の

を絞出した狗涎で喫ふ。二三箇を連續して食へばその物を自ら散ずる。【德生堂方】

附方

【諸骨哽咽】

涎主治【諸骨硬、脱肛、及び誤つて水蛭を吞みたるもの【時珍】

三回つづ敷けば生える。【聖惠方】

附方

【眉髮の火癰】毛の生えぬには、蒲灰を正月の狗腦で和し、一日

咬んだ犬の腦を取つて敷く。後に再發しない【時珍】記載は時後にある。

は諸風を治す【時珍】

皮 主治

【】腰痛には、炙熱した黄狗皮で裏む。頻りに用いて焼く。灰を取る。焼灰

陰卵

主治

【】婦人の十二痰には、灰に焼いて服す【蘇恭】

婦人の陰瘻を治す【日華】

【】精髓を補す【意】

起を強ぜしめ、大いに子を生ませす。婦人の帶下二疾を除く【】絶陽、陰痿不

氣味

【】

鹹し、平にして毒なし【】思。日。酸し。主

治

【】傷中、陰痿不

（別錄）

壯狗陰莖

釋名

【】狗精を六月上伏の日に取つて百日間乾したものである【】

量を入れ、一箇つ

の赤荊には甘草、白荊には乾薑の湯で送下する【】

（奇效良方）

【】赤、白下荊

【】臘月の狗膽一、一百箇を一一箇に黒豆を入れたてて充満し、一箇香少む。簡便【】

雄狗膽汁で和して

【】黍米大の丸にし、三十丸を空心で嚙む。羊肉、醋、麝を忌

【】瘡塊、五靈脂を炒つて

【】其毒を煙に、烟蓋を消半蓋に磨り溶して服す。三服に過ぎずして效がある。黄

の丸にし、一丸つ

【】五靈脂を好半蓋に磨り溶して服す。三服に過ぎずして效がある。黄

入、少者、遠年のもの、近日のものに拘らず、五靈脂末を黄狗膽汁で和して龍胆大

鼻梁骨を焼いて研り、就寝時に錢を酒で服す。【頭風白屑】瘰癧に、狗頭骨の

頭水となす。或は礬少量と共にするが就中妙である。【夢中洩精】夢中洩精に、狗頭

敷く。【直指】鼻中の瘰癧肉【狗頭灰方寸匕、丁香半錢を研末して吹く。直ちに化

老狗の頭腦骨を互で炒つて、桑白皮一兩、當歸二錢半を末にし、麻油で調へて

【瘰癧えぬ】の狗頭灰と黄丹末と等分を敷く。【毒瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【惡瘰癧】瘰癧を、肉を長くし、肌を生ずる

【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。

【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。

【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。

【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。

【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。

【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。

【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。

【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。

【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。【惡瘰癧】瘰癧を、水で和して敷く。

附方

舊三、新十。

【小兒久痢】狗頭の焼灰を白湯で服す。【小兒の解

骨は小兒の諸癰、諸癰に主效がある。【蘇恭】

字アリ。大觀二年下後

壯にし、瘡を止める【日華】癰疽、惡瘡、解頤、婦人の崩中帶下を治す【時珍】²⁷【領】

で炒り、丸にして十粒を空心に白飲で服するが極めて效がある【醃權】燒灰は陽を

瘡癤に血を止めめる【別録】燒灰は久痢、努痢を治す。乾薑、莫老（たふろ）と和して煙の出るま

頭骨 黃狗のものが良し。

氣味 【甘く酸し、平に平毒なし】

主治 【金】

に灰に焼いて湯で服すれば、痘瘡倒陷を治するに效がある【時珍】

【別錄】 磨汁は犬癩を治す。燒き研り醋で和して發背、及び馬鞍瘡敷く。人齒と共

茵 氣 味 【平】平にして微毒あり 主 治 【癰瘡寒熱、卒風癘。伏日に取る】

て癢えり。(梅師)

附方
湯火傷瘡【湯火傷瘡】
狗毛を細に剪り、
和膠で貼つて敷く。
跡が落ち

傷₂₁敷₂₁【時珍】

つて見の背の上に繋ける【藏器】焼灰一錢を湯で服すれば邪瘧を治す。尾の焼灰を犬

毛

主	治
---	---

【産難】蘇(恭)【頸下】の毛は小兒の夜啼に主效がある。紅絹の囊に盛

『とあるところから見て、風を治すといふ意味は此に取つたものだ。』

發明
時珍曰、
淮南萬畢術
『黑犬の皮、
毛の燒灰を
族々搗げば
天風が止む』

く毒を解す【時珍】

屎中藥 白狗のものが良し。一名白龍沙。治 主 【時珍】風病、瘡瘡倒陷。能

數見へる。又、馬鞍瘡を治するに神驗がある。【聖惠】

滓を敷く。一日二回。【外藥】疥瘡惡腫【治】牡狗屎を五月五日に灰に燒き、塗り敷いて

方寸匕を酒で服す。【後】發背癰腫【治】白狗屎半升を水で絞つて汁を取つて服し、

取り、一日三回服する。癰はそれを出る。【外藥】瀉肺【治】犬屎を燒いて末にし、

諸毒を治す。狗糞五升を燒いて末にし、綿に裹んで五升の酒中に二晝夜浸して清に

燒いて末にし、一日三回、方寸匕を酒で服す。【金】魚肉で癰と成つたもの【并に

す。】地黃【治】月水不調【治】婦人產後に月水の往來が乍多くなつて少しは、白狗糞を

る。】癰瘡、瘰癧【治】久しう癒癒せずには、白狗糞の燒灰を發作の前で水で二錢を服

す。】心痛で死せんとするもの【治】狗屎を炒つては、白狗糞の燒灰を酒で服するが神效があ

附方

【小兒癰亂】卒に走つたものには、白狗屎一丸の絞汁を服

けものだ。

發明

時珍曰く、狗屎で諸病を治するは、いつれもその解毒の功力を取るだ

師ニ作大觀ニ附後梅

（註）

[illegible]

屎シ白シロ狗イヌのノもモのノがガ良ヨクしシ。

寸ニモ服す。【桃李の囀しやうりやう】。河景に暮して臨下壘りんとりやう。○（士女類）

附方 舊二。【産後の煩懣】（ちやん）食事不能なるには、白犬骨を焼いて研り、水で方

附方

鼻中瘡に敷く【珍時】

骨 白狗のものか良し。【氣 味】甘し、平ににして毒なし【主治】燒灰は【燒灰】燒灰は

骨 白狗のものか良し。氣味 甘し、平にして毒なし。主治 燒灰は

燒灰の淋汁で沐する(聖惠方)

ベ。先ノ尊ヲ引キ、意ハト、味ナ即

音ノ北。河ノ今。陰西

ある。毛の長さ一尺餘のものは、たてた羊（ニ）と云ふ。北方では大羊（ニ）を引として、
 曰く、羊は種類が多いため、殺羊（ニ）にやむ褐色、黒色、白色のものが
 しては都下の親羊（ニ）に及ばない。しかし、乳、臍は肥好なものだ。
 は烏羊である。羊（ニ）に三四種あり、つて、薬に入れるには青色の殺羊（ニ）を勝れたものと、次
 弘。景。曰く、羊（ニ）に別。録に曰く、殺羊（ニ）は河（ニ）に生ずる。
 集。解。はこれをも柔毛といひ、また少羊といふ。古今注にはこれをも長鬚主簿といつてある。
 一 年經過せぬものを桃（ニ）音は兆（ニ）音は兆（ニ）といふ。内則
 ひ、七ヶ月のものも季（ニ）音は達（ニ）音は達（ニ）といひ、また
 羊子（ニ）を煮といひ、五ヶ月のものも羊（ニ）音は守（ニ）音は守（ニ）といひ、
 ひ、角なを煮といひ、去勢せるを親（ニ）といひ、
 といひ、白きを粉（ニ）といひ、黒きを粉（ニ）といひ、毛多きを羊（ニ）といひ、
 といひ、た。羊を殺（ニ）といひ、瓶（ニ）といひ、牝羊（ニ）を羊（ニ）といひ、非（ニ）音は臧（ニ）音は臧（ニ）——



○時珍。曰。熱病、及び天行病、瘧疾、病後にこれを食べへば必ず發熱して危篤に

羊の齒、骨、五臟は、いづれも溫、平であるが、ただ肉だけ性は大熱である。

問では理を以て言ひ、素問には苦しいといつて、辛は性にして火に屬するから苦に配したのである。

經には甘しいといひ、素問には苦しいといつてあるが、蓋し本經では味を以て言ひ、素

本、頤曰。溫なり。誤。曰。甘く、大熱にして毒なし【苦く、大熱にして毒なし】

が曾て土を握つてこれを得たといふことだ。又、千歳の樹の精もまた青といふ。

羊 土の精であつて、その肝は土は土である。雌、雄、が、物を食べない。季桓子

劉郁の説が正しいらしい。兎も角も神異な事實であつて、造化の微妙といふべきだ。

この三説にはやや相異があつて、果してその種もあるものが、何物であるか判然せぬが、

では羊角を種と生えて、大いさ兎ほどの肥美なものになるかといふ『ふ』とある。

れ、馬を走らせて驚かす。驚かす。その皮は褥になる。あるは、漢北地方

域では地に羊が生える。腰骨を土中に種ゑ、常聲を聞く。その骨の中から羊が生

と鳴いて、臍が絶ち、水草を逐ふて行くものだ。『吳策の淵頤集には』西

は地と連つてゐて、割けば死ぬものだ。しかし、ただ馬を走らせ、鼓を叩いて駭かすと驚

ス。地外チ指
シ。漢北チ
一。サリチ

註ハ大秦国ハ石部玉見。

照部七。雄涼州縣起參石。涼州縣起參石。

指入。雪山。連山。草類。大黃。註。見。

以割。字。可。

羊といふがある。その羔は土中から生ずるので、國人は櫓を築いてそれを圍ふ。臍臍種羊と名ける種類のものである『とある。段公路の北戸録には「大秦國に地生驚かす」と斷れられて歩き出し、草を嚙ふ。秋になるとその臍の肉を食へる。』また、と、雷を聞いて臍が生える。その臍は地に連つてゐるのだが、生長してから木聲で置く。地生羊西域に産する。劉都の出使西域記に「羊臍を土中に種多く水を澆いて置

封羊その背に肉封があつて駝のやうなものだ。(涼州の郡縣に産する。)

用ゐられる。

羴羊此思の切(に)に發音する。○西北の地に産する。その皮蹄は泰を割く(西域の驢羊といふは大いさ驢は重なるものは重量百斤のものがある。郭義恭の廣志に

洮羊

は毎歳その脂を取るのだが、久からずしてまた脂が肥満する『とある。葉盛の水東日記に「莊浪衛は雪山に近い地方で、(羊)といふを産する。土人春秋期に脂を割き取つて再び縫合して置く。取らねば腹れ死ぬものだ』とあり、

で觀る。羊の補虛の功は、すすます證である。

それ以後毎に羊羔を殺して、杏、酪、五味と共に毎日に數箇を食つた』とある。これ
 で、それで瘡を癒えるといつたので、その言の通りにするに瘡を癒さずして瘡を癒えた。
 に入つたので、病は胸臆にある。嫩く肥えたる羊を蒸して藥を摻つて食はすへきも
 つたと、常は太醫令元方に命じてそれを診察させた。元方が視て「風が膝に理であ
 時珍曰く、按ずるに、開河記に『隋の大總管麻叔謀が風逆を病んで起不能であ

いつてある。

肉に同じきものは、いづれも血虚を補するの、蓋し陽生すれば陰が長ずるのだ』と
 もの、人參、羊肉の屬である。人參は氣を補し、羊肉は形を補す。凡そ味の羊
 李曰く、羊肉は有形の物にして能く有形の氣を補す。故に『補は弱を去
 し、仲景の羊肉湯から水を加えて二服させるとそれで瘡を癒えた。

寒症である。醫は抵當湯を投じようとしたのであるが、予はその非なることを主張
 が冬期に産して寒が子戸に入り、腹下痛に按するところも出なかつた。これ
 宗曰く、仲景の寒疝を治する羊肉湯は、服して奏效せぬものがない。ある婦人

肉一片、（一）蜜子（二）末（三）を和し、綿で裹んで下部に納れる。（四）外方（五）を煮る。（六）外方（七）を煮る。（八）外方（九）を煮る。（一〇）外方（一一）を煮る。（一二）外方（一三）を煮る。（一四）外方（一五）を煮る。（一六）外方（一七）を煮る。（一八）外方（一九）を煮る。（二〇）外方（二一）を煮る。（二二）外方（二三）を煮る。（二四）外方（二五）を煮る。（二六）外方（二七）を煮る。（二八）外方（二九）を煮る。（三〇）外方（三一）を煮る。（三二）外方（三三）を煮る。（三四）外方（三五）を煮る。（三六）外方（三七）を煮る。（三八）外方（三九）を煮る。（三九）外方（四〇）を煮る。（四一）外方（四二）を煮る。（四三）外方（四四）を煮る。（四四）外方（四五）を煮る。（四五）外方（四六）を煮る。（四六）外方（四七）を煮る。（四七）外方（四八）を煮る。（四八）外方（四九）を煮る。（四九）外方（五〇）を煮る。（五〇）外方（五一）を煮る。（五一）外方（五二）を煮る。（五二）外方（五三）を煮る。（五三）外方（五四）を煮る。（五四）外方（五五）を煮る。（五五）外方（五六）を煮る。（五六）外方（五七）を煮る。（五七）外方（五八）を煮る。（五八）外方（五九）を煮る。（五九）外方（六〇）を煮る。（六〇）外方（六一）を煮る。（六一）外方（六二）を煮る。（六二）外方（六三）を煮る。（六三）外方（六四）を煮る。（六四）外方（六五）を煮る。（六五）外方（六六）を煮る。（六六）外方（六七）を煮る。（六七）外方（六八）を煮る。（六八）外方（六九）を煮る。（六九）外方（七〇）を煮る。（七〇）外方（七一）を煮る。（七一）外方（七二）を煮る。（七二）外方（七三）を煮る。（七三）外方（七四）を煮る。（七四）外方（七五）を煮る。（七五）外方（七六）を煮る。（七六）外方（七七）を煮る。（七七）外方（七八）を煮る。（七八）外方（七九）を煮る。（七九）外方（八〇）を煮る。（八〇）外方（八一）を煮る。（八一）外方（八二）を煮る。（八二）外方（八三）を煮る。（八三）外方（八四）を煮る。（八四）外方（八五）を煮る。（八五）外方（八六）を煮る。（八六）外方（八七）を煮る。（八七）外方（八八）を煮る。（八八）外方（八九）を煮る。（八九）外方（九〇）を煮る。（九〇）外方（九一）を煮る。（九一）外方（九二）を煮る。（九二）外方（九三）を煮る。（九三）外方（九四）を煮る。（九四）外方（九五）を煮る。（九五）外方（九六）を煮る。（九六）外方（九七）を煮る。（九七）外方（九八）を煮る。（九八）外方（九九）を煮る。（九九）外方（一〇〇）を煮る。

(千) 金 陽 壯 和 小 鯉 鮓 日 空 腹 一 百 箇 斤 生 蕪 一 日 三 回 用 之 甚 補 益 矣

包み、その外部分を荷葉囊^{てんぷ}に入れて蒸^くし、一石の米に入れて蒸^くし、取出して石炭を去り、

三升に煮て四回に分服する。(千金)【虚寒の補益】碎いた白石英三兩を精羊肉一斤で

のもの【肥羊肉三斤、水二斗を一斗三升に煮て、生地黄一升、乾薑、當歸三兩を入れば、

水一斗、以升五升、煮取、酥一升、納れ、更に二升、煮て服す。（千金方）【崩中で垂死

【鏡】産後うぶごの帶下おしり、産後中風うぶごちゆうふうの絶孕けつぐ、帶下赤白おしりせきぱく、羊肉じゅうりゆう一斤、香薷かうじゆ、大蒜たいさん三兩を

及び腦中風で汗の自ら出るにには、白羊肉一斤を切り、薑通の如く調理して食ふ。心。

煮て取つた汁に諸薬を入れ、二升に煮て服す。【産後の虚羸】腹痛、冷氣不調、

腹絞痛、厥逆を治す。羊肉一斤、當歸、芍藥、甘草各七錢半、水一斗、煮取五斗、肉を

【産後の大厭痛】胡洽の大羊肉湯——婦人産後の大厭、心

薑六兩を入れて二升に煮取ら、四回に分服する。胡洽の方では黄芩がなく、千金方

たものである。肥素肉一斤を二斗で八升に煮取り、當歸五兩、黃芪八兩、生

附方 舊八、新十六。【羊肉湯】張仲景が寒勞虛損、のうろう及び産後の心腹疼痛を治し

な。震。亨。曰。羊。頭、羊。頭、蹄。肉。の。性。は。極。め。て。水。を。捕。す。水。腫。の。人。が。こ。れ。を。食。へ。ば。百。に。一。に。死。す。大。明。曰。く、涼。氣。味。【甘。し。し。平。に。し。て。毒。な。し。】

氣味

指す。鐘の回を温す。として摩え。る。(肘後方)

より付けてその家で地上を掘ほいて土を嗜もみ食ふもの【の】市中で羊肉一斤を買い、ひき煮、熱して香しく炙いして食はす。或は煮汁も熱して

【のち】
 去肉六兩、麋肉八兩、鼠肉五兩、雉^{ニトリ}二羽、鴈^{カモ}一頭、去肝目傷^{【傷目】}。去肉去^{【去肉】}。

葱と共炒つて食ふ。(正鑒)【損傷の青腫】新しい羊肉を貼る。(千金方)【婦人の乳無

肉を煮て食ふ(要正)。水【羊、肉、一、脚、瓠、子、六、箇、薑、汁、半、合、白、麴、二、兩、鹽、

粳米二升、回回豆、即ち胡豆半升、木瓜二斤の汁を取り、砂糖四兩、鹽少々を入れば、

【肘後方】腰痛、脚氣【木瓜湯】カキヅク腰、膝痛、脚氣を治す。(三)羊肉一、草果五箇、脚、

つてそに入れて煮、葱、鼓、五味を投じて臘の方法のやうに調理して食ふ。

【身體】面部の浮腫【商陸】一升、水二斗を一斗に煮取つて滓を去り、羊肉一斤を切

ノエトカ。
(三) 足一本分

明發

記載は延壽の時、**發明**、曰く、外。諸方にある。

臺に『凡そ丹右を服する人は辛血を食ふこととを忌む。』

【主 治】 婦人の血虛中風、及び産後の血悶で絶せんとするは一、升を熱飲すれば活さる【蘇恭】二、一、升を熱飲すれば、産後の血攻を治し、胎衣を下し、卒驚の九【時珍】又、一切の丹石の毒發を解す

血 白羊のものも良し。【氣味】平、し、鹹【性味】寒、く、平。時珍。按ずるに、夏子益の奇疾方に『羊血を久しく食つて鼻中に毛が生じ、それが書る夜に五寸長くなくなり、漸次（やうじ）に繩（な）のやうになつてて忍び難く痛み、摘み去つて復た生ずるは、ただ乳石、硝砂（やうじ）等分を丸にし、就寝時に十丸を服すれば自然に落ちる。』

辛脂を多く食ふ。久しくすれば白ら出る。(肘後)。

【至る】青羊脂を摩れば數回^{（集）}癒さるる。^{（圖）}誤つて釘、鍼を吞みたるものと【きず猪、疥】赤黒色なるには、青羊脂を^{（千）}磨るる。【赤丹】疥の如きも治せねば死【小兒の口口】^{（癰豆）}疥の如きもの【蕒】羊脂で^{（善惡根）}患根を^{（癰豆）}塗るる。【苦効心毒】

（三）

脂一升を化して飲む。蛭はそれです。下る。(附後方)【誤つて蛭を呑みたるとき】猪、
 が臍を嗽して腸痛し、黄瘦するものである。熱した羊血一二升を飲み、翌早朝猪
 には、羊血一合を熱すれば効がある。(聖惠方)【蛭を食ふときと蛭を呑んだもの】蛭
 羊血を煮熱して醋を拌せて食ふ。最も有効だ。(吳球便良食療)【硫黄の毒發】氣悶する
 えて絶せんとするには、新羊血一盞を飲む。二三服で妙である。(梅師)【大便下血】
 飲すれば瘥える。(聖惠)【産後の血攻】或は下血して止まず、心悶し、面青く、身冷
 熱【血】一ヶ月に互つて止まぬには、羊血を刺し取つて熱

舊二、新五。

附方

は確かに缺典である。

言つてある。羊血のかやうな解毒の功に就いて、本草にいづれも言及してないの
 れを忌む』とある。巖表異録には、この物が胡蔓草の毒を解する功能のあることを
 を刺し取つて飲めば直ちに解す。又、地黄、何首烏の諸補藥を服用するものもまた
 摩等^摩の毒を制する功能もあるもので、凡そ毒發なることを自覺した場合は、一
 輕粉、生銀、硃砂、硫黄、乳石、鍾乳、空青、曾青、雲母石、陽起石、孔公
 年服餌して一回これを食べればそれで失する。この物は丹砂、水銀、

汁各五合、生薑汁一合を入れて手を休めず攪かき混ぜながら微火で煮つて膏にし、膏にし、黄

附方

新五。

【肺痿骨蒸】煉羊脂、煉羊髓羊髓各五兩を煎滌し、及生地黃

の肺虚肺虚の毛悴毛悴を治する酥酥湯酥湯中にこれを用ゐてある。

悶悶に主、效効がある【孟詵】肺氣を潤し、皮毛毛を澤澤かにし、癰疽癰疽を滅する【時珍】

服して人人體を損ぜない【孫思邈】酒に和して服すれば、血を補し、婦人の血虚血虚風

不足。血脈を利し、經氣を益す。酒で服す【別錄】風熱風熱を却却け、毒を止める。氣

陰陽氣

氣味

【主】温にして毒なし

治

【男子、婦人の傷中、陰陽氣

【足指の肉刺】刺し破り、新酒酢で羊腦を和して塗る。一合で癰癰を癒癒せる。【古今錄驗】

附方

新二。【丹】生綿生綿羊腦と朴消朴消とを共に研つて塗る。【瑞竹堂方】

に塗る【時珍】

主治

【面脂】手膏に入れば皮膚を潤はし、野蠶野蠶を去る。損傷、丹瘤、肉刺

て頭の黒いもの、食へば腸癰腸癰となる。

を迷はせ、風疾と成る。男子がこれを食べれば精氣を損じて子を少くする、白羊の心

氣味

【毒あも】

洗洗。曰く、風病を發する。酒に和して服すれば、人の心

る。(總録)

白乳三升、羊膈三副を和して搗き、毎夜洗淨してかかれを塗つて、翌朝洗ひ去
【顔の黒きを白くする】羊乳を傳ける。千金要方。【漆瘡の痒きも】羊乳を少しづつ瘡に入れて含む。數回にし

附方

舊、二新。

小兒口瘡

たが、それはその物の胃脘を開き、大腸の燥する點を取つたのだ。

が、蘇氏の説もやはり過てゐる。丹溪は、反胃の人は時、これを飲むがよといつ
時。珍曰、地方風土と飲食物と兩相資るものだ。陶氏の説は固より偏してゐる

ので、屢々かくなるとをいふ。

土が然らめゐるのだ。飲む乳に何の關係があるか。陶氏は知識が十分でなかつた
恭曰、く、北方人の肥えて健なるは、腥のものを食はないであつて、地方風

を食ふので多くは肥えて健だ。

發明

弘景曰、牛、羊の乳は實に腎を補うものである。故に北方人はこれ

したといふ。ある。

たので、食になつてゐるが、ある僧が羊乳を啖はせると幾ばくもなくなつて、疾が平癒

具を割開し、雄黄、麝香等分を入れて吞む。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

【中】解毒。【方】（養生方）

主治

【中】解毒。【方】（養生方）

下痢せしめるものだ。

な状態で長さ二三寸の蟲がゐるから必ずこれを取らねばならぬ。去らねば人をしやして
【心に同じし】託。曰く、三月から五月までは、その中に馬尾のやう

氣味

しめるものである。(正要)

鹽少量を入れて徐徐に心上に塗り、炙熟して食ふ。人をしやして心を安にし、多く喜ば
【心氣鬱結】新。【羊心一箇、咱夫蘭、即ち同紅花を浸した水蓋に

附方

を補す(藏器)

【日華】孔あるものは人を殺す。主治 憂悲隔氣(別錄)を止める【心】
心 已下いづれも白瓶(羊骨髓を煉つて一兩、輕錢を和して膏にして塗る。陳文仲方)を

氣味

瘰癧を滅する方。羊(骨髓を煉つて一兩、輕錢を和して膏にして塗る。陳文仲方)を落はさずして
【白羊髓】(聖惠)を傳ける(千金)。舌上に生じた瘡【羊の脛骨中の髓(羊から)を和して塗る
【日空心一匙つきの温酒で調へて服用す。或は粥に入れて食ふ。飲膳正要】赤

れを用ゐてある。

羊石子 即ち羊の外腎である。主治 【腎虛精滑】(時珍) 本事方の金鎖丹にて

ば癰(るる危氏)

合【香油を手に抹して送入し、人參、枸杞子の煎汁を温淋し、羊腎粥を十日間喫へを柔軟ならしめたるもの。然る後に補藥を服す。雞米急驚方(方)】腸を破つて腸の出た場を對、杜仲の長さ二寸、潤さ一寸のものを共に煮熟して空心に食ふ。人の内腎于一硬【老人の腎藏虚寒、内腎結硬で、補藥を服して見ても入らぬものを治す。羊腎子汁に少量を入れたものを塗抹し、徐徐に炙熟して空心にそれを食ふ。】老人の腎を酒で服す。○正要では、腰の卒痛を治す。羊腎一對に夫蘭錢を水一盞に浸したを【腎虚の腰痛千金では、羊腎を去つて干陰乾して末にし、一回、三方寸を食ふ。】虚損勞傷【羊腎一箇、米一升、水一斗を共に煮た汁に米を入れて粥にして羊肉半斤、葱白一莖、枸杞葉一斤を用ゐ、五味と共に煮た汁に米を入れて粥にして食ふ。○正要では、陽氣衰敗で腰脚疼痛するもの、五勞七傷を治す。羊腎三對し切り、肉從容兩を一夜酒に浸して皮を去り、和して羹にして葱、鹽、五味を下し

粥にして食ふ。（心。鏡）【五勞、七傷】陽虛無力には、經驗では、羊腎一對を脂を去つて、
虚で精の竭するものも、羊腎一雙を切つて、豉汁の中に入れて、五味、米、粿を用ゐて、
箇を煮熟し、米、粉六兩を和して、鍊つて、乳粉にし、空腹に食ふが妙である。（心。鏡）【腎一
附方】下焦の虚冷、脚膝に力無く、陽事不能なるには、羊腎一

たものである。

ののである。蓋しこの物を用ゐて、嚮導の作用をなせしめる爲めで、各その類に従ふ
する腎瀝湯といふがあり、方は甚だ多いが、いつれも羊腎の煮湯を用ゐて、藥を煎す
發明時。珍。曰く、千金、外臺、深師の諸方に、腎虚、勞損、消渴、脚氣を治

ば瘕瘕を療す。（蘇恭）【腎虚、消渴を治す】（時珍）

【華】脂を合せて作った羹は、勞瘵を療するに甚だ效がある。蒜、薤、これを一升食へ

虚の耳聾、陰弱を補し、陽を壯し、胃を益し、小便を止め、虚損盗汗を治す。（日）【腎

氣味】（主）【心に同じ】（治）【腎氣虚弱を補し、精髓を益す】（別錄）【腎

で服す。千金方

肺一具、白朮一兩、肉蓯蓉、通草、乾薑、芍藥各二兩を末にし、食後に五兩を米飲

獸類の肝を食はなかつただけだ。「といつた。或る者は、本草に羊肝は目を明にする類、人のいふところによつて別」に服薬したわけはな。い。た。だ。幼。少。の。時。か。ら。畜。類。と。す。る。あ。る。人。は。八。十。餘。歳。で。あ。つ。た。が、腫。が。子。が。膝。と。し。て。夜。間。細。字。を。讀。ん。だ。そ。の。佳。機。曰。按。ず。る。に、三。元。延。壽。に『凡そ目疾を治するに、青羊肝を用ゐる。』とある。だ。現。に。羊。丸。の。肝。の。經。に。引。入。す。る。の。で。あ。る。故。に。專。ら。肝。の。經。に。邪。を。受。け。た。病。を。治。す。る。の。肝。と。合。し。て。羊。肝。の。經。に。引。く、按。ず。る。に、維。德。倪。氏。時。珍。曰。按。ず。る。に、倪。氏。「羊肝を補するは、肝蘇。恭。【主 治】肝を補し、肝風虚熱、目赤暗痛、熱病後の失明を治す。いづれも肝がこれを食へば生れる子をして厄多からしめる。苦。箭。と。食。合。せ。れ。ば。青。盲。を。病。む。妊。食。合。せ。れ。ば。人。の。五。臟。を。傷。め、最。も。小。兒。を。損。ず。る。苦。箭。と。食。合。せ。れ。ば。青。盲。を。病。む。妊。弘。景。曰。猪。肉、及。び。梅。子、小。豆。と。食。合。せ。れ。ば。人。の。心。を。傷。め。る。思。慮。を。傷。め。る。生。椒。と。肝。を。合。せ。て。食。ふ。の。が。良。し。氣。味。苦。し、寒。に。し。て。毒。な。し。【氣 味】

【豊毒を解す】吳瑞

發明

一日間物を食つてはならぬ。或は薑、薤（かい）と共に食ふもよし。一二三具以上用ゐる要な
 に切り、三年の醋の中に入れて吞む。心悶するときは止め、悶せぬときは更に服す。
 以上二三年瘧（ま）を、變（か）じて瘧となり、たものが出（で）なく、休息痢（きしつり）【五十日
 て淡食する。三回到過ぎずして食つて、たものが出（で）なく、外瘧（がいま）【休息痢を生に作
 病後の嘔逆（おうぎやく）】天行病後に嘔逆して食へば直ちに反出するに、青羊肝を生に作
 肝一具、羊脊肉（やぎせきにく）一條、麋（も）末半斤を入（い）れ、葱、豉（し）を添（そ）へて羹（けい）を作（つく）つて食ふ。干姜（かんきやう）方
 二黄に煎じて早朝（そうさう）に服し、三日間それを服して、から、枸杞一斤、水三斗の煮汁に羊
 任意に食ふ。瘵（さい）【瘵集要】虛損勞瘦【新猪脂を煎じて一升を取（と）り、葱白握（にぎ）を入（い）れ
 て遂に視力を回復した。傳信方（でんしんぽう）【牙疳腫痛】羊肝（やぎかん）一具を煮熱し、赤石脂末（せきじしぽう）を
 承元が内障を病んで失明したとき、ある人がこの方を恵んで、徳に報（は）い、それを服し
 搗（と）いて梧子大の丸にし、一回、三七丸づつを食事に時間を隔（へ）てて茶で服す。崔
 粥（しやく）に煮（ゆ）て食ふ。多能部事（たのべぶじ）【青盲内障】白羊子肝一具、黃連一兩、熟地（じやくち）二兩を共に
 つて細切し、葱子一匁（もん）を入（い）れ、炒（い）つて末にし、水で煮熱して、滓（し）を去（は）り、米を入（い）れて
 なり、一年に達すれば能く夜間文字を見得る。食療（じきりやう）【遠視不能】羊肝一具を膜（まく）を去

去、肌膚を澤かにし、癰痕を減する【(時形)】肺燥の諸瘡を潤ほす。而脂に入れば、癰を

服 白 羊 の も の が 良 し 。 主 治

える【(孫思邈)

脾 主 治 下 虛 遺 尿 に は 、 水 を 盛 り 入 れ て て 炙 熟 し 、 空 腹 に 食 ふ 。 四 五 回 で 療

に 手 を 入 れ て 浸 す 。 痛 が 止 み 、 腫 が 消 ぐ 。 主 要

の 手 腫 【 腫 入 つ た ま の 羊 一 肚 一 箇 に 箇 の 口 を 割 き 穿 ち 、 そ れ

五 頓 で 撻 え る 。 主 要 【 項 下 の 癰 癰 を 灰 に 焼 い て 香 油 で 調 へ て 敷 く 。 蛇 傷

て 空 腹 に 食 ふ 。 主 要 【 尿 牀 の 羊 一 肚 を 水 に 入 れ て 煮 熟 し 、 空 腹 に 食 ふ 。 四

癰 癰 二 合 に 椒 、 薑 、 豉 、 葱 を 和 し て 羹 に し て 食 ふ 。 主 要 【 胃 虛 消 渴 羊 肚 を 煮 し

蒸 熟 し 搗 き 爛 し て 晒 し て 末 に し 、 方 寸 匕 を 酒 で 服 す 。 主 要 【 中 羊 肚 一

桂 心 、 人 參 、 厚 朴 、 海 藻 各 一 兩 五 錢 、 甘 草 、 秦 椒 各 六 錢 を 末 に し て 入 れ 縫 合 し 、

氣 を 益 す 【 羊 肚 一 箇 中 に 羊 腎 四 箇 、 地 黃 三 兩 、 乾 薑 、 昆 布 、 地 骨 皮 各 二 兩 白 朮 、

り 一 日 三 回 、 九 回 に 分 服 す る 。 三 劑 に 過 ぎ ず し て 擦 え る 。 主 要 【 中 羊 肚 一 箇 白 朮 一 升 を 切 り 、 水 二 斗 で て 九 升 に 煮 取

【(張仲方)

【久病虚羸】肌肉が生ぜず、水氣が腸下に在つて飲食不能

新六。

方

【五誑】

【胃反】虚汗を止め、虚羸を治す。小便數は、羹にして三五回食へば瘥

主 治

に和して久しく食へば、人をして多く清水を唾せしめ、反胃となり、嘔病を作す。

【胃一名羊臆】温ににして毒なし【思】曰く、羊臆を飯、飲

氣 味

【小兒疳瘡】羊臆二箇を醬汁に和して下部に灌ぐ。外臺

【冷水中に三回刺し込め、羊臆を塗る。立ちて瘥えて甚だ有效に

【崔氏は】代指の痛むもの【猪臆、細辛等分して三沸し、夜塗つて翌朝漿水で洗ふ。

【産婦の面】産婦の顔が雀卵のやうな色

【羊臆二箇を和勻し、毎日に點ける。聖惠方】

【羊臆二箇、雞臆三箇、鯉

【大便秘塞】

附 方

點ける。神效のあるものだ。

新四。

【透字】

か、その神は内に隠されてあるといふかも知れない。

發明

[illegible]

時主忌

一、右の二の麝と搗き和して、彈子大の丸の二にし、一丸づつを含み化して汁を嚥む。
 一、麝えん各二箇を用ゐ、昆布、海藻、海帶各二錢を洗つて焙じ、牛旁ごう子こを炒つて四錢を末
 し、蜜はちで炙あき、子こ大の丸の二にし、一丸づつを含んで津を嚥む。○難病治例では、羊膽ようたん、米
 羊膽ようたん七箇を陰乾し、海藻、乾薑各二兩、昆布、逆流水邊の髮かみ各一兩と米
 炙熟し、それを含んで汁を嚥む。一日一具、つづつ七日にして瘡を癒さる。○千金では、

附方

新、一、新。二。

【項下の氣癭】外臺では、羊臍一具を脂を去り、酒に浸し

らうが、他の癭では恐らくやほり効力が少いであらう。

は肺に屬し、氣を司するものだから、氣癭の證はこれを服すれば或は奏效するだ

療煩羊臍の句がある。しかし、氣、血、筋、石の五種あつて、かの

る。やはりその類に従つて效果を期待する意味であつた。故に王荆公の癭の詩に『内

發明

時。披するに、古今に癭を治するに多く猪、羊の臍を用ゐてあ

(時珍)

臍

即ち會咽である。

氣味

【主】甘く淡し、溫にして毒なし

治

【氣癭】

を

麝香、

麝香と羹にし、

肉汁で食ふ。

舌

主治

【主】中を補し、氣を益す

【正】要では、羊舌二枚、羊皮二具、羊腎四箇

二兩を和勻して塗り、翌早朝猪蹄湯で洗ひ去る。(千金)

するものをもを忌む。犯せば死する。(外臺) 【瘡癭】瘡癭痕、羊臍二具、羊乳一升、甘草末

【婦人帶下】羊臍一具を酢で洗淨して空心に食ふ。三回到過ぎす。魚肉、魚滑

附方

新。三。

【遠年の癭】大棗百箇を酒を五升に七日間漬けて飲む。

するに鍛成を以てす『といひ、註に『羊頭骨は能く鐵を消かす』とある。又、名醫
だ。按ずるに、張景陽の七命に『邪溪の赤山の精、羊骨を以てし、
故に誤つて銅、鐵を吞んだ場合にこれをを用ゐるは、その相制する關係に應用するの
時。曰く、羊腰骨灰は鏡を磨くに用ゐられ、羊頭骨は鐵を消かすに用ゐられる。

するためである。

發明

呆。曰く、齒は骨の餘、腎の標である。故に牙疼に羊脛骨を用ゐるは補
脚を健にし、牙齒を固くし、誤つて銅錢を吞みたるを治す【時珍】
主 治 【勞瘵】【虛冷】【脾弱】、腹中膨滿、白濁。濕熱を除き、腰、

とある。

曰く、性熱である。宿熱ある人は食つてはならぬ。〇〇鑑源に『羊髓骨は髓を伏す』
藥に、入るには煨性を存して用ゐる。【氣味】甘し、溫にして毒なし。

脛骨

音は行(かり)である。【性味】多能解毒。食ふ。五味を和して煮熟し、羊肉四兩と共に煮熟し、
五、荊芥一握、陳皮一兩、麴三兩を入れて煮熟して汁を取らり、麴を搜せて索餅に

附方

新 一

【鑑賞の要】

【鱧】大羊尾魚

歌聲

王

吳

【最良の】

【正】要

鐵微譜

五月三日。○

多を鹽泥でて固濟して煨ふ、研末して五錢に麝香、雄黃末各一錢入られ、そで瘡口を

寸比を水で服す。(寸金方) 甘草の精を成りたる【農水】の止まぬてま、
去^{かへり}無^な差^さ見^みし^し二

【林】
まき、ハナ、て、研り、
ゆ、
支、
煎易で、
二、髪を服す。
【同主下判】
まき、寺、災、方

[illegible][illegible]

食ふ。【胃】胃、消化管の上部にあり、食物を咀嚼し、消化液を分泌して食物を消化する。胃の容量は約1リットルである。胃の壁は筋肉でできているため、食物を攪拌する。胃の出口は十二指腸である。

[illegible]

是、故、王、子、の、書、を、讀、み、て、其、の、意、を、得、た、り。と、云、ふ、は、

【史記】(事蹟多)。手廻つて、時を要し、見聞の

一、^(イ)^(ロ)要するに、年々量を増やして、そのうち、お仕舞の箱に、手を入れたら

[illegible]

してから清油で調へて搽る。二三回で必ず癒える。【方】上方（聖惠方）。方は上に同じ。
には、羂羊鬚、荆芥、乾菜肉各二錢を焼いて性を存し、輕半錢を入れ、瘡を洗拭（洗拭）せぬ。
【香瓣瘡】顏面、耳邊に生じ、浸淫して水を出し、久しく癒えぬ。

附方

新二

和して敷く【時珍】記載は廣濟にある。

鬚羂羊ものが良し。【主治】小兒の口瘡、蠅螬尿瘡は、灰に焼いて油で

主治

【轉筋】には醋で煮てて脚を裹む【】（蓋禁方）。又、趨（走）の項を見よ。

毛

主治

懸壁

飲で服す。（聖惠）

に燒き、稀く煮た粥で食ふ。神效がある。【咽喉骨硬】（蓋禁方）。羊脛骨灰一錢を米

して素（もち）のやうになり、神效がある。【誤】銅錢を舂みたること【】（時後）。羊脛骨を灰

とを治す。羂羊脛骨を末にし、雞白子で和して敷き、聚朝米汁で洗ふ。三日醜

一錢をつつを溫酒で服す。【野鬚醜】身體が癢黒（癢黒）で皮が厚く、狀貌の醜

前左脛骨一骨一條を紙で裹んで泥で封じ、乾してから赤く殷き、棕櫚（棕櫚）灰等分を入

意に食ふ。（正）【筋骨羂痛】羊脛骨を酒に浸してて服す。【月水】の（水）をぬき、【羊

胡人方言。必言。嬰兒言。壓骨ノ

三〇漢上、未詳。

【三〇】頗兒必言。四十箇を水一升で煮つて大半をを減し、滓及び油を去り、凝るを待つて任
一 日一回、同、百九つ言。を米飲で服す。一には茯苓言。一兩半を加へる。【壓骨弱】
ためこの疾となる。羊脛骨灰一兩、厚朴言。二兩を糊言。で梧子言。大の丸にし、た
東垣方言。【脾虛の白濁】過慮のため脾を傷め、脾が精を攝することが不能となつた
【濕熱牙疼】羊脛骨灰二錢、白芷言。當歸、牙皂言。各一錢を末にして擦る。
香附子言。を黒燒にして各一兩、青鹽言。を煨言。き、生地黃言。を黒く燒いて各五錢を研言。つて用ゐ
一兩、升麻言。一兩、黃連言。二錢を末にして日に用ゐる。○瀕湖方では、羊脛骨を燒き、
にし、飛鹽言。二錢を入れ、共に研言。勻言。して日に用ゐる。○又ある方では、白羊脛骨灰
に、附方言。【牙に擦り、齒を固くする】鑑では、火で煨言。いた羊脛骨を末

附方

の到達し得る妙處である。

た『とある。談野翁にもこの方があつた。いつれも明敏な睿智言。に依る理論と経験と
翌朝大便から取り下した。その方を懸望したところ、それは羊脛灰言。の一兩のみだつ
く痛んで非常に憂懼したが、ある銀細工職人が炒言。した三錢を米飲で服言。せると、難
録に『漢上言。の張成忠の娘が七八歳の時、誤つて金環子言。一錢を呑み、胸膈が忍び難

氣付かぬ間に自ら出る。(千金)【箭鏃やせんの肉に入たりとさ】方は上に同じ。【反花惡
 氣せ】それと塗る。【木刺の肉に入たりとさ】乾羊尿の焼灰を豚脂とんじで和して塗る。それと
 る。【髮毛黄赤】羊尿の焼灰を臘ろう豚脂とんじで和し、晝三晝回、夜一晝三晝回塗る。黒くならねば止め
 と屋上懸煤えんばいとを清油じやうゆで調へて塗る。(普善)【頭風づふう白屑びやくせつ】烏羊糞の煎汁で洗ふ。(聖惠)【
 油で調へて敷く。】小兒の頭瘡づさう羊糞の煎湯で洗淨してから、羊糞の焼灰を清
 油あぶらを焼いて性を存してして研末し、輕粉けいふを入れ塗る。(集要)【痘風瘡とうふうそう證しやう】羊尿の焼灰を清
 水みづ二升に少漬け、汁を絞って汁を煮沸し、一升を傾かたむする。(廣濟方)【瘰癧れいでん】羊尿一升を
 囊ふくろも莖くきも少腫しやうしやうするは、羊尿やうに、黄蘗わうはくの煮汁で洗ふ。(外臺)【疔瘡ぢやうそう惡腫あくしやう】青羊尿せやうに一升を
 汁を取つて漬け、搓こえれば止める。或は猪膏じやうかうで和して塗るも佳し。(外臺)【時疫腫じえきしやう
 胎氣たいきを安する。】傷寒股痛わうかんこくう】手足が脱だつけんとするは、羊尿やうには、羊尿やうにの煮
 す。永ながく根を斷たつ。(孫氏集效方)【妊娠熱病にんしんねつびやう】青羊尿せやうにを研うり爛うしてて臍へしに塗る。それで
 【心氣疼しんきしやう痛いた】發病後經過の長短を問はず、山羊糞七箇、油頭髮あぶらかみ一團の焼灰を酒で服
 滓しを去つて三回に分服する。(聖惠)【小兒の流涎りうせん】白羊尿はくやうにを頻しきりに口中に納いれる。(千金)【
 らぬとさ】更には服す。(兵部手集)【反胃嘔はんゐゐ】羊糞やうふ五錢、童尿どうに一大盞を六分に煎じ、

溺

主治

【傷寒熱毒が手、足を攻め、腫痛し、

一升に鹽

豉を和

搗いて漬ける【(李時珍)

屎

青癢のもの良し。

味

【苦し、平にして毒なし】

時珍。粉霜

主治

【并に竹刺の肉に入りたるを罨ひ、魚鱗の腹中に納れて互告、焼灰の汁で理す。

す。

【(華)】焼灰は時耳を理す。

を制す。

【(蘇恭)】

良し【(蘇恭)】

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

腹中惡心腹

【主 治】補益の功は羊髓に同じ【正 要】

はならぬ『治』主 氣益し、中 氣益し、勞傷、虛寒を治す【時珍】

肉 氣 味

甘し、溫にして毒なし【正 要】湯に煮て味が少い、膈は食つて色で、脊が黒くして白斑あり、鹿に近似してゐる。

つ、南方の桂林に産するものは深褐色

にして尾が麋鹿に似たものをば洮羊と名ける。その皮は

をば黄羊と名ける。臨洮^{（一）}の諸處に産し、甚だ大きな

と名ける。野草中に生し、或は數十頭まで羣居するもの

走り、善く臥し、獨居して尾の黒いものをば黒尾黄羊

は羖羊に似て、喜^{（二）}んで沙地に臥す。沙漠に生じ、能く

角、ただ低く小さく、肋が細く、腹下が黃色を帯び、

黄羊は關西、及び桂林の諸處に産し、四種あつ

ふ。羊耳と云ふ。

その耳が甚だ小さいので、西方の地でこれを羖羊と云ふのは西蕃に産するからである。



〔羊 羖〕

註見チハ
（一）類
（二）類
（三）類
（四）類
（五）類
（六）類
（七）類
（八）類
（九）類
（十）類
（十一）類
（十二）類
（十三）類
（十四）類
（十五）類
（十六）類
（十七）類
（十八）類
（十九）類
（二十）類
（二十一）類
（二十二）類
（二十三）類
（二十四）類
（二十五）類
（二十六）類
（二十七）類
（二十八）類
（二十九）類
（三十）類
（三十一）類
（三十二）類
（三十三）類
（三十四）類
（三十五）類
（三十六）類
（三十七）類
（三十八）類
（三十九）類
（四十）類
（四十一）類
（四十二）類
（四十三）類
（四十四）類
（四十五）類
（四十六）類
（四十七）類
（四十八）類
（四十九）類
（五十）類
（五十一）類
（五十二）類
（五十三）類
（五十四）類
（五十五）類
（五十六）類
（五十七）類
（五十八）類
（五十九）類
（六十）類
（六十一）類
（六十二）類
（六十三）類
（六十四）類
（六十五）類
（六十六）類
（六十七）類
（六十八）類
（六十九）類
（七十）類
（七十一）類
（七十二）類
（七十三）類
（七十四）類
（七十五）類
（七十六）類
（七十七）類
（七十八）類
（七十九）類
（八十）類
（八十一）類
（八十二）類
（八十三）類
（八十四）類
（八十五）類
（八十六）類
（八十七）類
（八十八）類
（八十九）類
（九十）類
（九十一）類
（九十二）類
（九十三）類
（九十四）類
（九十五）類
（九十六）類
（九十七）類
（九十八）類
（九十九）類
（一百）類

類砂見
（一）類
（二）類
（三）類
（四）類
（五）類
（六）類
（七）類
（八）類
（九）類
（十）類
（十一）類
（十二）類
（十三）類
（十四）類
（十五）類
（十六）類
（十七）類
（十八）類
（十九）類
（二十）類
（二十一）類
（二十二）類
（二十三）類
（二十四）類
（二十五）類
（二十六）類
（二十七）類
（二十八）類
（二十九）類
（三十）類
（三十一）類
（三十二）類
（三十三）類
（三十四）類
（三十五）類
（三十六）類
（三十七）類
（三十八）類
（三十九）類
（四十）類
（四十一）類
（四十二）類
（四十三）類
（四十四）類
（四十五）類
（四十六）類
（四十七）類
（四十八）類
（四十九）類
（五十）類
（五十一）類
（五十二）類
（五十三）類
（五十四）類
（五十五）類
（五十六）類
（五十七）類
（五十八）類
（五十九）類
（六十）類
（六十一）類
（六十二）類
（六十三）類
（六十四）類
（六十五）類
（六十六）類
（六十七）類
（六十八）類
（六十九）類
（七十）類
（七十一）類
（七十二）類
（七十三）類
（七十四）類
（七十五）類
（七十六）類
（七十七）類
（七十八）類
（七十九）類
（八十）類
（八十一）類
（八十二）類
（八十三）類
（八十四）類
（八十五）類
（八十六）類
（八十七）類
（八十八）類
（八十九）類
（九十）類
（九十一）類
（九十二）類
（九十三）類
（九十四）類
（九十五）類
（九十六）類
（九十七）類
（九十八）類
（九十九）類
（一百）類

てあるからかく名けたのだ。或は幼稚なるを黄といふので、この羊は肥つて小さい
 獐羊 音は煩（ハル）である。時珍（ししん）曰く、羊に焼いて腹が黄を帯び

名 獐

黄羊 (綱目) 科名 牛 學名 Antelope (Gazella) gutturosa, Pallas. 科名 羊

て服す【葉氏摘玄】

存し、每一斤に棗肉、平胃散末一半を入れて和勻（わぎん）し、一錢つづつを空心に沸湯で調へ
 羊膝（やうか）乃ち羊の腹中に在る草の積塊である。【翻胃（はんい）】調へて服す。（聖濟錄）

主治

半錢つづつを、六年間東方から日光に照らされたる壁土の前湯で調へて服す。（聖濟錄）
 【慢脾驚風】羊屎二一箇を炮（ほう）き、丁香（たうかう）一百粒、胡椒五十粒と末にし、
 焼いて熏（くわん）する。（聖濟錄）【雷頭病】羊屎を焙（ほう）して研り、一錢を酒で服す。（聖濟方）
 し、猪骨髓（ぶつこつ）で調へて揉（も）る。（海上）【濕癩浸淫】新羊屎の絞汁を乾（かん）いたもの煙末
 ら揉（も）る。【瘰癧の已に破れたるもの】羊屎を焼いて五錢、杏仁を焼いて五錢を研か
 【瘡魚尾】一尾の腸を去つて羯羊屎を填満し、焼いて性を存し、先づ米泔で洗つて

本草綱目獸部第五十卷下

本草綱目獸部第五十五卷上終

やうな意味である。梵書にはこれを瞿摩帝といつてある。

迹の大きなもので、史記に牛を稱して四蹄といひ、今一般に牛を稱して一頭といふ内則はこれを元大武といふ。元は足跡の意味、武は足跡の意味だ。牛は肥えれば、牛の牛は大きく、羊の牛は小さい。故にいづれもその牛の名を呼ぶのである。ものだ『とつた。周禮にはこれを大牛といつてある。牛とは畜を參ふ室の參と稱するべし。按ずるに、許慎は『牛は作である。牛を大性といふ。以て時珍曰く、

釋名

した。

拾遺の寶麟尿を此には一條に併記

校正

科學科
名稱名稱
しし

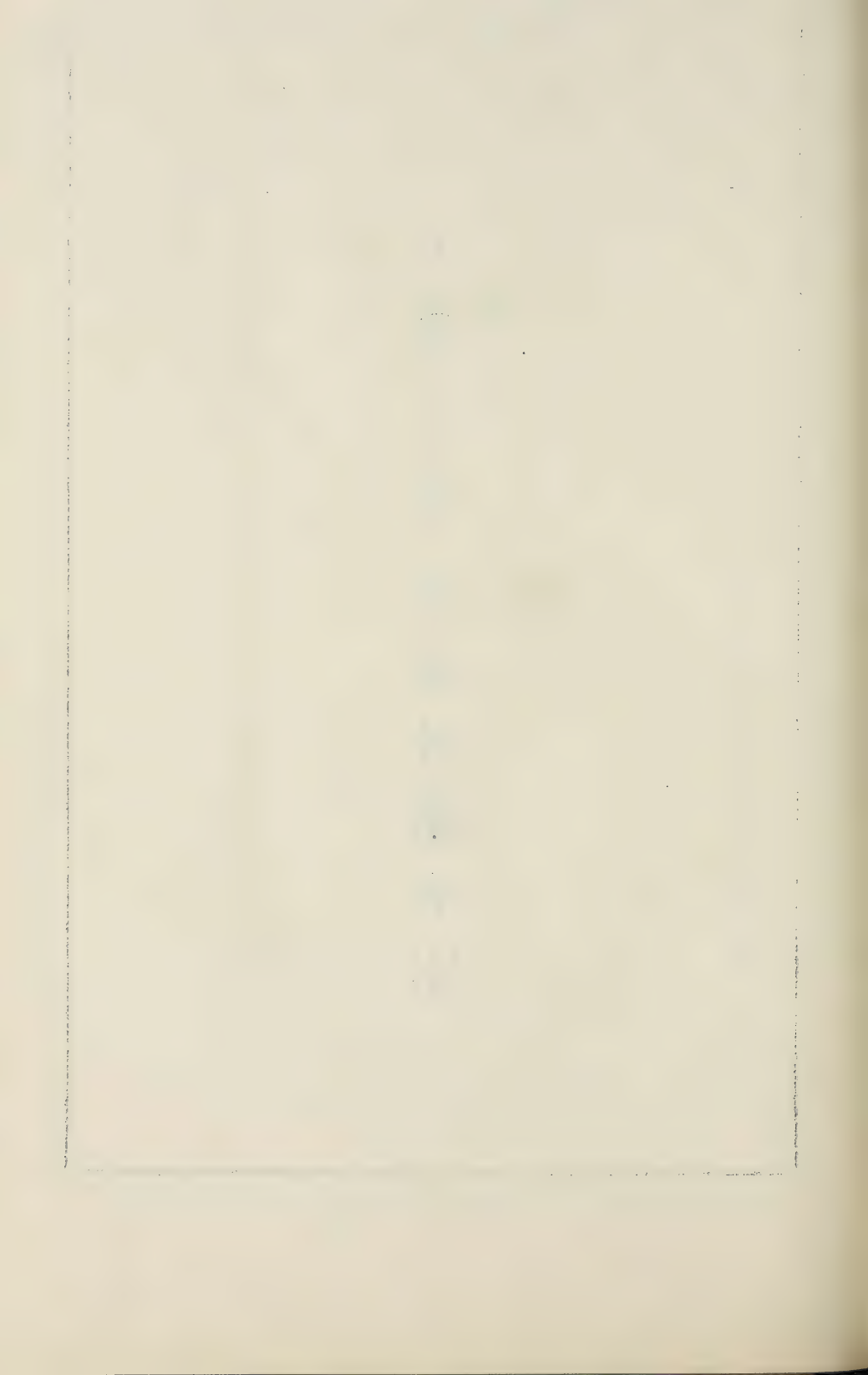
(本經中品)

牛

獸の一

リ。天。ハ。理。依。ニ。可。ハ。其。任。ス。能。註
フ。分。析。理。ハ。耕。ス。ル。能。註
ヲ。事。ニ。事。分。理、
事。文。件。事。分。理、
事。說。文。件。事。分。理、

Bos taurus, Linne.



かからざる性が、順であらう。造化権輿『乾』馬を馬となし、坤陰を牛となす。故に馬蹄踏

を奉るゝ、人々、田を復たし、
 市を立て、

鼻木、いふ、角胎を、いふ、胎を

葉、ひふと葉を歸、ひふと根を

萬事皆備

前
六
二
八
五
二
四
二
八
一
二
四
一
四

[illegible]

工
一
二
三
四
五
六
七
八
九

[illegible]

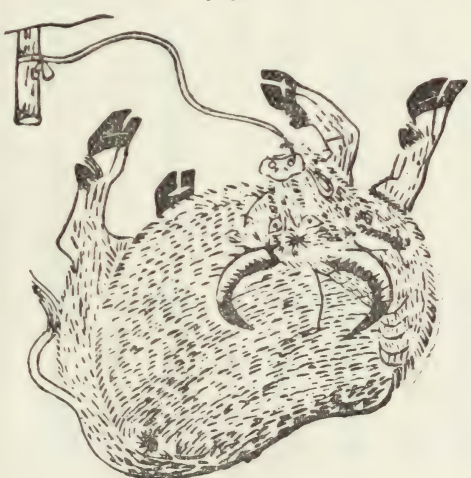
六箇とになり、六歳以後では毎日骨の

は二歳、歯四つ、
は三歳、歯六つ、

三、から考へるその年の利である。

(牛) — いき火は牛水 —

(卅)



角(五) 咄
口カフハ 咄
中ハ 咄
中ハ 咄

牛は歯が下
はこ牛だ。

及び睡^だを止める【孫思邈】

主治

人^ノ字^ニ大^ニ觀^ニ上^ニ咬^ニ

洗^{せん}曰^く、惡^を馬^をが肉^をを食^をへば馴^なれる。やはりの性に因るのである。

を入^{いれ}ば爛^{らん}れ易^い。これは相^あ合^あする關係に因るのだとある。

人^をして熱^{ねつ}病^{びやう}せしめる。生^{せい}薑^{きやう}と合^あせて食^をへば菌^{きん}を損^{そん}ずる。牛^{ぎう}肉^{にく}を煮^にるに杏^{けい}仁^に、蘆^ろ葉^{えつ}

肉^を、及^{及び}黍^と米^{まい}酒^{しゆ}と合^あせて食^をへば、いづれも白^{はく}蝨^しを生^{せい}ずる。非^ひ、雞^{けい}と合^あせて食^をへば

し、白^{はく}首^くの^{あつて}人^をを食^をへば殺^{ころ}す。疥^せ牛^{ぎう}を食^をへば痒^{かゆ}を發^{はつ}する。黄^{わう}牛^{ぎう}、水^{すい}牛^{ぎう}の肉^をを猪^ち

が^{あつて}、人^ををして疔^ぢを生^{せい}じ、暴^{はう}に死^しせしめるとあり、食^を經^{けい}には牛^{ぎう}の自^じ毒^{どく}

には牛^{ぎう}の夜^や鳴^{めい}くもの^{あつて}、その毒^{どく}に中^{ちゆう}つた場^{ばう}は合^あはだ人^{にん}乳^{にゅう}を以^{もつ}て解^{かい}し得^えるものだ、内^{ない}則^{そく}

の時^{とき}曰^く、張^{ちやう}仲^{ちゆう}景^{けい}が牛^{ぎう}が蛇^だを瞰^{かん}へば毛^{もう}髮^{はつ}が白^{はく}くつて後^ごに順^{じゆん}になる』といつた

灌^{かん}の^{あつて}、獨^{どく}に^はそれな^い。

て、人^ををして痢^り血^{けつ}して死^しに至^{いた}らしめる。北方^{ほくぱう}の地^ちでは牛^{ぎう}が瘦^{しやう}ると多^{おほ}く鼻^{はな}から蛇^だを

しめる。黒^く牛^{ぎう}に^は頭^{あたま}の白^{はく}いもの^{あつて}は食^をはな^ぬ。獨^{どく}肝^{かん}の^{あつて}は大^{だい}毒^{どく}があ

（六）腐^く惡^{あく}臭^{きう}也。

臓器。曰く、牛の病死したものは猶疾、痲癰を發し、入をして洞下し、疰病となら

骨髄が已に竭たもの食つてはならぬ。

養をなすものだから多く殺してはならぬ。牛の死したものの場合、血脈が已に絶え、

洗。曰く、黄牛は病を動ずる。黒牛は就中食つてはならぬ。牛なるものは耕作上の

では水牛ほどでない。

日。曰く、黄牛肉には微毒がある。これを食べ食へば藥毒を發するが、病を動ずる點

るだけのものである。

弘。曰く、犛牛は勝れたもので、青牛を良しとする。水牛はただ食料に供す

黄牛肉

氣味 甘し、溫にして毒なし

一面を知るだけのことだ』とある。

である。乾は健、坤は順だからといふことの根拠として説をなすは、蓋しそのに従ふのであり、牛が起つた後に足を先にし、臥すは先に足を先にし、陰に従ふのは陽が勝つたためである。馬が起つた後に足を先にし、臥すは先に足を先にし、陽は立

故に病が去つて胃が補を得るといふのであつて、やはり奇法である。但し病が腸、それのみを飲んで満つるきは凝れだるだけのものだ。補を併りて瀉するのである。○王。綸曰。牛、肉は本、脾、胃を補するもので、吐、下、の薬ではないのであつて、

ならしめて精神を爽快ならしめる。

やうにして陳莖のものが流つて去ることを然、然、然、とて、枯槁を潤す。在る場合に吐は因つて去り、濁道に在る場合に利に因つて除く。洪水が泛濫するに到らざる所なきものだ。病の表に在る場合に吐は因つて汗を發し、清道になり、一定の形態のないものとなる。故に能く腸、胃、に由つて肌膚、毛、筋、爪、甲、に透り、配合して働かせるのである。肉は胃の樂むところのものであつて、熱すれば液に蓋し牛は坤土であつて、黄は土の色である。その本の來の順なる作用を乾牡の作用に配合して、利の後に瀉するときは、その小便を服用する。やはり殘餘の毒を瀉する。物を瀉する作用もあるものだ。かく二日睡つたならば淡粥を食つて養ふ。牛、利せしめ、中に在るときは吐は利して利せしめ、

(?) 水牛
Eubalus bubalis,
(Linne)
學名

には、水牛肉肺一兩を黄に炙き、燕巢土、伏龍肝、飛羅麴各二兩、砒黄一錢を末に
裹めば腫が消いて痛が止まる。(范汪方)【白虎風痛】寒熱が發歇し、骨が微腫する
手、足の腫痛【傷寒時氣の毒攻で手、足が斷れんとするほど腫痛するに、は、牛肉で
養ふ】(別錄)【新】水腫尿澀、牛肉一斤を蒸熟し、薑、醋で空心に食ふ。(鏡心)
養ふ【虚を補して壯健にし、筋骨を強くし、水腫を消し、濕氣を除く】(醫器)
宜忌は黄牛に同じ。治主【平にして毒なし】(蘇合)【日華】冷にして微毒あり。
水牛肉 氣味甘し、平にして酒で輕粉を調へて敷く。(直指方)
【每】五に更に牛肉一斤を炙いて食ひ、酒で輕粉を調へて敷く。(直指方)【牛】牛皮風
癰に煮熟し、肉を食ひ汁を飲む。癰は必ず自消して甚だ效がある。(藥性類聚)
食物の痞積が自ら下るものだ。(經驗方)【腹中】癰積【黄牛肉一斤、恒山三錢を共
煮】(意)【腹中】痞積【牛】牛肉四兩を切片し、風化石灰一錢をこれに擦つて蒸熟して食ふ。
を和して搗いて梧子大の丸にし、一日三回、空心に五十丸を酒で服す。(乾坤生
て各四兩を末にし、牛肉半斤毎に藥末一斤を入れ、紅棗を蒸熟して皮を去つたもの
小茴香を炒つ

げては用をなさぬ。それを焙じ乾して末にし、適宜使用し得るのであつて、山藥を
 め、桑柴の文武火で一晝夜煮て取出す。黄沙のやうになれば佳いのである。黒く焦
 水が清くなるまでを程度とする。無灰好酒と共に壺中に入れて重泥で封じ、固
 肉を用ゐ、筋膜を去つて切片し、河水で數回洗つてから一夜浸し、翌日再び三回洗ひ、
 もいづれもこの法に依つて調製し得るのだ。【返本丸】諸虛百損を補す。黄犍牛
 いづれも任意にこれを食ふ。或は酒で調へて服するが更に妙である。肥大、及び鹿
 を待つて壺中に盛り、土中に埋めて壺の面を露出して置く。凡そ飲食に中つたものは
 で泥のやうになるまで煮てその骨を皆と砕き、併せて瀝して稠汁を取り、冷える
 草、蜀椒各二兩、食鹽二兩、淳酒二斗を入れ、共に八分を標準として煮る。文火
 煮て、十斤毎に黃芪十兩、人參四兩、茯苓六兩、官桂、良薑各五錢、陳皮三兩、甘
 に屠殺し、血を去り毛を燂いて洗淨し、臟腑と共に寸分遺さず大銅鍋に入れて
 るがよい。小牛犢兒のまだ交感せぬ一頭の頭を用ゐ、臘月の初八日、或は戊巳の日
 胃以外の場合には施し難いものやうに思はれる。

附方

新五。

【小刀圭】

韓飛。

胃以外の場合には施し難いものやうに思はれる。

し、大腸を潤ほし、氣痢を治し、痘瘡を除く。老人には粥に煮るが甚だ宜し【時珍】

薑、葱を入れば小兒の乳吐を止め、勞を補す【思隱】反胃熱噦を治し、勞損を補益

る【藏器】熱風患人これを食べるが宜し【孟詵】老人は煮て食ふが益がある。

を潤す【日華】冷補し、熱氣を下す。煎沸して食へば、冷氣痰癖を去

主 治 肺を養ひ、熱毒を解し、皮膚

○素先、不灰木を制す。

時珍曰、凡そ取るには物を以て撞けば得易い。その他、乳酪の條下に詳記する。

して腹中癥結せしめる。冷氣の患者はこれ忌む。生魚と食合せれば瘕となる。

て冷してかゝる。熱食すれば變に凡そ乳を服するに勝る。【時珍】酸物と相反するもので、人を

藏。器曰く、黒牛の乳は黄牛に勝る。【時珍】必す煮て一二沸で停め

右。蜜を造るに必要なものだ。

口を乾かしめが、温にして飲めばよし。水牛乳を酪に作れば濃厚で喉に勝る。

恭。曰く、犐牛乳は平性である。生飲めば人を利せしめ、熱飲めば人の

乳 氣 味 【甘】しし微寒にして毒なし【弘景】犐牛乳が佳し。

り、鼓汁を入れて食ふ(心健)【煎つた膠が最も良し】阿膠アケの條に詳記する。

皮 水牛のものが良し。主 治 【水氣浮腫、小便澀少ハレには、皮を蒸熱して切

で炙ヒキ熱して患はぬ處を熨すれば漸次ハレに止る(宗爽)【消渴には、石燕と共に煮て汁を服す(藏器)】

壯ヒキの乳ハレ無ハレさを治するには羹ハレにして食ふ。兩日に過ぎずして無限に乳が下る。火氣

主 治 【口眼喎斜を療す。乾ける濕ハレへるとに拘らず、火氣

鼻 水牛のものが良し。主 治 【消渴には、石燕と共に煮て汁を服す(藏器)】

し。(食醫心鏡)

煮、羹ハレにして切つて食ふ。或は水牛の尾條を切つて腊ハレにして食ふ。或は煮るも佳

附 方 【水腫】脹滿し、小便澀るには、水牛蹄一具を去つて汁

誼(誼)

筋を食つてはならぬ。多く食へば肉刺を生ぜしめる。主 治 【熱風を下す(孟)

頭 蹄 水牛のものが良し。氣 味 【涼なり】食經に『冷思人ハレは蹄中の巨

は薬を取つて油ハレを熱したハレ鍋ハレの中ハレへ抛ハレつ(聖惠)

し、少量ついで新汲水で和して弾丸ハレ大に作り、それで痛處を摩す。痛が止んだとさ

兩を三升に煎し取り、三合つのを服す。羊乳でもよし。或は牛乳五合で硫黄末一兩
 ぼし、肌肉を濯^{すす}かにし、人をして壯健ならしめる。【脚氣^{しやくき}痺^{しび}】牛乳五升、硫黄三
 食ひ、その養^{やう}を肥料^{けいり}にして栽培^{さいばい}した菜を食ふ。忌むもの何れもなし。能く臟腑^{ざうふ}を潤
 毎日一兩づつ七日與へ食はせてその牛乳を取り、或は一升を熱し、或は粥^{がゆ}にして
 飲む。又ある方は、白石末三斤に黑豆を和して十歳以上の生犢^{せいとく}に與へ、
 兩を袋^{ふくろ}に盛り、牛乳一升で三分の一に減ずて煎して袋を去り、一日三回その乳を
 て十日に至つて止める。【外癰^{がいよう}方^{ほう}】勞損^{ろうとん}の補益^{ほふやく}千金翼^{せんぎよく}、推尙書^{すいしやうしよ}の方^{ほう}では、鍾乳粉^{しゆにゅうふ}一
 【弱^{じやく}】七歳以下、五歳以上の黄牛の乳一升、水四升を一升に煎し取り、少しづつ飲ん
 脾中熱、下焦虚冷で小便多きは、羊乳を三合づつ四合づつ飲む。【廣利^{くわうり}方^{ほう}】病後の虛
 て煎じ、五六沸してから、その兒の大小を量つて與へ服させる。【下虚消渴^{げきしやうかく}】心、
 三回、空腹に服す。【金^{きん}方^{ほう}】小兒の熱^{ねつ}【牛乳二合、薑汁一合を銀器に入れて文火
 附方^{ふくほう}】風熱毒氣^{ふうねつどくき}【煎^{せん}した牛乳一升、生の牛乳一升を和勻し、一日
 三錢を共に煎して半減し、空腹に頓服するのであつたとある。】とある。
 つて即座に三品の文官を與へ、鴻臚寺卿を授けられた。その方は、牛乳半斤、華

痘。(二〇) 悲精黃病(女勞)

云。九。職方地方官子

【方】(二)走精黃病【面部、目俱黃、多睡、舌紫、甚、面顏面】

は、牛脂を漿一箇ぼろ鼻中に納れて吸入する。脂肪は消化される。食物が随つて出てくる。(外痔)

三回で永く瘡を癒さる。(姚氏)

【食物の鼻に入つたとき】

介介として痛んで出た。

收め、一日三回、一杯づつ酒を服用す。(蘇軾)

【腋下胡】牛脂胡粉を和して

三斗で
一斗を
でに煮
瀾淨し、
煉淨し
た黄生
脂一合
を入れ、
慢火で
煎書し
て瓶に
取て

【附方】新五。治諸瘡。生肌。根。切。下。水。

主治 諸瘡、疥癬、白禿。やはり面脂に入れる【時珍】

多食すれば痼疾、瘡瘍を發する。○鑑源に『牛脂は銅を軟にする』とある。

脂黃生のものが、煉つて用ゐる。

を熱飲し、翌朝猪脂（猪脂シロ）一升を溶化してて飲めば下出する。（肘後）

【誤つて水蛭を呑んだとき】腸痛し、黄瘦するにほ、半血二升一。

つた。故に此に記載して緩急の場合の備とす。

読んで見なす。この書は、元來、讀まねばならぬ。

久して甦つた『とある。何孟春は『予が職方に奉職中、各地の國境守備の將士に

貫き、幾ど絶命せんとしたか、伯顔が命じて水牛の腹を剖いて、その中に納れると良
つた』とあり、又『李庭が伯顔に従つて、郢州を攻めたとき、左脇に傷いて矢が骨を
かき、命じて一頭の牛の腹を剖き、その牛の腹中に納れて熱血中に浸すと間もなく
死なへた』と幾ど絶命せんとしたが、太祖
の時。曰く、按ずるに、元史に『布智兒が太祖の回征討軍に従軍した

發明

治す時珍

折傷で死に垂たるを治す。又、水蛭を下す。煮て醋を拌せて食へば血痢、便血を

血

氣味

鹹し、平にして毒なし

主治

毒を解し、腸を利し、金瘡、

なる。蜘蛛瘡毒【毒】牛乳を飲むが良し。生蜘蛛

を少しづつ滴入すれば出る。若し腹に入つた場合には、一二升を飲めば化して水

【方】重舌で涎を出すもの【特】牛乳を飲む。【】蛇の耳に入りたる【】牛乳

するものであつて、これを肉人と名ける。常に牛乳を飲めば自ら治する。夏子瘰癧疾

な形状の瘡が生じ、破れると項から皮のままで分裂して脱し、それが足にまで達

を煎調して服用す。汗を取つて尤も良し。【】肉人怪病【】項に五色で櫻桃のや

して效驗がある。（聖濟總錄）】氣積で塊となつたもの【牛腦散——牛腦子一箇を筋を

和勻し、糊で梧子大の丸にし、三十丸つづつを空心に好酒で服す。一、三日三服、百日

黄牛一頭、牛腦子一箇を皮、筋を去つて搗り爛らし、皮硝末一斤、蒸餅六箇を舂し研つて

方（牛腦子一箇を皮、筋を去つて搗り爛らし、皮硝末一斤、蒸餅六箇を舂し研つて。神效がある。）

食ひ盡して一酔する。醒めればその病が失つたやうに瘥えて甚だ效驗がある。（保壽堂

腦子にその末を搽り、瓷器に入れ酒を加へて傾に煮熱し、熱に乗じて食ひ、全量牛

ず、諸藥の奏效せぬものに神の如き效がある。白芷、芍藥各三錢を末にし、黄牛

し、二錢匕つづつを空心に燒酒で服す。（乾坤秘韞）】偏、正頭風【發病の遠近に拘ら

乾し、杏仁を煮て皮を去り、胡桃仁、白蜜各一斤、香油四兩を共に熬り乾して末に

附方新四。吐血、咯血【五勞、七傷である。水牛牛腦一箇を紙に塗つてて

用ゐる。（時珍）

主治

【風眩、消渴を治す】（蘇恭）】脾積、瘕瘕を潤す。而脂に入れて

く、牛の熱病で死んだものはその腦を食つてはならぬ。腸癰を生ぜしめるのだ。

腦 黄牛、水牛、黄牛牛のものか良し。【氣味 甘し、温にして微毒あり】心鏡に曰

して服す。(經心録)【手、足の皸裂】牛髓を敷く。

羊脂各二升、白蜜、薑汁、酥各三升三を煎回煎し下回こぎて隨意酒和

つて湯で一、二日蒸て、匙をつつ空に心々に服す。（瑞竹方）【劈損風溼】陸杭膏——牛髓、

兩、胡桃肉四兩、杏仁泥四兩、山藥末半斤、煉蜜一斤、各共搗て膏し、瓶盛

附方 新三。【精を補ふ、し、肺を潤ふ、し】陽を壯ふ、し、胃を助ける。煉生髓四

附方

新三

補し肌を溼し、面を洗ひ、打傷を擦るに甚だ妙なり【参考】

【孟】す
白靈等分煎してて服す
【肺】を潤してほ
【胃】を

いづれも清酒で暖服する【別録】
胃氣を平にし、十二経脈を通ずる【息養】
【瘦病】

絶(三) 傷を續き、氣力を益し、洩利を止め、清濁を去る。

主 治 【中】を補し、骨髓を填てゐる。久しく服すれば、天年を増す。【本經】

吳王

【つぎ】

鹽生、黑生、黃生、望牛のものが良し。煉つて用ゐる。

とて焙すれば活る。(二)黒皮一重を去つて濃煎し、たぎ湯を飲む。(三十三)大蘇方

爪甲の裏になくつゝ各場所には死すにさる。煎すて以て糞を糞

力解ニカク何物ノ黒皮

陽ノ誤ナラ

を吞めば肝を鎮め、目を明にする【(藥性)】南星^{なんせい}を醗^ふして陰乾したものは驚風を

濕を治するにいい【(蘇恭)】黑豆^{くろまめ}を醗^ふして日取出し、毎夜一箇つ

焦燥^{せうそう}を止め、目、精を益^{えき}す【(別錄)】臘月^{ろうがつ}に槐子^{かいし}を醗^ふして服すれば目を明にし、疳

【主 治】藥を丸にするに【(本經)】心腹^{しんぷく}の熱渴^{ねつかつ}を除き、下痢、及び口な

が、今此に拔出した。類に従ふたわけである。【氣 味】苦、大寒にして毒な

膽 臘月^{ろうがつ}黄牛、青牛のものが良し。弘景曰く、膽はもと黄條中に附してあつた

醋で食ふ【(醫心方)】

氣、水、痢を治し、酒毒、藥毒、丹行毒の發熱を解す。肝と共に生に作つて薑、

その胃には膽があり、肝が有る、蜂、蟻、蛇、鼠、其他の獸類と異なるところがある【主 治】熱

様をいつたものだ。牛、羊はあらゆる草を食ひ、他の獸類と異なるところがある【主 治】有

汗を取つて瘡をえる【(金匱要略)】

附 方

胃を養ふ【(時珍)】

新 一。

【蛇 嗽】た牛の牛の吐を細切し、水一斗で一斗に煮て服す。

渴、風眩。五臟を補す。醋で煮て食ふ【説】中を補し、氣を益し、毒を解し、脾、消

【主 治】青の牛、腸、胃と夫肉、夫血とを合せて食へば人をして病を止める。

【主 治】胃 黄牛、水牛、いづれも良し。【味 氣】甘し、温にして毒なし【弘景曰く、

腎氣を補し、精を益す【別錄】濕痺を治す【孫思邈】

【主 治】

食ふ【説】婦人の陰驢にこれを納れば蟲を引く【時珍】

肝 主 治 已下牛のものが良し。【主 治】肺を補す【藏器】

【主 治】肺を補す【藏器】

脾 主 治 已下牛のものが良し。【主 治】脾を補す【藏器】臘月に淡煮してて日に一回食へば痔瘻を治す。

【主 治】心已下黄牛のものが良し。【虚忘。心補す【別錄】

服す【同上】

で焙じ乾して末にし、輕粉三錢を入れて勻ぜ、一日三回、二錢づつを空心に燒酒で香、沈香、砂仁各三兩、皮硝一兩、碗を入れ、千杵搗いてから生銅中に入れて文武火去、雄雞一隻を黄のある一箇を夜浸して搗き爛らし、木

(一四) 呼吸氣吸

[illegible]

つて抹る。(海上方)

研 具を焼いて性を存し、牛胞衣【のぬらぬ】斂^{ちん}の【腫^{しゅ}瘡^{そう}】

新。一。方 附 胞衣

がその效驗である。(經驗)

置いて取出し、大麥の丸にし、紙に擦^{すり}込んで瘡中に送入する。惡物の流出する
十文、麝香二十文を用ゐ、三味を和勻して牛膽中に入れ、四十九日間高所に懸けて
【持】瘻の水を出すのも牛膽、蝟膽各一、賦粉^{ふふ}五
久して火のやうになる。(千金)
黄を牛膽中に百日間納れて乾かしめ、十四箇づつを取つて陰中^{いんちゆう}に納れる。
少量の蜜を和して梧子大の丸にし、五十丸づつを薑湯で服す。【男子の陰冷^{いんれい}食^{じき}菜^{さい}】
【殺^{ころ}疽^{しゅ}食^{じき}黄^{わう}】牛膽汁一箇、苦^く參^{じん}二兩、龍膽草一兩を末にし、

附 方

新。一。舊

鳴かぬとある。これはいづつれも制するところの關係があるのだ。

やうに變へるのだとある。『蛙は牛膽を得れば』
註に能く人の形を見まがへる
桂に塗ればその人が誰と判らなくなる
牛膽を熱に塗れば釜が鳴る。(三)

(三) 桂ノ桂ノ誤。

治するに奇功がある【蘇頌】黄を殺し、蟲腫を治す【時珍】

ものを焙いたものは、時氣の寒熱頭病を治す【】別録

角 氣 味 【苦し、寒にして毒なし】之。平なり。主 治 【水牛の

で和して傳ける。【】時後方

角 醃を灰に燒き、方寸匕を酒で服す。【】養上方

皮を去り、等を分を末にし、空心に二錢匕の酒を以て服す。【】孫和方

【】逆效方 赤、白帶下【】牛角醃を煙がなくするまで燒き、附子（きん）を水に七回浸して

服す。【】小兒の滯下【】牛角醃を灰に燒いて方寸匕を水で服す。【】大便秘下血で

附 方 新、四 舊 【】大腸冷痢【】牛角醃（きん）を灰に燒き、一、二回、二錢を飲で

精である。乃ち厥陰、少陰の血分の薬であつて、これを燒けば性が澀る。故に血痢、

酒にこれを用ゐてある。

發 明 時珍曰く、牛角醃は筋の粹、骨の餘であつて、醃なるものはまた角の

崩、赤、白帶下、冷痢瀉血、水洩を止める【】藥性

千金の徐王

下血、血痢に主效がある【宗慶】
 赤、白痢に主效がある【宗慶】
 血の疼痛を下す。婦人の帶下
 血にこれを用いて酒で服す【本經】
 灰は

氣味

苦し、溫にして毒なし【甄權】
 甘く、苦く甘く

主治

便下血、血痢に主效がある【宗慶】
 赤、白痢に主效がある【宗慶】
 血の疼痛を下す。婦人の帶下
 血にこれを用いて酒で服す【本經】
 灰は

牛角鯨 釋名

角胎

吐き去る。損動するものの場合、末錢を拵る。これよりやう類を以て従ふのだ。
 固濟して赤く煨いて末にし、水盞で末二錢を煎じ、熱して含漱し、冷えてきたとき
 固濟して赤く煨いて末にし、水盞で末二錢を煎じ、熱して含漱し、冷えてきたとき
 固濟して赤く煨いて末にし、水盞で末二錢を煎じ、熱して含漱し、冷えてきたとき

發明

時珍

固濟して赤く煨いて末にし、水盞で末二錢を煎じ、熱して含漱し、冷えてきたとき
 固濟して赤く煨いて末にし、水盞で末二錢を煎じ、熱して含漱し、冷えてきたとき
 固濟して赤く煨いて末にし、水盞で末二錢を煎じ、熱して含漱し、冷えてきたとき

主治

小兒の牛【外臺】

せ、小尚（しょう）香（かう）、鹽少量を入れて拌ぜ

主 治 牯牛卵囊

（蘇恭）

【婦人の漏下赤白で子無

主 治

陰莖 黄牛、烏牛、水牛、いづれも宜し。

の焼灰を油で調へて敷く（癰瘻）

【玉莖に生じた瘡】牛蹄中

【膿癰瘡】牛蹄中の焼灰を桐油で和して敷く（海上方）

【性】黄米粉糊で和して膏にして敷く（經絡）

【牛皮風】牛蹄中、一錢を末にして入れて灰に焼

【損傷の接骨】牛蹄中一箇の中に乳香、沒藥各一錢を末にして入れて灰に焼

【附方】卒魔（新五）で（新五）ぬめぬめの【青牛蹄、或は馬蹄を頭上にかざせば活さるる】

を止める（時珍）記載は集要の諸方にある。

水で服すれば牛癰を治す。油で和して貼着に塗る。研末して貼れば小兒の夜啼

【主 治】青牛のものが良し。【婦人の漏下赤白】蘇恭（蘇恭）焼灰を

飲んで服す。これは御傳の方である。（張文仲方）

【水穀痢疾】牛骨灰と六月六日の麴とを炒つて等分を末にし、方寸匕を

東、九、朝鮮、鮮、地、方、今、ハ、指、ス。

附方

鼻中に生じた瘡【牛骨、狗骨を灰に燒き、臘猪脂で和して敷

入れて病を治すといふことも尤な次第だ。

といふ。牛は智を含むの物ではないが、骨に事は先に先ずけるの靈がある。これこそ薬に

發明

時珍曰く、東夷では骨で吉凶を占卜し、大抵中らぬものはない

を蝕するものに塗るが有效である【時珍】記載は十便にある。

帶下、腸風瀉血、水瀉を治す【日華】邪瘡を治す。燒灰と共に疥瘡の口、鼻中

骨

氣味甘し、溫にして毒なし【主治】

鼻洪、鼻中

て塗る【聖惠方】

し、方寸匕を酒で服用す【子母秘錄】赤髮落【牛角、羊角の燒灰等分を猪脂で調へ

す【總錄】

血の心の上逆するもの【煩悶し、刺痛するに、水牛角を燒いて末に

附方

石淋破血【牛角を灰に燒き、一日五回、方寸匕を酒で服

る【蘇頌】記載は崔元亮の方にある。【時珍】淋破血を治す

服す。小兒の乳の飲み振る悪く嘔痺し、乳房に塗つて嘔ませれば瘡を

す【日華】望牛の喉痺腫塞で死せんとするを治す。灰に燒いて一錢を酒で

鼻瘡、及び濕癬に塗る【時珍】記載は外臺諸方にある。

主 治

【小兒客忤に中りたるには水に少量を和して灌ぐ。又、小兒の

れば自ら落ちる。千金。

ける。【目】牛口涎を頻りに塗

に同じ。【聖惠方】黑睛の破れたものも瘡を磨る。肘後

ば自ら瘡を磨る。【外臺方】小兒の口を損じ、【牛口涎】を破りたるものも【牛口涎】に二回點けて風を避

て食はす。【小兒の流涎】東に行くと牛口涎の中、及ひ臍上

仁三十箇を研末し、銅器に入れて稠く熬り、一日三回、兩匙づつを粥に和して與へ

香汁を入れた粥を與へ食はす。○【千疋】は、好蜜を半斤、木麩

に熱し、先づ帛で緊く胃と臍とを束ねて氣喘を鎮せしめ、熱に乗じて飲む。同時に

て食ふ。○【危氏得效】は、香牛飲——牛涎一盞に少量を入れ、銀盞に入れて傾し

【附 方】新七。【時珍】集成では、糯米を牛涎で持せて小丸にし、煮熱し

治す【時珍】記載は外臺、胡居士の方にある。

す。一、合灌げば小兒の霍亂を治す。鹽少量を入れて一盞を飲服すれば喉閉口噤を

吐【日華】水で二匙を服すれば終身嘔せぬ【思遷】小兒に吮せれば客忤を治

藥で牛の口を包んで耕作に驅使し、疲勞して出す涎を取る。治主【反胃】はんい或は荷

涎口。日華曰く、水で老牛の口を洗ひ、鹽を塗つて置くと少頃して出る。或は荷

けて置くも效がある。

同、方寸匕を酒で服す。一〇には、牯牛の陰毛七本、黄荆葉七片を内關上に縛り

主を漿水で服す。張文仲方【邪氣瘧疾】外臺では、黑牛尾を焼いて末にし、一、回、一

尾毛でもよし。集驗方【小兒石淋】特牛の陰頭の毛を灰に燒き、一、回、一、刀

附方【淋疾の卒患】牛耳中の毛を燒き、牛錢を取つて水で服す。

瘧病を治するは、蓋し釃醉の意味だ。

ある。これは牛の性は牛の性に順にして毛の性が下行するものだからではあるまいか。又、

發明時。珍曰く、古方に、牛の耳毛、陰毛、尾毛を淋を治するに多く用ゐて

いづれも淋閉を通ずる主效がある【時珍】

毛主治【臍毛は小兒の久しく歩かせぬを治す】【蘇恭】耳毛、尾毛、陰毛、

て食ふ【吳球】

發明

時珍曰、牛屎は熱を散し、毒を解し、潰を利す。故に能く腫、疽、

小便不通を治す【蘇恭】

〃
三〇三 大觀ニ痘ニ作

主治

の燒いて灸瘡の瘡を能く癒す【時珍】絞つた汁は、消瘡、癰疽、疔瘡、及び癰腫の合せぬに
ふ。【水腫、惡氣、乾いたものを燐いて鼠癭、惡瘡に敷く】【別錄】灰に養
寒にして毒なし【鏡源】曰く、牛屎は銅量を抽く。火に燒いて一切の藥力を養
屎稀いものを牛洞と名ける。黄牝牛のもの良し。【氣味】苦し、

て止む【梅師】

牛屎二升を服す【千金方】刺傷が水に中つたものも【烏牛屎二升を服す。三服にし

どの量を服す。鳴轉して病が出るものだ。隔日に更に服す【千金翼】霍亂逆【烏

〃
三〇四 大觀ニ外臺祕要

る【癰疽、瘰癧、癰疽、癰疽】【烏牛屎一升を微火で稠い飴のやうに煎じ、空心に棗め

【氣脹の久患】【烏牛屎一升を空心に溫服する。氣が散したとき止める。

【氣滿】尿の澀るは、【烏牛屎一升を取つて一日に分服し、消いたとき止める。】脚氣

〃
三〇五 大觀ニ痔ニ作

三十九【風毒脚】（毒方）だものも奏效するも下して及び惡物を水、及び惡物を茶で茶服す。

三升まで煮つて末を入れ、丸にし得るまで煮つて梧子大の丸にし、一日三回、

水氣喘促【水腫尿澀】小便の澀るには、生牛尿一斗、刺梨皮末半斤を用ゐ、先づ銅器で尿を

が利して良し。○時後では、黄體牛尿を三升つて飲む。老人、幼者は半減する。

小便。小便是、烏體牛尿生升を空腹に飲む。小便

【附方】新三、新五。水腫尿澀【小品では、水腫、腹脹、脚滿に小便を利す】（別錄）

【主】治。水腫、腹脹、脚滿に小便を利す。【氣味】苦く辛く、微温にして毒

子末等分（總錄）を和勻（和）して寒くが良し。烏牛の耳垢を傅ければ瘡える。

止まぬには、烏牛の耳垢を傅ければ瘡える。【鼻衄の止まぬものも牛耳中垢、車前

【附方】新三。疔瘡惡腫【黑牛の耳垢を敷く。聖方】（聖方）脇漏でて水を出すものも

瘡（瘡）されたるには、いづれもこれを傅ける。疳蝨が鼻を蝕して生じた瘡、及び毒蛇に

咬（咬）だ化膿せぬものはこれで封ぜれば散る。疳蝨が鼻を蝕して生じた瘡、及び毒蛇に

【主】治。蛇傷、惡瘡の毒（毒）。○裁とは毛蟲のことだ。【癰腫を治し、

耳垢。烏牛のものもが良し。時珍曰く、鹽少量を牛耳中に入れて入れば取り易

は、牛洞一升を取つて温酒を和して灌ぐ。或は濯へるもの汁を絞るもよし。これ
ました汁を服す。三服に過ぎず。（必效方）【卒死して人事不省のもの】四肢収ぬに
一合を和して温する。【舟刺で死に垂たもの】新牛一升、水一升を攪ぜて汁
し、半升を服すれば止む。○聖恵では、烏牛糞の絞汁一合と生兒百日の母の乳沸
亂吐下止まずして四肢逆冷するは、外臺では、黄牛一升を水二升で煮て三沸
して末にし、麴（麹）で梧子大の丸にし、七十九つを食前に白湯で服す。（簡便方）【霍
ば尿が利して瘡を食つてはならぬ。（梅師）】濕熱黄病【黄牛糞を日光乾
【附方】】水腫して尿の澀るもの】黄牛一升の汁を絞つて飲め

果して瘡をたかある。これでは駄目な例の「といつた。そこでその言葉の通にする
つて煮て敷くがよし。それで效驗がある」といふ。それでその言葉の通にする
對して行はれたのではなく、使者が誤つてその方に罹病させたのだ。ただ牛糞を取
で苦んだとき、夜中ある婦人が現れて「自分は天の使だ。此度のことは元來善人瘡に
抜く。故に能く癒疽、瘻、諸瘡を治するの灰に焼けば濯を收し、肌を生じし、毒を
霍亂、疰瘡、傷損の諸瘡を治するものである。灰に焼けば濯を收し、肌を生じし、毒を

す【時珍】記載は肘後にある。

【中惡、霍亂、及び鬼擊吐血に主效がある。一升を酒三升に和して煮汁を服

て末にし、水で方寸匕を服す。一日四五服するが良し】【鐵器】姚僧坦方に記載あり

【九竅、四肢の指岐の間から血の出るもの、これは暴怒に因るもの、これを焼い

主治

黃犢子臍屎 生れたばかりでまだ草を食はぬものから採取して乾す。

のを晒し乾して末にし、百草霜（蘇方）を掺（蘇方）入（蘇方）れ、細（蘇方）く

牛屎を灰に焼き、苦酒で和して敷く。千金方【背瘡の潰爛】黃、黒牛糞の多年のも

傷【毒を洗淨してから、熱牛屎で封ずる。即時に痛が止まる。千金】蜂窠（蘇方）の發痛（蘇方）

裏じ。即效がある。簡便【湯火燒灼】濕牛屎を搗（蘇方）いて塗る。姚和衆【惡犬の咳

汁を出さしむれば癒える。外臺秘要】硃傷損【黃牛屎を炒り熱し、それで封じて

瘡傷風水痛み劇しくして死せんとするものは、牛屎を焼いてその烟で煙じ、

【荆】牛屎を酒で和して敷けば消する。姚僧坦方【燥瘡瘡】熱牛屎を塗る。千金

【蜚蠊瘰癧疾】熱牛屎で封じ、日に數回易へる。蜚蠊（蘇方）が出るもの。千金【乳癰の初

○肘後では、鼠瘻（蘇方）の核があつて濃血あるものを治す。熱牛屎で一、二、三回封ずる。



〔馬〕

爾雅、及び説文に詳述されてある。楚

——といふ。名。稱色。別けが世だ多く、

ひ、四歳なるを桃——音桃(カ)

二歳なるを駒——音駒(カ)

るを騊——音騊(カ)

といふ。去勢をといふ。一歳な

いふ。牝馬をといひ、騊とと草

と見といひ——音は廣や——

毛、その文字は頭、

一條に併記する

校正

別録ではは上馬に馬乳を掲げてあるが、本書ではこの

釋名

尾、足の形を象したものだといつた。牡馬は騊と、牝馬は騊と、按ずるに、時珍曰く、

馬

(本品)

科名 學和 名 名 種

Equis caballus, Linne.

妙である。(普通方)

ものを用ゐ、甘草半兩、大白梅一箇、水四碗、水三碗にて煎し、熱服するが甚だ妙である。(普通方)

附方

新二

【消渴】牛鼻木二箇を洗つて、男は牝牛のもの、女は牡牛のものを研つて、小兒の鼻下瘡に傅ける【別錄】焼灰は、糠風（糠風）に吹くが甚だ有効だ【時珍

がある【別錄】消渴を治す。煎汁を服し、或は焼灰を酒で服す【時珍】草拳を焼

【主 治】木拳は小兒の癰に主效。音は卷（ケ）、鼻を穿つ（穿）、繩木である。

牛口絞草の汁を灌ぐ(聖惠)

は、【初生兒の口瘡】十日以内のものに、【小兒の流涎】牛膽草（牛膽草）

生薑各三兩、甜漿水（甜漿水）一升半の煮汁を五合を服す。【劉涓子遺方】

入れるが、就中妙である。(醫正學傳)【利】止まぬは、烏牛の胎草（烏牛の胎草）一團、人參、

を末にし、黃母牛の涎を取つて和して、龍眼大の丸にし、煮熟して食ふ。砂糖二兩を

【附 方】反胃噎膈【大力奪命丸】牛草（牛草）、牛頭糠（牛頭糠）各半斤、糯米一升

功と同じである。

係せしめたものではあるが、多分に口涎で汚濡されたものだから主たる治功は涎の

妊婦が食へば子を^レして月を過さしめる。乳母が食へば子を^レして疳瘦せしめる。
蕭炳曰く、痢を患ひ、^レ疥を^レ生した人は食つてはならぬ。必ずすすすし^レくなる。

ならぬ。

のだから食つてはならぬ。馬の脊が黒くして臂の斑^ハなものは漏^ハするから食つてはならぬ、馬鞍下の肉の色黒きもの、及び馬の白死^ハせるもの、いづれも人を殺すとも、白馬にして頭の黒きもの、いづれも人を^レして癩^ハせしむるものだから食つて青鼎^ハ。曰く、馬馬にして角の生を^レたもの、の、馬にして夜眼^ハなきもの、白馬にして青ふ。或は、冷水で煮て、釜に蓋をしてはならぬといふ。

清水で^レ撈^ハ洗^ハして血を盡して煮るのであつて、さうせねば毒が出して疔腫を思ふ。○目。曰く、華^ハ。ただ煮れば食へるものだが、その他の方法で食つては消化し難い。

説。曰く、小毒あり。士。良。曰く、大毒あり。思。遷。曰く、毒なし。

肉 純白なる馬の良しとする。【味 氣】辛く苦く冷にして毒あり

病を辟ける。いづれも物の理がさうあらしめるのだ。

馬汗を門に著ければ、いづれも馬をして^レ駒を落さしめる。を^ハ癩^ハに繫げば馬の

二(四)漏^ハ臭^ハアルチ

タコトモ^ハ二前足ノ二
節、内側ノ夜眼ノ關

附ノ事ヲベカハ
(二)駒ノ落スハ

を食はなくなり、海馬骨に遇へば歩行せず、猪槽ちようで飼糧を與へ、石灰を馬槽に泥ら、
ば物を食はなくなり、桑葉を與へれば齒が脱ける。鼠狼皮を槽に掛けて置いていも物
なり、鼠屎を食へば腹が脹り、雞糞を食へば骨眼を生ずる。糞くそを食へば足が重く
近いほど齒が愈よといふ。馬は杜衡を食へば善く走り、稻を食へば足が重く
し、金に屬する。馬の眼光が人の全身を照すものはその齒が最も小さく、光が愈よ
く。畜に在つては火に屬し、辰に在つては午に屬する。或は、卦けに在つては乾に屬
す。馬は月に應ずるもので、それゆゑに十二月にして生れる。その年齡は齒で判がつ
て、概して西北方のものが勝れてゐる。東南の地のものは劣弱でそれ及びない。
時珍曰く、別錄には雲中の馬を良しとしてあるが、雲中とは今のこと大府たいふのと
しもそれなげばならぬといふことはない。
も眼も蹄あしもみな白いものが俗にも時に二三あるものだが、わづか用途には必ず
口弘景曰く、馬は色類が甚だ多いが、薬用としては純白なるものを良しとする。
集解別錄曰く、馬は雲中に出る。

書では馬を阿婆あはといつてある。

る。

がこれを行り、甘はこれを助ける。故に美に酒を飲み、炙肉を嘔ふといつたわけであ
 じのたである。炙は能く風痺を治し、節^{せつ}に敷^しるも、病の上部に在るには酒
 酒の辛、熱、急、束を用ゐてその緩に塗り、それでその骨衛を和してその經絡を通
 平、柔、緩を用ゐてその急を摩し、それでその痺を潤してその血管を通じ、^經
 である。治法は、急するを緩にし、緩するを急にすへ、^馬音の廿、
 である。寒は急し、熱は緩するもので、^急すれば皮膚が寒に中つたとき、^右に^逆熱^{のう}は
 縦する。故に左が寒に中つたとき、^右に^逆熱^{のう}は右が寒に中つたとき、^左に^逆熱^{のう}は
 に聯絡する。故に左が寒に中つたとき、^右に^逆熱^{のう}は右が寒に中つたとき、^左に^逆熱^{のう}は
 といふは風が血脈に中つたものだ。手、足の陽明の節は口に聯絡し、太陽の節の口
 は註本がないで、世間多くはこの方^かの妙を知らないが、^竊に謂ふに、口頰の喘^{おほ}
 り、且つ美、酒を飲み、炙肉を嘔ふ、これを爲すと三^かの^みにある。『靈樞に
 に置いて坐し、膏を以てその急、熱を熨し、白酒を以て桂末を和してその緩、熱に塗
 て頰移り、^頰筋に熱あれば縦緩して收まらず。桑^{さん}劍^{けん}を以て劍^{けん}し、生^{せい}灰^{かい}を以てて^中

發明

時珍曰、按、く、接するに、靈樞經に『卒口痺急は、頰筋に寒あれば急引し

面、手足の敏粗を治するに脂澤に入れて用ゐる。【時珍】痺を療す【時珍】

【あり鑑源に馬脂は五金を柔にするに『とある。主 治 髪を生ずす【別錄】

鬢膏 鬢は項の上である。白馬のものが良し。氣味 甘し平、小毒

附方

舊一。【晚豆瘡毒】馬肉を煮て澄した汁で洗ふ。【集】

瘡白禿を洗ふ【時珍】記載は聖恵にある。

志強く、身を輕くし、飢多す、肺に作つたものは寒熱痿痺を治す【別錄】煮汁で頭

主 治 傷中。熱を除き、氣を下し、筋骨を長し、腰脊を強く、壯健にして

だ。

時珍曰、馬を食つて中毒した場合は、薑腹汁を飲み、杏仁を食へば解するも

弘。景曰、秦の穆公は駿馬の肉を食つて酒を飲めば死ぬ【といた。

心。悶するときは清酒を飲めば解す。濁を飲めば死ぬ【といた。

と共に食へば氣嗽を生ずる。共に食へば霍亂となる。馬肉を食つて毒發し、

○。説曰、倉米、蒼耳、中九まで死にす。

の。志を強くし、氣を益し、肌肉を長じ、肥健にし、子を生ましめる【木經】小兒

も【治】傷中、總脈で陰起るもの

【主】

【味甘】平にして毒なし

【氣味】

乾し、粗布で皮及び乾血を去り、挫碎して用ゐる。

毀曰、これを使用するときは、銅刀で七片に破り、生羊血を拌まぜて半日晒し

つて日間乾して用ゐる。

なる白馬の春期交尾期に於ける勢力強の絶頂期絶頂期のものを取るべきもので、生で取

つて病無にして銀色にして貯へるには、

凡そこれを採つて貯へるには、

【治】

白馬陰壺

かつた。兎も角此に記して後の參考に供する。

ので、功用があるものに相違あるかと思ふが、惜いかな従前から一般に知られな

るに在る。造物の特殊な力はたらきの現れた『といつた。これにはやはり牛黄、狗寶の類のもの

腎時。曰、按ずるに、熊太古の黄集に『馬には墨が在り、牛には黄が

て研り、毎食前に熱酒で一錢を服し、通じなれば止める【聖惠】

【附方】【通】心腹滯悶し、四肢疼痛するには、赤馬肝一片を炙い

るとその毒なることを察せられる。方家では鼓汁、鼠尿でこれを解す。

肝を食つて死んだといふ。韋莊は馬を食つて肝を留めるといつた。これで見

く、按ずるに、漢の武帝は『肉を食つても馬肝をば食ふな』といひ、又『文成は馬

肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬

肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬

肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬

肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬

肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬

肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬

肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬肝を食つて死んだ』といひ、又『文成は馬

肺

主

治

【主】

【治】

【主】

【治】

【主】

【治】

心

已下

【主】

【治】

【主】

【治】

【主】

【治】

【主】

【附方】瘡疫の氣を辟ける【紅絹の袋に馬骨を盛つて佩びる。男は左、

婦は右。】【時珍】記載は小品、外臺の諸方にある。

陰瘡、癰疽で漿が火で灼くやうなるに傳ける。乳房に敷いて兒に飲ませれば夜

體上の瘡に傳ける【孟詵】邪癰を止める。灰に焼いて油で和し、小兒の耳瘡、頭瘡、

骨氣味【毒あり】主 治 灰に焼いて醋で和し、小兒の頭瘡、及び身

回、冷えるを待つてそれを含めば止まる【唐孫思邈方】

燒灰でもよし【千金方】蟲牙の痛【馬牙一箇を煨き熱して醋中に投ずること七

る。】赤根【馬の牙齒を搗いて末にし、臘猪脂で和して敷く。根が出来る。

てからその灰で封じ、濕癰で腫處を圍ひ、醋で洗ひ去る。根が出たて大いに効驗があ

る。千金方【行腫のまだ破れぬもの】白馬の齒を灰に燒き、先づ針で腫を刺し破

【附方】新三。舊一。腸癰のまだ成らぬもの【馬牙の燒灰を雞子白で和して塗

癰疽、丁腫に塗る。根が出たて奏效する【無名氏】

毒あり【主 治】小兒の馬癰には水に磨つて服す【劉綰】燒灰を唾で和して

牙齒已下いづれも白馬のものを用ゐるが良し。【氣味】甘し、平にして小

を焼いて性を存して敷く。立ちに癒える。

吐き去る。永く根源を断つ。或は生附少量を加へる。○玉機微義では、馬の夜眼を焼く。時後【瘧】瘧牙痛【瘧】馬の夜眼を米粒ほど綿に裹んで孔中に納め、涎の出るを焼く。苦酒で小豆大の丸にし、二丸を白湯で瀉ぎ下す。須臾にして再服すれば附方【附】卒死【附】白馬の前脚の夜目二箇、白馬尾四十本を合せて

附方【附】卒死【附】白馬の前脚の夜目二箇、白馬尾四十本を合せて

【附】卒死【附】白馬の前脚の夜目二箇、白馬尾四十本を合せて

【附】卒死【附】白馬の前脚の夜目二箇、白馬尾四十本を合せて

夜眼足膝の上にある。馬はこれがかつて能く夜中歩するものだ。故にかく名

【驚癘、腹滿、瘧疾】小兒の瘧病には、母に與へて帯びしめる【蘇恭】

眼白馬のものも生で殺して取る。【氣味】平にして毒なし【主治】

錢に麝香少量を入れ、空腹に新汲水で服す。三服に過ぎずして良し【孫氏集效】

【治】主

【治】主

。頸曰く、男子の陰痿に主效があり、房中術に特にこれをを用ゐる。で梧子大の丸にし、空心に四十九つをつつ酒で服す。一二日一回、百日にして效が現れ驚癘【別錄】男子の陰氣を益す【説】陰乾して肉凝滯と等分を末にし、

牀ハ
國ハ
牀ハ
誤、
牙

脛骨

氣味

【甘】し、寒にして毒なし

主治

【煨】いて性を存したものは

附方

新三

【馬頭骨灰、乳香各三兩、酸棗仁を炒つてて

汗が出て良し【時珍

瘡に傅ける【日華】馬汗の氣の瘡に入つて痛腫するを療す。灰に焼いて傅ければ白

回、方寸匕を水で服す。枕にするも良し【別錄】齒の痛を治す。灰に焼いて頭、耳一

主治

【眼を喜むもの。人をして睡らざらしめる。灰に焼き、回、夜

、頭骨を

作
年、大觀二年

頭骨

氣味

【甘】し、微寒にして小毒あり

【韓保昇曰く、大熱なり。藏器。

女は右、附方

【和】飲酒を斷たんと欲するもの【馬汗を刮して酒に和して服す。】（金）

【附方】新二【騾刺、鵝青】白馬汗を採り、再び汗で水（水）未（未）を調（調）塗る。子。

出るもので、それが毒氣である。發汗で、ある者がこの方法を用（用）てて奏效した。

を攻めて死せんとするものには、（栗）を燒（燒）いた灰の淋汁（淋汁）に浸して洗（洗）ふ。白沫が

尿に觸れるといつれでもやまずす劇しくなくなる。註曰く、馬汗が、新に人、毒が心

汗【氣味】大毒あり。弘景曰く、人馬汗、新を思ふ馬氣、馬尿、馬、馬尿、馬

一夜にして死した。

して腫起し、心に連及して死する。ある人馬を刺き手を傷め、血が肉に入つて

血【氣味】大毒あり。註曰く、凡を生馬の血が人の肉中に入れば一二日に

酒を斷つには、臘の月ものを酒で服す【無患】

腦【氣味】毒あり。註曰く、これを食へば人を癩（癩）させて癩（癩）させる。主

とを服す。癩服してはならぬ。人を殺すものだ。（金）

一切して酒で服す。初服は五分の「一」と、次同には三分の「一」として更に二分の「一」

煙の前で毎日重ずる。【腹中の蛇】白馬尾を細

ニ作ル。大觀二簡要濟衆

字二アリ。大觀二幹三下草
アリ。大觀二瘡上人字

附方

【小兒の客忤】小兒が馬毒に中つた客忤には、馬尾を燒き、その毒二。

く焼灰で拭き、最も腐するものから注意要する。

延壽書畫に「牙を削ぐに馬尾を用ゐれば齒疎損せらるゝ」とある。『近來一般に多

發明 時珍曰、馬尾は、濟生方の崩中を治する十灰散中に用ゐてあり、又、

尾 主 治 【婦人の崩中、小兒の驚悸】(時珍)

に焼いて服すれば血を止める。惡瘡に塗る【日華】

婦人の崩中赤白【別錄】思、く、赤には赤馬を用ひ、白には白馬を用ゐる。【灰】

毛 即ち駿である。一 名 駿うま。

氣味

【九】

吳王

【小兒驚風】

○ 女 21 暈

赤馬皮、白馬蹄の焼灰を臘猪脂で和して傳けるが良し【時珍】
記載は誤

鋪之二字アリ。
二(〇)大觀ニ皮字下ニ

皮主治 婦人の臨産に赤馬の度^{おの}かき分婉を催して良し【孟詵】小兒の赤

る。男は左、女は右。(肘後)

蹄末乳を敷いて飲む。續録

馬蹄灰を灰に焼いて生油で調へて塗る。(要意方)

【小兒の夜啼】

馬蹄灰は含するに、

【小兒の夜啼】馬

【治主】 瀉を止め、吐血、下血、鼻衄、金瘡出血、婦人の崩中を止める【別録】

る。

【味氣】 微温にして毒なし【馬尿の熅火^{はんか}で一切の藥力を養ふとあ

とい、洞といふのであつて、胸と腹は廣腸のこである。

その名^なを諱^をで呼んだものだ。すへて尿は必ず腸に達して出るものだから、通れ、いづれ、白馬^{しうば}通^と時^{とき}珍^{ちん}く、馬尿を通といひ、牛尿を洵^{しゆん}といひ、猪尿を零^{しやう}といふ。

【白馬通】 錢^{せん}末^{まつ}二錢^{にせん}を白馬尿で調へて服し、竝に塊^{くわい}に傅^はける。

【狐尿刺瘡】 甚しく痛むものである。白馬尿を熱して漬ける。【瘡^{かさ}】 癰^{おん}氏^し（鮑氏）

れば直ちに落ちる。或は巴^は豆^{とう}を剪^{せん}して牙に點けても落ちる。好き牙に近けてはなら

を利し、牙を取る【白馬尿に茄^けの科を三日間浸して炒つて末にし、それを牙に點け

【齒牙疼痛】 その左右に隨^{したが}つて馬^{うま}溺^{せき}を含む。三三回に過^すぎずして瘥^{ちやう}える。【骨

ろに癢^{かゆ}える。】赤^{せき}兒^にの身體^{しんたい}上^{じやう}に生^はじたるには、馬尿で頻りに洗ふ。【千金】

に白馬尿一升を盛つて毎朝服^{しやう}するが妙である。【小品】 婦人の乳^{ちち}腫^{しゆ}馬尿を塗^ぬれば立

するやうに覺^さえるものがそれである。白馬尿を飲むが佳^よし。【千金】 伏梁^{ふりやう}心積^{しんせき}銅器

灌ぐ。乾いたもの水を煮てその汁を用ゐてもよし。これでは扁鵲の法である。(肘後)
 て止まず、病の何なるや判明せぬにば、大人小兒に拘らず、馬糞一丸の汁を絞つて
 鈴方(方)【久痢赤白馬屎一丸を灰に焼いて水で服す。(肘後方)】中惡の卒死(はつし)吐利し
 に浸して用ゐてもよし。【口、鼻の血出血】赤馬糞を灰に焼き、一錢を溫酒で服す。
 ○千金では、赤馬糞の汁を絞つて一二升を飲み、竝に鼻中に滴す。乾いたものを水
 つて一升を服す【梅師方(方)】衄血の止まぬものは、綿燒では、白馬尿を裏んで塞ぐ。
 【附方】新五、舊五。【吐血の止まぬもの】白馬通を燒いて水に研り、汁を絞

で刺傷し、毒攻で死せんとするものに塗る【時珍(珍)】記載は小品の諸方にある。
 れば久痢赤白を治す。猪脂で和して馬咬瘡、及び馬汗が瘡に入り、死馬を刮いて骨
 を濯げば中惡の卒死を治す。酒で服す。産後は寒熱悶脹を治す。燒灰を水で服す
 じものを治するは、炒りて包み、五十回覆す。極めて效がある【孟詵(詵)】絞汁
 を治するにば、絞汁三合を晝夜各二服する。又、杖瘡、打損傷が風に中(ちか)つて
 治す。吐、下するものである【藏器(器)】時行病が起つてて陰陽を合して死せんとする
 【頂に敷けば衄を止める】(徐之才)汁を絞つて服すれば、産後の諸血氣、傷寒時疾を

魚類ノ魚眞ハ註部無見
E



驢といふは能く水に入つて溺れぬ。又、海馬、海は羚羊の條に詳記した。東海の島中に産する海に産する山驢は羚羊のやうな角がある。これに骨格が太く、食つての功は驢と同じ。西方の地る野驢は驢に似て色が駿、尾が長く、は黒きものを良しとする。女眞、遼東に産する。負する。黒、白の三色あるが、薬に入れて耳、尾長く、夜鳴いて更に應じ、性善く、時珍曰く、驢は頰長く、額廣く、

集解

驢は力が臆に在るものだ。
時珍曰く、驢は臆である。腹の前方のことで、馬は力が臆に在る。

釋名

驢 唐本草 (名)
科 學 和 名 名 科
Equus asinus, Linne.
種 名 科

人の臍下に置けば、臥して起てなくなることある。

時珍曰く、淮南萬畢術に『東行白馬蹄下の土と三戸の家の井中の泥とを合せて判

東行馬蹄下の土弘景曰く、方術にこれを用ゐると、不貞な婦人の癡情關係が判

に參る【時珍】

馬絆繩

主治

【蘇恭】燒灰を鼻中に生じた瘡

白馬頭蛆

蟲部に記載してある。

(外臺)

附方

舊一

は、馬腸中の栗屎を搗いて傳け、尿で洗ふ。大いに效がある。絞汁を飲むもよし。骨で刺破つて死せんとするもの

【時珍】千金に馬通栗丸といふがある。

尿中の要

主治

【蘇恭】小兒の食事不能のもの

(統心)

一切の漏疾

白馬通汁を一升つゝ、服するが良し。(千金)

(千金)

【積聚腹滿】白馬糞を共と搗いて膏にし、患部に傳ければ效がある。

は信憑し難い。

腰こしその實驗がある。日華子はこのを一切の風狂を止めるといつたが、そのまゝに

に、
【發明】宗曰、臍肉を食へば風を動ずるもので、脂肥のものが就中甚しく、

汁を空心に飲めば痔を療し、蟲を引く【時珍】野驢の肉も同功である【正要】煮

ひ、或は汁で粥を作つて食ふ【孟詵】血を補し、氣を益し、遠年の勞損を治す。

【風狂、憂愁して樂まぬものに主效があり、能く心を安ずる。五味と共に煎て食

【主 治】心煩を解し、風狂を止める。酒に醗したものは一切の風を治す【日華

ある。

へば難産する。【三】臍此と共に食へば入をして筋急せしめる。病死したものには毒が食

思。曰、酸し、平。吳なり。【日華】臍肉を食つて荆芥茶を飲めば死ぬ。妊婦が食

【氣 味】甘し、涼にして毒なし。

起つ。物の性の然らしむる現象だ。

海牛、海猪、海權かいけんなどいふ物もあつて、いつれもその皮を供用する。

臍。曰、海驢、海馬は海のもので、皮を毛を陸に置くといつて、風潮を候あきて毛が

【陸を強くし、筋を壯くす】

その端を火で煙を出し、拭き淨めてから右の乳中に浸し、その乳

れは、大いに効果がある。鳥糞乳は一合を用ゐ、車に引いた槐枝を長さ三寸のものと十七本の

【の】方ま上に可じ。

【懐胎風】先づ乳の中間に三胚として後ての方を用ゐ

【小兒の口】
乳、諸乳を二升を一分五厘に煎じて服す。(金鑑)

【西の方延】
出

附方
舊、一新三。
【心氣痛】
黑驢乳三合。暖服之。
日二再服。
(廣利方)

黄連を浸して汁を取り、風熱赤眼に點ける【時珍】記載は千金の諸方にある。

【た】
（臓器）
頻にこれを熱飲めば氣鬱を治し、小兒の熱毒を解し、痘疹を生ぜ

盛つて寝す。
 虫むし疑うたがひ
 及および飛とべ
 蟲むしの耳みみに
 入りたるに
 は、これこれを滴たせ
 ば、水みづとな
 る。

美(日)華 卒(甫)の要、隣に在るにま、三升を服する【産】 蜘蛛交尾にま添て

[illegible]

(四) 主治 小兒の熱急黄には、多く服して利せしめる【唐本】大熱を療し、

(四) 原本主治 子脫

五
(五)

乳 氣味

【甘】し、冷利にして毒なし【思】酸、し、寒なり。

す時珍

【主 治】鹹し、涼にして毒なし【大、小腸を利し、燐結を潤ほし、熱氣を下

味 氣味】これはやはり一の異常なる現象だ。昔はこの事實に言及したものが無い。

血 時珍。曰く、熱血に麻油一盞を和し、攪ぜて沫を去つて煮熱すれば白色になる。

石末一兩を鋪いて晩まで枕にする。此の如く三回試れば通ずる。いづれも普濟方

少量を耳中に滴入し、外部には、四角な新磚を赤く焼いて醋を潑け、それに磁

は、鹽髓を、針砂一合を水二合に十日間浸して取つた清水少量に和して攪ぜ、

おてはならぬ。白色のものを上とする。黄色のものは役に立たぬ。○又ある方で

め、綿に少量をつつてを點して耳の中に入れ、側臥して薬の候つ。その髓は多く用

效がある。驢の前脚の脛骨を打破り、日中に向けて漉出して瀝出する髓を瓷盒に盛つて収

【附 方】多年の耳聾【重きものも三兩同、初期のものは一兩同あれば

氣味

【甘】し、溫にして毒なし【主 治】

【耳聾】時珍

瘥える。千金方

タム
ハ
腎風ハ
ベキ

た。經驗方【鬼瘡の止まぬもの】白驢蹄を倒んで炒り、砒霜と各二分、大黃四兩、

分を水に削り下し、煮て濃汁を冷し、煮て濃汁を冷し、煮て濃汁を冷し、煮て濃汁を冷し

分を穿ちたるもの、飲酒過度で腸に孔を穿つに至らんとするもの、驢蹄の硬い部

分、麝香少量を末にし、醋で和して塗り、乾くまじくは摻る。飲酒が原因で腸

生じて大いさ錢ほどあり、赤色で水を出すものがある。驢蹄二片、胡粉を煮つてに

密陀僧、輕粉各一錢、麝香半錢と末にして傅ける。奇效方【天柱毒膏】春大椎上に

附方 新一、新三。【腎風下注】瘡を生じたるには、驢蹄二十片を灰に焼き、

解頤頤に傅け、瘡を度とする。【時珍】

懸蹄 主治 灰に焼いて癰疽に傅ければ膿水を散す。油で和して小兒の

頭骨 主治 灰に焼き、油で和して小兒の顫解に塗る。【時珍】

年の消渴を治するに極效がある。【時珍】

骨 主治 湯に煮て歷節風を治する。【孟詵】此驢骨の煮汁を服すれば、多

（千金）

麝香を豆ほど入れて乳汁で和し、銅器に入れて慢に炒つて末にし、乳汁で和して灌

附方

新二。

煎して飲む。【外臺】癰腫中風【癰腫】癰腫背から前に交る脊中の毛を取り、一、拇指大ほどに剪して飲む。【外臺】癰腫中風【癰腫】癰腫の腫上、の旋毛を剪り取り、一、彈子ほどを乳汁で

如くして飲む。陳倉米、麴を忌む【孟詵】

主治

て三日間漬け、空心に少しづつ飲んで酔はしめ、暖臥して汗を取り、翌日更に前に投じ

掃光と名ける。【李樓奇方】

【牛皮風癰】生驢皮一塊を朴硝で醃けてかから灰に燒き、油で調へて搽る。これを一

いて通の方法で淨治し、蒸熟【生】汗汁に入れて、五味を和して煮て食ふ。【鏡心】

附方

舊一新。

【中風風喘】骨疼し、煩躁するに、は、烏驢皮を用ゐ、毛を毛を

に記載してある。

【中風】癰腫中人を覆ふが良し【日華】詳細は阿膠【阿膠】

治す。酒に和して服するが更に良し【孟詵】膠にして食へば、鼻衄吐血、腸風血痢、

一切の風毒、骨節痛で呻吟して止まぬものを

主治

【膠】膠に煎して食へば、一切の風毒、骨節痛で呻吟して止まぬものを

【外臺】酒を斷つに、は、煨いて研り、方寸匕を酒で服す

五十七丸を空心に黄酒で服するが神妙である。（龍泉林醫鑑）【風腫中疔】（中疔腫中風）

【經水止まぬもの及び血崩】黒驢尿を焼いて性を存し、麴糊でて梧子の大丸にし、

【焼灰を鼻に吹けば衄を止めるに甚だ效がある。油で和して悪瘡、濕癬に塗る】（時珍）【時珍】（時珍）

此驢尿を用ゐる。文字のやうに現れぬものは溼水である。驢尿を用ゐる——（唐本）

【人】の身體上に爪の痕を附けて文字を畫いたやうに現れるものは燉水である。

反胃止まぬもの、牙齒痛に主效がある。水腫を治すには五合つづつを服するが良

【主 治】（主 治） 熱つて風腫、漏瘡を熨す。絞つた汁は心腹痛、諸疔、（疔瘡）

し、（烏驢駒尿） 合と和勻してて器に盛り、少量つづつを耳に滴入する。（華惠）

尿、薑汁等分を和勻して頻に洗ふ。（聖濟錄）【耳聾】人中白一分、乾地龍一條を末に

【附 方】（新 三） 狐刺瘡【烏驢尿】に熱して漬ける。千金【白垺風】（白垺風）

用ゐて效驗を擧げた」とある。

熱飲すべし。病の深きものである。この物はやや有毒だから、服する時過多にならぬやうに注意を要し、

いづれも瘥えた。

【白垺風】（白垺風）

【白垺風】（白垺風）

次第を奏上すると、折柄宮中に五六人反胃を患ふ人があつて、同様これにこれを服して、み、晡時に再び二合を服して、食つて見ると、それで定まつた。翌日その效果の止を聞き、早速二合を服して後に食事を攝つて見ると、従前の半分ほど吐いただけで止つた。ところが不圖ある衛士が「驢の小便を服せむ」と極めて效驗があるといつたのを調治したが、竟に治療不能で漸次に疲困し、はや旦夕に絶命を候つといふ有様だて須臾にして吐出した。貞觀年中、許奉御兄、弟、及び弟、蔣等の諸名醫が刺を奉じて時珍曰く、張文仲の備急方に『幼年の頃、反胃を患つて、養、粥、諸物を食ふ毎に

せ、それで蟲の生ずるを防いだところ、數十貼にして癒えた。

【發明】

震亨曰く、ある婦人が嘔を病んだとき、四物尿を加へて與へ服す。

風蟲牙痛には頻に反胃、嘔病、狂犬の咬傷、癰瘍瘡を治す。いづれも多く飲んで瘡を取る。

【氣味】辛し、寒にして小毒あり

【主治】

蜘蛛咬瘡を灸すが良し

【用法】服すれば止む。七日間油を忌む。(時後)

【集解】大豆三分、雄黄一分、硃砂半分を研つて梧子大の丸にし、未發の早朝に二丸を冷水

で、肉は人體に益せぬ。妊婦が食へば難産する。

肉 氣味

【辛く苦し、】^{毒。}原曰く、騾は性の頭劣なもの
が、今は俗に通じて騾と呼んでゐる。

騾(カクモウ)——といひ、牝牛と馬と交尾して生ずるものをば騾ロウといふのである
牝駒——音は宅陌(カクハク)といひ、牝牛と騾と交つて生ずるものをば騾——音は
のをば騾驢——音は決題(カクタイ)といひ、牝驢と牝牛と交尾して生ずるものを
あつて、牝驢と馬と交尾して生ずるものが騾である。牝馬と騾と交尾して生ずるもの
その後部には鎖骨があつて開けないといふところから子を産まないのである。その五種
その集解時。曰く、騾は驢より大きくして馬より健く、その力は腰に在る。

る。

釋名

時。曰く、騾は、古文でば騾と書いた。馬に従ひ騾に従ふの諧聲であ

騾 (食鑑) 英和 名 騾 Mule 科 名 騾 科 名 騾
騾 (食鑑) 英和 名 騾 Mule 科 名 騾 科 名 騾

四六

發明 時珍曰、駱駝の黄は牛黄に似てゐるが香しくない。我人アノヒトはこれ

黄 氣味 苦、平、微毒あり。主 驚風、風熱、驚痰、時珍アノヒト【治】

を壯にし、人を饑えてゐる【正】

乳 氣味 甘、冷、無毒なし。主 中氣を補し、氣を益し、筋骨

に、肌膚を潤ほし、惡瘡に主效がある【大明】

肉 氣味 甘、溫、無毒なし。主 諸風に氣を下し、筋骨を壯

服半匙から一匙まで加して一三日回服す。聖濟總錄

附方 周痺【野駝脂を煉淨して一斤に好酥四兩を入れて和勻し、毎

酒で調へて服す【正】

治す。いづれも薬を和して傳ける【大明】虛勞風に冷積あるものに主效がある。燒

餅にして食へば痔を療する【問費】一切の風疾、皮膚の痺急、及び惡瘡腫、漏爛を煎

縮、筋骨の腕損は、火で炙つて摩す。熱氣を取り肉に透る。また米粉を和して煎

く、能く五金を柔にする。主 頭痺、風癰、惡瘡、毒腫、死肌、筋皮の癢

は多く煮熟し、糟食とする。氣味 甘、溫、無毒なし【鑑源】

方ノ發地西方北

二作ル。大觀ニ肌膚

ヲ漬ケタル食物ヲ糟ニ

摩を、精血を生じ、膚を潤ひ、顔色を光り、髪を黒くし、

腫
肌瘡を除く【唐本】
煩渴熱悶、心膈疼痛止める【日華】
燥を潤し、腸を利し、腫

孫子の謀面、翻行、孫子の中胸、し利發、し、解（の）散（の）、あ、止、を、溺、に、毒、（毒）

吳王

表乳を調へて食へば上り痕となる。

糞、牛、羊、の孔の氣は温である。洗く日、冷やを瘧ひ、軍を瘧、食はともなへばなり。

【甘く酸し、寒にして毒なし】時珍曰く、水生、馬、駝の略は冷である。

和氣

取用ニ付テ

てその皮がなくなつたところ釜に入れ、少し炒り、それを器盛りにして浮皮を掠め取り、晒ひくわいを晒し結むすみ、晒ひくわいを再び晒

り、冷さるを待つて浮皮を掠めつつ取つてそて酥をに入れて少許を量入紙で封じ

の乳を入れて煮つて數十沸し、常に構て糲糠攪き、それを傾け出して鑊に盛

多かれは、飲膳正要に「乳を中つて、その餘

つゞき、作れる得るのだから、薬用に比して、勝てぬものもある。蓋し半生は、半生を以てして勝れたものもある。蓋し半生は、半生を以てして勝れたものもある。蓋し半生は、半生を以てして勝れたものもある。

時○曰、く、略(は)三(三)靈(三)北(北)地方で多(多)く造(造)る。水(水)牛(牛)、驢(驢)牛(牛)、馬(馬)、駝(駝)の皮(皮)、乳(乳)、ひ

時珍曰、(三) 潼北地方で多造る。水牛、犍牛、羴牛、馬、駝の乳、

作_ル。(三)飲膳正要二餅二

指入。潼川府北一帶ノ地ヲ潼川省

英名 バツマス。一。脂肪、酪、醇、醃、例、乾、酪、

酪 (二) 音 (て) 落 (う) 唐本草 (英和名) Milk-fat of beast. 乳脂 (し) (う) 英名

蔵。曰く、酪には乾と濕とあつて、乾酪が更に強い。

であつて酪は作るに堪へない。

つたものは濃厚で味が牛に勝る。馬乳で作つた酪は性が冷であり、驢乳は就中冷

作 集 解 曰く、牛、羊、水、馬の乳はいづれも酪に作り得る。水牛乳で

灌 音 董 (リ) である。

酪 (二)

鼠を殺す【博物志】

主 治

れて末にして揉る。即效がある。【駝絨を灰に焼いて水で澄した黄丹等分を入

附 方

いて方寸匕を酒で服す【時珍】記載は推行功の纂要にある。

主 治

毛 婦人の赤白帶下にも最も良し【蘇恭】釐毛は痔を焼する。灰に焼

熱、肺痿を除き、渴を止め、嗽を止め、吐血を止め、毛髮を潤ほす【日華】應勞を
 大、小腸を利し、口瘡を治す【別錄】胸中の客熱を除き、心、肺を益す【思慮心】
 【主 治】五臓を補し、

氣味

沙牛、白羊酥

るが良し。

め取り、焦皮を去れば酥となる。凡そ藥に入るには微火で溶化し、用いて攪
 ある。ある法では、乳を桶に盛り、木渣を著けて半日搗き、沫を出るのを攪
 てその皮を取り、再び油を煎し出し、渣を去つて鍋に入れて置いて酥油となる【と
 鍋に入れて煎し、二三沸して盆内に傾け入れ、冷えてから表面に皮が結するを待
 を雜ぜてあるから辨別に注意を要する。傾けるに、醴の仙の製造法は、乳脂
 時珍曰、酥なるものは醴の表面に浮ぶので作つた。今一般に白羊脂
 がある。酥は勝れたものに相違ないが得難いものだ。

るものに適し、羊酥は温を離れなかいから病の寒を兼ねるものに適し、それぞれ特長
 汪機曰、牛乳は冷、羊乳は温であつて、牛酥は寒を離れなかいから病の熱を兼ね
 誥曰、水牛酥と羊酥とは同功で、その羊酥は牛酥に勝る。

思。曰。牛、摩牛の乳のものを上とし、白羊のものがこれに次ぐ。

内。牛、摩牛はまた家牛に勝る。

恭。曰。酥は酪作り、その性は酪と異ふのだが、牛酥は羊酥に勝り、その牛酥

で作つたものだ。

弘。景曰。酥は外國に産し、やはり益州から来る。本來は牛、羊の乳

酥油。北方の番族では馬思^マ油^ウこ名ける。

酥 (Membranes of milk, 乳皮膜) 英和名

乾酪を水に化して灌ぐ。(藏器)

たものの場合には二升を飲めば化けて黄水となる。(廣利方) 【馬が黒汗を出す場合】

金(蜜)蚰蜒の耳に入らると【さ】華佗方では、牛酪を灌入すれば出る。腹に入つ

附方 三。火^火丹^丹應^應【酪に鹽を和して煮熱し、それで摩すれば消する。】

ところのものだ』といつた。

時。珍曰。按ずるに、戴原禮は『乳酪は血液の屬であつて、血燥に宜

發明

摩藥になるものにて、功は癖に優る（唐水）【精を添へ、髓を補し、中益をし、骨を益し、骨髓を通ず】**主治**【風邪、痺氣】**氣味**【甘し、冷、利ににして毒なし】

景王

【つぎに、つぎに、つぎに】

味 道

○ 小田原

煎じて三兩沸してこの物は女性が滑で物に盛るとみな遠るが、ただ子般、及び壺に盛

ものだ。使用する場合、割合の聚である。凡そ川に流すは、重絶して、銅器で

[illegible]

作るに『いふたのものは、無くて居る。』

その醃酶が、穿つて置く、津が出来る、それを取つたものである。陶氏が「黄白」で、餅に底に居く、好酥の右に三、四升ある。酥の精液である。

とあつて、色が黄白で作つて甚だ甘肥なものかそれである。

【集解】弘景曰く、佛書に『乳は酪となり、酥は醍醐なり、酥は醍醐なり』

醍醐 (唐本草) 英名 Kefir or koumiss.
(乳酒) 和名 酪

中に流中せしめる。その物は涙と共に出る。(聖濟總錄)

て塗る。(聖惠方) 【目味】酥少量を左右に隨つて鼻中に納れ、少頃の間頭を垂れて目

【附方】新二、一。【蜂螫】酥を塗るが妙である。(聖惠) 【蟲咬】酥に血を和

孔の間に發出するものだ』とある。

じである。按ずるに、生生編に『酥は能く腹内の塵垢を除く。又、毒氣を追ふて毛

【發明】

除き、大便秘し、宿食を去る【思靈】諸膏に合せて風腫、血瘀、跌、(懸器)熱を

【氣味】甘し、平にして毒なし【主治】諸風濕痺を去り、熱を

酒に化して服するが良【時珍】

益し、益し、臟腑を潤ほし、肌膚を澤かにし、血脈を和し、急痛を止め、諸瘡を治す。

【氣味】甘し、微寒にして毒なし【説】水牛乳は涼、漿牛乳は温である。

し、攪定して晒乾し、燻油で燻熱して食ふ』とある。
 れを扯して塊にし、釜に釜に入れ煮て潰し、取出して薄皮に捻成し、竹筴で數回搥
 うになつたとさ、煎じ熱して酸漿を點じて凝成させ、漉し出して數回揉み擦り、
 して收める。又、乳線を造る法は、牛乳を盆に盛り、晒して四邊に清水がやるや
 る。また塊らぬとさ、更には、酪五升を煎煮して冷漿水半升を入れ、と必らず塊にな
 〇乳團を造る法は、漉し出して、釜で煮て、豆腐の製法に準じて、と必らず塊にな
 次、に結成する。漉し出して、釜で煮て、豆腐の製法に準じて、と必らず塊にな
 に入れ、煎じて五沸して水で解き、醃を點し、入れて豆腐の製法に準じて、と必らず塊にな
 を勝れたものとする。醃の神書に「乳餅を造る法は、牛乳一斗を絹で濾して、と必らず塊にな
 時珍曰く、諸乳いづれも造り得るが、ただ牛乳で造つただけ

【集解】

【釋名】

乳腐 (宋嘉祐) 英和名 (Curd) 腐體 (名)

あつて、本經にも阿膠はやはり牛皮を用ゐるとある。この二皮は通用してよいので、つたもたのたけ佳いのである。當今方家て用ゐてある黄明膠は多くは牛皮で、井は官禁で、眞膠は極めて得難い。商品は多くは偽物だ。膠は鳥鱉皮を阿井水で煎、顔曰く、今は（三）鄆州でも能く作る。阿縣城北の井水で煮たものが眞物だが、そのた物に膠に膠つたるけものだ。



濁つて黒いものは薬には入らず、膠と名けて薬に入れて用ゐる。晝家が用ゐ、清んて厚いものは晝三種あつて、清んで薄いものは膠で、さうせねば成らない。一片の鹿角を用ゐてそれと膠と膠に清と濁とある。煮る時に必ず能く作る。用ゐる皮の老と少とは弘景曰く、今は二東都でやはり

部ノ陽部。カト部。東部。河部。或部。洛部。

三。類。永。鄆。州。阿。縣。北。の。井。水。で。煮。た。も。の。が。眞。物。だ。が、。そ。の。た。物。に。膠。に。膠。つ。た。る。け。の。も。の。だ。

集解

別錄に曰く、阿膠は東平郡の東阿縣に産する。牛皮を煮て作るものだ。は清くして重く、その性が下趨する。故に逆上の痰を治するのだ。蓋し濟水と稱む。故に人がこれを服する、膈に下つて痰を疎し、吐を止める。濁水を攪ぜちの井だ。その井は濟水が注ぐところ、その井水を取つて煮た膠で濁水を攪ぜたいと輪ほどで、深さ六七丈あり、毎歲常に膠を煮て天府に貢納する『とあるが即だ。そこには宮があつて禁制となつてゐる。酈達元の水經に『東阿にある井縣の時珍曰く、阿井は今の山東兗州府濮陽縣の東北六十里に在る。即ち古の東阿縣傳致膠（本經弘景曰く、東阿に産するから阿膠と名けたのだ。）

釋名

阿膠 本經上品 和名 英名 Gelatin of Beest. はにめ

附方

【附方】血痢の止まぬもの【乳腐一兩を漿水一鍾で煎して服す。】
【孟詵】赤、白痢を治するは、豆ほど大のさいに切つて麴を排ぜ、酸漿水で煮て【主 治】五臓を潤ほし、大、小便を利し、十二經脈を益し、微氣を動する【

【性】頤曰、液を止めるには、黄連（黄連、配を配合するが尤も佳し。）吐血、

し立つもの。能はるる。肝氣を養（別錄）筋骨を堅くし、氣を益し、病を止め

れば身を輕くし、氣を益す（本經）男子の小腹痛、虛勞、陰氣不足、久服

態となり、腰腹痛し、四肢酸痛するもの、婦人の下血、胎を安ずる。久しく服

主【治】心腹内崩、極端に勞して酒（音は蘇）——とて瘵の如き

少陽、厥陰の經に入る。○火を得て良し。葶（葶、使となる。大黃を畏れる。）

平、味は淡であつて、氣、味共に薄く、浮にして升る、陽であつて、手の少陰、足

氣味【甘し、平にして毒なし】別錄。微温なり。張元曰、性

それぞその與へられた方に從ふべきものである。

は粉（粉、炒り、或は草で炒り、或は水で化して膏にして膏にする。）

時珍曰、今の方法では、或は炒つて珠にし、或は麴（麴、炒り、或は火で炙り、或

研つて用ゐる。

毀曰、凡そ用ゐるには、洗つて（洗）一、夜浸して取出し、柳木火上で炙燥し、

修治

弘景曰、凡そ用ゐるには、いづれも火で炙る。

作（五）
痛、本經
二、大觀
二、先

據^ル之ヲ改^ムニ
作^ルナリ。觀^ニ
誤^ニ。最^ニ
大^ニ。觀^ニ
綱^ニ目^ニ。是^ニ
(三)

へ、とであつて、眞物ならば皮臭がなく、夏期にも濕軟にならない。い。黄透にして琥珀のやうな色のも、或は光黒^{ツツ}で堅^{ツツ}漆^{ツツ}のやうなものを眞物とす。い。つれども馬皮や舊草、靴の類を雜^{ツツ}せるので、その氣^{ツツ}が濁^{ツツ}臭^{ツツ}で藥に入れるに堪へ方で用ゐてあるものは多くは牛皮であつて、後世には驢皮を貴んである。偽造物は底に近い部分^{ホンド}を全^{ツツ}膠^{ツツ}と名ける。膠を煎^{ツツ}した水の鹹^{ツツ}く苦いものを妙とする。概して古再び熬^{ツツ}つて膠に成^{ツツ}るので、それを盆に傾^{ツツ}け入れ凝^{ツツ}るを待つのであつて、その盆の再^{ツツ}清^{ツツ}淨^{ツツ}にし、時に熬煮^{ツツ}して時々攪^{ツツ}きしはな絶^{ツツ}えず水を添^{ツツ}へ、爛^{ツツ}れたとゞま汁を濾^{ツツ}し、鞋^{ツツ}履^{ツツ}のものを下とする。いつづれも生皮を取つて水に四に浸し、洗ひ刮^{ツツ}つて極めて驢^{ツツ}の皮^{ツツ}のものを上とし、猪^{ツツ}、馬^{ツツ}、驢^{ツツ}、蛇^{ツツ}の皮^{ツツ}のものがこれに次ぎ、それ等舊皮や、時^{ツツ}珍^{ツツ}。曰く、凡そ諸^{ツツ}膠^{ツツ}を造^{ツツ}る時期^{ツツ}は十月から三三^{ツツ}月までであつて、沙牛、水牛、

時字アリ。大觀二年別字下ニ

附方

【攤緩風】攤緩風、及諸風、手腳不遂、一腰脚無力を

新十四。舊

て阿膠の蘊^アを發明するに足る。

疎導する。熱毒^ア留滯^ア無ければ平安になるものだといつた。これ等の數説は以て因つて起るものだ。阿膠は大腸の要藥であつて、熱毒、留滯あるものの場合に能くも良し。阿膠は神を育み、人參は氣を益するののである。又、痼疾は多く傷暑伏熱に驚風の後、腫人の正^アしからぬものに、阿膠では、人參を倍にして煎じて服用するが最肺を安じ、肺を潤すへきものだ。その性が和平であつて肺の經の要藥である。小兒

じ、蜜二匙を化^アし入れて溫服する。【胞轉淋】阿膠三兩、水二升を七合に煮て溫等分、水で煎じて服用す。直指^アの老人の虚秘^ア阿膠を炒つて二錢、葱白根を水で煎が潮し、眼の實^アするに、透明の阿膠を切つて炒り、紫蘇、烏梅肉を焙じ、研つてまろ。その場合^アの冷えの阿膠を喫つては嘔吐するものだ。【廣濟方】肺風喘促、涎止つたと云々頓服し、それから先に煮た葱豉粥を喫めて喫ふ。か三四劑を用ゐれば正二合を煮て、滓を去り、それに入れて膠を入れて更に煮て七沸し、膠が^ア炸けて^ア湯のやうに香致治するに、は、驢皮膠を微炙し、先づ葱豉粥一升を煮、別にまた水一升で香致

を治するに、肺虚と肺實と、下すへきと温むへきを論ぜず、必ず阿膠を用ゐてに味を以てする。阿膠は甘膠を陰血を補するものだ。『陰不足のものは補するに風を去るに阿膠を用ゐる』。按ずるに、陳自明は『虚を補するに牛皮膠を陰益して諸證を治する』である。阿膠は大體に於てた血と液とを補するものだ。故に能く肺を清し、時珍曰く、阿膠は烏鴉、烏雞の如きみなりである。ものをを用ゐるは、烏色は水に屬し、それで熱を制すれば風を生ずるの意味を取る宗前曰く、驢皮で煎じた膠は、その皮膚の外に發散する點を取るのである。烏皮の驢皮の主效に於て最たるものだ。諸膠といついても風に主效があり、洩を止め、虚を補するが、燥を潤ほし、痰を化し、肺を清し、小便を利し、大腸を調へる聖藥である【時珍】肺痿で膿血を唾するもの、及び癰腫を療ず。血を和し、陰液を滋くし、風を除き、下、産前産後の諸疾、男女一切の風病、骨節疼痛、水氣浮腫、虚勞の咳嗽、喘急、血淋、尿血、腸下痢、婦人の血痛、枯血、經水不調、子無きもの、崩中帶

頭曰、當今方家で用ゐてゐる黃明膠は多くは牛皮であつて、本經の阿膠もや

權。白膠、一名黃明膠。

正誤

牛膠、皮膠、食療、水膠、外臺、海犀膏

釋名

黃明膠 (綱目) 英名 和名 Gelatin of neat.
うしひしにわは牛皮膠

(聖濟總錄)

人參と各二兩を末にし、每服三錢を豉湯一盞、葱白少量を煎して服す。一日三回。
を溫水で服用す。なほ通ぜぬときは再服する。(和劑局方) 年久經たぬ阿膠を炒り、
り、枳殼を炒つて各一兩、滑石二錢と末にし、蜜で梧子大の丸にし、五十丸つ
た熟艾葉二兩、葱白一升、水四升を一升に煮て分服する。【產後の虛弱】阿膠を炒
水三升で一升に煮取つて膠を入れて化して服す。○產實では膠湯——阿膠で炒つ
梅師方(方) 妊娠動【刪】阿膠を炙き研つて二兩、香豉一升、葱一升を用ゐ、
ある方では、阿膠末二兩、生地黃半斤、生薑汁に清酒二升を入られ、三回に分服する。
まぬには、阿膠三兩を炙いて末にし、酒一升半で煎じ化して服すれば癒える。○又

す。聖惠〔〕。妊娠血痢【阿膠二兩、酒一升半を一升に煮て頓服する。】妊娠下血【止錢を酒で服す。秘傳。】妊娠尿血【阿膠を黄に炒つて末にし、食前に二錢を飲で服する方では、辰砂末半錢を入れる。】月水の止まぬもの【阿膠を炒り焦^がして末にし、あ水不調【阿膠一錢を粉で炒つて珠にし、研末して熱酒で服すれば平安になる。】月蓋、生地黃汁一合と合煎し、六分に煎じて溫服し、急を帛で兩乳を繫^はる。聖惠〔〕。月一【大餅の止まぬもの【口、耳、俱に出すには、阿膠を蒲黃生兩で炒り、一錢を水一香一錢、糯米一合半を末にし、一日一回、錢つづつを百沸湯に點^たてて服す。聖惠〔〕。汁に蜜を入れたものを治す。調へて服す。】肺損嘔血【并に胃を開く。阿膠を炒つて三錢、搗入、小兒の吐血を治す。阿膠を炒り、蛤粉と各一兩、辰砂少量を末にし、藕^{くさくさ}節の搗つて二兩、蒲黃六合、生地黃三升、水五升を三升に煮て分服する。】○經^{きやう}験では、大五十丸つづつを粟湯で服す。和劑局方〔〕。吐血の止まぬもの【千金翼では、阿膠を炒にしたもの一兩、黃連三兩、茯苓^{うきふく}二兩を末にし、搗いて梧子大の丸にし、一日一回、白を下痢し、裏急厚重し、腹痛し、小便の利せぬには、阿膠を炒つて水で化して膏服する。】赤、白痢疾【黃連阿膠丸——腸、胃の氣虛で、冷熱調はず、赤、

研末し、毎服一錢を酒で服用す。その痛は立ちに止む。(萬氏)【風濕走痛】牛皮膠一兩、分に塗るが良し。(葉氏摘玄方)【寒濕脚氣】牛皮膠一塊を細切し、麴で炒つて珠にして二一服す。一。日三服。(千金)【顔面木痺】牛皮膠を化して桂末を和し、厚く塗る。二一温めて呷ふ。三五口で止む。(食療)【腎虛失精】水膠三兩を研末し、酒二盞で化していて研り、毎服一錢、人參三錢、薄朮湯一盞、葱白少量を煎沸して嗽ぎ、時に血【黄明膠二兩を酒で煮化して頓服する。(肘後方)】效嗽の瘡をぬくもの【黄明膠を炙り、新綿一兩を焼いて研り、一日一回、食後に一錢つづを米飲して服用す。(食療)】妊婦下血の止まぬもの【黄明膠を要^{からい}に盪いて山根に貼る。髮際まで貼る。(三因)】妊婦下血、三錢を化して服用すれば止まる。(斗門方)】吐血、咯血【黄明膠一兩を切つて黄にぬは、海^{かい}尾^び膏^{こう}、即ち水膠一大片を炙り、酥を塗つて再び炙つて研末し、白湯に三錢を化して服用すれば止まる。(斗門方)】肺痿吐血【黄明膠を炙き乾し、花桑葉を陰干して各二兩を研末し、毎服三錢を生地黄汁で調へて服用す。(普濟方)】肺破出血【或は嗽血して止まぬ、血を活し、痛を止め、燥を潤ほし、大、小腸を利す。(時珍)】

附方

妊娠胎動、血の下るもの、風濕の走注、疼痛、打撲傷出、湯火灼瘡、一切の癰疽腫毒、

氣味

【主】甘し、平にして毒なし

治】吐血、衄血、下血、血淋、下痢

の者に適するものではない。その置別に慎重な注意を要する。

つれも平、補であつて、虚熱に適する。鹿角膠なら性質が熱補であるから、虚熱いづれに入らなかつた場合に、眞牛皮をやはり權に用ゐて差支ない。その性味は、手に阿膠の後に附した。但しその功やはり阿膠と彷彿^{つうぼう}たるもので、苟も阿膠の正は又、黄明の諸方を采^{さい}つてそれに附したが、いづれも誤である。ここにその誤を正だ阿井水で作つたものでないのだから、醜^{みにく}は黄明を鹿角膠とし、唐慎微た膠の、牛皮で作つたもので、その色が黄にして明なものである。白膠とはい。水名傳致^ち膠、牛皮を煮てつと、その説明が甚だ明だ。黄明とは即ち今の水時珍^し曰く、按ずるに、本經には、白膠、一名鹿角膠。鹿角を煮て作る。阿膠、一

ら眞物は鮮^ないのである。

本經では白膠といつてある。處處で能く作るが、ただ功は牛膠に倍すといふのだから粗末だから用ゐるに堪へない。ただ物を膠づけるに用ゐただけ。而して鹿角膠は膠^{かく}が牛皮を用うとある。この膠はやはり通用するのだが、ただ今の牛皮膠は製作が

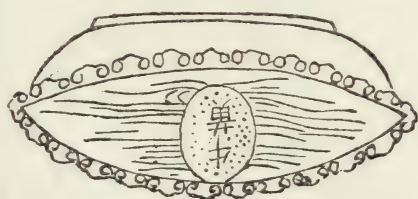
[illegible]

てみな生黄の勝れたるに及ばない。

うにかなる。それをいふのである。肝、膽中から取つたものをば肝黄と名ける。概してかから水中に投ずる。これは初め心中に在つては黄漿汁のやうな状態のもので、取つて角中に在るを取つたものをば角中黄と名け、牛の病死後に心中を割いて取つたものに角中に在るを取つたものをば生神黄と名け、殺死したに雷と。この物に四種あつて、喝迫して取つたものも黄になるが真物である。

一 般には偽物が多いが、それを試験するには、ただ手上一取り放せる。輕虚にして氣の香しいものが佳し。重疊してゐるのであるが、一の子は大いさは雞子ほどで、重疊してゐて喝迫すると水中に墮下する。それを取つて百日間陰つに照するとを好み、人が盆水で承け、その吐出する水を、色で、時にまた鴨吼し、人を恐懼さすものだ。又、牛にして黄あるものは身上に夜間光があり、眼は血のやう

[黄 牛]



歌ニ作ルニシ。

作ル。下、大麗ニ落ニ

還つて能く心、及び肝膽の病を治す。正に人間の淋石がまた能く淋を治するやうな
 である。その病が心、及び肝、膽の間に在つて凝結して黄となるのである。故
 易の。諸種の獸類にはいづれも黄があるであつて、人間の黄もやはりそれ
 時珍。牛の黄なるものは牛の病である。故に黄の多くは病んで死
 骨。髓に流入する恐れあり、油が凝入つたやうなことを出すことが不可能になる。

出すものだ。風が腑、及び血脈の中たつたものの場合にこれを用ゐては、
 は、必ず牛黄、膽、脾の劑を用ゐる。骨髓に入り、肌膚に透つてそれで風を引き
 李杲曰く、牛黄は肝に入つて筋病を治す。凡そ中風が臓に入つたもの

發明

記載は王氏方にある。

なつて發狂し、諸語【心を清し、熱を化し、痰を利し、驚を涼す】【舞原】痘瘡が紫色に
 病を除く【思慮】（憂慮）【肝、膽を益し、精神を定め、魄を安し、魂を安し、驚を辟け、百
 夜啼】（驚悸）【健忘、虛乏】（口華）【魂を安し、魄を定め、邪魅を辟け、小兒の
 行時疾、天年を増し、人をしめて忘れざらしめる】【別錄】【中風の失音、口瘰、驚悸、天
 癇熱で口の開かぬもの、大の狂頭を（人て）磨す。又、胎を磨す。久しく服すれば身を輕

【主 治】驚癇寒熱、熱盛狂癡。邪を除去、鬼を逐ふ【本經】小兒の百病、諸

て、かく相惡まぬものやうである。

驚癇を治し、熱を解し、蟲を殺し、牛黄の主治と相近い。やはりの肝の經の藥であつ

を治する涼驚丸、驚丸、麝香丸の方にもこれを用ゐてあるは矛盾のやうだが、龍膽は

時珍曰く、別錄に『牛黄は龍膽を惡む』とある。而るに錢のてん小兒の急驚、疳病

膽、地黃、常山、藟れいを惡み、牛、乾漆を畏る。

し。之才曰く、人參が使となる。牡丹、豈蒲と配合すれば耳、目を利す。龍骨、龍

【氣 味】苦、平にして小毒あり【日。華。曰く、甘、し、涼なり。善。曰く、毒

それを取る。

よく裏んで黄であや嫩なな牛の皮に裏んで一夜井中に、水から三四尺離して懸け、翌朝

【修 治】毀こ曰く、凡そこれを用ゐるには、搗いて細研して塵のやうにし、絹に

擬なふものだから審別に注意を要する。

堅くして香しき。い。ま駱駝らくたといふものもあつて極めて得易く、やはり能く見

宗昉曰く、牛黄は輕かろくにして自然に微かろかな香がある。西域にある驚牛黄といふは



[鮓]

れを搬弄してやむが降るものだ』といつた。その後陶九成
へると立ちろに雨が降る。咒文を知らなくとも、ただ水に浸して唱
せる。西域には秘密の咒文があつて、これを用ゐてその咒文を降ら
馬、猪などの畜類にいづれもあるもので、これは祈つて雨を降ら
なかつたが、ある外國僧が『これは非常珍しいものだ。牛、
蘇州で一黄牛を屠殺した時にこの物を得た。一般には知るもの
が破つて見る層になつて豊つてゐるもの。嘉靖庚子年、
が骨でもなく、打破つて見る層になつて豊つてゐるもの。嘉靖庚子年、
は栗のやうだ。その状態は白色で右に似てゐるが石でもなく、骨に似てゐる
囊に裏あてあるもので、多きは一升ほどあるもあり、大なるは雞子ほど、小なる
時珍曰く、鮮客は、走獸、及び牛、馬、諸畜の肝、膽の間に生じ、肉

集解

鮮 鮓 (綱) 目 英名 Gall-stone of Beast.
類ノ膽ノ石

研末し、蜜に臘脂を浸して汁を取つて調へて揉る。一日一回。王氏療瘡方
汁に化して服し、臍下に田の字を書く。聖惠方。【陷】牛黄二粒。硃砂一分。

類ノ蘇州二年元明
五年嘉靖庚子年
見草部當ル。唐宗

地ノ任ノ丘縣ノ民家に一正の非常な惡犬があつて、後に病衰して衆ノ大のため
道ノ任ノ丘縣ノ民家に一正の非常な惡犬があつて、後に病衰して衆ノ大のため
道ノ任ノ丘縣ノ民家に一正の非常な惡犬があつて、後に病衰して衆ノ大のため

に『任丘縣の民家に一正の非常な惡犬があつて、後に病衰して衆ノ大のため
び、その理が層疊してゐる。やはりは得難い物である。按ずるに、賈似道（たにせう）の賈（たにせう）隨抄
集解時。曰く、狗寶は狗の腹中に生ずる。状態は白の石やうで青色を帯

Vesical calculus of dog.

英名 狗寶 (目) 和名 いぬのたし

【氣味】甘く鹹し、平にして毒なし【主治】驚癇、毒瘡（時珍）

とある。

れば鮮苔も狗寶も同一類のもので、ただ狗の腹に生ずるものを狗寶といふだけ
ずるに、京房の易占に『兵強く主武なるを牛腹に石を生ずる』とある。これに據
特に牛、馬から出たものが最も妙だ。蓋し牛黄、これは走獸の腹中に産するもので、
もで、大なるは雞卵ほど、小なるは不揃だ。これは走獸の腹中に産するもので、
て玩弄し、密に咒語を唱へる。その石が降る。その石は鮮苔と名ける
の記事には『蒙古地方では、雨を禱るにただ淨水一盆に石數箇を浸し、淘（たう）り
の較耕録に鮮苔の記載があるの、それを調べて見ると、即ちこの物であつた。そ

蟾二錢、龍二錢、麝香一錢、末にし、好酒で和して麻子大の丸にし、三九つ、立ろうに效がある。後白粥を食つて補ふ。(養生方)【赤瘡】狗寶丸——狗寶八分、を研つて新汲水で調へて送下し、暖臥して汗の出るを度とする。三服に過ぎずして三錢を熬膏したもので和して緑大豆の丸にし、一丸、或は三九つ、白丁香七うぐいす、各一箇、蟾二錢、麝香一分を共に末にし、第一番に男兒を産んだ母の乳合、一合、黃各背、諸毒の初期で非熱、煩渴を覺えるには、癩狗寶一兩、臘月黑狗膽、臘月鯉魚膽、一兩、鹽二錢と搗いて泥のやうにし、漿水を攪き勻ぜて去つて調へて服す。一、日一回、三日に過ぎずして癒える。後に補劑を服す。(杏林摘要)【丸寶】狗寶癰疽發

附方

新四

【病食】時

【丸寶】時

(時珍)

氣味

甘

【主】時

【丸寶】時

である。有情に之くのである。

あつて、正に妊婦が異像を感ずると鬼胎となるの如きものだ。祥ではなくなつて病

漢ニハ優婆塞ヲ翻ス。
（正）

佛三昧ノ行ヲイフ。
（四）

方。
（三）
（二）
（一）

をある物に局め注がれて心志が分散せぬため、精靈の氣液が感應して形に凝るの志をあれど、それが彫刻したもののやうに見えた『とある。』それはいづれもその心が包質は骨でもなく石でもなく、そして佛體のあらゆる部分が完備してゐた。又、徽水の質は骨でもなく石でもなく、五色の光を放出して高さ三寸の佛像があつた。それ載には『臨川の僧法と云ふのは般舟三昧の法を行つてゐたが、死後火葬するといふに集注してゐた。それがかやうに融結したのだ』とあり、宋潘溪文集の記をみた。蓋しこの棺内は女であつて、生前山を愛するが、あり、朝庭に凭つて開いて見る青と碧に畫いた山水があり、傍に一人の女子がゐて、靚粧して欄に凭て内ものすべくなくなくつてゐたが、だんだん石のやうに堅くなつてゐて、鋸で切らずに、程氏遺書の記載には『ある波斯人が閩中で古塚を發したとき、棺を禽鳥には生卵の如きものがあるのだ。これはいづれもその物の中に圍はれて化すところの出来なかつたものである。故にか。人間が癪を病めば心に金に石に似たものがあるのは狗の寶のそれであるまいか。

るこの判知し得るもの骨を取ればよいのである。

集解 時珍曰、朽骨とあるは何の骨をいふか分不明なべ、やはり無毒なる

諸朽骨 (拾遺) 英和名 暴露或 worn bones of animals.

諸毒、菌毒^{くわんどう}を解し、渴^{かつ}を止め、丹毒^{たんどう}を除き、煩熱^{はんねつ}を去る【(膿膿)

皮上の膚が^た起ち、面^{めん}に顔色なきはみな不足である。いづれも生で飲むがよし又、

氣味 【甘、し、平なり】 主治 人身の血不足を補す。或は血枯を患ふ。

主治はいづれもその本條を見よ。

「やうに思はれる。姑のそく量のものをあつたてしに、
 けわしく、そのせいの血の

概に諸血とし、一條を設けて記載した、主治たる病に對する說明は、明か、明瞭な

寒、熱、溫、涼、不、同、で、あ、り、有、毒、無、毒、の、差、異、が、あ、る。

集解 時珍曰、畜には水と陸との別があり、産地により特異がある。

諸血 (拾遺) 英和名 Blood of animals.

曙
血
(拾遺)

腹積聚【唐本草】

主治 百病、中惡、客忤、邪氣、心

味 氣

字。下。大觀二年。辛巳。

頤、曰、來の時、南海にやはりこのものが、或はあらしい。

てことかであつて、甚だ珍(めづ)り重(おも)なる。試用して見るに有効だ。

状態は久しく壊れた丸薬やうで赤黒色のものだ。胡人は時に中國へ將ち來る

恭曰、西戎に産する。彼の地の者は、
(二)猪膽で作つたものだといふ。

集解

作ル。(二)緒、大觀二諸二

學和名名
Theriac.
フリツカ

底野加

はれる。(楊氏願真堂方)

日煨へて取出し、研細してて五分つづつを焼酒で調へて服す。三服に過ぎずして効果が現

卵一箇を白土を黄りてめその薬を和して攪勻せ、紙で封じ泥固して焼火で生

狗寶丸——硫黃、水銀各二錢、共炒つて金色にし、狗寶三錢を入れて末にし、雞

流氣追毒藥を服し、拔毒膏を貼つて瘰癧を取る。(通玄論)

生三葉并細の葉で蒸して汗を出す度にして後

（六）煤、一本、焦二作

層 焼いて弘景く、

【中蠱の毒】(別錄)

主治

【平にして毒なし】

氣味

も好し。

すことなし』とはこれだ。今はこれを用ゐる處方は甚だ少ないが、膠に煎ずるに尤である。唐の韓退之の所謂『生馬勃、敗鼓の皮、醫師收め畜へて用を待て遺さ定してない。馬皮でも驢皮でも作るものだが、黄牛皮の勝れたものとすべし。宗禔曰く、これは敗れてぼろぼろになつたもので、何の皮と指

集解

のである。

もとは京都に在つたが、宋本に移してて醫部に入れた

校正

英名 和名 別錄下品 (敗鼓皮) Torn drum-skin. あぶれたたたき

主治

【食ふ】(饑饉) 肺にして食ふ

集解

人をして大風疾を成さしめる』とある。

て用ゐるのだ。時珍曰く、按ずるに、『雷害に』雷霆したた六畜の肉は食つてはならぬ。これは六畜が雷のために震撃されたもので、その事に因つ

失心ノ大驚字アリニ

震 肉 拾遺 英名 乾けば易へる。外臺秘要。【打撲の青腫】

英名 乾けば易へる。外臺秘要。【打撲の青腫】

英名 乾けば易へる。外臺秘要。【打撲の青腫】

を唾で和し、石上で磨つて塗る。乾けば易へる。外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

【打撲の青腫】 外臺秘要。【打撲の青腫】

主治

○東坡

風牙痛を治癒

附方

一、三

諸朽骨を多く取つて土氣を洗淨し、釜で煮て

し、水痢を止める【時珍】

風牙痛を治癒

風牙痛を治癒

作(一) 粥、大觀二餅

(上)

錢を灰に焼いて二錢を酒で服す。白崩には白錢を用ゐ、紅崩には紅錢を用ゐる。(海)

效がある。(簡便)【夜夢魔寐】一尺を枕にすれば平安である。(肘後)【赤白崩漏】

性を存し、白瘰を焼きて各一錢、尿、白、紅、錢半を燒き、共に研つて揉る。神

れば易へる。三、五、回で瘰を磨る。(廣濟方)【牙疳、鼻疳、酒五升、鹽抄、煮熱して裏み、冷

附方 新四。【瘰損疼瘡】故馬錢二枚、酒五升、鹽抄、煮熱して裏み、冷

治す。久しこれに臥せば人の脂、血を吸ひ、顔色を損じ、氣上する。(機要)

止め、賊風を除くには、灰に焼いて二錢を酒で服用す。産後に血が下つて止まぬを

烏錢 氣味 【主 治】 【毒なし】 【火燒生瘡。水風に著けてはならぬ。血を

上げた物に因つて命名したもので、概して薬に入れば著しい相異のあるものでな

黄、赤のものは染色だ。(錢、紅、白、錢、呼ぶ名はそれの纏り

るものだ。その白色のもの、黒色のものはその毛のこともその色だが、青、烏、

時。曰く、錢の屬は甚だ多い。い、西北方の地に産し、いづれも畜毛で作

集解

字(一) 大 下 肉 有
蹄 下 二 大 下 有

【獾くさげの肉】犬の懸蹄けんていもあるもの【六畜の瘡病、瘡疥で死んだもの】
【馬うまの夜眼よがんなまきもの】白馬の蹄の青きもの【六畜の自死して口の閉ぢぬもの】
【馬うまの肝】白馬の頭の黒きもの【六畜の自死して首を北に向けたもの】
【馬うまに角の生えたもの】白羊の頭の黒きもの【馬うまの鞍下かんかの黒肉】
【羊ひつじの獨角どくかくのもの】黒羊の頭の白きもの【猪いのしし、羊ひつじの心、肝に孔のあるもの】
【牛うしの獨肝どくかんのもの】黒牛の頭の白きもの【牛うし、馬うまの疔うしを生じて死んだもの】

諸肉有毒 (拾遺)

路を割いて硃砂、或は雄黄ゆうわうの中に入れて吞む。蟪こが死んで瘰癧るるをる。(集驗)
す。一。を聞いて十を知る(外臺)「蛇蟲心痛」六畜心を生で切つて四切にし、縦横に
猪、羊、犬の心を取り、乾して末にし、一日三回、日向つて方寸匕を酒で服
【附方】健忘けんわう。新二。心孔が昏塞して多く忘れ、喜よろこく誤るものは、牛、馬、

(時珍)

主治

【心昏こころくらし多忘おほわうのもの、心虚して痛を作すもの、驚悸おどろおどろし恐おそるもの】

作ル。
(一) 蛇、大鰐、狗ニ

ら、諸心は心を損じ、諸肝は肝を損ずるとの説もあり、これと相反してゐる。従つたのであるが、しかゝ、又殺す時に驚氣が心に入り、怒氣が肝に入るものだから時珍曰く、古方では多く六畜の心を用ゐて心病を治した。その類に

集解

六畜心 綱目 (目) 英和 譯名 和名 英名
The heart of the domestic animals.

狂走。駢駢の毛尤良し【本經】

氣味

【主 治】 鹹し、平にして毒あり

鬼 疰、蠱毒、寒熱、驚癇、癰瘡、

の蹟を存して置く。

時珍曰く、これは本經に一品として取扱つてあるものだから、姑くそのまゝ古

に及ぬ。

それ類だが、それぞれ本條に已に主療の記述があるから、必ずしもこれに掲げる

集解

六畜毛蹄甲 (本經下品) 英和 譯名 和名 英名
Hoof of domestic animals.

六畜毛蹄甲

馬肉の毒 蘆根汁。杏仁を嚙む。甘草汁。かんそうじゅう美酒を飲む。

豆漿汁を服す。

扁豆。へんとう【いづれも水で服す】人の乳汁を飲む。頭垢一錢で服すれば死人を起す。

六畜肉の毒 六畜の乾屎末。伏龍肝末。黃蘗末。わうはくまつ赤小豆の燒末。東壁土末。白

諸肉の解毒 (綱目)

【四季脾を食はず】

【春は肝を食はず】【夏は心を食はず】【秋は肺を食はず】【冬は腎を食はず】

【本生命の肉は人をして神魂不安ならしめる】

【諸脂で燃す燈は目を損する】

【夏を経た臭肺は人の陰を瘥し、水病となる】【魚の饒あじをたのは肉を敗る

を敗る

【六畜の脾は一生食つてはならぬ】【諸肝は肝を損する】【諸血は血を損し、陽

【諸心は心を損する】【諸腦は陽を損し、精を滑する】

毒を生ぜしめる。

【口上】はいづれも食つてはならぬ。人を殺し、人を病ましめ、人をして癰腫、疔

【六畜肉の犬に興へて犬の食はぬもの】【乳酪で煎した膾くわい】

【肉汁の器に盛つて氣を閉ぢたもの】

【六畜肉の地に墮ちて塵に沾あれぬもの】【肉の水に落ちて浮くもの】

【肉の煮ても熱せぬもの】【肉の煮熱して水の斂あらぬもの】

【生肉で水の斂あらぬもの】【六畜肉で鹹かん、酢をつけても變色せぬもの】

【六畜の五臟ござうに草くさが著ついて自ら動くもの】【肺の曝はくして燥かぬもの】

【祭肉の自動するもの】【諸肉の一夜たつてまだ煮ないもの】

【尾漏びろうで沾あつた肺】【米饗まいけい中の肉肺】【六畜肉の熱血のまだ斷えぬもの】

【獸の竝なら頭けうのもの】【禽獸の肝の青きもの】【諸獸の毒箭に中つて死んだもの】

るもの

【獸にして尾に岐のあるもの】【諸獸の足の赤きもの】【諸畜の肉中に米星のあ

【鹿の臆おそ白しろきもの】【鹿の文ぶんの豹ひょうの如ごときもの】【諸畜にして龍形を帯びたもの】

本草綱目
獸部
第五十一卷
上

本草綱目獸部第五十卷下終

腸を食つて消化する。

肉食の不消化　還つてその肉を煮たとき、その汁を飲めば消化する。その食つた獸の

諸肉の過傷。その畜の骨灰を水で服す。生韭汁。葵の煎汁。

藥箭肉の毒大豆の煎汁。

乃。大黃湯。

猪肉の毒とく　杏仁の研汁ぎんじゅう　猪尿の絞汁じゅうじゅう　韭菜汁さいさいじゅう　朴消ぼくしょうの煎汁せんじゅう　猪骨灰ちゅうこつがいを水で調へ

狗肉の毒 杏仁を水に研つて服す。

獨肝牛の毒入乳を服す。

牛肉の毒　猪脂を湯に化して飲む。甘草湯。猪牙灰を水で服す。

搗る。甘菊根を水に搗る。甘草の煎湯を服す。汗を取る。

牛、馬の疔を生ぜるもの
 澤蘭根を水に搗る。
 猪牙灰を水で服す。
 生薑を酒に

馬肝の毒。猪骨灰。牡鼠屎。豆鼓。狗屎灰。人頭垢。【いづれも水で服す】

目録

射 唐本草

絡
衍義

蜀本草



日
末

熊、本經、難、附、上。

目録

目錄

莫圖經、醫藏、針、校兔、加附す。

目録

二九

本草綱目獸部目錄第五十一卷

産する。状態は虎のやうだが小さくして黄色

に諸國に獅子は西域の時珍曰く

集解

語する『とあるから獅ではない。

現に瑞應圖を參照して見ると『白澤は能く言

いつてある。説文に『名白一』澤とあるが、

聲を象したものだ。梵書にこれを僧伽ひんがと

る。故にこれを獅といふのだ。獅とほそ

交の切（キ）時珍曰く獅は百獸の長であ

許俊雅には虎と書いてある。

釋名

狻猊

音は酸倪（サ）科（イ）

獅

綱（目）

科

和名

獅子

獸の 三十八種



右附方 新一新なり。

水客、山澤を附す。

罔兩綱目

彭侯綱目

封綱目

な附す。

狸綱目

野女を附す。

獼猴、靈、瀧、を附す。

怪類共八種

狻猊

獲遺、獲、獨を附す。

果然拾遺

蒙頌、獼猴

獸の四

右附方

舊二十四新四十二

鼯鼠拾遺

食蛇鼠綱目

狸本經

土撥鼠拾遺

貂鼠綱目

黃鼠綱目

鼯鼠綱目

即鼠狼。

鼯鼠別錄

隱鼠拾遺

鼯鼠綱目

竹鼯綱目

鼠別錄

鼯鼠、鼯鼠、水鼠、氷鼠、火鼠、鼯鼠を附す。

獸の三

鼠類二十種

右附方

舊八十七新四百四十六

滑、鼯、多、論

た
 關(五)を中(五)心とし
 南楚(四)の地方ではこれを李耳(五)といひ、或はこれを鸛鵒(五)といふ。
 誤だ『といひ、揚雄の方言には』陳、魏(三)の地方ではこれを李(五)といひ、江淹(三)、
 『その文字は』虎(二)に從(五)几(五)に從(五)。この物の蹢躅(二)せる形を象したもので、人從(五)は
 大蟲(五)肘後(五)李耳(五)時。虎(二)はその聲を象したもの。魏才書い
 烏鵒(五)音は徒(二)である。左傳には於(五)菟(五)と書さ、漢書には烏鵒(五)と書い

釋名

虎
 (別錄中品)
 學和 科名
 Felis (Panthera) tigrinus, L.
 科名

主 治
 【これを服すれば、宿血を破ら、百蟲を殺す。これを焼けば鬼氣を去る】

尿 時。曰。陶氏が蘇合香に註して誤つて獅の尿だといつたのを、陳氏が正誤
 らは馴らし難い。

日以内にまだその目の開かぬうちに取つて馴らし習はせるのだが、ややや成長してか

關(五)ハ南見
 南楚(四)ハ南見
 石部
 水部
 江(三)ハ江見
 草部
 魏(二)ハ魏見
 參部
 陰部
 草部

(藏器)

古國名。印度。一。

(六) 伽耶國。印度。一。

在河南東。二。

白狼山。嶺南。三。

(五)

猛悍なものだが、やはりそれを制するものもあるのだ。西域では獅を畜ひ、生七
 鐵獸を厭じた。能く獅、象を擡にするものだ』との記載がある。獅は獅
 頭カウに跳びついで殺したのを見たとあり、『唐史には高宗の時、伽毘耶國カピヤから天の
 ところろが、博物志には『魏の武帝が白狼山ハクランへ往つたとき、狸カのやうな物が獅子
 の尾に敢て集らないといつてある。物の理にかやうな相異ところがあるからだ。
 みな化して水となる。この物が死んで後、虎、豹が敢てその肉を食はない。蠅と、
 毛が粉として落ちて、『といひ、熊太古は獅が牛、羊、馬の乳中に入ると、羽
 を分つ『といひ、陶九成は『この物は禽獸を食ふには氣を以て吹く。すると羽
 虎、豹を食ふ』といひ、虞世南は『この物は虎を拉しき、獅を呑み、犀を裂き、象
 尾に在り、一たび吼えれば百獸が辟易し、馬はみな溺血する。爾雅には『この物が
 里を走る。毛蟲の長である。牡には尾上の耳が大きい斗ほどあつて、一日に五百
 は雷の如く、威嚇イハがある。鉤爪、鉤額、鐵額、銅頭、銅角、銅耳、昂鼻で、目の光は電の如く、吼えるも
 だ。また金色の猊狗のやうであるが頭が大きい。また青色のものも

(四) 毛蟲ノ類。

ア(七)ルノ方破ハ角ノ陣ニ利
昨日
昨。



〔虎〕

烟を聞くと走るはその臭を惡むのだ。虎は人間や獸類を害するが、蛇鼠が能く虎を
 内をしに行く。虎は狗を食ふと酔ふ。狗なるものは虎に取つての酒である。羊角
 とさはその物を捨てて了ふ。人間が虎に殺されると恨鬼といふものになつて虎の案
 ひ躍つてその物に中てる。それで驚きた
 尾を囓む。他の動物を搏つときは三は
 下に随つて上句に首を囓み、下句に
 を謂ふ。虎が物を噬むには月の句上、
 現に世人はそれにて虎といふこと
 奇、偶を觀つて以て食ふといふ。
 又『虎は衝破を知り、能く地に畫き、
 せず、卒んで七ヶ月で生れるといひ、
 に虎始めて交はるといひ、或は『月の量するときに交はるといひ、又』虎は再交
 つて風が生り、百獸が震する『とあり、易卦通變に『立秋に虎始めて囓き、仲冬
 には一方の目で光を放ち一方の目で物を看る。吼える雷のやうで、吼えるに従

集解

はつれもゐる。

尖り、舌は大いさ掌ほどあつて倒に刺が生え、項が短く、鼻は麗り、夜間物を視るさ牛ほどあり、地色は黄に、紋様は黒く、牙は鋸のやう。爪は鈎り、鬚は健しく、時。珍。曰く、按ずるに、格物論に『虎は山獸の君であつて、猫のやうで大きい

頌曰く、虎は、本經には產地を記載してないが、今は多く山林地帯に

といひ、虎に似て角あるを麀——音は嘶(ソ)——といふとある。

といひ、虎に似て五指あるを驪——音は軀(カ)——といひ、虎に似てて眞に非ざるを彫(ウツ)

といひ、白虎を紺——音は令(ケ)——といひ、黒虎を驪——音は育(イ)——とい

いづれも穿鑿不經の言である。爾雅には『虎は、毛の淺さを驪貓——音は淺(サ)——

といひ、應劭は『南郡の李翁が虎に化けた。それで李耳と叫ぶのだ』といつたが、

ととと耳に食ひ當ると止める。それで李耳と叫ぶのだ、その諱に觸れるからだ『

現に南方の地でやはり虎を呼ぶが同じやうなわけである。郭璞は『虎は物を食

見と書くへ蓋し地方音の轉訛で、李は李となり、見が耳となつたのである。

東西の地ではこれを伯都といふとある。余(時珍)が按ずるに、李耳といふは狸

ノ字ハ大觀ニ邪ニ上ニ除

骨毒風で癢念し、屈伸し得ず、走注疼痛するを治し、尸注腹痛、傷寒溫氣、溫瘧を
氣。鬼炷ゆづりの毒を殺し、驚悸を止め、惡瘡、鼠癭を治す。【頭骨が、就中たつちゅう良し】【別錄】【節】

氣味

主治

【ハ】邪惡の

れる。

酒、或は醋を塗る。それはそれ方に示す方法に隨ひ、炭火で黄に炙いて藥に入
時。珍く、凡そ虎の諸骨を用ゐるには、いづれも砕き、碎いて髓を去り、或は

めるものだ。

箭で射殺したものは藥に入られな。い。その毒は骨、血の間を浸漬ひんじくして能く人を傷
佳し。凡そ虎の身の數種のはいづれも雄虎のものを用ゐるが勝るのである。藥
虎骨。修治。頭曰く、虎骨は、頭、及び腰の骨を用ゐる。色の黄なるものが

修治

虎骨

鼯鼠。獺の條下に記載してある。

は黒く、形は犬に類し、獼猴みこうを食ふものだ。黄腰と名けるといつた。

又、孫は『穀——音は舩ふね（カ）——といふは豹に似て小きく、腰以上は黄で以下
すれば母を食ふ。形は小さいけいれども能く虎、及び牛、鹿を食ふのだ』とある。

黃腰 蜀志に『黃腰と名ける獸は、身は鼬のやう、首は狸のやうなり、成

は犴狴は胡大であつて、能く虎を逐ふ』とある。

渠 搜逸周書に『渠は西戎の獯大であつて、能く虎、豹を食ふ』とある。一

食ふ』とある。

曠は鵲は鴉を食ひ、豺は豺を食ひ、驢は驢を食ひ、豹は豹を食ひ、駃は虎を

鋸のやう、能く虎、豹を食ふ』とあり、周書にこれぞ、白とひ、説苑に『師

駃 山海經に『駃は、形は馬のやうで、身は白く、尾は黒く、角が一、牙は

のことだ。文の黒い虎で、尾は身より長い』といつた。

豹を見る直ちに殺す。太の平に現はれるものだ』とある。郭璞は『即ち驢虎、

附錄

西耳

瑞應圖

人といふが虎に變じたといふ説があるが、やはり自ら理のあるところだ』とある。

變ずる。又、海中にゐる虎は能く虎に變ずる。古は虎といふが人に變じ、白

能く虎を食ふ。勢は強と弱に因らぬものだ。抱朴子に『虎は五歳になると白

制するところを見る」と、智は大、小に因らぬものだ。獅、駃、黃腰、渠は

一斗を盛つてこれに浸し、糖火でそれらを微温にし、七日後に任意に飲む。微利する寸を取ら、肉膜を刮り去つて酥を塗つて黄に炙き、細に搗いて絹袋に盛り、瓶に酒急造して服するもよし。【腰脚不隨】（攣急し、冷痛するは、虎脛骨五六一盃を飲む。若し服して急く場合には、銀器を用ゐて火爐中で三日暖養つてこの三物を無灰酒に浸して七日間養ひ、秋冬はその日數を倍にする。毎日空腹にある。虎脛骨二大兩を搗き碎いて黄に炙き、鈴羊角（つせうかく）一兩、新薬二大兩を切り、磨（つ）の疼の脛、【痛】虎骨酒で治す。病の深淺に拘らずいついれも效がある。と等分を末にし、一日三回、生薑湯で服す。久しくすれば人をして聰慧（ちやうい）ならしめ、附方 健忘、驚悸【預知散】虎骨を酥で炙き、白龍骨、遠志（えんし）とある。身筋節の氣力はみな前足から出るものだから、脛骨を勝れたものとすると『とある一は陽出て陰藏（えんざう）れる關係にある。故にその骨は能く風を追ひ、膏を定める。虎のうゑ、の、腰、背の諸風は脊骨を用ゑ、うゑ、の、手、足の諸風を治するに、脛骨を用

作ル
病、大觀二疾二

時珍曰く、虎骨は各部分通して用ゐ得るもので、凡そ邪疰を辟け、驚癇、溫瘰、

小兒ぬれものだ。故に脚腰無力を治するにこれを用ゐる。

汪曰く、虎の強悍なるはみな腰に賴るのであつて、死んでも腰だけは屹きつとして

病を治する所以は、いづれも此の關係である。

あつて、風病の撃急して屈伸し得ず、走疰するもの、骨節風毒、癰疰、驚癇の諸

ければそれ風に從はざるわけに行かない。故に虎が嘯けば風が生ずるは自然の道理で

受。宗曰く、風虎の從にわくは、風は木であり虎は金であつて、木が金の制を受

推元亮の海上方には腰脚不隨を治するに、いづれも虎腰骨を治する方がある。

發明

頌曰く、李絳兵部集には虎骨といふ辟癰腫を治するものがあり、

】風を追ひ、痛を定め、骨を健にし、久病脱肛、獸骨（時珍）を止める

で浴すれば惡氣を辟け、瘡疥、驚癇、鬼疰を去り、成長してから無病になる（孟詵）

。醋を和して膝に浸せば脚腫を止める。腰骨が就中良し。初生小兒をこの煎湯

夢を辟け、戸上に置けば鬼を辟ける（陶弘景）】煮汁で溶すれば骨節風毒腫を去

治し、犬咬毒を殺す（甄權）】朱を雜せて符に畫けば邪を療し、頭骨を枕にすれば惡

肉 氣味 【酸し、平にして毒なし】宗。虎。曰く、微鹹し。弘。景。曰く、俗方

ては人に憎まれる。

して威あらしめるもので、官の任に臨むにこれを帶びるが佳し、無官のものが帶び
傍に在るもので、肉を破つてこれを取る。尾端にもあるが、脇の骨に及ばない。人
蔵。器。曰く、虎には威骨といふものがある。この字のやうで長さ一寸、脇の兩

にして敷く。便民圖纂

を敷く。痛は直に止まる。便民圖纂 【腰癰瘡】藥汁で洗ひ拭ひ、虎骨を刮つて末

骨末を油で調へて塗る。普。散。【足猪散】甲。猪皮湯で浸洗して軽く剪り去り、虎骨末

疳瘡。虎頭骨二兩を搗き碎き、猪脂一斤で敷きしめて塗る。神效方 【小兒の白禿】虎

品。湯火傷。灼。虎骨を炙き焦して碎いて敷く。神效がある。便民圖纂 【月蝕

す。外。臺。】惡犬の咬傷。虎骨を刮つて末にし、方寸匕を水で服し、并に傅ける。小

一日三回、方寸匕を水で服す。外。臺。 【獸骨鹽】虎骨を末にして方寸匕を水で服

早朝に十丸を溫酒で服して效を取る。勝。金。 【肛門凸出】虎骨燒いて末にし、

【痔漏脫肛】虎脰骨二節を蜜二兩で赤く炙き、末に搗いて蒸餅で梧子大の丸にし、毎

ニ作ル。年(一)字、大觀ニ時
 齒生足大觀ノ小兒下
 二〇〇字ニ

を取、黄、炙き焦して末に搗き、一日三回、方寸匕を飲で服して、效を取る。(張文仲方)
 ぬ。齒が生えなくなることある。(療)【疾】休息(一)【年】を經て癒えぬには、大蟲骨
 る。絶對に熱い食物を忌む。齒を損ずるもの。小兒に(二)與へて食はせてはなら
 の煮汁で和、空腹に半升を服して、寝具を覆ふ。少時して汗が出て、奏效す
 中に置いて、五晝夜浸し、隨意に飲むが妙である。(聖惠方)【痛】虎骨を通草
 難きは、虎頭骨一具を塗つて、黄に炙き、槌き碎いて、絹袋に盛り、二斗の清酒
 回、二錢づつ酒を温酒で服す。(聖濟總錄)【痛】走、節、壓【痛】あらゆる節、節がみな痛んで忍び
 回、同。經、夏、方(一)【歴】節、痛、風、虎、骨、を、酒、で、炙、いて、三、兩、没、薬、七、兩、を、末、に、し、一、日
 炙き、黒、附、子、を、炮、き、裂、いて、皮、を、去、り、各、一、兩、を、末、に、し、二、錢、づ、つ、酒、を、で、て、一、日
 る。(崔元亮海上方)【白】虎、風、痛、【走】注し、兩、膝、腫、するに、は、虎、腰、骨、を、酥、を、塗、つて、黄、に
 任意に飲む。十一年以上の患者も三劑に過ぎず、七年以上のものは一劑で必ず癒え
 て、無灰濃酒中に投じて密封し、春、夏は七日、秋、冬は二十一日の間、後、一、日、三、回、
 いづれ、石、上、で、斧、槌、を用ゐて、碎き、鐵、床、上、に、置、いて、文、炭、火、で、炙、き、脂、が、出、る、を、待、つ
 ので、それ、で、效、がある。又、方、では、虎、の、腰、脊、骨、一、具、前、脚、の、骨、一、具、を、

ある。ただ毒に中つて自死したものは用ゐてはならぬ。能く人を傷めるものだ。虎の雄あり、老いともいふものも、嫩いものもあつて、殺つたものも、雌の腹に、凡そ虎睛を使用するには、いかに調へておく必要がある。雌の腹に、凡そ虎睛を使用するには、いかに調へておく必要がある。

虎睛 虎睛には偽物が多。い。自ら獲つてこそ真物として用ゐらる。

研つて服す【孟詵】

膽 小兒の驚癇【蘇軾】小兒の驚癇して不安なるには、水に

る。衰達の禽蟲述に『虎の腎は腹に懸り、象の口は頤に隠れる』とある。

腎 癰癰【時珍】千金の癰癰を治する雌黃丸中に用ゐてあ

神效がある【時珍】記載は保壽堂方にある。

で固めて煨いて性存し、平胃散末一兩を入れて和勻し、三錢つづの白湯で服す。

吐 反胃吐食は、生のももの取をし、洗はずに淫穢のつたまま新互

で合せて用ゐれば形を變し貌を易へ得る【とある】

血、雞血を殺取して等分を和合し、初生草といふ胡麻子に似たその實を取り、それ

を熱刺して飲めば能く神志を壯にする』といつた。又、抱朴子には『三月三日に虎

血を神を壯にし、志を強くする。時珍。【時珍】獵人李次口は虎の心血

を度とする。油が盡きたときは再び添加する。毒域神方

月間氣の洩れぬやうに密封し、その油一兩つに無灰酒一盞を入れて温服し、瘡を

【附方】一切の反胃【虎脂半斤を切り、清油一斤に互瓶で浸して一

煎し消かして小兒の頭瘡を白禿に納れて五痔下血を治す【孟詵】これを服

【主 治】【別錄】下部に納れて五痔下血を治す【孟詵】これを服

葱、椒、醬で調へ、炙熟して空心に冷食する。諸親老方

【附 方】脾、胃の虛弱【惡心して飲食を欲せぬには、虎肉半斤を切り、

【主 治】惡心【孟詵】これを食へば瘡を治し、三十六種の精魅を辟け、山に入つて虎がその人

を傷める。時珍。【時珍】虎肉には土氣があつて、味は甚だ佳くなく、いが、鹽で食へば

に、虎肉を熱食すれば人の齒を壞くといふ。説曰く、正月は虎を食つてはならぬ。

つて辱にし、婦人に飲ませると高貴な子を生む。他人、及びその婦人に知らせては時珍曰、按ずるに、河魚圖に『虎鼻を門に一年間懸けて置き、それを取つて煮(煮)る(煮)』【(別錄)】戸上に懸けると男を生ぜしめる【(別錄)】

鼻 主 治

主 治 【驚邪(驚邪)。】惡を辟け、心を鎮(鎮)める【(藏器)】

ある『とあつて、その説甚だ詳た。寇氏はその關係に考察しなかつたのだ。

。これらは虎の精魄(精魄)が地下に淪(淪)入したもので、それゆゑに小兒の驚癇の疾に主效が出る。月の黒い時にこそ一尺ほど掘り下けると石子、琥珀(琥珀)のやうな状態のものが出つずるに、茅亭客話に『獵人が虎を殺したとき、その頭と項の常つた場所に目を押つが地に入り、そこを掘ると鉄炭のやうな状態のものが出ると同時にやうな關係だ。按時珍曰、この骨の説は怪しい。目光の説も、やゝは入りなが(入)死(死)す(死)と蛇だ。

宗奭曰、陳氏の所謂乙骨の説や、目光が地に墮ちるといふ説は結局怪しいもの。墮ちて地に入る。それを取つて見て石白の如きものならな(確)である。

を看るものだ。獵人がそれを候(候)つて射ると、總に觸れられんとした途端に目光が

まななくなる。(千金方)

【附方】酒を鬺たの虎屎中の骨を灰に焼き、酒で方寸匕を服すれば飲

新。一。

【主 治】痔にして火瘡を治す【別錄】破傷風【明珍】

屎中の骨

晒し乾して灰に焼いて明珍す。千金

色白く、刮けげ汁を出し、癰うみを復た發するには、虎屎の白い部分を馬尿で和し、

【附方】癰疽、手、足、肩、背に生じて米のやうに起り、

服すれば腫骨腫を治す【明珍】

【主 治】惡瘡【別錄】鬼氣【醫器】瘰癧、痔漏を療す。燒き研ひつて酒で

を抜いて挿んでやると痛癒えたとある。

【主 治】齒痛【別錄】西陽雜俎に『許遠が齒痛のとき、仙人鄭思遠が虎鬚ひげの

神を驚かしめる。その毛が瘡に入れば大毒難記にある。』とある。

るが、やゝは鬼魅を辟ける。現に世間で、卒中惡病に皮を燒いて飲のみ、或は衣服きに繫かけ

る。能く鬼魅を辟ける。現に世間で、卒中惡病に皮を燒いて飲のみ、或は衣服きに繫かけ

【發 明】時珍は、虎は陽物にして百獸の長であ

瘧疾（瘧器） 邪魅を辟ける

吳王

莊子に記載がある。

一名貴毘

皮

に於てある。

主 治 小兒の臂に癰腫を辟けるに、虎爪、蟹爪、赤朱、雄黃を末にし、松脂で和して丸にし、外臺には、時珍曰く、

張王

爪、爪、并に指骨、毛、つ、い、れ、も、用、に、ら、れ、る。雄虎のものも勝れたもの

を温酒で服す。(解毒藥毒)。

(癩瘡)。

晒し乾し、天麻二兩、乳香、沒藥くすりやく各一兩、麝香半兩を末にし、一日三回、錢二つ

赤足蜈蚣十條を酒に三日浸して

四國

【白虎風痛】大虛

方

治す。刮つて末にし、方寸匕を酒で服す〔時珍〕

【勞蟲を殺し、獨犬を傷つて發狂を

【男子の陰瘡、及び疽瘰】(孫思邈)

牙

なともこのあやめといふ意味と同じ。

知られては效驗がない。又『門』に懸ければ子孫に宜く、印おしも勇壯ゆうさうに見せていづれば虎、胎教に行はれたる。これは古代に行はれた胎教に、虎、豹を見せたいづれば勇壯ゆうさうの印おしを

(一) 南方木也(重)曰(白)樹上生之
サバク(サバク)樹上生之
Panthera diardi De.
smoul.

鮮ノ地ヲ指ス。
(四) 東胡ノ朝
(三) 見。延州ノ土部蠻ノ地。
(二) 秦ノ今ノ陝西省

豹

(別錄中品)

科名

Felis fontuierii A. M. Edw.

科名 學名 和名

科名

釋名

程(列子)失刺孫

時珍曰、豹は性暴なるものだから豹といふ。按

ずるに、許氏の説文には『豹なるものは春が長くして行くときは春が多然として隆なり、司殺の形を具へたものだから、その文字は身に勻に従ふのだ』とあり。王氏の説には『豹は性は物を勻して取り、度を程つて食ふ。故に従ふに従ひ、又、名けて程といふ』とある。列子には『青寧、程を生じ、程、馬を生ず』とあり、沈氏の筆談には『秦地方では豹を程といふ。今でも延州ではやはりさういふ。東胡ではこれを失刺孫といふ』とある。

集解

弘景曰、豹は至て稀にあるもので、藥に用ゐることと鮮い。ただ尾

だけを貴ぶものだ。

恭曰、陰陽家には豹尾神車龍といふが、國に豹尾車といふがあるが、それはさう名ける車が尊貴なので、眞物の豹尾そのものは何等貴ぶべきわけがない。

時。曰、按ずるに、『林邑記』に「廣西の南方地方に暖風^{暖風}といふが、死人の

中に人れば有毒だ。

皮膚。器。曰、藉いて睡つてはならぬ。人の神を驚かすものだ。その王が人の瘡

(時珍) 記載は五行志にある。

【頭骨】主治 燒灰の淋汁は頭風^{頭風}白屑^{白屑}を去る^(時珍) 【枕にすれば邪を辟ける】

記載してある。

外臺には、夢中の鬼交、及び狐、狸の精魅を治すとして、推氏方中に用ゐてあると

鼻 主治

【狐魅^{狐魅}には狐鼻と共に水で煮て服す^(時珍)】 【(麝香) 日、按ずるに、

(時珍)

【脂】主治 生髮膏に合せて朝塗れば暮に生え^(孟詵) 【面脂にも入られる】

傷を補し、身を軽く、筋を壯にするのである。

宗。曰、この獸は猛捷なる處に過ぎたるものだ。故に能く五臟を安し、絶

ずるものだ。

う感ずるが、少頃して消化するところを定まる。久しく食つてやもはり同様に感

發明

説く、豹肉は人の志性を粗豪ならしめるもので、これを食べると直ぐ

寒暑に耐へ、人をして强健ならしめる【日華】鬼魅、神邪を辟け、腎に宜し【孫思邈】

身を軽くし、氣を益す。冬食へば人を利す【別錄】筋骨を壯にし、志氣を強くし、

食つてはならぬ。神を傷め、壽を損ずる。主 治 【五臟】を安じ、絶傷を補し、

肉 氣 味 酸し、平にして毒なし【思邈】温にして微毒あり。正月は

で、珍物の一に入るとある。

丘に昔し、豹が死ねば山に首する。本を忘れぬのだ。豹の胎は至つて美味なもの

は豹をして止らめしめる【とつて、物にある相制の關係だ。廣志には『狐が死ぬば

畏れが、獅、駿は能くそれを食ふ。淮南子に『蝟は虎をして申せしめ、蛇を

變ずるものもあるだけ。寇氏はそれを知らなかつたと見える。豹は蛇と鼯鼠とを

宿應ずるものがゐる。禽蟲述に『虎三子を生じ、一は豹となる』とあるを見る

べ。又、西域にある金線豹といふは文が金線のやうだ。水中には水豹といふ上に箕

といひ、これには裘を作るに宜し。艾葉のやうな紋のものは艾葉豹といひ、前者に次

白く、頭は圍く、自らその毛の色彩を愛惜する。その文の錢のやうなものは金錢豹

といふ。伽耶記載は北戸録にある。

角に生じ、象は雷を聞くが爲に花牙に發す『
 とある。古語に犀は月を望むに因つて紋
 開は花が暴出し、遂巡として復た發す
 たのだとある。南越志には『象は雷聲を
 て文が生ずる。故に天象にこの字を用ゐ
 牙は雷に感じて文が生じ、天象は氣に感し
 たものだ』とあり、王安石の字説には『象
 象の字の義文に、許慎の説文に、

〔象〕



釋名

時珍曰

く、

許慎の

説文に

象の字

の義文

に、

王

安石

の字説

には『象

象

宋開寶

科名

科名

和名

Elephas indica, L.

科名

科名

科名

科名

科名

【して水となる】

主治

尿

銅、鐵を吞んで腹に入らるには、水で和して服す。直ちに化

るもので、銅、鐵、瓦器に盛つても悉く透るが、ただ骨に盛れば漏らないといつた。

膏主 治 癰腫。能く肌、骨に透る時珍。曰く、段成式は『瘻膏は性の利な

皮主 治 氣、邪氣を辟け得る蘇頌。これに寝れば温瘡を驅り、濕氣、邪氣を辟け得る蘇頌。

に銳利だつた』とある。

みな鐵であつた。そこでそれを取つて劍を鑄たところか、玉を切つて泥を切るやう

その地を掘つて見ると二匹の兎を得た。一は白色、一は黄色で、腹中は腎、膽まで、

で、丹石、銅、鐵を食ふ。昔、吳王の武庫中の兵器が悉く無くなつたことがあつて、

交兎拾遺記に 狡兎は昆吾の山に生ずる。形は兎の如く、雄は黄、雌は白色

獵人これもれを畏る』とある。

七尺、頭に一角を生じ、老いと鱗があり、能く虎、豹、龍、銅、鐵を食ふ。

豺禽書に 豺は井星に應ずる胡狗であつて、形狀は狐のやうで黒く、身の長さ

とある。

には『吐火羅から大獸を獻じた。高さ七尺、銅、鐵を食ひ、日に三百里を行く』

物に作れるもので、その銳利なること鋼のやうだ。名を嚙鐵といふ』とあり、唐史

新羅新羅者、密ノ山ノ地ニ在リ

鳥註 吐火羅ノ山ニ見

獅子、巴蛇を畏れる。南方の人民が野象を殺すには、多くはか、くらの落し葬おほなまし作

といつてある。その性く久しく物を記憶し、智豆、甘蔗かんざんと酒とを嗜むが、烟火、

び乳す『といひ、古訓には『五歳にして始め産して、六十年にして骨が全部具はる』

て胸と胸とを合せる。この點は諸種の異つてゐる。『習慣は三年にして一た

雄の牙は長さ六七尺あるが、雌は纔に一尺餘である。牝と交尾するには水中に在つ

るがこれを利用して死ぬ。口内には食齒があり、兩吻二本の牙が出て鼻を夾み、

のだ。故にこれが傷けば死ぬ。耳後に穴があつて鼓つづみのやうに薄いものが覆つてゐ

物を食ひ水を飲むにのみ鼻を以て卷いて口に入れる。一身の力がみな鼻に在るも

するやうになり、中に小肉爪があつて能く針、微小なものまでも拾ひ取り、

下り、その鼻は大きくして臂の如く、下垂して地に達し、鼻端は甚だ深くして開合

を移し、臥すは臂に著けるが、頭は俯し得ず、頸も回らない。その耳は驢うしに

は家のやうに小さく、四足は柱のやうで、指がなく爪甲がある。歩行には先づ足

身長一丈餘あり、高さもそれに相當し、太さ六尺ばかりあり、肉は牛に數倍する。目

はそれに乗る。灰、白の二色があり、體軀たいくは擲なとして面目が醜陋だ。大なるものは

【小便過多】象牙を灰に焼いて飲で服す。(續錄) 【痘疹の收らぬもの】象牙屑を銅銚どうしやう

【附方】小便不通【腹急するに】は、象牙屑を生で煎して服す。(救急)

會得するものなり。たのは何故であらうか。

肝の驚癘、迷惑、邪魅の疾を治するは宜なることだ。昔の世にこれを用ゐることとを

観ると象牙の邪を辟けることはまた怪を驅除するに止まらぬわけで、この物が能く心、

合丹くわたん電は象牙で竈を夾む。雷聲が震ふと能く光を發するものだ』といつた。これで

とある。又、按ずるに、陶貞白は『夏期に藥を合せるには象牙を傍に置くがよし。

こととで、象牙を十字にしてその木に貫いて沈めるのだ。すると因象いんさうの類が死ぬ

てこれを沈める。則ちその神死して淵は陵となる』とあり、註に「樟木とは山松さんそうの

』壺塚氏は水蟲を掌てのひらする。その神を殺さんと欲するときは、樟木かうぼくを以てて象齒を貫い

が、象牙を沈めれば水怪を驅除し得る。いふことと知ならぬ。按ずるに、周禮に

時珍曰く、世人は犀を然せば水怪を見得るといふことと知らぬ。いふことと知らぬ。

【發明】骨蒸、及び諸瘡に主效がある。いづれも生付を藥に入ることが宜し。(時珍)

て服すればやほり出る。舊梳屑が就中佳し。(蘇頌) 【風癘、驚悸、一切の邪魅、精物、

【氣味】甘、し、寒にして毒なし。【主治】諸鐵^{さく}、及び雜物の肉に侵入するは、水に磨つたに牙を刮^けつた層を水で和して敷く。立ち上る瘡病を治すには、水に刺^さりたるに、水に磨つたに研末してて飲服する。【開寶】諸物の咽中に刺^さりたるは、水に磨つたに研末してて飲服する。【開寶】諸物の咽中に刺^さりたるは、水に磨つたに研末してて飲服する。

吳王

【つね禁ふつゝ寒く、つ丹】

氣味

か換ることもいふが、それには事實でい。

次ぎ、山中に蛇しめてあつて多年をを経たものを下とす。『象牙は、象牙を殺して取つたものを上とし、自死したものゝがそれによつて一回に一歳に或は一歳に』とある。

日○華○曰く、象の蹄底は犀に似たものを作したる。

て得えににすすりり換かへへてて容よう易いににそそれれをを取とるる。

人々で労働にしている。象牙を賣つて貯へるものでも、諸國では木牙

願○曰、西へ、海を舟を重しとて、臺邊や土^ち傍^{はた}へ、中へ、
 此を以て、
 中へ、

て、瀝、たふ、時は、條に、切つて、器物、を、真く、用ゐる。

自由に取扱ふが、左右前後^(四)するまゝになる。その皮は甲、鼓に作れるもの

誘つて獲る。久しく飼ひ押らせれば漸次に人間の間言語を解し、象使ひは鉤を以て象を

つて、或は象牙鞋を路に埋めてその足の眞く生象を捕へるに雌象を嫁として

(四) 却誤。原書二脚ト下ル

註。見。王。保。石。崇。見。五。

する。故に近頃、金瘡の合はぬを治するにその皮灰を用ゐる。

【時珍】瘡肉は癰腫したもの、人が斧刀で刺しても半日にして合

【時珍】

皮

主治

【】下疳には灰に焼いて油で和して敷く。又、金瘡の合はぬを治す

睛

主治

【】目疾には人乳で和して目中に滴す【藏器】

の

（總錄）

丸にし、一回、十丸をつつを茶で服す。

鯉魚七箇、熊膽一分、牛膽半兩、麝香一分、石決明末一兩を末にし、糊で大豆大

附

方

【】内障目翳【假月】の如く、或は梨花の如くなるには、熊膽半兩、

雷敷の炮炙論に『熊膽は粘を揮ふ』とあるはこの事實をいつたのだ。

發

明

時珍曰く、

象膽は目を明にし、能く塵膜を去る。熊膽と同功である。

（海藥）

を齒根に貼り、早朝漱ぎ去る。數回で瘡を癒さる。

【（日華）】瘡腫を治するには水で化して塗る。口臭を治するには、綿裹で少量

和

氣味

【】苦し、寒にして微毒あり

主治

【】目を明にし、疳を治

入れるにはそのまゝ衆藥と和してはならぬ。必ず先づ搗いて粉にしたもので衆藥を

作^ル。約、二木ニ肉

膽 修治

から表面に青竹の文斑があり、光膩なものである。その味は微し甘を帯びてゐる。藥に乾して。乾して。象膽はよく乾して。

である。

驚を滑する關係だ。燒けば火に従つて化するものだから、又、よく小便を縮めるのである。『とあり、又、爾雅翼には『象の肉は肥えて脆^{ちやう}く、少し猪肉に類し、味は淡くして滑を含む』とある。そして見ると、その小便を通ずるものはやはり淡、滲にして滑を滑する。又、時珍曰く、按ずるに、呂氏春秋に『肉の美なるものに旌^{しやう}象の旌^{しやう}約^{しやう}あ

發明

通を治す。燒灰を飲すれば小便の多きを治す。【日華】

氣 味

主治

肉 氣味 甘く淡し、平にして毒なし。【主 治】灰に燒いて油で和して

るもの。象牙を刮つて末にし、水で和して敷けば出る。

に、水で煮た白梅肉で調へて塗る。自ら軟くなる。【鐵箭の肉に入ら

骨【鯁】象牙を水に磨つて吞む。【骨刺の肉に入ら】象牙を刮つて末

で黄^{ちやう}紅^{ちやう}色に炒つて末にし、七分、或は一錢つづを白水で服す。【諸獸

が、て薬に入れるに堪へない。

つて来ないものだ。又、犀角といふが、甚だ長くして文理は犀に似たものだ。集

に所謂駭犀といふは、米の中に置いて、雞に食はせよ。犀角をその米を啄はくせぬ。犀角を水の中に産するものだといふ。漢書

これ水犀の角で、水に産するものだ。犀角を水に入れて、至つて神驗がある。或は

白線があり、直線に端まで通つてゐて、夜中露つゆして

る。又、通天角といふのがあつて、それは角に一條

する。犀に二角あつて、額上のもを勝れたものとす

弘。景曰く、今武陵、交州、寧州諸地の遠き山に産

（三）益州に産する。永昌、即ち今の滇南の地だ。

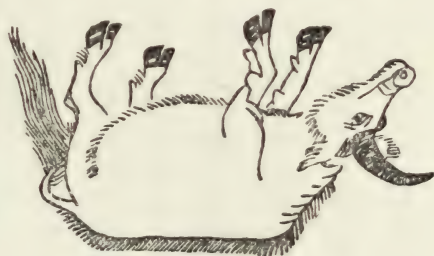
犀は、永昌の山谷、及び

別錄に曰く、犀は、永昌の山谷、及び

集解

ない。詳細は下文を見よ。楚書には犀を犀きと書く。犀は、南方音では多く、犀といひ、北方音では多く、犀といひ、

く犀といひ、北方音では多く、犀といひ、南方音では多く、犀といひ、



【犀】

（一）犀、永昌、益州、寧州、武陵、交州、寧州、益州、見

ト云ハ後重ノ類併食ニ

骨

主治 毒を解す【時珍】

【胸前】小横骨を灰に焼いて酒で服すれば、人

をして能く浮ばしめる【開寶】

附方

新二。

【象骨散】脾、胃の虚弱で水穀が消化せず、噎氣し、吞酸し、

吐食するもの、霍亂で膿血を泄瀉し、臍腹疼痛し、裏急し、類併して食思なきの諸證を治す。象骨四兩を炒り、肉豆蔻を炮き、枳殼を炮き、訶子に肉を炮き、甘草と各二兩、乾薑生兩を炮き、末にして三錢つづつを水一盞半で八分に煎し、滓を和して熱服する。食前一、二日一回。【宣明方】

犀

（本經中品）

科名 犀角

Cicerorhinus sumatrensis lasiotis, Sch.

科名 犀角

Rhinoceros unicornis, L.

科名 犀角

科名 犀角

釋名

【釋名】犀。時珍曰、犀の字の篆文は形を象したもので、その字を兕と名け、また沙犀ともいふ。爾雅翼に『兕と犀とは字の音が相近い。』穀を牯といふやうなるのだ』とある。概して犀と兕は一物であつて、古人は多く兕といひ、後代には多

ア
チ
指
ス。
ハ
波
斯
ハ
外
國
商

ものは器皿に作られた。或は、兕と犀は雌で、やほり水牛に似て青色、皮は豆を撒いたやうなもので、斑色の深いものは帯に、角は、斑の散色で淺い、一、株の重量七八斤ある。これは牯犀の額の角だといふと、その花文は多くて、識別し難いものだといふ意味である。犀中の最も大なるものは羅犀^{ラクシ}といふのは、極めて多いものだ。故に、洗^シ斯^ス象牙と呼び、犀角を黒^{クロ}と呼ぶ。それらと、いふものは一半已上が通じ、腰鼓^{ウヅ}ありといふものは、一半已下が通じ、正挿^{セイサツ}の事實か否かは判^ハない。角の文に倒挿^{タウサツ}ありといふものは、一半已下が通じ、正挿^{セイサツ}の形があるものだ。或は、犀の通天といふ病の爲に出来た紋だといふが、み、常に濁水を飲んで自己の影を照し見ないやうにする。その絶品にはあらゆる物、だか、高價なものには通天の花文がある。この角を有^モ犀は必ず自らその影をける。この數種の角は、いづれも栗文のあるもので、絞の粗細を観て價の貴賤をつける。説が、多く傳へられてゐる。

といふ。牯犀^{コシ}も二角ある。いづれも毛犀といふとある。『しかし今は一般に一角の犀には、犀は二角あつて、額上に一角あるを兕犀といひ、鼻上に一角あるを胡帽犀^{コバツシ}といひ、

た奴角と名け、小さいが墮ちない。また一角のものもある『とある。劉恂の嶺表録
 一は頂上に在り、一は額上に在り、一は鼻上にある。鼻上のもは食角といひ、ま
 り『とあり、郭璞註に『兕は一角、色青くして重さ千斤ある。犀は水牛に似て三角、
 のも二角のもの、三角のものもある。爾雅に『兕は牛に似たり。犀は豕に似た
 上に刺があつて、好んで棘を食ふ。一毛孔に三毛が生えて豕がやうだ。一角の舌
 牛に似て首は緒のやう、腹大脚、脚は象に似て三蹄があり、色は黒い。犀は水
 頭曰く、犀角は、今は南海のもを上とし、黒、蜀のもがこれに次ぐ。犀は水
 く『といつたのはこの物のことだ。

ふのである。抱朴子が『この犀で魚を彫刻し、それを銜くれば水が三尺開
 く氣を出して天に通ずるので、能く神に通じ、水を破り、難を駭く。故に通とい
 とは腦上の角のこと、経を長く且つ鋭く、白星が端に徹するものだ。能
 藏。器。曰く、犀に水、陸二種はない。ただその精と粗とを以て言ふだけだ。通天
 器服として上は上だが、薬に入ては雄犀に及ばない。

恭曰く、犀とは雌犀のこと、文理が細く、斑白が分明だから俗に斑犀といふ。

牛(五)字、當作犀。

ノ字、大觀二下命。
四、物二命。

くなる『ともいつた。

牛の出で聴くところを採る。鼻角と頂角とあつて、鼻角を上とするものだ』とある。海水中に牛(五)がある。絲竹の音楽を聞くことが好きで、彼地の者は音楽を奏して夷(五)は弓矢を以てこれを探り、名けてて黠犀(五)といふ』とあり、又、異物志には『山東それが判る。按ずるに、五溪記に『山犀は竹木を食ふと、その小便が終日晝ききない。形はたれだ。故に通天といふのである。但し月下で水盆を以て映して見ると、李(五)曰く、通天犀とは胎中に在る時に天上の(五)物かが過ぎるのを見て、それが角上

ないものだ。しかしかき脱すると直ぐに取つては、埋藏所を他へ移して丁つて判らない。海外人は潜(五)に木角を作つてすり換へる。再三換へてもその脱(五)する場處を離れて、『といつてある。又『犀は毎歳一回角を(五)換へて必ず自ら山中に埋めるもので、入(五)凭りかかると忽ち折れて犀が木に凭(五)り、凭りかかつて息(五)ふもので、その朽ち爛れた木棧置く。海(五)外地方で犀を取るには、先づ山路に朽木を多く植ゑて、羊の棧のやうにしては堅厚で鑑(五)に作れるといふことだが、的否のほどは判らない。唐(五)吳士卓の言に

から熱に乗じて搗くべきものだ。手に應じて粉の如くになる。故に歸田録に『裴^裴翠^翠』
 李琦曰、凡そ犀角は、鋸で曳き削りてから薄紙で裏んで懷中に入れて、蒸燥して
 れ、細に杵いて一萬研つてから用ゐる。
 ならぬ。ただ烏黒にして肌が皺み、折裂して光潤なるものを取り。鉛屑^{鉛屑}して臼に入
 毀曰、凡そこれを使ふには、奴犀、野犀、病水犀、擊子犀、無潤犀^{無潤犀}を用ゐては
 のだ。西番の生犀を磨つて服用するが佳く、湯、散に入れる犀は骨にするのだ。
 宗曰、鹿では茸^茸を取り、犀は尖^尖を取る。その精銳^{精銳}に力^力が盡くそれにあるも
 し犀は捕へてから殺して取つたものを上とし、蛟角^{蛟角}はこれに次ぐのである。
 のとし、角尖はまた生犀に勝る。獨り水、火を経ないからいふだけではない。蓋
 の頃曰、凡そ犀は、藥に入れるに黒、白の二種あつて、黒きものを勝^勝れたも
 も蒸煮^{蒸煮}されてゐるから用ゐるに堪へない。
 の生のものもただけを佳しとする。犀片、及び治^治
 犀角 外國では低密と名ける。修治^{修治}
 も稀世の珍である。故に此に附記する。弘景曰、く、藥に入れるにはだ雄犀

犀（さい）といふは、帶（おび）すれば人の怒（いか）を去（はら）して去（はら）しめるといふのである。これはいづれに
 簪（かんざし）、梳（くし）、帶（おび）勝（かち）に作る塵（ちり）が身に近づかないといふのである。杜（と）陽（やう）編（へん）にある辟（へく）塵（ちん）とい
 たといふのも、夏の期（き）に能く暑（あつ）氣（き）を清（きよ）するものである。嶺（りやう）表（ひょう）録（ろく）異（い）に、唐（たう）の文（ぶん）宗（そう）皇（かう）帝（てい）が得（え）
 期（き）にも暖（ぬく）氣（き）の入（い）る襲（ふ）も、白（はく）孔（こう）六（りく）帖（てふ）にある辟（へく）暑（しよ）犀（さい）といふは、唐（たう）の文（ぶん）宗（そう）皇（かう）帝（てい）が得（え）
 開（かい）元（げん）遺（い）事（じ）にある辟（へく）寒（かん）犀（さい）といふは、その色（いろ）が金（きん）のやうなもので、交（かう）趾（し）から貢（きん）納（なつ）し、冬（ふゆ）
 飛（ひ）禽（きん）、走（そう）獸（じゆ）がこれを見（み）てみな驚（おどろ）くのだ。又（また）、山（さん）海（かい）經（けい）にある白（はく）犀（さい）といふは、白（はく）色（いろ）のもの、
 通（つう）天（てん）にして夜（よ）に視（し）ると光（ひかり）のあるものは夜（よ）明（めい）犀（さい）と名（な）ける。故（ゆゑ）に能（よ）く神（しん）に通（とお）じし水（みづ）を開（ひら）き、
 のはこれに次（つぎ）ぐ。鳥（とり）犀（さい）といふは純（じゆん）黑（こく）にして花（はな）のないうもので、下（げ）級（きやく）品（ひん）である。その
 花（はな）あるを重（おも）透（とほ）といふ。いづれも通（とお）犀（さい）と名（な）ける上（うへ）級（きやく）品（ひん）である。花（はな）が、豆（まめ）のやうな斑（まだら）
 黑（こく）中（ちゆう）に黄（わう）花（はな）あるものを正（ただ）透（とほ）といひ、黄（わう）中（ちゆう）に黑（こく）花（はな）あるものを倒（たふ）透（とほ）といひ、花（はな）中に復（また）
 犀（さい）角（かく）は、紋（もん）の魚（ぎよ）子（こ）の形（かたち）のやうなものなものを栗（り）紋（もん）といひ、紋（もん）中に眼（め）あるを栗（り）眼（がん）といひ、
 れも正（ただ）置（お）く。毛（け）犀（さい）とは旄（ぼう）牛（ぎゆう）のこゝで、本（ほん）條（じよう）に記（き）載（さい）してある。
 ひ、蘇（そ）頤（い）が、毛（け）犀（さい）を牯（こ）犀（さい）だといつたのは、いづれも郭（かく）璞（ぼく）傳（でん）に出（い）でたものだ。此（こゝ）にいてい
 ふが、それである。犀（さい）に水（みづ）、陸（りく）はなないといひ、犀（さい）は郭（かく）璞（ぼく）が、犀（さい）には三角（さんかく）あるといふ。

中つたととき、犀角で瘡中を刺せば立ちに癒える。犀はあらゆる毒と棘刺とを食ふ。これでは毒を煮ると一向に毒熱がなくなり、『北戸録には凡そ毒箭にでそれを握き出す。毒があらばそれだけで白沫が生じ、毒がなければ生じない。角ゆゑに能く毒を解するのだ。凡そ毒の行はれる地方では、飲食する場合にその角するのである。抱朴子に『犀はあらゆる草、毒、及び衆木^{しゆ}の棘刺を食ふ。それ邪、熱毒は必ずこれを干すのだから、犀角能く諸毒を解するのだ。五臟、六腑はこれに受けるものだから、犀角は能く一切の諸毒を解するのだ。飲食物、藥物は必ず先づこれであつて、足の陽明の藥である。胃は水穀の海の海であつて、飲食物、藥物は必ず先づこれであつて、足の陽明の藥である。

發明

或は癰を結ばぬものを治し、肝を瀉し、心を涼し、胃を清し、毒を解す【時珍】

下血、及び傷寒の奇血、發狂^{譫言}、發黃、發斑、瘡の稠密なるもの、内熱、黒陷し

れば、小兒の驚熱を治す。山犀、水犀の功用は同じ【孟詵】磨汁は吐血、衄血、

藥毒、熱毒、筋骨中風、心風、煩悶、中風、失音を治して、みな瘥える。水に磨つて服す

驚癰に主效がある【海藥】灰に焼いて水で服すれば、卒中、惡心、痛、飲食中の毒、

は金を屑にし、人の氣は尾を粉にする。』とある。

氣味

大寒にして毒なし。甄權曰く、牯犀角は甘く辛く、小毒あり。張元素曰く、く、苦酸、微寒なり。李珣曰く、別錄に、毒なし。寒にして酸く鹹く。苦。

し、寒なり。陽中であつて陽明の經に入る。

○之。オ。曰く、松の脂が、使となる。雷丸、毒菌きんぐんを惡む。及び妊婦は服してはならぬ。能く胎氣を消

するものだ。

主治

迷惑、驚悸、久しく服すれば身を軽くする。傷寒瘟疫、頭痛寒熱、諸毒氣。人をして駿健ならしめる。【別錄】中惡毒氣を辟け、心神を鎮め、大熱を解し、風毒を散じ、疰瘡腫を治し、膿を化して水にし、時疾熱で火の如く、煩毒が心に入つて狂言し、妄語するを療す。【藥性】心煩を治し、驚を止め、肝を鎮め、目を明にし、五臟を安じ、虚勞を補し、熱を退け、痰を消し、山瘴、溪毒を解す。【華佗】風毒が心を攻めてて熱悶するもの、赤痢、小兒の痲豆、風熱、

蛇毒を殺し、邪を除く。

【本經】傷寒瘟疫、頭痛寒熱、

【別錄】中惡毒氣を辟け、心神を鎮め、大熱を解

し、風毒を散じ、疰瘡腫を治し、膿を化して水にし、時疾熱で火の如く、煩毒が心に入つて狂言し、妄語するを療す。

【藥性】心煩を治し、驚を止め、肝を鎮め、目を明にし、五臟を安じ、虚勞を補し、熱を退け、痰を消し、山瘴、溪毒を解す。

し、一丸つづつを水一升で五合に煎し、滓を去つて温服する。(聖惠方)

【鮮血を下痢するもの】犀角、生地黃各一兩を末にし、煉蜜で彈子大の丸に

角汁を飲んで瘡を取る。(千金方) 【山嵐瘴氣】犀角を水に磨つて服するが良し。(集前

方) 毒氣が臟に入れば人を殺す。これは燒鐵で烙し、或は灸を百壯し、日に毎に犀

角十指に著いて代指のやうな状態となり、根深くして肌に至り、能く筋骨を壞る

中央に白膿があり、惡寒、壯熱するは、犀角の磨汁を塗る。(千金方) 【瘰癧毒瘡】

寸匕を新汲水で調へて服すれば瘡は差える。(聖惠方) 【蠅屎瘡】尿蠅(あひる)のやうな形狀で中

【中毒煩困】方は上に同じ。雄を食つた中毒【吐下】止まぬには、生犀角末方

汁を頻りに飲む。(同上) 【服藥過】犀角を燒いて末にし、方寸匕を水で服す。(外臺

方) 酔り、その濃汁を冷飲する。(錢小兒方) 【消毒、生犀角尖を磨つた濃水

でよくし。】痘瘡稠密【大人、小兒に拘らず、生犀角を灑中に入れて新汲水

に舌を嚙み、仰目するに、犀角を水に濃く磨つて服すれば立ちに效がある。】末にし

ば活き。そこで犀角を桃にすれば魔が襲はなくな。【小兒の驚癇】意識を失ひ、
 火で照せばその人は死ぬ。ただその顔に唾し、痛くその腫、及び大趾の甲際を嚙め
 二錢つゝの水を以て調へて服すれば即効がある。(華佗方)【臥して忽ち驚めぬもの】若し
 を焼き、その醒める候つて移動し、犀角五錢、麝香、硃砂各二錢五分を末にし、
 らぬ。その周圍に人が集つて火を燒き、鼓を打ち、或は蘇合香、安息香、麝香の類
 状態でただ腹が鳴らず、心腹が暖なだけのものである。これは直ぐに移動してはな
 を握り、口、鼻から清血を出し、須臾にして手當の方法がなくなり、尸厥(しけつ)のやうな
 つて、その證は、或は晝夜に廁へ行き、或は郊外に出て突然に地に倒れ、厥冷し、拳
 生犀角、生桔梗一兩を末にし、二錢つゝの酒を以て服す。(總錄)【中忤、中惡鬼氣であ
 附方】吐血の止まぬもの驚、驚、鴨の肝のやうなもの吐くには、
 驚はしめぬといふことは、これで「層考」へられる。
 角を狐の穴へ置くと狐が歸らなくな。『とある。』して見ると犀の精靈の邪を辟けて
 多いところ、で、角を燃えて照すと水族の形を現したとあり、【雅南子に「犀
 からに由るのである。昔、溫嶠が武昌の牛渚の磯下に立寄つたとき、そこは怪物が

方部。指入。藏、青海、四川、雲南、地。通。外。徵。二。境。

フモノ。ニ白熊ハ毛毬、旗ハ旗ノ先ニ云ク(トチ即チ先ニ

神といふ『とあるのは物のた。

形狀、及び毛、尾は俱ことに牝生に同じだが、牝は小くして、騾は大く、重量千斤の重さである。時珍曰く、騾生は西南せいなん徼外きょうがいに産出する。深山にゐる野牛であつて、

集解

[illegible]

名錄

毛庫(廣志)

蜀牛(漢書註)

摩牛

是

は麻々々

（二）

○
○
○

本

晝は作

中

て來毛(あ)る。(う)モ(イ)カ(の)價(三)景(一)

名名名
性靈性

8 ~ Bos 3 7

grunion

ns, L.

解集 時珍曰牦牛は甘肅の臨洮及び西南徼外に産する野牛で、その

類砂牦牛註チ石部圖石
(二) 今、驢、四川、茂作

はまた毛の遺種かやれぬ。知れぬ。

が偏するためにかやうなものはなる。故にこれを牦といふとある。して見ると氣には毛』牦牛と封じたり。牦牛は交尾すれば牦牛が生れる。やゝ毛に類するものだが、氣記此に取つたものだらう。牦牛は顔師古の『牦牛』といふと観ると、牦牛なる名は蓋しといひ、重さ千斤あり、毛は旄になる。『とある。これ觀ると、牦牛なる名は蓋し、牦は旄と同じ。或は毛と書く。後漢書に『再麗』とある。牦牛を産する。一名牦牛。時珍曰

釋名

牦牛

牦牛

音は鬚(しゅう)である。(爾雅) 牦牛は偏(へん)である。時珍曰

科名和名 牦牛 未詳 未詳

綱(目)

音は毛(もう)である。

牦牛

牦牛

説してある。

ものはこの物だ。やゝ使用し得るが、功力は犀に及ばない。昨夢錄、格古論に詳たまた犀の偽物になるものだが、ただ粟粒の紋がない。蘇頌の圖經に誤つて牦犀角とした

肉 氣 味 【甘し、平にして小毒あり】

野馬の類のもだ。

青し、名け騮と云ふとある。これはいづれも
あり、山海經には北海に騮あり。狀馬の如く、色
似た一角がある。角なとも騮といふのだ『と
のたといふ。爾雅には騮は馬の如くして鹿茸に
馬の肉のやうだが、だ地に落ちて沙が^あ沿^ひかぬも
る。その皮を取つて裘^きに作る。その肉は、食ふと家
といつた。今は西夏、甘肅、及び遼東の山中にも
集解 時珍曰く、按ずるに、郭璞は野馬は馬に似て小ざい。
寒外に産する



〔馬〕 野

野馬 (綱) 目 科 學 名 Equus przewalskii, Tol. ?
料 名 野馬

る。一服に過ぎずして癒える。神妙無比だといふことだ。

の毒域方に、瘰癧を治するにその方^{ほう}は、或は煮、或は焼き、仰臥して頓し、同時に巧即ち磨くす取る意味である。その方は、犛牛の喉腕骨^{ろうたんこつ}二寸ばかりの一節で、兩邊に連つて扇動する意み爛れしとき、一時間ほど嘔む。病人の容貌が必ず瘦減して瘰癧が自ら内消するのみ。

喉嚨腫痛

吳王

吳王

の美なるものは、象の肉』とある。

節に毛を生す』とあるは、この物である。その肉は美味なものだ。故に呂氏春秋に『肉
で染めて紅色にする。山海經に『ハク潘侯の山、旌牛あり。旌牛の如くして四足。

(上) 番侯之山、未詳。

代にこれを取つて旌旄としたが、今は一般に纓、帽にする。毛は難白色だが、茜色だ。い。自らな一尺ばかりの黒毛があり、その尾が最も長くにして斗の如くである。ややはりから荷を載せ、歩行が飛ぶやうに速く、性の粗梗なものだ。髀、膝、尾、背、力が多。くして能く重地では一般にこれを畜養する。形状は水牛のやうで體が長く、力が多くして能く重

皮。(三)胡、顙、下、垂。

は色赤く、馬肉のやうで食つては家豬に勝る。牝の肉は更に美味だ。後のものもを射る。その前方のものもを射る中^あと散走して人を傷けるからだ。その肉は小ざくして脚が長く、毛は褐色だ。羣をなして行くもので、獵人はたその最大

野猪
猪
(唐本草)
科豪和
名名各
Sus leucomystax, Temminck.
科)のふし(科)

收録してなほ。此に採録補記する。

發 明 時○曰、々、野馬は、孫思邈の千金方の記載に功があるが、本草には

陰室 氣味 【酸く鹹し、温にしてし毒なし】 主治 【男】の陰の痿縮として

入の 膳せんを 及及び羹きやうに 粥しやくにして 頻しんりに 食くふ。白はく蒸じやうして も して 五味、肌肉、不仁の 蒸じやうを 自じを

[illegible]

名錄

科名 やまあらし科

Hystrix leucure, Sykes. (南大猩猩ノ子)

Hystrix crustata, L.

おぢやう

臺猪烟(目)

主治 灰に燒いて鼠癰、惡瘡に塗る【時珍】外臺方中に用ゐてある。

腸風瀉血、血痢を治す【(葦日)

吳王
外景

及下
 中
 下

に^て入^りれ^ば煨^ひき、末^にし^て二^三錢^{づつ}を^を粥^{じやく}飲^みで^は空^{くう}心^{しん}に^に服^{ふく}す。(聖惠方)

附方

附子一箇名共十二瓶

主治

【邪瘧】聖童方中に用ゐる。

學

【灰に焼いて水で服すれば、蛇咬毒を治す】（藏器）

研つて一日二回服す【時珍】記載は衛生方にある。

作ル。
大觀ニ
肝ヲ
疳ニ

膽 主 治 【惡熱毒氣】【孟詵】 鬼疰、癰瘤、小兒の諸疳には、水に煮候（唐本）を

天用を治す【日華】

【水に研つて服すれば、血痢、疰病を治す】【藏器】 惡毒風、小兒の客忤、

癰瘤を療ずるには、水に凍核（唐本）を研つて服す。一日二日服すれば效がある【日華】

黃 氣 味 【甘し、平にして毒なし】 主 治 【金瘡に血を止め、肉を生ず。

のもでも出るやうになる】【孟詵】 顔色を悦ばしめ、風腫毒を除き、疥癬（唐本）を治す

人をして乳多からしめ、十日後には三四人の兒に飲ませ得るやうになる。乳をな

脂 臘月に鍊つて取る。 主 治 【鍊淨して酒に和し、一日三回服すれば、婦

にしてみよし。食慾（孟詵）饑

附 方 一。 舊 久痢下血【野豬肉二斤に五味を著けて炙き、空腹に食ふ。養

して虚氣せしめ】【孟詵】 炙いて食へば腸風瀉血を治す。十頓に過ぎず【日華】

主 治 【癰瘤。肌膚を補し、五臓を益し、人をして虚肥せしめ、風を發せず

微し風を動するもの。時珍曰く、大豆（日華）の藥を服するものはこれを忌む。

病を發せず、藥力を減じ、家猪と同じくない。但し青蹄のものは食つてはならぬ。

科名	熊科
學名	<i>Selenarctos ussuricus</i> , Heude.
和名	ウシグミ
學名	<i>Ursus tibetanus</i> , Cuv.
和名	シカクサ

熊(本經上品)

だけだ。

時珍曰、豪猪は本草には記載がなく、ただ孟氏食療本草の鰯の條に説いてある。
だが、冷腹をば治せな。

猪は多く参を食ふものだ。故に能く熱風水腫を治する。
説曰く、この猪は多く参を食ふものだ。故に能く熱風水腫を治する。

發明

氣、奔豚を治す【時珍】

いて服すれば黄疸を治す【蘇恭】尿あるまゝ焼き研つて酒で服すれば、水腫、脚
共に焼いて性を存し、二錢匕を温酒で服す。一具を用ひれば【孟詵】乾して焼
吐及尿氣味【主】寒にして毒なし【主】水病、熱風鼓脹には、

發し、人をして虚羸せしめる。【主】膏を多くし、大腸を利す【蘇頌】

肉氣味甘【主】大寒にして毒あり【頌曰く、多く食つてはなぬ。風を

であらうか。

となる『豨は魚である。』

海のある泡魚といふは、大いといふに能く變化して豪緒

から牝牲となつて孕むといひ、張師遊録には『南

射。美人はその皮で鞆を作る。郭璞は『猪短は

白くして端が黒く、怒れば激刺して矢の如く人が

あり、脊に長さ一尺及び帽刺に似たもの、本が

項、脊に長さ一尺及び帽刺に似たもの、本が

まは羣をなして作物を害する。形状は猪のやうだが、

多時。曰く、豪猪は處の深山にあるもので、

時。

うな豪があつて能く人を射る。

集解

頤曰く、豪猪は、陝洛、江東の諸山中にいつれもある。毛間に箭のや

といた。星禽に『壁水獋は豪猪なり』とある。

能く毫を激して人を射るから『楚、吳、郭璞は』とある。楚ではこれを豨猪と呼ぶ。



[猪豪]

聚寒熱あるものがこれを食へば永く除けなくなる。十月それを食へば神を傷めるか積るものは熊肉を食つてはならぬ。その疾は終身除けなくなる。曰鼎。腹中に積疾あるもの、痢疾。弘景曰微温なり。【別錄】甘し、平にして毒なし。【別錄】曰く、微温なり。弘景曰く、痢疾。

肉

【氣味】甘し、平にして毒なし。【別錄】曰く、微温なり。弘景曰く、痢疾。

【氣味】甘し、平にして毒なし。【別錄】曰く、微温なり。弘景曰く、痢疾。

字アリ。大觀ニ金下翼

入つて地に伏し、一時間ほどして出れば盡く黒くなる。脂一升を用ゐるに過ぎずし調へて塗る。【髮毛の黄なるもの】熊脂を髮に塗つて梳き散らし、寝臺の底で【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で

附方

【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で

【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で

【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で

【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で

【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で

【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で【髮を長く黒くする】熊脂、膏刺末等分を和勻し、寝臺の底で

【氣味】甘し、平にして毒なし。【別錄】曰く、微温なり。弘景曰く、痢疾。

氣味

【氣味】甘し、平にして毒なし。【別錄】曰く、微温なり。弘景曰く、痢疾。

學名 *Ursus mandchuricus* (Hende)
和名 熊 (西)
名 入 (ハク)

修治

戰。曰く、凡そこれを取つたならば、一斤毎に生椒十四箇を入れて共に

のだ。

の肪、及び身中の脂を煎鍊したのもよし。薬用にはなるが、喉ふわけには行かぬ。白くして玉のやう、味が甚だ美である。寒期にはあるが、夏期には無い。その腹中色

脂 名 釋

白 熊 弘景曰く、脂、即ち熊白なるものは背上の肪であつて、

が減ずる。功用はやはり同じ。

或は、熊は即ち熊の雄だともいふ。その白脂は熊の白脂のやうだが、理が粗くして味は形が豕のやうだ。馬熊といふは形が馬のやうだ。即ち熊であるといつてある。俗に人熊と呼ぶ。關西では假^カ熊と呼ぶ。羅願のやうに立つて攫^カかかると、猪熊といふ。扱き、虎もこれを畏れる。人間に遇ふと人のやうに立つて攫^カかかると、能く樹木を黄能といつたそのものだ。熊は頭が長く、脚が高く、猛^{マウ}多力にして能く樹木を小さくして色の黄赤なるものが雌である。建平地方では雌を赤熊と呼ぶ。陸機が熊三種であつて、豕のやうで色の黒いものが熊、大きくして色の黄白なるものが熊、

附 錄

熊 雌

時。曰く、熊、雌は一類の中

附方 舊四、新六。【赤目障翳】熊膽丸——膽少量を化開し、氷片一二斤と銅

舊四、新六。

驚瀾、挫、墜、蟲牙、蛇痛の劑である。

足陽明經の藥である。散に能く肝心く涼し、肝を平し、脾を健し、胃を和す。

發明 日珍、龍鷹は喜しくて心に入ら、寒は蘇ち勝ち、少の手の少陰、厥陰、

○曰○狂○

(五) 【子】
 子、りて目、に
 子、りて目、に

心中心の胎を去つて其だ良【し】(五)【執】退け、心を清くして肝を平

鼻の瘡、惡瘡を治し、鱗を殺す【(日華)小兒の驚癇、瘰癧に、竹瀝で豆一粒と

氣の熱が盛で黃疸に變じたもの、暑期の久痢、心精、疳癰(かんよう)、疥癩(せいか)、耳聾(じそう)】

異人

○ ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㅁ ㅂ ㅅ ㅇ ㅈ ㅊ ㅋ ㆁ ㆆ ㆏ ㆐ ㆑ ㆒ ㆓ ㆔ ㆕ ㆖ ㆗ ㆘ ㆙ ㆚ ㆛ ㆜ ㆝ ㆞ ㆟ ㆠ ㆡ ㆢ ㆣ ㆤ ㆥ ㆦ ㆧ ㆨ ㆩ ㆪ ㆫ ㆬ ㆭ ㆮ ㆯ ㆰ ㆱ ㆲ ㆳ ㆴ ㆵ ㆶ ㆷ ㆸ ㆹ ㆺ ㆻ ㆼ ㆽ ㆾ ㆿ ㆿ

一器の浄水に表面に塵を散し、それにより米粒のうしろの塵を落す。と疑つた塵が、懸浮状態で浮いてゐる。

つた。周（密）の車（馬）を「熊」は「善く塵（ちり）をけけるもの」で、眞（偽）を「試験する」は、

に點するやうに動き廻るものが良し。他の膽は動いていゝ緩慢なものだ』といふ

ら食つてはならぬ。

主 治

【風】痺の筋骨不仁。功は脂と同じ【】孫思邈(Sung)【】鹿藿を補す【】孟詵(Meng)

發 明

時珍曰、按ずるに、劉河間は『熊肉は羸を振ひ、兎目は眇を明にす。その氣の有餘で不足を補ふのだ』といつた。

附 方

【中風痺疾】中風で心、肺に風熱があり、手足が風痺不隨となり、筋脈五緩し、恍惚し、煩燥するに、熊肉一斤を切つて、豉汁に入れ、葱、薑、椒、鹽を和して、臠(くわい)にし、空心に食ふ。【脚氣風痺】五緩、筋急には、熊肉半斤を上記の方法で食ふ。(いづれも食醫心鏡)

掌 修 治

聖惠方に『熊掌は脚難痺(つづ)しいものだが、酒、酢、水の三件を配合して共に煮れば熟して大いど皮(ひ)毬(き)ほどになる』とある。

主 治

【これ】れを食へば風寒を禦ぎ、氣力を益すのだ【】華佗曰く、熊膽は陰乾して用ゐる。しかし、偽物が多いものだが、ただ粟一粒を水中に滴(ち)して見て、一、すぢの絲のやうになつて散ぜぬものならば真物である。時珍曰く、按ずるに、錢乙は『熊膽の佳きものは通明なもので、米粒ほど水を中

集解

別錄に曰く、麋羊角は石城、及び華陰の山谷に出る。採取に一定ぬる。故に九尾羊と名ける。』とある。

『』とある。費信の尾標懸覽には、『阿に書いて、胸中から尾まで九塊を垂れ

海經に、阿に書いて、狀は羊の如くにして馬尾な

は山羊である。大々くして角が細い』とある。

と書くやうになつた』とある。許慎の説文には『麋

は鹿に從ひ靈に從ふの省文であるが、後世では

て羊を遠ける。如何にも靈なるものだ。故に文け

防禦する。麋なるものは獨棲し、角を木上に懸け

時。移。曰く、按ずるに、

釋名

麋羊(俗) 鈴羊

九尾羊

時。移。曰く、按ずるに、



〔羊 麋〕

麋 羊 (本經中品) 科名 和名 學名 科名 學名 種
Nemoriosus caudata A. M. Redw.
し 科

註見ハ石部石陰ノ生ヲ。華陰ノ石陰ノ山ハ英ノ部ニ出ス。大觀ノ城ヲ見。草部ニ。比。阿。丁。阿。國。阿。刺。

湯に^レして^レて^レ風、及^レび小兒の客忤を溶す^{【孟詵】}

骨 主 治

小兒の客忤^{【蘇恭】}

血 主 治

を生ずる^{【日華】}

髪、風府を去り、^{【蘇恭】}頭旋を療ず。頂を摩^摩でれば白禿、

腦 主 治

蒸餅で麻子大の丸にし、^{【諸葛亮】}一十九つ^{【蘇恭】}の米を飲^飲で服す。

ば癰癤を^{【蘇恭】}諸疳の^{【蘇恭】}膿、^{【蘇恭】}君于末等分を研^研勻^勻ぜて^{【蘇恭】}蒸し溶し、

る^{【蘇恭】}水弩^{水弩}に射^射れたと^{【蘇恭】}き、^{【蘇恭】}熊膽を^{【蘇恭】}塗^塗り、^{【蘇恭】}更^更に雄^雄黄^{雄黄}と^{【蘇恭】}酒^酒と^{【蘇恭】}共^共に磨^磨つて^{【蘇恭】}服す

にある。^{【蘇恭】}風蟲^{風蟲}牙痛^{牙痛}【蘇恭】熊膽三錢、^{【蘇恭】}片腦四分^{片腦}を用^用ゐ、^{【蘇恭】}猪膽汁^{猪膽汁}で少量^{少量}を調^調へて

豆一^{【蘇恭】}粒ほどを水に和して服す。大いに效がある^{【蘇恭】}。小兒の驚癇^{驚癇}方は主治の項

半兩に片腦少量を入^入れて研^研り、^{【蘇恭】}猪膽汁^{猪膽汁}を和して^{【蘇恭】}塗^塗る。【蘇恭】^{【蘇恭】}熊膽を^{【蘇恭】}大

年の痔瘡^{痔瘡}【蘇恭】熊膽を塗^塗るが神效がある。一切の方も及^及ばない^{【蘇恭】}。【蘇恭】^{【蘇恭】}熊膽

を加へて服す^{【蘇恭】}。小兒の鼻蝕^{鼻蝕}【蘇恭】熊膽半分を湯に化^化して抹^抹する^{【蘇恭】}。【蘇恭】^{【蘇恭】}熊膽

て蒸した水で洗ふ。一七^{【蘇恭】}八回試み、三日にして開^開かぬときは、四物に^{【蘇恭】}甘草^{甘草}、天花粉

ゐる^{【蘇恭】}。【蘇恭】^{【蘇恭】}初生兒の閉目^{閉目}【蘇恭】胎中で熱^熱を受けたるに由^由るものだ。熊膽少量を取

があつて、夜宿して他の危害を防ぐには、角を樹に掛けてその身軀を地に著けな
 蔵。曰く、山羊、山驢、羚羊の三種は相似たものが、羚羊には不思議な異性
 陶氏所謂一邊に粗文^{そぶん}もあるものはこれを用いたのだ。これは山羊ではない。
 作れる。兩角あつて大小は山羊角ほどのものだ。俗間では一般にこれを用ゐる。
 どあり、角は鞍橋になる。又、山驢といふものもあつて、大いさ鹿どあり、皮は靴に
 五寸で文があり、細に麋^{わしか}つてゐる。山羊、或は野羊と名けるは、大なるものは牛
 にも産し、やはり貢納物としてある。その角は人の指ほどの細いもので、長さは四
 恭曰く、羚羊は^五南^六南山、商洛地方に大いにゐる。今は^七梁州、^八眞州、^九洋州
 れを羚羊と呼んでゐる。能く峻峻な坂や崖を陟^{のぼ}るものだ。
 はり疎大だ。薬用には入れない。これは爾雅^{じふ}に山羊とあるもので、^十羌夷^{きやうい}では
 だ。別に山羊角といふがある。それは極めて長く、一邊だけに節があつて、^{十一}節^{ふし}もや
 が、一角のものを勝れたものとする。角は多くして^{十二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{十三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{十四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{十五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{十六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{十七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{十八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{十九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二十}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二十一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二十二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二十三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二十四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二十五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二十六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二十七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二十八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二十九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三十}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三十一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三十二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三十三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三十四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三十五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三十六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三十七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三十八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三十九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四十}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四十一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四十二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四十三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四十四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四十五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四十六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四十七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四十八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四十九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五十}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五十一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五十二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五十三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五十四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五十五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五十六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五十七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五十八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五十九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{六十}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{六十一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{六十二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{六十三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{六十四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{六十五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{六十六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{六十七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{六十八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{六十九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{七十}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{七十一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{七十二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{七十三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{七十四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{七十五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{七十六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{七十七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{七十八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{七十九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{八十}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{八十一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{八十二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{八十三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{八十四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{八十五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{八十六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{八十七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{八十八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{八十九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{九十}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{九十一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{九十二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{九十三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{九十四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{九十五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{九十六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{九十七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{九十八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{九十九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{一百}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{一百一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{一百二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{一百三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{一百四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{一百五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{一百六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{一百七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{一百八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{一百九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二百}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二百一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二百二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二百三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二百四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二百五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二百六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二百七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二百八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{二百九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三百}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三百一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三百二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三百三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三百四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三百五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三百六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三百七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三百八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{三百九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四百}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四百一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四百二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四百三}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四百四}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四百五}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四百六}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四百七}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四百八}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{四百九}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五百}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五百一}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五百二}蹏^{たい}蹏^{たい}として、^{五百三</}

ぬものだが、ただ羚羊角で扣けば自然に氷のやうに溶けるものだ。又、獏の骨で佛に産するもの、状態は紫石英のやうで、百鍊してても化けず。何で撃つて砕け石を砕く』とある。そして見ると羚羊角にも元一があるのだ。金剛石は西域接するに、袁宇志『安南』高山の羚羊を産する。一角極めて堅く、金剛だけのもだ。陶氏は羚羊に角があるといひ、陳氏はそれを非としたが、角が長く太い。山驢は身が羚羊で角の角が生え、その角はややくしく節が疎慢な角時珍曰く、羚羊は羊に似て青色く、毛粗く、兩角が短だ。羚羊は吳羊に似て

から注意が肝腎だ。

ふ一説だけで十分なもの、それ以上確實とはいへない。しかし偽作のものがある。宗夷曰く、諸角は耳に附けて見るとみな集集と聲が聽える。掛けた痕があるとい死したものの角ならば聲がないのだ。

の諸角も、殺して取つたものならばみな聲が聽える。羚羊に限つたことはない。自ゐる。陳氏は『耳の邊に近づけて聴くと鳴るもの、良し』といつたが、現に牛、羊、又、圃、廣の山中に野羊といふ一種を産し、彼の地ではやはりこれと羚羊といつて

附方

舊七、新四。【噎塞不通】勢平角付を末にし、方寸匕を飲で服し、并に

近世俳優の間で能くそくを發揮するものはいはば遺憾なきをえたり。

燒けは蛇、
蛇を走らせるのである。本經別錄にに世だ明にその功を記述してあるが、

あゝるものか。故にまた強壯を期す事、
 一、勸を請ふべし、
 二、禁を止むべし、
 三、煙、酒、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

傷んであるが、船がまよな能くそれだけ性かであつたので、この時の情勢に

臺之亭以武氣用
對之亭以武氣用
對之亭以武氣用

[illegible]

肝は肺の制にあつては發する疾は蘊鬱狂越假象

大入の中風抽搐、及び筋脈緊急、歴節掣痛であるが、勢角は能くこれを鎮へる。

る。肝は風を主り、合に在つては筋となり、その發する病は小兒驚癇、婦人の子癇、

開くのも、それになんか病気が發すれば、暗、障翳になると、角は能くそれと平に

肝の經に入る處が甚だ捷だ。同氣相求めるのである。肝は木を主とせり、癸をそへ目に

時珍曰、羊は火畜であるが、勢は木に屬する。故にその角は厥陰。

發明

[illegible]

し、溜まり能く銀を蓄する。

[illegible]

すれば人の腸を刮する虞を免れる。

を少し出して用ゐ、搗き篩つて極細にし、更に一畝面研つて薬に入れる。くかく

に用ゐてある。

【主 治】 炙き研つて用ゐれば五尸、通尸、邪氣を治す【時珍】 外臺の方中

に塗る。(外臺)

【附 方】 新。一。麝半、膽各一箇、醋二升を共に煮て三沸し、頻

色なるには、二升を共に煮て三沸し、四五回塗るが良【時珍】

【主 治】 顔面の肝癰で雀卵のやうな

【味】 氣 膈 苦し、寒にして毒なし

【主 治】 口 中 乾 いて妄語するが效驗の現であつて、數日間小便が大いに利して瘥える。

【主 治】 蒸熱して搗き爛し、和して梧子大の丸にし、四十九つを麥門冬湯ばくもんとうで食後に服す。

【主 治】 具を用ゐ、沸湯で微し燻くわんして末にし、黄芩于一升を三年の醋に一伏時浸して

【主 治】 引いて肺に入り、小便の上源を通ずる作用を取つたものだ。その方は、羚羊肺を

り、大醫山璉が韋司業の水腫を治した黄芩丸わうきんがんにこれをぬいたとある。蓋しその藥を

【主 治】 時。曰く、羚羊肺は、本草には收録されてないが、千金翼に記載があ

【發 明】 氣 味

【主 治】 肉に同じ

【主 治】 水腫鼓脹、小便不利【時珍】

食ふ。南方人はこれを食つて蛇蟲傷を免れる(註孟詵)

炒熟し、酒中に投じて一夜置いて飲めば、筋骨の急強、中風を治す。北方人は恒に

五味を和して【氣味】甘し、平にして毒なし【主治】惡瘡

羊角末一錢を水で服す(集簡方)

を殺す。羊角を水に磨り、それで數百遍摩るが妙である【氣味】山嵐瘴氣

雞子清で和して塗る。神效がある【瘡】瘡の如し【赤癰】瘰癧、甚しき人は

角の骨を焼いて末にし、方寸匕を飲する【通身】遍身【赤丹】赤丹、羊角を灰に焼

す【羊角一箇の尖を刮つて末にし、方寸匕に焼いて末にし、方寸匕を水で服す】【時後方】時後方

血氣逆煩【羊角を焼いて末にし、方寸匕を水で服す】【時後方】時後方

再服する。又ある方では、芍藥（芍藥）等分を加へて炒つて研末し、湯湯にして服す。

は、千金では、羊角を焼いて末にし、方寸匕を東流水で服す。なほ癰えぬと云は

を灰に焼き、三錢を豆淋酒（豆淋酒）で服す【産後】産後の煩悶、汗を出し、人事不省なるに

【腹痛】方は上に同じ。【墮胎】腹痛【出血】出血して止まぬは、羊角

角で噎上上を磨する【外臺】外臺。胸脇通滿【羊角を焼いて末にし、方寸匕を水で服す】

多^{多く}其^{その}他^たし^しか^か屬^{りゅう}種^{しゅ}
(Cervus Xanthopyg-
us M. Edwards)
ス、^ス北^{きた}支^し那^な住^{すま}居^ぐす^すて^てい^いふ^ふに^にあ^ある^る

麋鹿といふ。性喜んて麋を食ひ、能く毒なまな良草を擇り別けて、食ふときは相呼び、にして子を生む。鹿は性の淫なるもので、一の牡が常に數頭の牝と交る。これをなく、小くして斑がなく、毛は黄白を雜へてゐる。俗に鹿と呼ぶ。鹿は孕んで六月大いば小い馬ほどで、地色は黄で白斑がある。俗に馬鹿と呼ぶ。牝には角が頭は側^{たは}つて長く、脚は高く歩いて歩行が速い。牡には角があつて、夏至になる^あと解^{かい}る。頭は、或は此から出たものだらう。梵書にはこれを密利迦^{みかりや}といつてある。斑龍と相戯るれば必ず異角を生ずとあるところを見るとき、鹿に龍なる名があるといふ。『とある。斑龍とは儼方に出てゐる名稱で、按ずるに、乾寧記に——といふ。』その子麋——音は迷(メ)——といひ、絶^はた力^{ちから}あるを麋——音は堅(ケン)といひ、その子麋——音は麋(メ)——といひ、いとひ、牝を麋——音は加(カ)——といひ、牝を鹿——音は攸(イ)——といひ、鹿の字の篆文^{せんぶん}は、角、身、足の形を象したる。し。

校 正

本經上品の白麋、中品の鹿茸を本書には一條に併記

作ル。
(三) 大觀ニ角ナキ茸ニ

按ずるに、沈存中の筆談に『月介に「冬に麋角解す。夏至、鹿角解す」とあつて、陰

陽

た、鹿角で偽造したのもあるから大いに注意を要する。

瑤、紅玉の破る肌と朽木のやうなものか最も善いのである。世間には

はまた大老い過ぎてゐる。ただ長さ四五寸、形が分岐した馬鞍のやう、茸端が

か、これは太だ、太くして血氣が具はらず、その實は力の少いものだ。堅いも

品として茹ぢたりと名ける。それは得難いものといふわけで取分けて言ふのだが、し

蓋しその力は盡く血中に在るものだから出て了はぬものか最も得難良品だ。

宗。鹿曰、茸は、破れぬもの、及び血が出て了はぬものか最も得難良品だ。

に鹿を斃すので、鹿の血がまだ散ぜずにあるものだ。

の茸は甚だ痛むものだ。獵人がこれを取るには、素で繋ぎ住めて茸を取り、然る後

なると羸瘦するが、夏に入つた苔蒲を食つて肥える。角の解する時に其に

抱。子。曰く、南山に鹿多く、毎に一頭の雄が百數十の牝と遊び、春に

を取る入るものである。

發明

のと、酒で蒸し焙じて用ゐるといふものとあつて、各々その方に随つて適當な方法

時珍曰、麝香、濟生の諸方に、酥を用ゐて炙くところあるもの、酒で炙くといふ

候まつて微く炙く。酥を用ゐねば火焙で火を傷めるものだ。

宗奭曰、茸の毛に先づ酥を薄く塗り、烈焙中で灼いて毛が盡きあつて

日華曰、ただで炙き炒つて研る。

慢火で焙して乾し、搗いて用ゐる。

で脆かにし、鹿皮で裏んで室中に置く。一夜経てば藥魂がそれに歸入する。そこで

片にして五兩づつに、羊脂三兩で天靈末を拌せて塗り、又ある法では、鹿茸を鋸で

て搗いて用ゐれば、人をして渴せしめるところを免れる。晝夜浸して漉出し、切つて焙じ

る。易い、ただ破つて火で乾すが、大いに好し。

り。易い、ただ破つて火で乾すが、大いに好し。

恭曰、鹿茸は夏期に採收する。陰乾しては百に一も完全に行かず、且つ臭く

用するときは燥す。

鹿茸

修治

別錄曰、く、四月、五月の角を解するときに取つて陰乾し、使へば蠶がつかず、茜せき中ちゆうに置けば歳久しく經つても紅色くわうしきが黯くろくなくなる。『とある。

す。夜中夢に鬼と交接し、精が自ら溢出するもの、婦人の崩中漏血、赤白帶下、に近けて胎を安じ、氣を下し、鬼精物を殺す。久し服すれば老に耐へる。男性の陰を散利、洩精、溺血を療じ、瘀血を酒して癰の如くなくするもの、羸瘦、四肢酸疼、小腹痛、數【主】虚勞で酒して癰の如くなくするもの、羸瘦、四肢酸疼、小腹痛、數【治】漏下、惡血、寒熱、驚悸。氣を益し、齒を生じ、老い

いものだ。

蟲がゐて、肉眼では見えないが、人の鼻に入つて必ず蟲類となる。藥では治し得ない。辛し。〇〇麻勃が使となる。〇〇鹿茸は鼻で験ではならぬ。中に小さい白く【味】甘し、温にして毒なし【別錄】曰く、酸し、微温なり。頸。曰く、白苦。

ト。

得て角を解す。これは陰から退く象である。『といつてある。』その他の角の項を見る。麋なるものは麋にして陰に屬するものだ。情淫して淫に遊び、冬至に陽氣をだ。情淫して山に遊び、夏至に陰氣を得て角を解す。これは陽から退く象であ

時珍曰、按ずるに、熊氏の禮記疏に『鹿なるものは山獸にして陽に屬するものから、凡百の血と比較になるへきわけがないでいいか』といつてある。角に鍾るのだ。これを益する所以である。頭は諸陽の集中するところであつて、上に茸、角に鍾るのだ。これは骨としての至強なるものであつて、能く骨、血を精し、陽道を堅くし、精髓をも延びねばならぬわけである。凡そ骨の生えるところの速さに於てこの物ほど速いものはないのである。草木が生長し易いといつても、やはりこれに及ばない。け生え延びねばならぬわけである。故にこれを計算して見ると、一晝夜に數兩なるものには二十餘斤になるのだ。故にこれを堅まるまで一ヶ月ほどいかに、ただ麋、鹿の角だけ生えるところから堅まるまで一ヶ月ほどいかに、故に人間は胎に成人に至るまでに二十年を要して骨髄が始めに堅まるのである。物としては、肉はやや長じ易く、筋はこれに次ぎ、骨は最も長じ難いものである。利あるもので、他の藥を佐するところを條件として有功なのである。凡そ血を含むものがあるが、これは大なる誤だ。麋茸は陽を補するに利あり、鹿茸は陰を補するに本^{ほん}考だ。或は麋、鹿の血を刺し取つて茸の代用にし、茸もやはり血だといふも陽^{やう}がかやうに相反してゐる。今一般には、麋、鹿の茸を一種のものとしてゐるが、粗

【血氣衰弱に因る者は、鹿茸を酥で炙いて一兩を末にし、麝香五分を入れ、燈

で炙いて末にし、一回二錢をつつを溫酒で服す。（鄭氏家傳方）】虛痢で危困せるも

て紫色に炙いて末にし、一錢をつつを酒で服す。（續千金方）】小便頻數【鹿茸一兩を酥で

五十丸をつつを米飲で服す。（濟生方）】傷敗せるものは、鹿茸に酥を塗つ

歸を酒に浸して各一兩を焙じて末にし、烏梅肉を煮て搗いて梧子大の丸にし、

當上を酒に浸して下寒し、下寒し、峻烈な補劑を用ゐるに堪へぬものは、鹿茸を酒で蒸し、

五十丸をつつを溫酒で服す。（本草方）】精血耗【耳が聾し、口が渴き、腰痛し、白濁

對を酒で煮爛して泥に搗いたもの、梧子大の丸にして陰乾し、一日三回、三

側し能はぬには、鹿茸を炙り、兎絲子と各一兩、舶來の香半兩と末にし、羊腎二

て瓶を開き、一日に三盞を飲み、茸を焙じて丸にして服す。（養濟方）】陰虛腰痛【反

す。嫩鹿茸一兩を毛を去つて切片し、山藥末一兩を絹に裹み、酒壺中に七日間置い

十丸をつつを溫酒で服す。（養濟方）】鹿茸陽事虛痿、小便頻數、顔色に光なきを治

を九蒸九焙して各八錢、辰砂砂半錢を各末にし、酒糊大の丸にし、空心に五

を酒に浸し、酸棗仁、柏子仁、黃芪を各炙き、各一兩、當歸、黑附子、炮き、地黃

もよしし——鹿角膠を炒つて珠にし、鹿角霜、陽起石を紅く煨いて酒に淬し、肉蓯蓉ニは酒で炙く

附方

新入。舊

斑龍丸

諸虛を治す。

鹿茸を酥スで炙く

頭に生ずるの類に因つて相從ふだ。

無灰酒三盞を一一盞に煎じ、麝香少量を入れて溫服するも效があるであらうである。

二に見えざるを治するに、茸丹ニを用ゐるが甚だ有効だとしてあり、或は鹿茸半兩、

轉倒するやうに覺え、眼が暗黒ニになり、或は物が飛ぶやうに見え、或は一ものものが

鹿角霜を用ゐたものだ、『とあり、禮原戴の證治に、頭眩運で、甚しきは家屋が

と高らかに歌ひ、下の社會に、それが傳はつてゐた。その方は蓋し鹿茸、鹿角膠、

轉ニの靈丹は却て西慢説。ただ龍頂上の珠のみ有つて、能く玉堂閣下の穴ニを補ふ

一各茸珠丹といふを賣つてゐたが、毎に大肆するに「尾閼禁ぜざれば蒼海竭ニ、九

斑龍丸、

發明

暗、眩運、虛癩を治す【時珍】

髓を補し、血を養ひ、陽を益し、筋を強くし、骨を健にし、一切の虚損、耳聾、目

は、炙いて末にし、方寸匕を空心に酒で服用す。筋骨を壯にする【日華】精を生じし、

し、丹にして服するが至つて妙である。角を一寸位に截つて泥で裹み、器中に入れ
て浸し、微火で焙じて少し變色せしめ、曝乾し、搗き篩つて末にし、或は燒いて飛
鏝（せき）して、鏝（せき）屑（くず）して、凡そ鹿角、麋角（びき）を用ゐるには、いづれも截段し、鏝（せき）屑（くず）して、蜜

修治

異つたところがあるわけだ。

ものを擇ばねばならぬ。かかる角のある鹿は靈草を食ふもので、そこに衆の鹿と
して薬に入れるにいいよし佳し。鹿角（ろく）は黄色にして、緊つて重く、尖の好きに
角（かく）頭（かぶ）曰く、七月に角を採る。鹿の年久しきものはその角（かく）が更に好く、煮て膠に

五十丸つづつ酒で温す。濟生（せいせい）。

白（びやく）釵（し）各一兩を末にし、艾を煎した醋で打つた糯米糊で梧子大の丸にし、一日二回、
女（にょ）の白（びやく）帶（たい）【衝任の虚寒に因るものには、鹿茸を酒で蒸して焙じて二兩、金毛狗脊、
で梧子大の丸にし、五十丸つづつ酒を米飲いで服す。これを香茸と名ける。】（香茸方）【處
は、嫩鹿茸を酥で炙き、肉蓯蓉を煨いて一兩、生麋香五分を末にし、陳（ちん）白（びやく）米の飯
】飲酒で發つた泄（しゃ）し、骨立立泄（しゃ）を飲み、ただ酒を飲み、ために泄（しゃ）するものに
心で煮た棗肉（さうにく）で和して梧子大の丸にし、三十五丸つづつ酒を空心に米飲いで服す。】（濟生方）

で服す。【千金方】小兒の重舌【鹿角末を一日三回舌下に塗る。】姚和衆【方】小兒の流

水【小兒の滯下赤、白を下すには、鹿角灰、髮灰等分を用ゐ、一日二回、三錢を水

瘰癧【瘰癧を生で研つて末にし、發作するに先だつて一字を乳で調へて服す。】千金

角、大粉、大豆末等分を相和し、乳で調へて乳の上に塗つて飲ませる。【古今錄驗】小兒の

兩、人參一兩を末にし、一日三回、方寸匕を薑湯で服す。【肘後方】小兒の嘔痰【鹿

し、一日二回、一錢を酒で服す。食後によく嘔するも鹿角を焼いて末にして二

つて末にし、一錢を酒で服す。【婦人良方】筋骨疼痛【鹿角を焼いて性を存して末に炒

下せば醒める。【楊梅醫方摘要】婦人の白濁【滑數し、鹿角を末にし、酒に炒

【産後の血運】鹿角一段を焼いて性を存し、火毒を出して末に酒で調へて灌

して血が下る。【聖惠方】胞衣不下【鹿角屑三分を末にし、薑湯で調へて服す。】産乳

悶し、寒熱するには、鹿角屑二兩を末にし、一日三回、一錢を薑湯で服す。須臾に

とを葱、豉を煮た湯で和して服す。立ち出る。【一方】墮胎血瘕【墮胎血瘕を下らずして狂

を煎して生減して頓服する。二服に過ぎず。【華寶方】腹中の胎兒死【鹿角屑三寸

服す。一日二回。【子母秘錄】妊姪下血【止血ぬには、鹿角屑、當歸各半兩、水三盞

で服す。【産後（産後）】血の盡きぬには、鹿角を焼いて研り、豉汁で方寸匕を
 升の中に投じ、また焼いてまた浸しかく數回繰返して細研し、空心に方寸匕を酒
 方寸匕を酒で服す。楊氏産乳。【妊娠腰痛】鹿角を長さ五寸に截り、赤く焼いて酒
 一、夜浸して飲む。【婦人腰痛】鹿角骨を黄に炒つて研り、一、一五、六、回、
 【卒に腰痛脊の痛むもの】轉側し能はぬには、鹿角五寸を赤く焼いて二升の酒中に投
 は、鹿角屑三兩を黄に炒つて研末し、一日三回、方寸匕を空心に溫酒でて服す。【肘後方】
 つつを空心に鹽酒で服す。【腎虛腰痛】錐で刺すやうに覺え、動搖し能はぬに
 角二兩、牛膝を酒に浸して焙じて一兩半を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、五十丸
 立つ能はず、血氣衰憊し、髮落ち、齒枯れ、甚しきは喜んて睡するものである。鹿
 一回、方寸匕つづつを溫酒で服す。【外臺】骨虛勞【極】顔面腫れて垢黒く、脊痛して久しく
 し、神明明に通ずる。【彭祖方】腎消で尿數のもの【鹿角一具を炙いて搗篩ひ、一二日
 去つて末にし、二錢つづつを空心に溫酒で服す。人をとして睡を少からしめ、氣力を益
 附方
 舊新十六、新十六、鹿角を服する【法】鹿角十兩、生附子三兩を皮、臍を

つて熬膏したものは滋補に卓かなものだ。

つて、陽を見えて角が解す。故に陽を補するには鹿角を用ゐるが勝り、陰を補するに時珍曰く、蘇東坡良方に『鹿は陽獸であつて、陰を見えて角が解し、麋は陰獸である。』今醫家では多く麋茸、鹿角を用ゐ、力は鹿よりも緊いといつてゐる。

發明

穀曰く、凡そ鹿角を使ふは麋角に勝る。

又、勞嗽、尿精、尿血、瘡瘍、腫毒を治す【時珍】

れ、ば、虚勞を補し、肌を長じ、髓を益し、人をして肥健ならしめ、顔色を悦く。

子あらめ、胎を安じ、冷を去り、漏下赤白を治す【藥性】炙いて搗き、酒で服す

跌傷損を療す【別錄】男子の臓氣を損じて氣弱のもの、勞損吐血。婦人が服すれば

る【未經】吐血、下血、崩中止血ぬもの、四肢痛み、汗多く、淋露するもの、折

閉、子なまもものに痛を止め、胎を安ずる。久しく服すれば身を軽くし、天年を延べ

黄を畏る。【傷中、勞絶、腰痛、羸瘦】中氣を益し、氣を補す。婦人の血

主治

氣味

【甘し、平にして毒なし】別錄に曰く、温なり。〇〇火を得て良し。大

が軟になつたとき、竹刀で刮り淨めて搗いて霜にして用ゐる。』とある。

斤に黄蜡まっつ半斤を入れて壺に掩住し、水が少なくなつたとき少しづつ添へる。その角

つてて囊に盛り、流水中に七日間浸し、瓦缶かわかんを用ゐて水を入れ、桑柴火で煮る。每一
刮くわり海うみめ、晒ひし研ひつて霜しもにする『とあり、韓かん志しの醫い通つうには新鹿角を一寸ほどに截
停ていめず、水が少すくなくつたとき湯ゆを添そへる。かくて一定時日に達したとき取出し、少
淨じやうめ、緒つひ實じやう子し、桑白皮、黃臘各二兩を入れ、鐵鍋を用ゐて水で三晝夜煮る。少
正せいの濟急方じきやうには『新しんしい角三對を一寸位に截つて盛り、長流水で三日間浸して刮くわ
以もて霜しもにして用ゐ、その汁に無灰酒を加へて熬あつて膠かうにして用ゐる』とあり、又、
霜しもに東流水を用ゐて桑柴火さんさいかで七日煮て、少すくしつゝ水みづを添そへ、醋しやう少量を入れて搗たいて
方かたに『米こめ泔せんで鹿角を七日間浸して軟なにし、急流水中に入れて七日間浸して粗皮そひを去
に、或あるはただ濃汁のうじを熬あつて膏かうにしたものを鹿角りかくといふ。按おずるに、胡環こくわんの衛生
膠かうに時とき珍しん。曰いはく、今は一般に、煮爛しやうらんして粉こなに成なりつたものを鹿角りかくといひ、粉こなを熬あつて
毎まいに無な灰酒かいしやう一いつ鑑かんに入いれて煮れば膠かうに成なりる。それを研ひつて用ゐる。
から午後八時ごころまで一日ほど経へてば角は軟なに粉こなのやうになる。それを搗たき爛らんし、一
少すくしづつ醋しやうを添そへ、少すくしも歇やすめてはなぬ。成なりつた時は火にかけず、ただ午前
百ひゃく日間浸して取出し、刀やいばで刮くわつて黄皮わうひを去すつて拭ふ淨じやうし、酸くわん醋しやう七日間煮る。その

し、酒糊で梧子大の丸にし、四十丸づつ、鹽湯で服す。【虛勞尿精】白膠二

兩、膏する。【遺精、盜汗】鹿角霜二兩、生龍骨を炒り、牡蠣（煮）を煨（煮）いて各一兩を末に

服す。もし厚味で飲を好むものは猪膽汁二合を加へ、それで火を降すの意味を

九、十丸を。積（積）脊（脊）髓（髓）九條を入れて搗いて梧子大の丸にし、毎空心に鹽湯で五、九、十丸を

研り、虎脛骨を長流水に七日間浸して蜜を塗り炙り炙き各二兩、錢を、水（水）火煉蜜で

日間浸して炙（炙）麝（麝）で炙いて研いて各三兩六錢、鹿茸を燻し乾し洗淨して麝を塗り炙（炙）いて

はなない。その方は、鹿角霜——修治の方法は前項を見よ——を用ゐ、龜板を酒に七

錢、虎は陰に屬し、血、氣に情がつて各その類に従ふのだ。金石、草木の木比で

そ男子が中年にして衰へるを覺えたならば服するがよし。蓋し鹿は純陽であり、凡

【附方】異類有情丸（異類有情丸）【韓氏醫通に『この方は自製するもので、凡

點から推考するに、蘇東坡の説の方が正しいやうだ。詳細は茸の項を見よ。

陰を補するにあり、鹿茸は陽を補するに利にありといふ説と相反する。理と功との

鹿に勝るといふので見解が疎笨だ』とある。按ずるに、この説は沈存中の鹿茸は

は麋角を用ゐるが勝る。かやうな不同のあるもので、ただ鹿は麋に勝るとい、麋は

これはこの物は解毒の草を食物するのて諸藥を制するためだ』といつてある。

凡そ藥餌する人は、久しく鹿肉を食へば藥を服して必しも必ずその功力が現はれない。
ものだ。神に饗するにその肉を以てするは、その性烈にして清淨なもただからた。
食ひ、他の草をば食ははない。處るには必ず山に居る。故に産するとまに下澤に歸を
ただ葛花、葛葉、鹿葱、鹿藥、白蒿、水芹、甘草、薺危、齊頭蒿、山蒼耳のみを
發明。思。曰く、壺居士の言に『鹿は性多く警烈なもで、能く良草を別つ
養ひ、容貌を生かし、産後の風虛、邪僻を治す【時珍】鹿瘦弱を補し、血脈を調へ【孟詵】血を
正しくなつたならんば除く』と『中風口偏には、生肉を生椒と共に搗いて貼り、
る。片に割いて薄く【別錄】華佗は『中風口偏には、生肉を生椒と共に搗いて貼り、
【主治】中氣を補し、氣力を益し、五臟を強くする。生のものは中風口僻を療す
てはならぬ。惡瘡を發するもものだ。禮記には『鹿を食ふには胃を去る』とある。
或は曝しても燥かぬのはいつれ人も人を殺す。雉肉、菰、蒲、鮠魚、蝦と共に食つ
はいつれも食つてはならぬ。鹿の肉脯は、炙いては動かず、水を見せて動かすもの、
が、他の月は食つてはならぬ。冷痛を發するもの、白の、豹の文のもの

て出でぬに、は、腦を敷き、燥けば易へる。半日にして出るもの【だ】（深師）

【刺】肉中に入つ

【面脂】に入れば入して悦澤（蘇頌）

主 治

にし、一日三回、一匙つづつを合んで嚥む（聖惠）

先づ杏仁、桃仁、地黄の汁を煎して半減してかき、三味を入れて煎して稀（傷）

酥、蜜各一兩、杏仁、桃仁各三兩を皮を去つて炒り、酒一升と共に搗いて汁を取り、

【附方】（新）【鹿髓煎】肺痿咳嗽、傷中脈絶を治す。鹿髓、生地黃汁各七合、

は知るものが稀だ。

に透入して火の如くになり、大いに元陽を補す。この法は甚だ佳いものだが一般にで、これれで古方の摩腰膏を和し、薑汁で一粒を化して腎堂を擦れば、暖氣が丹田の丸薬を和する劑とするが甚だ妙である。『とある。凡そ腰痛は腎の虚寒に屬するもこれ膏にし、毎一兩に鍊蜜二兩を加へて鍊り勻ぜ、（発器）密收し、これを滋補る薬があるが、甚だ道理のあることだ。白飛震の醫通に『鹿腦、及び豬骨髓を取つる酥髓湯に用ゐてあり、御薬院方の滋補薬その脊髓を酒に和して熬膏して丸にする時。曰く、鹿髓は近代の方では用ゐたものが稀だが、刪繁の方の肺虚毛悴を治す

發明

頤曰。髓は酒に作れるもので、唐の方にくそその法がある。

髓を益し、燥を潤ほし、肌を澤やわらかかにする（時珍）【主】陰を補し、陽を強くし、精を生じ、骨髄を填みて、筋骨を壯つよにし、嘔吐やうとを治す（日華）【治】地黄汁と共に煎じて服すれば、煮て服すれば、陽道を壯つよにし、子あらしめる。酒で和して服するが良し（別錄）【主】蜜と共に子、婦人の傷中、筋絶、筋急痛、効速。酒で和して服するが良し（別錄）【主】蜜と共に子、煉淨して薬に入れる。【味】甘し、温にして毒なし【治】男

附方

新。一。顔面（はんめん）【附】麝脂を一日二回塗る（聖惠方）

主

陰に近けてはならぬ（蘇恭）時珍曰く、これは本經の麝脂の正文だが、蘇氏はこれを脂に註した。二脂の功を或は同じとしたものかも知れぬ。

主

はぬに、は、鼓汁、五味と共に煮て食ふ（孫思邈）【治】諸風で脚膝の骨中が疼痛し、地を踐ふみ能

附方

新。一。老人の消渴（消渴）【主】鹿頭、一箇を毛を去つて煮爛し、五味を和して空

【附方】鹿筋を漬けて軟かにし、細に撻つて緊く彈丸ほどの大

み入れる。それで粘出する【時珍】

【主】勞損。絶を續く【蘇恭】塵沙の味目に、は、嚼み爛して目中に接

【主】腫を消し、毒なし【主】腫を消し、毒を散ずる【時珍】

【主】癰疽。癰疽に煮て食ふ。また癰疽に煮て食ふ。また癰疽に煮て食ふ。

【附方】鹿耳【鹿耳】鹿腎一對を脂を去つて切り、政汁に麴米二合

【主】腎氣を補す【別錄】腎氣を補す【日華】及び粥に煮て食ふ【日華】

【主】腎氣を補す【別錄】腎氣を補す【日華】及び粥に煮て食ふ【日華】

酒醉へ酒糟。

【主】鼻血の時に作るもの【孫氏集效方】酒醉で二三次鼻血を蒸してから、酒醉生盃で和して服す。

【主】鼻血の時に作るもの【孫氏集效方】酒醉で二三次鼻血を蒸してから、酒醉生盃で和して服す。

【主】鼻血の時に作るもの【孫氏集效方】酒醉で二三次鼻血を蒸してから、酒醉生盃で和して服す。

【主】鼻血の時に作るもの【孫氏集效方】酒醉で二三次鼻血を蒸してから、酒醉生盃で和して服す。

【主】鼻血の時に作るもの【孫氏集效方】酒醉で二三次鼻血を蒸してから、酒醉生盃で和して服す。

附方

新三。

又、刺血を以て甚に代ふるを非なりとしたのもまた一説だ。

て、往々にして牝鹿を以て鹿とする。牡はなほ角退けるので別ものだが、此
人因つて耕稼する。その鹿の息ふところを鹿場といふ。今獵人は多く分別せずし
は南方の鹿は千群をなし、澤草を食ひ、踐む鹿場となる。鹿名けてて（鹿の）鹿といふ。
はする。故に淮南子に『孕女（うぶめ）は小牛どあり、大いさ（おほい）は小羊どあり、二に
似てに。故に角を解し、鹿は澤を喜んで、陰に属するが、故に冬に至て角を解す。鹿は
時。曰く、鹿は鹿の属であつて、牡には角がある。鹿は山川を喜んで、陽に属するが

○ 34 6 8 5

此の庄にて多し。手なを喜ぬ頭見下、く多も喜に方地の國海(み)は、く日喜。此。

集解

別○錄に曰く、麋は南山の山谷、及び淮海の邊に生ずる。十月に取

を塵——音は天(オカ)——とふ『とある。

『莊子』——音(キ)は谷——いとたところから見るに、塵なる名梅はその意味を取つものらしい。耐雅には

蘇地方。(三)淮南、安徽、江西。

縣置カ、海陵今江蘇省泰
(三)漢二縣

。凡子昂昇人

「正誤」弘景く、世間では、麋は一頭の牡が十餘頭の牝と交尾し畢る。ぶ。酒で服するついである。その脂は、年を經たものも性を失ふだ。人の陰を呼ぶ。『陰に近くハムからず。陰をして瘵せむ』とある。

○喜○

盛にして顔面瘡癰を生じたるには、脂を化くわして塗る【参】

【本經】皮膚を柔にする。陰に近けてはならぬ。痿せしめるもの【別錄】少年氣

惡瘡、死肌、寒熱、風寒、濕痺、四肢拘攣、緩不收、の、頭、腫、脹、理、通、す、る、【】

氣味 辛し、溫にして毒なし、桃季を忌み、大黃を畏る。

○ 2 4 7

し、麝膏は散する。聚なれば温、散なれば涼なものだから、それで時に『順ふのだ』聚する。周禮には『冬、狼を獻し、夏、麋を獻す』とあり、『註に』狼膏は聚する脂とあるが、一名官脂（本經）曰く、別錄には『十月に取ら、脂を煉過して收用は兩者を通しして鹿麋（ろうび）とある。』とある。

一、廢脂

（本經）

○汪
○崇

は兩國を通じて腹をついてゐる。

時珍曰、鹿茸、角は陽を補す。右腎、精氣不足のものに適する。鹿の茸、角、角日。華曰、鹿角は陰に屬するから、腰膝、不仁を治し、一切の血病を補するのだ。

鹿角の頂を見よ。

恭曰、鹿茸の功は鹿茸に勝り、角を煮た膠はまた白膠に勝る。詳細は鹿茸、煎膠は鹿角膠と功で、茸もやも鹿茸に勝る。肉と功が同じくない。煎ば大いに陽道を益す。如何なる理に因るか。

發明

詵曰、鹿角を常服すれど、血を養ふ。功は茸と同じ【時珍】

に美しくなる【孟詵】陰を滋く、血を養ふ。功は茸と同じ【時珍】

え。漿水で磨つて泥にし、それを顔に塗れば光華あらしめ、赤白にして玉のやうに美くする。服すれば、男子の冷氣、及び風の筋疼を治す。卒心猪の若きは【華】粉にして常に暖め、陽を壯にし、色を悦く、風氣を療じ、偏に男性を治す【日華】粉にして常にある。【肩に刮つて香しくし、煎り、酒で服す。大いに人に益す【弘景】記載は彭祖傳中【氣味】甘し、熱にして毒なし【主治】風痺、血を止め、氣力を益す【別錄】

虛勞損、一切の血病、筋骨、腰膝の酸痛。陰を滋くし、腎を益す【時珍】

麋角

修治

旁に兼て

に小尖を生じ、色の蒼白なるものを以て上級品とす。

に説曰く、凡そ麋角を用ゐるには、五寸に截つて中を破り、黄に炙いて末にして薬

に入れるがよし。

時珍曰く、麋、鹿の茸、角に就いては、今は一般に明に判別し得る者が罕で、陳

自明が、小なる鹿茸とし、大なる麋茸としたのやもはり臆見だ。親しくその採

取の時に立會て誤なるものに確に信を置くに若くは、麋角膠、麋角霜を造る方法

は、いつれも鹿角膠、鹿角霜と同一方法である。又、集靈方には『麋角霜を用ひ、

水に七日間浸し、皮を刮り去つて銀屑とし、銀瓶に牛乳を盛つてこれに一日間浸し、

乳が耗るときは再び加へて耗らぬやうになつて止め、紙で瓶の口を密封し、

別に鍋の中に大麥を三寸厚さに鋪いてその上に瓶を置き、再び麥で瓶の周圍を填

し、水を入れて一伏時浸し、水が耗るときは少しづつ加へ、肩が麋のやうに軟にな

つたとき取出し、焙じ研つて霜にして用ゐる』とある。

いて藥と麥とを取出し、各焙じて末にし、藥を浸した酒に酒を添へて麥粉を煮て
 一半は底に藉き、一半は上を載せ、藥との間を二枚の絹帛隔てて、覆をして一日炊
 酒に一夜浸し、大附子を生皮を去つて一兩半、熟地黄四兩を用ゐ、大麥一斤を
 炙つ、四肢力なく、爪枯れ、髮落ち、眼昏く、唇燥くもの瀉角府斤を
 皮が緩み、毛が瘡を、血脈が枯槁し、肌膚が薄著し、筋骨が羸弱となり、飲食物が
 二回、五十九づつ酒を溫酒、鹽湯の任意の酒で服す。楊氏藥方
 二兩、熟附子一兩、以上を通過して末にし、酒で煮た糯米糊で梧子大の丸にし、一
 酒に浸して焙じて五兩、肉蓯蓉を酒に浸して焙じ、遠志を心を取り、沈香を
 子を酒に一夜浸して焙じ、山藥、白茯苓、黃芪を蜜で炙いて各四兩、當歸を
 角を細に銚り、眞酥二兩、米醋一斤、煮乾し、慢火で炒りて半兩を取り、青芷
 する。鹿角を細に銚り、眞酥一兩、損補し、精血を生じ、風濕を去り、筋骨を壯に
 となるもんだ。(千金)【二】至一兩、無灰酒一升、慢火で炒りて半兩を取り、鹿
 黄丸を服して微利する。かかこ度發動するが已後は始めに適當な調和状態
 佳し。酒を飲み、麪を食つて口が乾き、眼が澀り、内熱するさ、直ちに三

ス。勢
ハ男
子ハ
等チ
指去

し、陰人、雞、犬、喪中の子等に見られなくてはならぬ。婦人はこれを服するが尤もすれば顔貌が一定して變にならなくなる。この藥を調合する時には、必ず淨室中に於て取る必要がなく、自ら仙人を見るやうになる。三十已下からこれに服する未だ實現せぬものを預見し得るやうになる。四年にして常に飽いて食物を攝とせし上のもこれを服すれば却つて少年のやうになる。三年にして腸が筋體と十里を歩し得るやうになる。二年にして人をして肥飽して食物の量が少なくなり、七たもは更生し、記憶力が強く、身體が軽くして風如くなり、一日に數百の雨を加へる。服して二日に達すれば面が光澤に生じ、一年にして齒の落ち後には漸に多く氣を泄し、食う能く、食ふやうになる。氣を患ふものは枳實、青木香、經過すれば腹内の諸疾は自ら相驅逐する。微利する。あるが怪しむに及ぬ。五十九丸までは、空腹に酒で服するの、初めて三十九丸を服し、一日に丸を増加する。手で一時に梧子の丸にする。手に粘るときは少しし酥を手に塗る。これに服の末を投じて相和し、稠く粘つて丸にし得るやうにして新器に盛つて貯へ、多人數の

集解 藏。曰、按ずるに、張華の博物志に『茶音機とは(こ)永昌郡に産する

生(こ)類。鬼永昌郡。詭部見化

志に記載がある。舊本には訛つて茶音機と書いてある。又、余義と書くも茶音の部

釋名

茶目機

時珍曰、

茶目機は

蔡茂機

と發音する

外國語であつて、

博物

科學和名 茶目機 茶目機

雙頭鹿 (拾遺)

皮主 靴(こ)に用ゐれば脚氣を除く【(茶音機)】

て顔色を美ならしめる【(馮錫)】

骨主 虚勞に至つて良し。煮汁を酒に釀してて飲めば、人をして肥白にし

ものに及ばない。(彭祖食經)

するもよいが、やはり人をして老いざらしめらる。しかしだだ性が緩で附子を入れた
つづつを温酒で服す。二十日にして大いに效がある。また草に熟つて末にして酒で服
法は、刮つて末にして十兩、生附子一箇を合せ、雀卵で和して丸にし、日に二十丸

ず、房室に氣力を勞損せず、顔色を衰へざらしめ、は麋角に過ぎたるはな。い。その
で丸にするもよし。(總論)【麋角丸】彭祖の丸である。人をして丁壯ならしめ、老い
て船子大ほどの丸にし、十五丸から二十丸までづつを空に溫酒で送下する。煉蜜
し、附子を炮製して皮を去り、乾山藥と各三兩と共に末にし、蒸した羊肉で和して
須_マつたとき少しづつ熱湯を添へ、頻りに看て角屑が粉爛して乾し、一劑を八兩づつを
耗_マつたとき少しづつ熱湯を添へ、頻りに看て角屑が粉爛して乾し、一劑を八兩づつを
で周圍を填實して瓶の口だけを露出し、火を住めず一伏蒸す。鍋中の水が
一斗を別の瓶に入れ、約三寸厚にした上に先づ麋角を入れた瓶を置き、更に大麥
と全耗なく、乳汁で一日浸し、乳を常に高さに満て、乳が耗つた
瓶内に盛つて牛乳汁で一日浸し、乳を常に高さに満て、乳が耗つた
顔色を駐_ツめる。麋角副一、水に七日間浸し、鱧_{ヒラ}皮を刮り去つて鰾にし、一銀
色に炒つて五兩、熟附子半兩を酒で丸にして服す。【麋角霜】麋角を酥で黃
湯で送下する。一日三服。ある方では、ただ麋角をづつて屑にしたものを酥で黃
作つた糊で和し、三千杵搗いて梧子大の丸にし、五十丸づつを食前に溫酒、或は米

縣ノ陝西郡ニ在リ。淳化
今左。雲陽縣ハ兩漢ニ
屬ス。

釋名

麋

從ふのだ。又、字説には『山中に虎がゐれば麋が必ず鳴いて告げる。その聲が凡に
麋即ち古の麋の字である。時珍曰く、麋は味が甘く旨まじい。故に旨に

麋 (未開寶附) 科 名 和 名 名 科 名
Muntiacus reevesii (Solator) し 科

胎中尿

主治

【惡瘡、蛇蝎の毒に敷く】(麋胎)

てあるはこの意味だ。

人は鹿を耶といひ、尿を希といふとある。按ずるに、唐韻に尿の字を又音希とし
れを見ることがある。『とあり、段成式の雜俎には『雙鹿ふたかの矢を希や耶やと名ける。夷
産する。鹿に似て前後に頭があり、一頭は食し、一頭は行く。山間の住民が時に
時珍曰く、按ずるに、盛弘之の荊州記に武陵の雲陽山、黔陽山に兩頭の獸を
陽國志には『この鹿は雲陽郡の熊含山くまがみに産する。即ち余義の『とある。
范曄の後漢書には『雲陽雲陽にある神鹿は兩頭にして能く毒草を食ふ。』とあり、
兩頭鹿の名であつて、鹿に似て兩頭がある。その胎中の尿を四月に取る。』とあり、

Hydropotes inermis
Swiulrse.

真

(別錄中留)

科 學 和 名 名 名

(吳夢祥)

Capreolus pygargus, Pall.

七、
办、
科

冬 蠶



日

君(スキ)であら。また
 一
 麗さん

釋名

麿、麿はすすをの舞はすと。麿、麿がそれを見るに從ふであらう。陸氏は「麿」は性驚するもの故に字の音(ソキ)君はと書くもしく、曰く、時珍。人が彩色の



に『四足の美なるものに鹿あり』とはこの物のたゞ。

集解

[illegible]

【主 治】 轉機にすれば濕氣、脚痺を除く【時珍】

皮

飛尸（飛尸）を治す【藏器】

【主 治】 灰に焼いて飲んで服すれば

【主 治】 辛し、平にして毒なし

頭 骨

醋で食ふが大いに效がある【藏器】

煉熟（煉熟）して毒

【主 治】

【主 治】 甘し、平にして毒なし

肉

今は施州山中に一種の紅麋といふ紅色のものを産する。

或はまた好んで蛇を食ふのだといふ。符瑞に銀麋といふ白色のものがあり、

一筋の徑に循つて行くものだ。皮は極めて細い。それで作つた鞵は珍重される。

脚は豹のやうで矮い力が勁く、善く跳越する。この物に草莽（草莽）を行くには、た

時珍曰く、麋は大山中にゐる。麋に似て小さく、牡には短い角があり、麋黒色だ。

多。

傷痕が多い。その聲は破鈹（破鈹）を撃つやうだ。四方からいづれにもゐて、山の深い處に應る

ら。【子母秘錄】糟を消す【麋肉、或は鹿肉を割いて厚い肺にし、炙熱して搗す。

【乳を通ずる】麋肉を煮てて食ふ。婦をして知らしめてはな

く

方

新。一。

すれば小膽になる。性なるものがこれを食べへば、ますます性になつて始末がつか

藏。曰く、心の粗豪なる人は、この物の肝を曠して末にし、酒で一具を服

書に『麋鹿に魂なし』とある。

時珍。曰く、麋は膽が白くして性性、水を飲んで影を見と奔り出すものだ。道

と名け。『十長に屬せずして腥膩でないから禁忌がない』といふ。

説。曰く、肉は麋肉と同じく酒に醸すのが良し。道家ではその肉を以て供養して白肺

明

弘景。曰く、俗に、白肉を麋といふ。その膽は白くして驚怖し易い。

に醸して飲めば風を消松するの功がある【麋原】

主

五臓を補す【別錄】

【氣力を益し、人の顔面を悦澤にする】【愚農】酒

あるものだから食つてはならぬ。

食合はせれば癰疾となるから食つてはならぬ。又、梅、李、蝦と食へば人を病まし

作ル。(一) 苦、大觀二若ニ

へば人をして消渴せしめ、癯惡に(一)苦むものかこれを食へば瘡疾を發する。鵝肉と食多く食を食へば羊に勝る。十二月から七月までの間は、これを食へば氣を動し、多く食を食へば氣を動し、【註】曰く、八月から十一月までの間に

氣味

がそれである。此に正して置く。

時珍曰く、麝に香はない。香のあるは麝であつて、俗に土麝と稱し、香麝と呼ぶものも、完全な香とはいへないが、やはり惡病を治す。

正誤

時珍曰く、麝中から往々にして香を得ることがある。栗子ほどの大いさ星散して麝鹿となる。『とある。

のがあつて、王者の刑罰が理に中るときに出現するものだといふ。運斗極には『麝の換つて皮が厚く、冬期には毛が多くして皮が薄。符瑞志に銀麝といふ白色のもの出てゐる。俗に牙麝と稱するものだ。その皮は細で軟に勝る。夏期には毛が生が無く、黄黑色のもので、大なるものも二三斤に過ぎぬ。雄は牙があつて口外に角の時珍曰く、麝は、秋、冬には山に居り、春、夏は澤に居り、鹿に似て小さく、角

の形が麝に似てゐるから俗に香麝と呼ぶのである。梵書には麝香を莫訶婆伽はまかといふ。或は、麝父の香が来つて射るものだから名けたといふが、やはり通じゐる。その射る麝は香氣が遠く射るものだから。故に麝と

釋名

射父（耐雅）香麝（時珍）

科名 麝科
學名 *Moschus moschiferus*, Linne.
和名 麝
本品（經上品）
藥

いふがあつて、煮汁で藥を煎するものだ。

を益し、顔色を悦よろこぶ【日華】時珍曰く、千金に、産後の虚損を治する麝骨湯と

骨

氣味

【甘し、微温にして毒なし】

主治

虚損、洩精（別錄）精麝

である。頤曰く、唐の方に麝骨の酒がある。いつれも下を補するものだ。

珍曰く、千金の暗風を治する薯蕷煎、虚損を治する天門冬煎（冬煎）を用ゐ

髓

主治

【氣力を益し、人の顔面を悦よろこばす】虚風を治す【別錄】

みる。外毒秘要

四回灸いて四回易へるがよし。膿が出てて癰えゐる。除けぬときは再び新肉を用ゐて試

縣ノ今治ノ河ナリ。南陽。汝置
 二ノ註見州ハ。石部丹砂
 三ノ商州ハ。

指平。カ。陸。今。城。山。西
 四ノ唐ハ。唐ノ今。城。山。西。

でもなほ四足を拱してその臍を保護するやうにしてゐるものだ。故に李商隱の詩に
 逐はれて危急な場合には、臍に投じて爪を擧げてその香を剔^剔し、裂^裂れて死ん
 在つて他に移らない。人間がそれを獲る。その性は臍を非常に愛惜するもので、人
 憤。曰く、楊億の談苑に『商^二』汝の山中には臍の遺棄が多く、常に一箇處に
 であらう。

は一向にその物がゐたといふことを聞かない。或はその物は世間でも誠に近頃で
 した。その香は肉臍に倍したといふ。この説は西陽俎に記載してあるが、近頃で
 ひ、毎に針でその臍から刺し取つたが、眞雄^{眞雄}末^末て置く^{置く}と臍がまた癒合
 天寶年間に、虜地方から曾て一度獻上したことがあつて、それを御苑の中で
 一滴を一斗の水に濯^濯し、それで衣服を洒ふと、その香がなかなか失せない。唐の
 一種がある。その香は更に奇なるもので、臍中がみな水になつてゐるのだ。そ
 つて、それで乾血塊を作るものもあるが、薬に入れるに堪へない。又、水麝香とも
 たもの人間が描つて取るのだから、心を破つて血が脾上に流出するを見ることもあ
 はその動物が人間や他の動物に捕逐され、驚畏のあまり失心し、度を失つて陰^陰死^死して

發明

これを用ゐて風の邪をしいて出るところを得せしむへきものである。若し肌肉には、
 李杲曰、麝香は脾に入つて内病を治す。凡そ風病の骨髓に在るもの

明發

中惡、痰厥、積聚癰瘕を治す【時珍】

一切の惡氣、及び驚怖、恍惚を治す【孟詵】鼻窒でて香臭を聞かざるを療す【好古】諸氣、中風、中食積を消し、瓜果の酒毒を解し、肌骨に透り、經絡を開き、痰を通じ、氣、中風、中食積を消し、瓜果の酒毒を解し、肌骨に透り、經絡を開き、痰を通じ、

すれば、人をして百毛九竅をしてみな香しかしめる。『ととふ。』

小便利を止める。又、能く一切の癰瘡膿水を蝕する【薬性】又『十香丸』に人乳にて（四服）

【熟水で一粒を研ぎて服すれば、小兒の驚癇、客忤を治し、心を鎮め、神を安し、

吐し、一切の虚損、惡病を療す。子宮に納るれば水臙を暖め、冷帶を下と止め【る】(華)

沙蟲、瘰癧の毒を治し、蠱氣を辟け、臙附の蟲を殺し、瘡疾を治し、風痰を

中に著けるか有効だ』とある。貯は蛇を噛ふところから蘇生したのだ。蛇(三三)】

又、蛇毒を療す【弘景】抱朴子に『山人つて蛇を辟けるには、麝香丸を足の爪

【通ずる】別録
 佩服し、及び枕間に置けば、惡、及び戸挂、鬼氣を辟ける。

蠱咬ノ意ナラ。蛇、咬、蛇、咬、(三)

二(四)大觀 = 服字

く服すれば邪を除き、夢瘧、魔寐せぬ【本經】諸種の凶邪、鬼氣、中惡、心腹の暴
【主治】惡氣を辟け、鬼精物を殺し、三蟲、蠱毒、溫瘧、驚癇を去る。久し
香を帶びれば關に透つて人をして異疾と成らしめる。
曰く、麝香は鼻に近けてはなぬ。白蟲がうつて腦に入り、癰を患ふ。久しくその
氣味【辛し、溫にして毒なし】頸顙。曰く、辛く、苦く、大毒。李延飛。
ばない。
妙である。子の日にそれを開いて微し研つて用ゐる。必ずしも極く細くするに及
【修治】麝香 麝曰く、凡そ麝香を使用するには【三三】當門子をを用ゐるが尤も
間ではそれを雜へる。本條を見よ。
れるが力が大位にある。南方の地の靈貓の囊もその氣が麝のやうなものなので、世
ものが香が實してゐる。東南に産するものは士麝といふもので、やはり用ゐら
時珍。曰く、麝は山に居り、麝は澤に居る。この點で差別がつく。麝は西北に産す
る。『とある。
「麝に投ずるの麝【二】自ら香し【一】とあり、許渾の詩に「麝を尋ねて生香を采る」とあ

五二五
作大觀
三四四

木は桂を得れば枯れるものだからである。(濟生)【水】清濁飲酒、或は果實を食大の丸に、大人は十五丸、小兒は七丸を白湯で服す。蓋し果は臍を得れば落ち、たもの【】脾を傷め、腹つて氣急するには、臍香一錢、生桂末二兩を飯で和して煮豆【】臍香で墨を研つて「去邪辟魔」の四字を額上に書く。(經験)【諸種の果物を積と成つ【】小兒の邪癰】小兒の邪癰(聖惠方)調へて服す。臍香一錢を醋生蓋で調へて服す。聖惠方(小兒の邪癰)【水】腫して忍び難く痛むには、臍香末一字を瘡中に納れる。膿水を出し盡して效【】破傷風の中水草に臍のみに大豆三粒ほど奶汁(た)で調へ、三回、臍香一字を清水で調へて服す。廣利(小兒の驚啼)【】發歇不定には、一日三回、臍香一字を清水で調へて服す。廣利(小兒の臍香少量を乳汁で兒の口に塗つて效を取る。醋で調へてもよい。)(廣利方)【小兒のして灌ぐ。その人は自ら吐(か)ける。】中惡客忤項強して死せんとするには、和酒は臍を得れば敗れる『といつてある。これは臍を用ゐるの理を得たものだ。【附方】中風不省。】臍香二錢を研末し、清油二兩を入れ、勻

開き、通してなぬといふこととかがあらうか。用ゐてはなぬのではな。い。ただ過て驚、癩、癰、瘰、癧、諸病の經絡壅閉、孔竅不利のものの場合、いかでこの物で引導をなして、諸の竅の不利なるを通じ、經絡の壅遏^{うちやど}せるを開くのだ。諸風、諸氣、諸血の諸痛、には必ず用ゐてはなぬといふ。いづれも妥當^{たうたう}でな。い。蓋し麝香は走竄^{そうさん}して能時。珍。曰く、嚴氏は、風病には必ず先づ麝香^がを用へようといひ、丹溪は、風病、血病、以後に語^ご、難^{なん}痰^{たん}の證を免れて、他の藥も有效になる。麝香は、中風不省のものには、麝香、清油を灌いで先づその關を通する。そある。麝香の散、琥珀の煉を用ゐてはなぬ。婦人は血が主であつて、凡そ血が虚して寒熱し、盜汗するは補し養ふべきもので、陰を抑^{おさ}へねばならぬものであつて、腦、麝の輕揚、飛^ひ竄^{さん}の劑を用ゐてはならぬ。陰ら出血するもの。この場合は陰盛陽虚で、升有^あつて降^{くだ}なすものだから、陽を補し、朱。震。亨。曰く、五臟の風に麝香を用ゐてはなぬ。ためために衛氣を瀉^さして、口、鼻、か場。合。のやうで出すことが不能になる。反^ひつて風を引いて骨に入り、油が、入つた

香木 Viverra zibetha, L.
(一) 水材(重) 白木

靈貓 (拾遺) 和名 科學名 科 名
Viverra zibetha, L.
鼬科

る (范汪方)

に搗いて雞子白で和して小豆大の丸にし、一二三丸つづつ湯で服し、知あるを度とす
【小兒の癰病】【臍肉二兩を切つて焙じ、椒三箇を炒り、末

附方

新二。

(時珍)

に似て腥氣がある。これを食へば蛇毒を畏れぬといふ。【腹中の癰病】

肉氣味

炙熱してて咬み、一二三回換へる。その蟲は死んで根を断つ。甚だ妙である。【臍方癰

れは解す。】【集簡方】【蟲牙で痛むもの】香油を頭抹して臍香末を綿け、裏ん

となつたもの】【蜜で瘡を調へて傅ける。】【臍方】山嵐瘴氣三分を水で服す

過ぎず。】【外臺】鼠咬瘡となつたもの】【臍香で封する。】山嵐瘴氣三分を水で服す

溫酒で服す。】【本草方】痔瘡腫毒【臍香當門子、印城鹽等分を塗る。】三三回

ふて自ら生れる『といいた。】死胎の下らぬも【麝香當門子一箇、桂心末二錢を
横、逆産は、兒枕が破れて敗血が子宮を裏むものだ。勝金散を服すればその敗血を逐
いて末にし、秤を秤して難産なるを治す。麝香一錢、鹽^{しん}一錢、青布を裏んで紅く燒
散——母が弱くして難産なるを治す。麝香一錢、鹽^{しん}一錢、青布を裏んで紅く燒
【續千金方では、麝香一錢を水で研つて服すれば立ち下る。】○○濟生では、勝金
一錢を一日三回水で服すれば自消する。夏^{なつ}子益^{やく}奇^き疾^{しやく}方【分婉を催して出産を容易にす
ものを吐出し、それを能く物を食べ、心が徹して痛むものもある。麝香
の裏んで吞む。衛生^{へいせい}】口内^{くちのう}の肉を縁^{えり}のやうな根があり、五、六寸餘の釵^しのやうな
五種の蠱毒^{こどく}、麝香、雄^お黄^{わう}等分を末にし、生羊肝を指の太さほどで割開したも
その上から髪し、冷せば易へ。麝香一分、皂角^{さうかく}末一錢を薄紙に裹んで患部に置き、布で炒鹽を包んで
髪を分開し、麝香も酒を敗るものだ。濟生^{けいせい}】偏^{へん}、正頭痛【久しく除かぬには、晴朗な日に
壞り、酒で和して十餘丸にし、枳^し椇^き子^しの煎湯で下す。蓋し麝香は酒を敗り、果
子、酒で和して十餘丸にし、能く食^くふが口渴して水を飲み、數^{かず}尿するには、麝香當門

(三) 冥爰之山、未詳。



【貓 靈】—— 狸 香・狸 文 ——

卒痛、狂邪鬼神、鬼癢、疫氣、瘴氣、悲しき邪氣、心を鎮め、神を安する【(靈)懸挂、ふつ豐尸、飛尸、中惡氣、主 治】腹心腹
 二氏の説と異物志の所説と合致する。見ると類とは靈狸をいふことに疑ない。
 があるが、それが神狸そのものか、ものか、知れぬ。『とある。手(時珍)が按ずるに、劉、楊
 思はれる。又、尾禽形圖の心月狐には牝牡兩體とあり、ふ「とある。それが此の物を言つたのではないかい
 り、列子にも「冥の自ら食ふ牝牡となる。」「とある。食ふ者は姑せずとあり、あり、
 あり、状態の如くにして「毛毫あり、その名を類獸とてあるもので、南山經に所謂「冥爰冥爰之山、神狸と乘つて文狸を載すとあり、」とあり、王逸王逸の註に「神狸と

建西曆一八七二年
國一省中律大耶
號三二地亞
ル一征細ガ石南
ニ一服亞、四ノ丹
。年服、時カ

か、狸のやうで、その文は金錢豹のやうなものだつた。これは楚辭に所謂「赤豹に氣のやうに香しい」とある。『楊慎の丹鉛錄には予は大理府にゐたとき香貓を見た。』
（三）黒契丹（黒契丹）自ら能く牝を産する。文は土豹に似て、その肉は食へる。養、溺はみな麝はして見ると、自ら能く牝を産する。或はこれに似て、いふのだらう。劉郁の西域記には時珍曰、按ずるに、段成式は『香狸には四箇の外腎を有つてゐる』といつた。生に料理するやうな方法にするのだ。その氣は香しくして微し麝の氣がある。麝曰、香狸は南方に産し、その地ではこれを膾炙して料理する。北方の地で狐をすればその氣が麝のやうになる。麝香の中に雜入すれば區別がつかないもので、これを使つても麝のやうだ』とある。
すれば一體にして自ら陰陽をなす。その水道を刳いて囊を連ねたまた酒つて陰乾貓は一なる。その陰は麝のやうで、功もやうに相似たものだ。按ずるに、異物志に『靈と藏。曰、く、自ら牝なり、又、香氣ある。靈にして神なりと謂ふべきだ。類時珍。

釋名

靈狸

蛤

香狸（雜類）

神狸（離騷註）

類

時珍。

貓

(蜀本草)

科名知

名名

Felis domestica, L.

科名

釋名

家狸

時珍曰

貓

苗

音

二

音

有

名

呼ぶものだ。陸佃が『鼠は苗を害し、貓はそれをつたむる故に文字は苗に從ふで、禮記に所謂「貓」を迎へるその田鼠を食はせたるためだ』といつたが、やはり通ずる。格古論には「一名烏圓」とある。或は蒙貴といふは貓のてたとといふが、その

れは誤だ。

集解

時珍曰

貓は鼠を捕る小獸であつて、

處處で畜つてゐる。黄、黒、

白、

腰が短い。目が金鈴のやうなもの、及び上脰に稜多きを良しとする。或は、その

腹の數色あつて、身は狸のやうで、面は虎のやう、毛が柔で齒が鋭く、尾が長く、

鼻端は常に冷で、ただ夏の至りだけ燠だといふ。性は寒を畏れるものだが暑を畏

る。刻には満月のやうになり、辰、戌、丑の刻に未の刻に、寅は稟核のやうになる。その亥の刻は時に刻を量れるもの、子、午、卯、酉の刻は一線のやうになり、寅、申、巳、の腰が短い。目が金鈴のやうなもの、及び上脰に稜多きを良しとする。或は、その腹の數色あつて、身は狸のやうで、面は虎のやう、毛が柔で齒が鋭く、尾が長く、白、腰が短い。目が金鈴のやうなもの、及び上脰に稜多きを良しとする。或は、その腹の數色あつて、身は狸のやうで、面は虎のやう、毛が柔で齒が鋭く、尾が長く、鼻端は常に冷で、ただ夏の至りだけ燠だといふ。性は寒を畏れるものだが暑を畏る。刻には満月のやうになり、辰、戌、丑の刻に未の刻に、寅は稟核のやうになる。その

灰に焼いて等分を研末し、一字を蜜水で服すれば發し起る【時參】

牙主 治 小兒の疳瘡倒壓で死せんとして人牙、猪牙、犬牙と共に

同【記載は外臺にある。

眼主 治 癰癰、鼠癰には、灰に燒さ、井華水で方寸匕を服す。一三日

共に末にし、孔中に納れる【時參】記載は千金にある。

腦主 治 癰癰、鼠癰の潰爛せらるるには、莽草と等分を

毒瘡【貓頭骨を燒いて性存して研り、三錢つづつを酒中で服す。】吳茱萸湯方

を人、灰を調へて傅け、その外部を膏で護住するが神妙である【醫方摘要】對口

一箇を煨いて研り、雞子十箇を煮熟して白を去り、黄を煎して油を出し、白蠟少量

貓頭【灰に燒き、油で調へ敷く。瘡を癒せるを度とする。】癰癰の收斂【貓頭

で服す【小兒の陰瘡】貓頭骨を灰に燒いて傅ければ瘡を癒せる。【鼠咬瘡痛

五香連翹湯【走馬疳】黑貓頭を灰に燒き、方寸匕を酒

俱【上に黑豆を撒いて共に燒いて性存し、末に摻り、乾きき油で調へ、

二回、一錢匕を水で服す【千金方】多年の癰癰、瘡をぬには、貓頭、貓頭各一

【貓鬼、野道】病で無意識に歌ひ哭くものである。臘月の死貓頭を灰に焼き、

一日（傳正醫學）を止まらる。二錢を酒で服すれば止まる。【貓頭骨を灰に焼き、

痰（發喘）】【貓頭骨を灰に焼き、一箇を灰に焼き、一日三回、方寸匕を酒

に、人、猪、大の四種の頭骨を用ゐる。方寸は人類にある。

種ではあるが、性氣が同じものだから通用し得るのだ。孫氏は痘瘡倒瘡を治する

二時珍曰く、古方には多く狸を用ゐ、今一般に貓を用ゐる。これは二

を殺し、并、及び痘瘡の變黑するもの、瘰癧、瘰癧を治す【時珍】

頭骨 氣味 甘し、溫にして毒なし【主 治】鬼、疰、蠱毒、心腹痛。蟲

その相制の意味を取つただけ。

【又、狐目、狸腦、鼠の穴を去る。』とある。『いづれも

一般にみえな癰子鼠を毒で起した。』とある。『狸頭は、及び鼠に

つて普通癰のやうにして空心に食ふとあり、不傳の法だ』といつてある。昔は一

ら。附後には、鼠瘻核腫の或は已に潰れて膿血を出すものを治するに、貓肉を取

で蠱は害し得なくなる。』とある。野道の貓鬼、野道の蠱の蠱のことだ

香油で調へ傳て内服には白斂末を酒で服す。多量に用ゐるを上にすると同時に同時に鼠糞石菖蒲を生で研つて盆ひんして微し破り、猫兒皮の毛のついたまを灰に焼き、**【癰】**癰中じゅうちゅうで煨いて性を存し、輕粉少量を入れ、油で調へて封する。（濟生秘覽）**【癰】**癰を附方つづか新六。

皮毛 **主 治** **【癰】**癰の諸瘡、癰疽の潰爛（時珍）

だ效がある（時珍）記載は楊氏經にある。

胞衣 **主 治** **【反胃】**反胃吐食には、灰に焼いて硃砂少量を入れ、舌下に壓す。甚

十五日の五更に酒で調へて服す（時珍）記載は直指にある。

肝 **主 治** **【勞瘵】**勞瘵に蟲を殺す。黑猫肝一具を生で晒して研末し、毎月の一日と

涎 **主 治** **【癰】**癰に刺して破つてこれを塗る（時珍）

舌 **主 治** **【癰】**癰、鼠瘻は、生で晒して研つて敷く（千金）

もだが、熱證にも用ゐるがよいといふことだ。

であつて、能く腎に入つて毒を發する。薬の内に猫牙があれば毒を解する
時珍。曰く、痘瘡が腎に歸すれば變黑するものだ。凡そ牙はみな腎の標

發 明

時珍曰、狸には數種ある、大いざは狐ほどのもの、毛は黄黒の雜色、貓のや
 糟食するが、藥に入れるといふことは聞かない。

だ。江の南の一種の牛尾狸といふは、その尾が牛のやうであつてある。その地方では多く

づれ、藥に入られる。肉の味は狐と相違ない。

二種あり、一は連錢のやう、一は虎のやうだ。い

宗。曰く、狸は形が貓に類するもので、この文に

その肉が甚だ香しいもので、^{微かに}鼻の香がある。

斑のあるものは佳くない。南方にある一種の香狸は、

く、虎の斑文のあるものは用ゐるに堪へる、貓の

頭。曰く、狸は處處にゐるもので、その類が甚だ多

肉や鼠に主效がある。

ものがいいが、しかし貓狸もやほり好いものだ。又、色が黄にして臭いものもある。

弘景曰く、狸は類が甚だ多い。今は一般に虎狸を用ゐて、^猫狸を用ゐる

ある。風とは指頭部分である。

集解



狸

野猫 (イ) 種伏を埋伏二同

野猫 (イ) 種伏を埋伏二同
野猫 (イ) 種伏を埋伏二同
野猫 (イ) 種伏を埋伏二同
野猫 (イ) 種伏を埋伏二同

釋名

野猫

時珍曰く、

狸

別錄中品

科名

科名

Lynx microtid, M. Edwards.

【ヒ】——といふ、その足には蹄あり、その跡には風音は鈕(チユ)とあり『

に從ふので、空居し種伏する獸だ』とあり、爾雅には狸(チユ)の子を狸(チユ)音は曳

とあり『狸(チユ)音は鈕(チユ)とあり、その跡には風音は鈕(チユ)とあり、狸(チユ)音は曳

錢を砂糖湯で服す。(葉氏摘玄)

一 痛むもの【猫兒尿を塗れば三五回で瘡を癒さる。心鏡】【駒哮喘】猫養を灰に燒き、

ける。(千金)鼠咬で瘡となつたもの【猫尿を揉みければ癒さる。(壽域方)】獸整で

し、油で調へて揉む。(儒門事親)【鬼頭禿】猫尿を灰に燒き、臘猪脂で和して傳

【外癰】癰癰の潰爛せるもの【猫尿を陰陽互で合せて鹽泥で固に濟し、煨いて研末

燒き、津で調へて塗る。(永類鈴方)【蠱注の腹痛】雄猫の尿を灰に燒いて水で服す。

を服す。立ち立るに瘡を癒さる。(溫居士方)【腰脚の錐脚】支腿の猫尿の灰に

蓋を服す。立ち立るに瘡を癒さる。(溫居士方)【腰脚の錐脚】支腿の猫尿の灰に

附方

舊、一、新七。

【小兒の癰疾】烏猫の尿一錢、桃仁七箇を共に煎して一蓋

ぬ。神を傷める。時珍曰く、内則に、狸を食ふには正脊を去る。人に利あらざる。た
る。人々に食つてはなす。正月に食つてはなす。【註】曰く、温なり。

氣味

登州島上にゐる海狸といふは、頭が狸で尾が魚である。

又、色で、澤中にゐて蟲、鼠、及び草根を食ふも、狐の音を迅といふ。又、鼠が、みかな帖伏して敢て出なす。『とある。』狸に似た一種で、甚だ小さく、黄斑
あるが、大いに能く酒を醒すもの。張母の廣雅に『玉面狸を捕へて煮つて置けば、
らゆる果實を食ふもので、冬期に極めて肥える。その地では多く糟にして珍品とす
るに似たものがあつて、牛尾狸といひ、また玉面狸といふ。専ら樹上に上つてあ
つて麝香の氣をなすもの。香狸といふ。即ち靈貓である。南方には白面にして尾が
に『安陸州から野猫、花猫を貢す』とある。二種である。豹のやうな文があ
る。黒白の錢文があつて相間するものは九節狸といひ、皮は裘領にも用ゐられる。宋史
に『狸といひ、善く蟲、鼠、果實を食ふ。その肉は臭なく、食へる。虎狸に似て尾は
氣は臭く、肉は食はれない。尾の大きなものは猫狸といひ、善く雞鴨を糲み取る。そ
うな斑があつて、頭が圓く尾の大きなものは猫狸といひ、善く雞鴨を糲み取る。そ

草類
安陸州
註
見
類
草部
見
類
草部
見

學名 Paradoxurus
 musanga, (Mar-
 den)
 和名 木村(重)
 科名 狸科
 属名 狸

科名 狸科
 属名 狸
 種名 風狸

風狸 (拾遺)

效がある【孟詵】灰に焼いて臘猪脂で和し、小兒の鬼疳に傅ける【千金】

屎 五月に採收して乾す。 【主 治】 灰に焼いて水で服すれば、鬼瘰癧熱に主

に潰れたるもの狸頭を灰に焼いて頻りに傅ける【千金】

も酥を塗つて黄に炙いて散し、毎日空心に錢とを米飲して服す。【理】 瘰癧の已

れいつい、狸頭骨を用ゐ、久しく焼えぬには、腫痛【理】 瘰癧腫痛【理】 瘰癧腫痛

治する神應丹には狸を用ゐ、身を焼いて薬に入れる。

時珍曰く、狸骨、猫骨は性相近いものだから通用し得る。衛生實鑑の諸風心癰を

用ゐてある。

發明

頤曰く、華佗の尸注を治するもの狸骨散といふが、あつて、その頭を

ば時、及び瘰癧を治するに甚だ效がある。【理】 瘰癧を殺し、瘰癧を治す【時珍】

に效驗がある【孟詵】宗頭曰く、骨を炙いて雄黄、麝香を入れ、丸にして服す

指せば欲する所のものが意の如くになる。『ともいふ。この二説は十洲記、及び嶺南
 て撃打し、極端に苦しめる。その所在を指し示す。人間がそれを取つてそれで物を
 指された物が動けなくなる。人間を見るときそれを持つてゐて、鳥獸を指すとそ
 げば死ぬ』といひ、一には『この獸は常に一枝を持つてゐて、鳥獸を指すとそ
 鐵でその頭を撃ち破つても風を得れば復た起つたが、ただ右肩蒲でその鼻を塞
 で焚いても焦げず、打てば皮の囊を打つやうなもので、火
 ば全く死んで了ふ。一には『刀で斬つても入らず、火
 奥して復活する。ただその骨を碎き、その脳を破れ
 それを打撃すると候ちに死ぬが、口を風に向けると須
 と差ち、叩頭して憐を乞ふやうな態度をする。人間が
 渡る。こゝと鳥の空中を飛ぶやうなものだ。その地の者が綱で捕るのだが、人を見
 て動かぬと鰯のやうで、夜になると風を因つてて膨躍して甚だ捷く、鼻を越え
 その尿は乳汁のやうだ。その性蜘蛛を食物とし、また薰陸の香をも吸ふ。晝は隠伏し
 た鼻から尾まで一筋に廣さ一寸ばかり、長、三、四、分の青毛が生えてゐるといふ。



【狸風】
 廣西

本草綱目獸部第五十一卷下

本草綱目獸部第五十一卷上終

尿

主

治

【諸風】(臟器)

【大風疾】(廣衡志)

【菊花を和して十斤まで服すれば長生し得る】(十洲記)

腦

主

治

【酒に浸して服すれば風疾を癒す】(時珍)

志に記載され、あることで、事實か否か判らない。

記載は嶺南志にある。

註
(一) 見子益州金部金ノ

學方產ノ狐を Vulpes ben-
galensis, Shaw.
(一) 日本村重(狐)曰ク、

獸の 11

(一) 狐

(別錄下品)

科學科
和名 Vulpes vulpes, (L.)
名 名
き い

釋名

和合しなさいものだ。故にその文字は狐に従ふ。或は『狐は膽實を知るの
時珍曰く、埤雅に狐は狐である。狐は性疑ふもので、疑へば同類と



[狐]

集解

は北方及び益州に産する。形は狸に似て黄に、
弘景曰く、江東には狐がゐる。狐に
從ふこともいふが、やはり通ずる。

善く魅をなす。

恭曰く、形は小黃狗に似て、鼻が尖り尾が太い。
全く狸に似てゐない。

類香澤ノ洛ハ註ヲ見ヨ
(三) 京部芳部京

一 名青邱ト「邱」東海ニ在リ
「澤」瀛洲ニ在リ
「京」嶽ノ海名ト記
「部」里ト光ト
「芳」東里ト
「京」子一里ト
「部」邱一里ト
「京」邱一里ト
「部」邱一里ト
「京」邱一里ト

「京」邱一里ト
「部」邱一里ト
「京」邱一里ト
「部」邱一里ト
「京」邱一里ト
「部」邱一里ト
「京」邱一里ト
「部」邱一里ト
「京」邱一里ト
「部」邱一里ト

せす』とある。
ふ。山海經には『青丘の山、狐あり、九尾にして能く人を食ふ。これを食べへば靈
て照せば眞の形を現はす』といひ、或は『犀角を穴に置けば歸らなくなる』とい
て火を出す』といつた。或は『狐魅は千年の老狐は千年の枯木を燃し
達する』と北斗を禮して男、女の姿に變化し、淫を以て人を惑す。又、能く尾を撃つ
善く氷を聽く』といひ、或は『狐は媚珠を有つてゐるといひ、或は『狐は百歳に
首する』といつた。或は『狐は上伏を知つて阡陌を度らぬ』といひ、或は『狐は
三徳を有するもの、其色は中和であり、前が小さくして後が大きく、死ねば丘に
腋の毛の純白なるを狐といふ。許慎は『妖黠であつて、鬼が乗つてゐるのだ。
出て食物を竊み、聲は嬰兒のやう、氣は極めて臆だ。毛皮は裘に作れるもので、
色のものは就中稀で、尾に白い錢のあるのが佳し。日中は穴に潛伏し、夜間に
時。曰く、南北にわかれ、北方に最も多く、黄、黒、白の三種あり、白
に捕獲するには多く宜く用ゐる。
頌曰く、今は江南に時にあつた。(三) 性疑多く、聴覺が鋭敏だ。故

して醉はゞらめしめる』とあり、高誘の註に『狐血で黍米、麥門冬を漬け、陰乾して信方にある。邪瘡を辟け、酒毒を解す』(時珍)萬畢術に『狐血に漬けた黍は人を研つて濯ぎ、喉に入れば活る。時を經過しては致し方がない』(蘇頌)記載は續水膽に臘月に取める。主 治 人の突然に絶息したるには、雄狐膽を溫水に

狐腸を灰に焼いて水濯ぐ。瀧に勝るものだ。

【毒臘月】臘月を焼いて末にし、方寸匕を水で服す。(千金)牛の病む疾。【赤。】中惡に

一丸を把つて嗅ぎ、同時に排肩に包んで手の中指に繫ける。(聖惠)【中惡に

て陰乾し、阿魏一分を末にし、醋糊で炙干す。鬼瘡寒熱【野狐肝、一丸つを排肩に裹み、男は

左、女は右の手の中指に繫ける。(聖惠)【野狐肝一具を新瓶に入は

北斗下の氣を受けて末にし、粳米で菹大豆の丸にし、一丸つを排肩に裹み、男は

【野狐肝一具を陰乾し、五月五日の五更の初刻に

附方

金烏散中にいづれもこれを用ゐてある。

を治する狐といふがあり、また衛生寶鑑の神應散、普濟方の破傷中風を治する

○【肝を灰に焼いて風癰、及び破傷風の口口緊、搗強を治す】(時珍)【古方に諸風驚癇

分出した。

もとは猫の條下に入れたが、本書では一條を

校 正

貉 カ音 貉 （ては）ある。 衍 （義） 科 名 和 名 名 科 名
 Nycterutes p. ocyonoides (Gray)

水で服す。(千金)

に冷瘡肉があるには、正月の狐糞を乾して末にし、一日二回、食前に一錢を新汲
 大の丸にし、發作時に男は左、女は右の手に丸を把つて臭ぐ。【一切の惡瘻中

醋糊で炭子

附 方

脂で封ずる【千金】

記載は崔元亮の海上方にある。【惡刺の肉に入りたるを療するには、焼いて臘月緒

を和して搗いて末にし、空腹に方寸を酒で服す。一日二回。甚だ效がある【蘇頌】

蒼として死灰の如く、喉に喘息する如くなるを治す。一二升を灰に焼き、薑黃三兩

これを焼けば惡を辟ける【別錄】瘰癧の氣を去る【蘇恭】肝氣で心痛し、顔色蒼

作ル。喉。大腫ニ狀ニ

恭○曰、竹木、及び石の尖頭に在るものがそれである。

○ 二 二

燒灰は惡を辟ける【日華】頭、尾の燒灰は牛疫を治す。水で和

皮主 治 邪魅を辟ける【時珍】

元荻煎酒で二錢を調へて服す。一日三回。屢效を擧げたる。(永類方)

し、砂鍋に入れ、固濟し、乾くを候つて炭火で紅く煨いて末にし、木香末一兩を入
山甲、蠟皮各三兩、黃明膠、白附子、五靈脂、蜀頭、川芎せんきやう各二兩を剉おろ細

附方 新 一
【痔漏】反花し、瀉血するに、狐の手、一足、副陰を乾し、穿

四足主治【痔漏下血】(時珍)

証を人にする。それを取る。

中瓶に
 狐を盛つて
 常に行く處に
 置くと、
 狐がつかみ
 取れぬので
 上を徘徊し
 瓶の中に

口中の涎液

主治

【媚薬に入れる】嘉謨曰く、これを取る法は、小口瓶に肉

唇 主 治

主 治



——獲
[猫]緒——

釋名

獲(獲器)貓

く、足が褐色だ。獲、貓三種は大體に於て相類するも、頭曰、貓は犬に似て矮い。喙が尖つて黒指頭の跡のことだ。

の跡は風がある。とある。踏とは足の掌のこと、風とはものだ。爾雅に『猫の子を獲といふ。その足は蹠で、その時。獲は圍んである。その形の狀く肥つた

貓

音(ハ)音(ア)音(カ)

(唐本草)

科名 和名 學名
猫科 Meles leptorhynchus, M. Edwards.

肉氣味

【甘し、溫にして毒なし】

主治

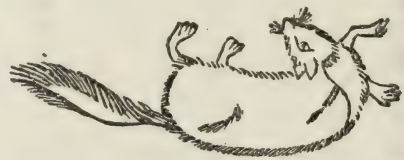
【元臟の虚寒、及び婦人の虚

備(蘇頌)

とあるが、いつれも誤だ。

南方では猫といふ、『星禽書』には『氏土の猫は千歳の猫狐が變化したものだ』

えれば死ぬ。その土地の氣に因つてである『とあり、王凌川は『北方では狐といひ、



〔貉〕

ればただ趨り出すのだ』といひ、考工記に『貉は汝を跡見とを好むけなく、耳が聾^{ろう}なのだ。それで人さへへてふ。俗に渴睡と書くは謬だ。俗間では又これに睡といふ。やはりまた寐^ねたて了ふ。故に人の好く睡るものを貉睡といふ。人を奇^{かし}ふこともあつて、竹を叩^{たた}くと醒めるが、かから出る時ときは權が随つて出るもつた。その性睡るもので、日中は潛伏し、夜間に出て蟲物を捕つて食ふ。穴を温く滑か裘^きにすゐるに似し。權と同穴にして異處する斑時^{はんとき}。曰く、貉は山野の間に生ずる。狐のやうで、頭は鋭く、鼻が尖り、毛は黄褐色だ。

集解

原。本に貉^をとしたのは詛^そだ。

子。貉^を——音は陌^を——といひ、その雌を貓^を——音は惱^を——といふとあ

は各に従ふのだ』とあり、説文には猶と書き、貉とも書いてある。爾雅には『獬^けの字時^{とき}。珍。曰く、按ずるに、字説に『貉と權^{かん}とは同穴に各處する。故に文字

釋名

集解

汪。狗頭曰、狗權は處の山野にゐる。土に穴を穿つて居るもので、形く。や。形は肥えて鈍い形である。蜀地方では天狗と呼ぶ。天狗の字はまた類にも書

釋名

狗獾 音は歡(カン)、天狗 時珍。科名 學名 Meles amurensis, Schrenk. 科名 和名 いたち

食物

〔五〕

主治

【上氣嗽】は、多く酒に研り、一日二回、三合を服して瘧を取

〔唐本草〕

主治

【蠱毒】は、臘月に乾したものを湯に摩り、雞ほどを空腹に服

主治

血するは、酒に和して服す。或は下し、或は吐し、或は自消する【催行功】

主治

【蜂蟻毒】で胸中に嘔吐し、恍惚として蟲が行くやうに覺え、效

〔吳瑞〕

して煮て食く【氣虛】上氣虛で、欬逆勢熱を治す。五味を和

肉 氣 味 【甘く酸し、平にして毒なし】 【主 治】 水脹の久しく瘥えずすは、煮て五味を和して食ふ。【孟詵】宗。曰く、野獸の中で、は、た入く瘥えぬは、肉を煮て一夜露し、空腹に嚙に和して一頃に食へば瘥える。瘦せたりは、瘥米、葱、豉、粥でに、羹にして食ふ。【丹石】を服して熱を動したるもの、下痢赤白の久しは、聖恵では、【蘇恭】あるに効に大して下して水を食はす。【蘇恭】あるに効に大して下して水を食はす。

肉氣味

『瑠璃は瑠璃なり』といふのも誤だ。

時○
猪ぶたの形に似たものだ。形が肥つて歩く、尾短く、足短く、毛は褐色だ。能く地に穴を穿ち、蟻、蟲、瓜果を食ふ。その皮毛は狗に及ばない。頭かぶの註したのまゝ狗の形に似たものだ。今のは今いまの猪獾のことで。穴の中に居し、形状は小

は短く、嘴は尖つて黒い。蒸して食へば極めて美味だ。

てゐるが、頭、しか方書に説いてあるその形状には差別がある。宗。曰く、鬚は肥えて矮く、毛は微灰色で、頭から脊に連る一筋の毛が黒く、尾のだが、頭、足が少し別である。郭璞註爾雅に『鬚、一名攢さん』といひ、一物と考へ

西(三) 川ハ四川省ノ部。

鳥類(二) 鷓鴣ノ江ナ註見林部

木 狗

綱(目) 科 學 和 名 名 科 學 和 名 名 科 學 和 名 名

Charonia flavigula, Radde.

集 解

し動ずるものだ。元の世祖は足疾があつて、これを取つて袴にした。それから一般に貴重されたが、前代には聞かぬかたがた『子(珍)とある。蜀人に聞いたとが、川西に交(交)いふが、大いさ狗ほど、あつて、黒く、尾も狗のやうで、その皮を裘、梅にすれば世



[狗 木] 西 廣

作ル。蛇、大觀ニ蛇ニ

魚類(ニ)魚、牛、魚、鱈、無見

同【時珍】

人に宜し【汪頤】小兒の疳瘦。蛇蠍を殺すにこれを噉くはふが宜し【蘇頌】功は蠍と

肉 氣味

【甘く酸し、平にして毒なし】

主治

【中を補し、氣を益し、

衣裘の材料とするが、やはこの類のものだ。

蟲、蟻、瓜、果を食物とする。又、遼東、女眞アムルの地方に海獺エナと深い毛、短く、尾

短く、毛は深く褐色で、頸に似てて、喙くちばしが、足あしは、

ふ。狗獺イヌクサは小に似て、種は相似てゐるが、やや異

このとで、種は相似てゐるが、やや異

時珍。曰く、獺イヌクサとは猪獺イナズナのこ、と、は狗獺

だ。甘美なもので、皮は裘になる。

る。數種あるが相似たものだ。その肉は味甚

は家狗イヌのやうだが脚が短く、果實を食物とす



狼筋 藏。曰く、狼筋は纏り結んだ袋子のやうでもあり、又、筋膠で作つたもの
 してこれを負ふて行く。故に狼といふのだ。

類曰く、狼の足は前が短く、後が長く、狼の足は後が短く、
 象は上尾に牽星に應ずるものである。

サ
 (三) 胡ト下ノ肉



〔狼〕

が袋のやうになる。(三) 胡をみ尾に肉
 る。老いるとその下に垂した肉
 如何に殘忍らしく踐み荒してあ
 み食ふ物で、動物を食つた跡は
 上つて斜にならぬ。その性善く顧
 その糞を烽火に用うれば烟が直に
 のだ。故に鳴けば後敵がみな沸く、
 入を魅するの山野に住む人は就中この物を冬鳴くを惡む。その腸は直い
 で、蒼灰色のものもある。その聲は大きく小きくも鳴き、小兒の啼聲を出し
 廣く、脚は甚だ高くはなぬ。能く雞、鴨、鼠などの動物を食ひ、その色は雜黄黒

ル(一) 子^リ 肋^リ 骨^リ 並^リ び 現^レ

は犬ほどの大いさで頭が鋭く、喙が尖り、頬は白く、脇がこ^こ駢^ハび、前が高く、後が食ふ。南方人の毛狗と呼ぶものがある。棲息するに穴を有つもの、その形を時珍^{時珍}曰く、狼は豺の屬であつて、處^こにゐるが北方に就中多く、喜んでこれをかみな沸く。

集解 藏器^{藏器}曰く、狼は狗ほどの大いさで色蒼く、聲を出して鳴くときは諸孔

といふとある。

ある。爾雅には『牡を^カ糴^カといひ、牝を狼といひ、その子を獾^ハ——音は叫^ケウ(ウ)とに立ち、先づその獸のいつれに向つて良きかを卜ふのだ。故に字は良に従ふ』と倒^{たか}る。

釋名

毛狗

時珍^{時珍}曰く、禽書に『狼は、食はんとして物を逐ふとさは能く

狼

(拾遺)

科名 學名

名 名 和 名 學 名

Canis rutilus, Pall.

れば定まる【時珍】記載は總錄にある。ゆる方法で奏效せぬを治す。狼尿中の骨と共に灰に燒き、等分を少量つづつ水で服す

【時珍】病にほ、日光で乾して末にし、牛錢をつつ、牛を飯に入れて食ふか

【主治】喉嚨

記載は小品の諸方にある。

【時珍】灰に焼いて水で方寸匕を服すれば、牛を食つた中毒を治す【時珍】

【主治】牙

これに佩ふれば邪惡の氣を辟ける。刮つて末にし、水で服す

つて補記して置く。

一説を述べてあるだけだ。缺陷といふべきである。本書には飲膳正要の諸書に據

が、本草にはいづれもその功用を記録してない。ただ陳藏子が狼筋に就いて疑似の

取り聚めることである。諸種の方にもやはり狼の壓^{おさ}、皮、糞を用とある

を食ふには腸を去るとしてある。周禮に獸人は冬狼を獻す【時珍】とあるは、その膏を

つて、古代には多く狼肉を食ひ、膏で飲食物を煎和したものだ。故に内に則には、狼

稻米にてて【時珍】とすなは、狼の胸臆中の膏を米に和して粥^{かゆ}に作ることであ

る。【時珍】曰く、臘月に煉淨して收取めらる。【時珍】に狼の膏を小さく切り、

【發明】

塗る【時珍】

膏

【主治】

【時珍】中を搗し、氣を益し、燥を潤ほし、敏を澤^{しやく}かにする。諸惡瘡に

(二) 胃腸ナリ。

(時珍) 記載は飲膳正要にある。

補益し、胃腸、胃を厚くし、骨髓を填^みてる。腹は冷積あるものはこれを食ふが宜し【】五臓を

主 治

氣 味

肉

雞卵ひよこより大さしいいふも膠ひよこだ。

筋で、實に實際にさした事實があつたわけではない。羅氏の爾雅翼の解に、狼胄中の事、實に實際は蓋し術者の作である。これが陳氏の所謂狼筋であるが、子が謂^もふに、さやうな事實は蓋し術者の作である。婢が臉を腫^はかしたので、それが器を竊^もんだのだからいふことが判明した【】とある。婢があつて、金巾を失つたとき、奴婢を庭に集めてこれを焚いた。するところには狼筋と書く。形状は大きな蠅^はのやうで、兩頭が尖り、黄色を帯びたのだ。一段一

時珍曰く、按ずるに、李石の續博物志に「唐の時に狼巾といふものがあつた。これが事實なや判らない。」

は、これは狼の胄^し下の筋だといひ、又、これは蟲が作るものだといふが、孰^し或^は重^しずるこそその脚が攣^くする。それでその眞犯人を逮捕し得るものだといふ。或のやうでもあり、大いには鴨卵ほどのものだ。物を盗んだ人間がある場合、これを

(一) 雄豪、未詳。
 (二) 雄、走ル。
 (三) 雄、輕ク走ル。
 (四) 雄、跳ク。
 (五) 雄、跳ク。

孕み、五个月にして子を吐く。その大なる
 懸捷に善く走り、雄豪を舐めて
 足が短い。尻に九孔があつて居し、
 唇が缺けて脾が長く、鬚があつて前上
 うで尾が短く、耳は大きくして鋭く、
 は狸ほどの大いでは毛は稀、形は鼠や
 時珍曰、按ずるに、事類に『兎
 ので、食品としての上味である。



集解

といひ、兎——音は護(サセ)——といふ『とあり、梵書には兎を舍迦(サセ)といつてある。

説文には『兎の子を甥——音は萬(マン)——といひ、按ずるに、魏子才の六書精義には『兎の字の篆文は

に、これれを明(アキラ)めといつてある。それは目が瞬(タビ)たか、瞬然たるものとの意味である。

形を象したものだ』とある。一には吐して子を生まむから兎といふといふ。禮記

釋名

明時珍

魏子才の六書精義には『兎の字の篆文は

ノ野
村(鬼)
重(種)
日(多)
支(類)
那(多)

科名 Lepus tolai, Pall.
學名 和名 別錄中品 (兔)

末にし、一、錢つのを米湯で調へて服す。口の乾くものならは治せぬ。(經驗方)

錢を
蟬蛻いんぜんせ各二

桑花、黄に炙る、穿腸骨四錢の破傷風【破傷風】

附方 新。一。

さる。又、能く酒を斷つ【千金】

定ば服す水を灰に焼いて【黍米ほどを水で灰に焼いて】小兒の夜啼には、

尿中骨 主 治 灰に焼いて水で服す【時珍】記載は外臺、千金方にある。

尿 主 治 瘰癧には、灰に焼き、油で調へて封する。又、骨哽の下ら治

尾 主 治 馬の胸前に繫ければ邪氣を辟け、馬を驚かす【正要】

ば羊が外へ出ない【とある】

を勸れば能く風を去り、痛を止め【正要】淮南萬畢術に『狼皮を戸に當てて置

皮 主 治 人を暖め、邪惡の氣を辟ける。○嚔下さの皮を揉つて條にし、頭

妙である【聖惠】

すること甚しい。斑爛して人を損ずる毒がある。

するに必ず五味を用ゐる。既に往に豌豆瘡を患つたものがまた此の物を食へば發毒に
の、その時は金は氣が完が、春、夏になると味が變る。さやになわけて醬に
を得たもので、藥に入れて就中效がある。凡そ兎は秋き時期に入つて食ふべき氣
宗。兎曰く、兎は明の精であつて、白毛のものである。それは金の氣

發明

を去る【藥性】血を涼し、熱毒を解し、大腸を利す【時珍】

る。【五】食へば丹石の毒を壓す【日華】臘月に醬を食へば小兒の豌豆瘡
【主 治】中【氣を補し、氣を益す【別錄】熱氣、痺痺。痺渴を止め、脾を健にす

氣を傷める。兎の死んで眼の合するものは人を殺す。

陽事を損して痿黄せしめる。八月から十月までは食へるが、その他の月には人の神
唇が缺けるからいふだけではない。概して久し食へば人の血脈を絶ち、元氣だ
藏。曰く、兎の尻には孔があり、子口はから出る。故に妊婦はこれを忌む。

又、茅と共に食つてはなぬ。

獾肉くじらと合せて食へば通戸を病ましめる。蓋、橘きつと共に食へば心痛し、霍亂せしめる。

鹿鹿 多食、大觀ニ生

るものだ。白雞の肉、及び肝、心と合せて食つてはならぬ。人の面を黄ならしめる。
弘景曰く、兔肉は羹にすれば人を益する。妊婦は食つてはならぬ。子の唇が缺け
とある。
らぬものだ』『とあり、風俗通には『兔を食へば多く人の面に骸骨を生ぜしめる』
時珍曰く、甘し、寒なり。内則に『兔を食ふに尻を去る。人に利あ
肉 氣 味 辛し、平にして毒なし』詠曰く、酸し、冷なり。
ば、雅述に『兔は漆を以て醃となり、醃は早を以て兔となく。焚惑明ならざれ
の毛に文あり、百五十年に至つて環腦に轉じ、能く形を隠す』とある。王延相
に見てもその疑は破れるであらう』とある。主物體には『孕環』は左腋懷
る。現に雄兔は二箇の卵がある。占樂府に『雄兔の脚捷、雌兔の眼迷離』とあ
る。兔は雄がなく、中秋に月中の顧兔を望んで孕むなどいふが、荒唐無稽の説であ
ると同じく、足は鹿と同じものだ。故にその文字はその形を象したのである。或は、
をば變——音ハ綽——といふ。これは兔に似て大きく、色が青く、兔

用いて耳聾^{じゆうそう}を治す^(無毒)

腦

主

治

【凍瘡に塗る】

【別錄】

【分婁を催し、胎を滑する】

【時珍】

【隨と共に】

二十丸をつつを白湯で服す。

して服す。○譚樞方では、臘月八月に活兔血を取り、麝を和して梧子大の丸にし、兔血で茶末四兩、乳香二兩を和し、搗いて茨子大^{だい}の丸にし、一丸をつつを溫醋で陰乾して末にし、二錢をつつを香湯で服す。指迷方^{しへいめい}【心氣痛餅を蒸肉を紙に裹んで妙である。】劉氏保壽方^{りうしほうじゆ}【丹生】催産を治す。臘月の兔血で蒸餅を紙に裹んで點を發出するがその微驗である。但しその兒が成長してか常に兔肉を啖^くふが尤もつて菴豆ほどの大いさの丸にし、初生小兒には乳汁で二三丸を送する。全身に紅生兔一疋を取り、血を刺し取つて蕎麥少量を和し、雄黃^{ゆうわう}四分五厘を加へ、乾く候に【兔血丸】小兒がこれ服すれば終身痘瘡が出ない。或は出て稀だ。臘月八日だ效がある。○楊氏經驗方では、硃砂三錢を加へて酒で服し、兔砂丸と名けてある。にし、三十九丸をつつを綠豆湯で服す。一兒に劑つつを食はせれば、永く平安を得て甚に臘月八日に血を漆盤内に刺し取り、それで細麝を炒熟したものを和して緑豆大の丸

發するを治し、これを服すれば免れる。出るにしていともまた稀である。兎二疔を用ゐ、

瘡を

【附方】

新六。

【蟾宮丸】

乾坤秘

の熱毒を解し、分娩を催して産を容易にする【時珍】

血氣味【主治】血を涼し、血を活し、胎中

上方

て瘡を去つて澄し冷し、渴渴したとき飲む。極めて重きものも二兎に過ぎぬ。崔元亮海

附方【附方】消渴瘦【兎二疔】瘡を去り、水一斗半で煎稠し

ら通ずる』とある。またその性の寒、利することの證である。

劉純の治例に『反胃、結腸の甚きものは難治であるが、常に兎肉を食へば便が自

を壓する。瘡が已に出たもの場合、及び腫するものには警戒すへきものである。

れもその性寒にして熱を解するからこのことだ。故にまた能く消渴を治し、丹石の毒

間でこれを小兒に飼はせ、瘡がひどく出ないやうにするのだといつてゐる。蓋し你

味が美であるが、春になると草や麥を食つて金氣が衰へるから美味でない。今は你

時珍。曰く、兎は冬期になると木の皮を乾か、金氣を得て金氣が内實するから

骨

主治

【熱中消渴には煮汁を服す】（別錄）

○頤曰く、崔元亮の海上方に

ずる。熱痛は水のやうになる。頻に換へ、瘥を取つて止める。（金勝）

ミ爛らして瓶に入れて密封し、久しく封く瘥すほど佳し。それを帛上に塗つて厚く封

鬼腦髓を以て塗る。（聖惠）【發腦、發骨】及び癰疽、熱癰、は、臘月（兔頭）を搗

冷酒で一丸を服すれば瘥える。これは神仙の方である。（經驗方）【手、足】の（裂）破

て風に透る所に懸け、一丸つづつを溫湯で服す。良久してなほ産ぬきとは更に

紙に藥を包んで一夜露し、夜明前に豬肉を搗き和して茨子大の丸にし、紙袋に盛つ

願くは威靈を降して此の藥を佐助し、速に生産せしめたまへ（禱）と唱へ、禱り畢つ

を焚き、北を望んで拜して『大道弟子某、世上の難生の婦人を救ふの藥を修合す。

に研り勻ぜ、臘日前夜、卓子上に置いて星月下に露し、茶果を供へ、齋戒して香

【丹】臘月に取つた鬼腦髓一箇を紙上に塗つて吹き乾し、通乳香末二兩を入れて共

時、釵（銀）股で夾んで燈火で灰に燒き、丁香（香）を煎じて酒で調てて服す。（博濟方）【催生

陰乾し、剪つて符子にし、その表面に「生」の字一箇を書き、母が痛みの極まる

【催生散】臘月（兔頭）の鬼腦髓一箇を紙上に攤（攤）ひ、平均（平均）に夾んで

附方

舊二、新二

字アリ。大觀二北下帝

大觀二產二作

【附方】新五。【明月丹】勞瘵を治し、蟲を退ふ。兔屎四十九粒、兔屎

つたの、夢の意味が判つた『とある。

さて贈つて來たが、それをして遂に平癒した。その方を訊ねて見ると明と月丹であつて、心、骨みな寒からしめる夢と。瘧が癒めてから孫規が使に藥を持たしくやうに寒熱し煩躁したが、ある夜、ある人が腹に一の月を擁し、その光明が人のはやりはり寒熱漏だ。按ずる中に往々にて用ゐてある。諸家の本草にいづれも言及しなかつた瘵、勞瘵、瘵、勞瘵、瘵を殺す。故に目疾、瘵を殺す。【時珍】

【主 治】目、浮腫、勞瘵、五瘵、瘵、瘵。【時珍】

釋名

【附方】新二。【明月砂】聖惠。【新月砂】集驗。【兔屎】炮炙論。

【附方】新二。【明月砂】聖惠。【新月砂】集驗。【兔屎】炮炙論。

【附方】新二。【明月砂】聖惠。【新月砂】集驗。【兔屎】炮炙論。

肝

【目曙】(別錄)

【目を明し、心を補ふ】

頭う旋せん

【車】(車)

○方法のやうにして生で食へば、丹右の毒毒が上上衝衝して目目暗暗く、物物を見見得得ざるを治治食食と決決明明子子を和和して丸丸にして服服すれば、甚甚だ目目を明明にする。【切切つ洗洗ひ、羊羊肝肝を食食】

【孟子】

發明

時珍曰、按ずるに、『劉守眞は「兎肝が目を明にするは、その氣の有

あはれ

あぢきなく、
「さういふ性質の
おとこは」

附方

附方 兔肝、具、米三合、漿汁（漿汁を）で和し、普通のやうに粥に煮て食ふ（羹）。新。【風熱目暗】肝、腎の氣虛で風熱が上攻し、目が腫れて暗さに

皮毛

皮毛 臘月に收取する。
主治】灰に燒いて酒で方寸匕を服すれば、産難、

【あるに在つて】(藥性)皮中にある主効は、皮膚を治し、毛灰は小便不利を治す。その他は敗筆が、皮膚の帯下を治し、毛灰は小便利あり、主効がある、毛灰は灸瘻、鼠瘻、及び鬼毒氣の餘血が心を搶いて腹刺して死せんとするものを治し、及び胞衣の出ぬもの、煎湯で洗ふ【頭皮】(藥性)の灰は、灸瘻、鼠瘻、及び鬼毒氣の餘血が心を搶いて腹刺して死せんとするものを治し、及び胞衣の出ぬもの、煎湯で洗ふ

服すべし。立に効がある。【難産の催生】勝金方では、聖妙寸金散——敗毒

灰に燒いて水で服す。外臺【心痛の止まぬもの】敗筆頭三箇を灰に燒き、無根水で

附方
舊、二、新。一。
【小便不通】數にして微腫するは、陣久なる頭一箇を

で沾濡してある點を取るのである。膠墨は能く小便、胎産を利するものだからだ。

發明
時珍曰、く、筆は、新しきしを用ゐずして、敗れたるを用ゐるは、そのの膠薬

ば咽喉痛で飲食物の下らぬを治す【時珍】記載は范汪方にある。

婚のの夕の素を治す【薬性】酒一二錢を服す。難産を治す。漿飲で一二錢を服す。

小便、數難、淋瀝、陰腫、脫肛、
中惡を治す【唐本】酒で二錢を服すれば、男が萎

筆頭灰 氣味

のものだけを使ひ用に入る。

兎臺で筆を作ら、後世ではまた、鼠の毛で作るやうになつたのだ。しかし兎臺

集解 時珍曰、上古には殺青して竹帛に書いたものが、
 (二) 蒙恬の時に

頭ス。是。始。年。紀。前。二。〇〇。年。征。年。
 人。西。紀。前。年。奴。秦。ノ。時。
 (三) 法。方。且。サ。出。リ。易。ク。汗。富。文。
 方。且。サ。出。リ。易。ク。汗。富。文。

敗筆 唐本草(英和譯名) Warned brush-pencil やぶたふて

2587456

水で調へて服す。百に一も失たない。その效神の如きものだ。(蘭氏經驗方)
もふらずに兔尿十四粒を尋ね取り、雌雄の檳榔各一箇と共に磨り、地に落さず井
すれば平安になる。(聖濟方)【痘後の目瞤】直ちに山中に往き、東西の地上で、目
に入らるもの【醫を生ずるには、兔尿を目光で乾して末にし、一錢づつを茶で服
夜に兔尿を取り、蠅臺の腹中に納れて共に焼き、末にして傳ける。(肘後)】痘瘡の
れ、空心に溫酒で服す。一日三服。即ち兔糞である。(集驗方)【月蝕に乳香十五分を入
も【止まぬには、翫月砂を慢火で黄に炒つて末にし、毎服二錢に香五分を入
一匙を臍中に置き、冷水を滴して透らすれば自通する。(聖惠)】痔瘡で蟲を下す
どの大いさに裏んで下部に納れ、一日三回易へる。(聖惠方)【大、小便秘】明月砂
【五疳下痢】兔尿を炒つて生兩、乾したた臺(臺)に灰に焼いて末にし、綿子連子ほ
らば急に鉗(鉗)んで油鍋に入れて煎し殺す。三日にして下らぬときは再服する。(蘇氏良方)
で甘草を一夜浸して五更の初刻に汁を取り、それで十七丸を服する。蟲が下つたな
どの大いさの礪砂(礪砂)四十九粒を末にし、生蠶で梧子の大丸にし、十五日の月の前に水

ある。故に女字は大に從ひ、獺に從ふのだ。大なるを獺——音は蜜(ミツ)——といひ、本に報(は)いに反(か)つて多(おほ)く、獸として多(おほ)く、その形が狗に似て祭(まつ)す。水狗(みづいぬ) 王(わ)氏(し)の字(じ)に説(せつ)に十月(じゅうがつ)に二(に)回(かい)魚(ぎょ)を祭(まつ)す。

釋名

水獺 別錄下品

科名 水獺
學名 *Lutra sinensis*, Gray.
和名 水獺

主治

【藥箭の毒を解す。少量を研(ひ)つて敷(の)けば立ちに消(き)する】(時珍)

骨(ほね)に酒(さけ)に少量(りょうりやう)を磨(こ)つて服(の)す。獺(た)人はこれに要(よう)藥(りやく)とす(時珍)

陰毒

氣味

【甘(かん)し、熱(ねつ)にして毒(どく)なし】

主治

【陽虛(やうきょ)陰痿(いんゐ)で精寒(せいかん)して清(きよ)な

中(なかに)あるのだが、その形狀(けいじやう)の記載(きざい)がない。これも文獻(ぶんけん)として(時珍)の陽虛(やうきょ)陰痿(いんゐ)で精寒(せいかん)して清(きよ)な

蓋(かき)し陰氣(いんき)に感(かん)ずるからである。これ等の話(は)は范石湖(はんせきこ)の虎衡志(こけいし)、周卓窗(しゅうたくわう)の齊東野語(せいとうぎよ)の

て極(ごく)熱(ねつ)せしめ、掌(てのひら)心に置(お)いて強(こ)く氣(き)を吹(ふ)かきける(時珍)然(しか)して動(うご)くものが眞物(まぶつ)だ。

鼠(ねずみ)や獺(た)の胎(は)物を作(つく)る。その眞偽(まゐ)を試(こ)みる法(は)は、ただ婦人(ふじん)の手(て)でそれを摩(さ)擦(さ)し

はれる。しかしその土地(ち)でもやはり普通(ふつう)にあるものでないで、ではないので、方士(ほうし)は多(おほ)くは(時珍)

ナリト。持(も)つて、
(三) 獺(た)ノ意(い)ナ
カチノ意(い)ナ
魚(ぎょ)ノ意(い)ナ
(一) 獺(た)ノ意(い)ナ

(一) 獺(た)ノ意(い)ナ
(二) 獺(た)ノ意(い)ナ
(三) 獺(た)ノ意(い)ナ
(四) 獺(た)ノ意(い)ナ
(五) 獺(た)ノ意(い)ナ

府ニ屬ス。廣州ハ南海ノ族見。宋ノ地。嶺南ノ石部。丹砂ノ嶺。嶺南ノ石部。丹砂ノ嶺。嶺南ノ石部。丹砂ノ嶺。

て高價に値し、麝きさでは甚だ珍重し、それをその蠻界から他に密賣すれば死刑に行
 一箇取れば金きん一兩の値になる。木を抱いて死んだものを取れば就中珍しいもの
 一つと牢として脱だつけなくなる。そこでそれを扼おさして背負ふて歸るのだが。その陰を
 事とするが、獼奴みどが婦人の氣を嗅かぎつと必かならずず躍はなつて來て抱きつき、骨に次いで入
 ふ。獼奴みどの蠻女共は春期に大勢揃つて山に入り、山のさざの物を採ることを仕
 がみな避け去る。する獼奴みどは配偶するものがなく、無くなるので木を抱いて枯死して
 ては抑おさえと呼んでゐる。その性淫毒なもので、山中にこの物があつては此の地
 時。曰く、山獼さんみどは廣の宜州ぎしゅう、及び南丹州に産し、その土地

集解

科名未詳
 學名未詳
 和名未詳

山獼(綱)目

方では、兎の毫の筆頭三箇を灰に燒き、金箔三片と蠟ろうと和して丸にし、酒で服す。
 一の場合、及び元來冷疾があるもの場合は温汁で服す。○陸氏の難を治する第一
 頭一箇を灰に燒いて研ひき、生藕汁せいこうじゅう一盞で調へて服す。立ちろに産する。母の虚弱

臟及び骨頭のついたまゝ乾して末にし、一日二回、水で方寸匕を服す。十五

發明

熱、大、骨蒸、熱、勞、熱、男、婦、經、絡、不、通、の、熱、風、毒、汁、を、服、す、れ、ば、及、び、牛、馬、の、時、行、病、を、療、す、【別錄】水氣脹滿、熱、

治 兔肉と雞を食つてはならぬ。

【し思。】曰く、甘く、温なり。弘景曰く、寒く、毒なり。【味。】氣味

もい。

【獺水】



と。故に獺が鳴けば獺がそれ候つる。或は『獺は雌なく、獺を以て雌とあるが、甚だ敏捷だ。またた白色のものもあるが、往々に奇ひ馴して魚を捕らせし具はる性である。現に河の獺夫は

湖北（五）河、川、四、

等ノ二、大、頭、下、尾、字、ヲ、觀、ニ、秘、ニ、瀝、

候ナリ。種ノ水信ノ變化ニ生

(三) 蠶服ハ毛衣。

集解

代には『熊は鹽を食つて死し、獺は酒を飲んで斃る』なる語があつたが、それは物つくるので、郷人はそれであつて、獺と早く風を占ふ。鵲集で風を知らやうなものだ。古やう、尾長く、四足あり、水に棲息して魚を食物とする。能く水信を知つて穴を時。曰く、獺は形狀が青狐のやうで小さく、毛色は青黒で、狗のやう、膚は伏翼の著せぬもので、風聲目如きはたそれであつて、去るものだといふ。圻が藥に旋轉して水がみな旋渦をなした。西戎ではその皮で虎の服を飾る。圻が藥に居、た木上にも休む。嘗て大甕の中へ置いて置いて、風の中やうに紫のやうで、大なるものは身と尾と長さ三尺餘あり、魚を食物として水中に頤。曰く、江、湖に多くゐる。四足俱に短く、尾と身、毛は色が故。馬のやう、身は蝙蝠に似たもので、薬用に入れない。形は大きくして頸がた、魚を以て天を祭るもののみを取る。一、種の獺といふは、形は大きくして頸が獺といふ、獺は多く溪岸の邊に産する。兩種あるが、薬に入れるは獺といふ——音は編(ハ)とある。又、又、鹽譚の鹽鐵論には、獺なるを獺とし、羣が

發明 宗。或曰、癩肝の癆を治することとは實際上認められる。

【癆癰】 癰を殺す【時珍】

作ル。元。大癰ニ嗽ヲ瘦ニ

虚癆、嗽病を治す【藥性】傳尸癆極で虚汗し、客熱するもの、四肢の寒瘡、及び産

毒。久嗽を止め、魚鱗を除く。いづれも灰に焼いて酒で服す【別錄】上気咳、

肉、及び五臟はいづれも寒であるが、肝だけは温である。【主治】鬼疰、

氣味 温し、甘し、温にして毒あり【甄權】鹹く、微熱にして毒なし。頤曰。

を見て調へる必要がある。調へねば偽物が多い。

月に一葉、十二月に十葉で、その間にまた退葉がある。これを用ゐるにはその形

肝 頤曰、諸種の奇類の肝葉はいづれも一定したた数があるが、癩の肝だけは

作ル。元。布。大觀ニ昂子

布で裹む。立ちに疼痛を止める。(經驗後方)

燒いて性を存して末にし、黄米で煮た粥を患部に攤いてその上から癰末を糝り、

【折傷】 水癰を支援し、罐に入れて固濟し、乾くを待つて

を治すだけだ。冷を治せぬ。その性の寒なるがためだ。

日にして瘥える。冷氣虚脹のものならこれを服するが甚だ益がある。しかし只熱

る。赤には赤糞を用ゐ、白には白糞を用ゐる【時珍】記載は古今録驗にある。

【下痢を治するに】は、焼いて末にし、早朝に一小盞を飲服す。三服にして瘥を止

める【藏器】曰く、また馬の鹽類、及び牛の痰に疾にも主效がある。水に研つて瀉

尿【主】魚膽を、研末して水で和して敷く。それで膿が出て痛が止

ける【藏器】産母がこれを帯びれば産を容易にする【張傑】

【皮膚】煮汁を服すれば水瘰癧を治す。また癰、及び癰癧に作つて著

で喉下を爪（爬）【未】にして酒で服すれば癰癧を殺す【時珍】

足【主】手、足の皸裂（皸裂）を服すれば魚骨癰を治す。并にこれ

【主】治す【藥性】

骨【主】治【これを含めば魚骨を下す】【陶弘景】煮汁を服すれば癰癧（癰癧）の止

た癰癧が多過ぎたのでやはりは、癰癧のやうな赤點が残つたところある。

なる【時珍】大醫が、白癰癧と癰癧を、それを膏に合せて瘥をたが、

流れて啼叫した。この時大醫が、白癰癧と癰癧を、それを膏に合せて瘥をたが、

【發明】時珍曰く、按ずるに、集異記に、『吳主の鄧夫人が如意で頰を傷め、血

足（二）作（レ）大觀
取

鹽

主治

【癰疽を去る時珍】

一日一服、五丸、つづつ常歸酒で服す。(聖惠方)

一つて汗目を去る、各一分、水蛭を黄に炒いて十箇を末にし、醋糊で黍豆大の丸にし、

【附方】新二 月經不通【癰疽肝丸】——乾癰膽、乾狗膽、川椒を炒

が蓋面よりやや高く盛り上るだけのこと。蓋し安傳である。但し孟の層へ塗る酒と

いふが、或は犀角の箇に塗り、それで酒の中へ晝け酒が、兩分するといふ意味だ

を竹刀、或は犀角の箇に塗り、それで酒の中へ晝け酒が、兩分するといふ意味だ

【正誤】宗奭曰く、古語に『蟻肪は玉を軟げ、癰疽は孟を分つとあつて、

な黒花が見え、物を視て明ならぬには、點藥中に入る【蘇頌】

【附方】新二 氣味 氣味 苦し、寒にして毒なし【主治】男子を益す【蘇頌】

は、癰疽肝一副を煮熟し、五味を入れて食ふが妙である。(飲膳正要)

【附方】新二 氣味 氣味 苦し、寒にして毒なし【主治】男子を益す【蘇頌】

は、癰疽肝一副を煮熟し、五味を入れて食ふが妙である。(飲膳正要)

【附方】新二 氣味 氣味 苦し、寒にして毒なし【主治】男子を益す【蘇頌】

海獺(拾遺)

和名 ころも

Enhydra marina, Schreb.

名 姓

集解

藏○器○曰○、
海○、
瀬○

集解
解
海獺は水著に似て大さく、犬のやうで脚下に生ずる。獺な心。その地のもはやありその肉に

(1) 木村(重)日、

無
し
ふ
ハ
無

離、ち、い、せ、ハ、馬

ハ、あ、じ、か、及、エ、と、フ、と、

Enhydra

lutris, (L).

風領 (二)

● 十

事物志に記載されてゐる。

時珍曰、獐より大きく、
獐より小い。やはこれとも獐である。今は一般にそ

の皮を(三)風傾として、貂^{てん}に^く亞^あのものとてねる。如淳の博物志の註に『海獺は、頭は

馬のやう、腰以下は蠕蠕に、その毛は獺に似てゐる。大なるは五六十斤あつて、や

はり亭で食へるのや『とある。

黒色、前兩足なく、能く鼠を描る」とあり、郭璞は『晉書』の「召陵の虎」を援へて、美縣といふは鱗を連ねて取るからだと又、異物志には『猼訑(わうたひ)は鮮に産し、羅似て青と、魚に似たりといふはその尾の形のことである。藥川に入れば外腎はあるが、鱗でたとか鹿に似たりとかいふはその毛色だけのこと、狗に似たりといふはその足の形の似た胸と名ける』『とある。これで見ると狐と似たりといふとの説は無ではない。蓋し狐に似た狐に似て脚高く、矢の如く走つて飛ぶやうなものだ。その腎を取つて油に漬け、臘(ろう)は狐に似たり、一、統志には『臘胸(ろうきゅう)は女眞及び三佛齊國に産する。獸はその時珍、按ずるに、唐書に『骨貄戰(こつせつかん)、遼西、營州(ようしゅう)及び結骨國に産する。腹膺(ふくよう)の積冷(せきれい)、裘(ゆ)、脾、腎の勞極を治するに有功なもので、別段試験するまでもない。ものである。狐に似たりといふ語は一般に多く読まれぬがい。いも腹膺の積冷、裘、脾、腎の勞極を治するに有功なもので、別段試験するまでもない。その膚色は、毛上に深く黒い。今、今日登萊州に産する。その形状は狗にも犬にも異なるが、密に淡青白の毛がある。

のやうになつてゐるものか眞物なう。

なつてゐる。或は、睡た夫の頭に置いて置くとき、その大が忽ち驚き跳ね狂気に生えてゐる。丸を器の中に收めて置くとき、年が肉に自ら皮の上にも毛孔の二三に薄皮に裹まれば、丸核の皮もその物には別であつて、眞物は一対が二重に取つて骨髄に充ちてゐる。偽物は海の中に水鳥龍といふ獸があつて、海人がそれを敷く、鹽膂に^あはれ置き、水を入れて置き、それにして浸して凍らぬものか眞物だ』とある。

ゐてゐる。異魚圖には『その臍を試するに、臘月に風の真向に當る場所に盆に盛にその臍を紅紫色で上紫の斑點があり、全く類似して居ぬ。醫家は多くこれを引用し、滄州から提出した圖に據ると、これは魚類であつて、家のやう、兩足あり、頤（五）曰く、今は東海の近海にもゐる。舊説では狐尾に似て、尾が長いといふが、現に

江戸 濱州から提出した圖に據ると、これは魚類であつて、首は家のやう、兩足あり、
 頤。曰く、今は東の海の近海にもゐる。舊説では狐に似て、尾が長いといふが、現に

の香美なるのた。

でゐる。崑崙家（こんんけ）が弓矢でそれらを射て外腎を取り、百日間陰乾するのであつて、味に産する。形状は鹿の形のおうで、頭は狗に似て尾が長い。毎日（三）出て水面に浮ん

京華邸草八州（五）

ノ使用(四)人。トサトルカ。
 來人馬奴隷ハトスルカ。
 大觀二毎下遇

03

功時。猿轡に非ざれば、能くするべしといふのである。この獸が水中で火を生ずることは、樟脳と同じやうなものだ。その功も樟脳と似たものであらう。ただ現在では、それに關する智識のあるものが、

滅え。る。屋根の、ある。場の、に。は。貯藏せられ、ないもの。だ。故に。『水。中。に。火。を。生。ず。る。と。は。油。が。水。に。沿。つ。て。海。中。に。名。を。猜。と。いふ。獸。が。あ。る。そ。の。體。を。油。の。中。に。入。れ。る。と。い。ふ。』

獵(おと)
名。カ
ク。

(砲) 矢論科學和名未詳

酒に醗して服す。

するわけだ。概して、瑣陽の功に近似したものである。また糯米、法麴と共に

今の滋補の丸薬中に多くこれを用ゐてある。精不足の者はこれを用ゐてこれを補するに味を以て當、

發明

時珍。

和劑局方には、諸虛損を治するに鹽朮丸といふが、

虚で背膊が勞、問し、顔色黒く、精冷なるに最も良し【海藥】

を助け、驚狂癰疾を療す【日華】五勞七傷で陰痿して力を少く、腎

勞となつて瘦悴せるものを治す【藥性】中を補し、腎氣を益し、腰膝を暖め、陽氣

結塊、痰癖、羸瘦【藏器】男子の宿癥、氣塊、積勞、腎精衰損、多色のため血

主治

鬼氣、尸注、夢に鬼と交るも、鬼魅、狐魅の心腹痛、中惡邪氣、宿

氣味

鹹し、大熱にして毒なし【李珣】味甘く、味甘く、香美にして大温なり。

樟腦と共に貯藏すれば壞れない。

炙いて剉み搗き、或は銀器に入れ、酒で煎し熟して藥に合せ。時珍曰く、胡椒、

鹽朮

一名海狗腎

修治

ふはこの類かも知れぬ。

據ると豹には水、陸の二種あることになるから、藏器の所謂狐に似て尾が長いといふに

集解

弘景曰く、藥に入れるには牡鼠、即ち父鼠を用ゐる。その膽は死んだ

したものだ。

ぶこを諱んで家鹿と呼んでゐる。鼠の字の篆文はその頭、齒、腹、尾の形を容

ぶ。その性疑つて果さぬものだから首鼠といふ。嶺南方ではこれを食ひ、名を呼

こから、南方では驪鼠といふ。壽命が最も長いところから俗に老鼠と呼

く、これは人家に普通にある鼠である。その尖りたる喙で善く家に穴を明ける

釋名

鼯鼠

音は錐(ス)である。

老鼠(綱目)

(首鼠)史記

家鹿

時珍曰

部に移し入れた。

校正

もとは蟲魚部にあつたが、本書では爾雅に據つて獸

鼠

(別錄下品)

科名和名

鼠名鼠

Rattus rattus, Linne.

鼠名鼠

獸の三鼠類十二種

類(二) 鼯ノ註 見。 鼠ハ 部 山 草

鼯鼠(ハク) 音は豚(ブ)である。『北方に比肩と云ふがある。』
巨鼠キウスと作

穴の外に居り、鼠は穴の内に居る。『と云つた。

だ。そこに棲む鼠を鼯といふ。形は家鼠のやうで、色が少し黄で尾が短い。鳥色

在る。そこに棲む鳥を鼯——音は徐(シュ)といふ。形は家雀のやうで黄黒に

鼯鼠ハク 音は突(ツ)である。郭璞は『鳥鼠同穴山、今の隴西、陽山の西南

布を火浣布といふ。

及び草の皮、いつれも布に織れるもので、汚れたときは焼けば清くなる。その

春、夏に生じ、秋、冬に死息する。鼠はその中に産するので、甚だ大きく、その毛、

火鼠カウス 李時珍曰く、西域、及び南海の火州に産する。その山には野火があり、

で、席になる。これに臥せは寒を却け、これを食へば熱を已むといつた。

氷鼠ヒウス 東方朔は『北方遙かなる蠻地の氷水の下に生ずる。皮毛は甚だ柔なもの

魚、小蟹の變化したものだともいふ。

水鼠スイウス 李時珍曰く、鼠に似て小さく、莖、葉、魚、蝦を食物とする。或は、小

である。

水鼠スイウス 一種、(重)曰く、

魚、小蟹の變化したものだともいふ。

學名 *Avicola amphibius*, L.

一種は *Chimarrogale*

一種は *platicephalus* (Tem.)

(四) 火鼠、爪哇、指

詳。米。州。

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

在。隴西、陽山、西南

字二。大。鼠。下。皮。

去つて涼くなる。(經方)。【老鼠】の合はぬもの。一箇を燒き、末にして傅けを帶びた膏になつたときと差瓶に取收めて火毒を出し、用ゐるに貼る。痛がみず攪勻せ、水に滴して珠に成るやうになつたとき黄丹一兩を投じ、柳枝で手散らぬやうになつたとき澱して再び煎し、炒つた紫黄丹五兩を投じ、柳枝で住る。(經方)。【瘡腫熱痛】靈鼠膏——大雄鼠一箇、清油一斤煎焦し、水に滴して煎じ浄め、一日に三回、先づ布で拭つて赤くしてから塗り、水風を避ける妙法だといつた。(葛氏)。【諸種の瘡痕を滅す】大鼠一箇を臘脂四兩で銷盡する。歳の臘緒脂でて煎じ盡し、その半をば塗り、一牛をば酒でて服す。姚氏は不傳の附方。【鼠瘻の潰爛せるもの】鼠一箇、乳髮を雞子一箇ほどを三性因つて用をなすのである。

發明

劉完素曰く、鼠は善く穿つものだ。これを用ゐて瘡瘻を治するはその住居の場所を埋めれば瘻疫を辟ける『といつた。

して諸瘡瘻を治す。臘を焼けば惡氣を辟ける(弘景)。梅師は『正月元日の朝、【膏に煎

湯火傷に傳れば、癰痕を滅するに極めて良し。【油で煎して小兒の驚癇を治す】(日華)
 回易へ入る【別錄】膏で煎し、猪脂に膏に煎して打撲折傷、凍瘡、湯火瘡を治す【洗、臘月
 藥に入れない。主 治】
 氣 味 牡鼠 甘し、微溫ににして毒なし【日華。此鼠はいづれも

で、の非常^{ひじょう}に足の^{あし}の^の腰^{こし}の^のひも^{ひも}の^のうしろ^{うしろ}の^のひ。

ては巨虚を菴蘭子^{あらんこ}を食つて仙となる『これで見ると、これは動物中草』註して『叩叩叩は青獸にして狀馬の如く、巨虚は驪^りにて小さい』といひ、張揖これを食ふ。郭璞は叩叩叩は巨虚を獸の名として、前は兔、後は鼠の者は掘り取つてこれを靜止する。叩叩叩は尾も長くしてその端に毛があり、一たび跳ると數尺飛び、後足は一尺近くあり、尾も似て爪、足は鼠に似たもので、前は僅に一寸ばかり、毛色はいづれも兔に似てゐるが、爪、足は鼠に似たもので、前は僅に一寸ばかり、頭、目、鼻、口、舌、耳、爪、尾、毛、色、形、大小、動作、一切、兔に似る。』といふ。

蜀ノ註ヲ見。三。交河ハ葉部胡蘿
(九) 地方。熱河、察丹、契丹ハ東省、綏遠

いて焙じ研り、二錢つづつを熱酒で服す。瘡癰を感ずれば出る。(集要)

せられてはならぬ。(書)【節】^せ肉に人たりもの【大雄鼠】の肉を取り、薄く批^び知^ちをつつて食ふ。雌和衆方(せ)

を【乳汁】の通ぜぬも【鼠肉】を瘰癧に作つて食はす。本人に粥

り、粥に煮て空心に食ふ。二三頓で癒える。(鑑)【小兒瘰癧】^せ老鼠肉の煮汁で粥

【附方】水鼓右水、腹が脹り、身の腫るには、肥鼠箇の肉を取

薬に入れる【蘇頌】^{蘇頌}炙いて食へば小兒の寒熱諸疳を治す【時珍

蒸勞極で四肢勞瘦するに主效あり、蟲を殺す。及び小兒の疳瘦には、酒で煮て

和して羹にして食ふ。骨を食つてはならぬ、甚だ人を瘦せしめるもの【孟詵】^{孟詵}骨

なり、食を食るには、黄泥で裹んで焼き、熟し、骨を去つて肉を取り、五味、豉汁を

【主治】小兒^{小兒}疳^疳大腹には、炙いて食ふ【即錄】^{即錄}小兒の疳疾で腹が大きく

鼠肉 已下いづれも牡鼠を用ゐる。氣味 甘し、し、熱にして毒なし【

服す。(保幼大全)

腹脹し、煩悶し、睡を欲するには、鼠二箇を焼いて末にし、日毎に二錢つづつを湯で

傷瘡^{傷瘡}小老鼠を泥で包んで焼いて研り、菜油で調へて塗る。(醫華方)

【小兒の傷乳】

附方

新三、舊一

【耳の卒に聾に聾】鼠膽汁二箇を滴す。雷鳴の時の

えた』といつた。後世の多くの方はこれを祖とし、やゝ多き用ゐてある。

る、須臾にして汁が下側の耳から出て、初の間はますます聾したが、十日にして瘥

の如きは三に回到るに過ぎぬ。ある人が側臥してて耳に膽を瀝^たし入る膽を盡したとて

肘後方に甚だその妙なることを稱揚してて『能く聾を治す』と云つて、卒の聾を治す。

も腎の病である。諸家の本草には、鼠膽の聾を治すことを言つてないが、葛洪の

耳聾、青盲を治し、時^時は能く目を明にし、骨は能く齒を生ずる。その對症はいづれ

その目が夜明だ。卦に在つては艮に屬し、その精は膽にあるものだ。故に膽は能く

き、精を瞳子に注ぐ。その標は齒である。鼠や子宮、癸水に屬するもので、

に開^開、氣は腎に通じ、

癸^癸ハ北方。

發明

に滴させば聾を治す^{時珍}【目】

主 治

【目】暗^{弘景}【目】

雀目で物の見えぬを治す。耳

用^{時珍}おて熱に乗じて寒く能く蟲を引くものである^{時珍}【時珍】

主 治

【箭鏃のぬは搗いて塗る。時耳の汁を出すには、寒核ほどを

服すれば分娩を催す【日華】

四足及び尾
主治
【婦人の胎を墜してて出易からしめる】
【別録】
【焼いて】

四足及尾主崇

れ、少量のつゝを牙根上に點つけられ、立ち止む。(孫氏集效力)

【附方】新。一。肉の爛化し盡したと骨を取り、互で焙じて末にし、蠟ろう一分、樟腦しょうのう一錢を入し、皮を去つて硃砂しよさを上に擦り、三日に

附方

卷

骨末に頼る』とある。

發明
膽の項を見よ。○雷公炮炙論の序に『齒を長じ、牙を生ずるは雄鼠の

明發

あゝ【蔵器】

藏器()

主治 齒牙折れ多生えぬにほ、研末して日々に搦る。甚だ効かす。

六
景

あ、或は金の如き黄を發する。

氣味 【毒あり】食物中に含まれたものを食へば、人々として鼠癩を生ぜしめて

涎氣

で和して目些に點入し、兼て絳囊に二箇を盛つて佩ひる。(後肘)

目二七和

附方 舊一。【目】^{eye}、好んで眠るもの【目】一、儲を取つて焼いて研り、魚喜

附方

發明 膽の頂を見よ。

發明

目 【目】を明にし、能く夜中讀書し得る。術家でこれを用ゐる【陶弘景】

花末と等分を、就寢時に酒で一盞を服す。千金

ならすして神效がある。千金方 【酒】を酌つて飲まなくする。臘鼠頭を灰に焼き、柳

へて敷く。外臺 【湯火傷】 湯火傷を治す。死鼠頭を臘で消盡する。煎して傅ける。癰に

附方 鼻瘡、膿血 【鼻瘡】 正月に鼠頭を取つて灰に焼き、臘月猪脂で調

頭 瘻瘡、鼻瘡、湯火傷 【瘻瘡】 瘻瘡を治す。時珍

にある。

又、小兒の解顛、綿で裏んで耳を塞げば聾を治す。時珍 【記載】 肘後、總錄

れは出る。針、針、刺、竹木の諸刺、肉中に在つて出ぬには、擣き爛して厚く塗

脂 主 治 附方 耳聾、耳中滴し、寒。聖惠方

附方 耳聾、耳中滴し、寒。聖惠方

附方 耳聾、耳中滴し、寒。聖惠方

附方 耳聾、耳中滴し、寒。聖惠方

ある。

鼠屎、亂髮等分を灰に燒き、瘡頭を針で刺して納れるが大いに良し。【鬼擊】(善濟方)

百粒を五六日間密器中に收め、杵き碎いて傳けるが效がある。【疔瘡惡腫】(千金方)

黍米粥で和して四邊に塗れば散ずる。【鼠癰】(姚僧坦方)

【乳癰】の已に成つたもの新ししい濕ふた鼠屎、黃連、大黃各等分を末にし、

要方(五二)【乳癰】の初雄鼠屎七箇を研末して温酒で服す。汗を取つて散ずる。【五二】

七箇を核を去つて包んで燒いて性を存し、麝香少量を入れて温酒で調へて服す。

つて軟け、雄鼠屎を烟に燒いて熏すれば入る。【婦人吹入の奶鼠屎七粒と紅棗】

二升に煮て汁を取り、それで作つて食へば胎が下る。【產後の陰腫】

心に二錢(三三)を温酒で服す。【腹中の胎兒死】

に傳ける。立ちに效がある。【處女の月經閉止】

效驗である。なほ汗せぬときは再服する。【大、小便秘】

の尖つたもの十四箇、非根(一)一大把、水二盞を煎して温服する。粘汗を出す

のもので三回に分服する。【男子の陰易】及び勞復には、穀鼠屎湯【穀鼠屎湯】——穀鼠屎の兩た

作二。【大觀】子母秘錄

七二。【大觀】子母秘錄

一 升に煮て頓服する。〇〇活人書には、鼠屎敗湯——勞復發熱を治す。雄鼠屎四十箇、

雌鼠屎四十箇、水二升を合、五五箇、雄鼠屎二十箇、外臺【傷寒勞復】は、雄鼠屎二十箇、水二升を合、

【附方】前記の諸證がそれである。

厥陰、血分の病であつて、前記の諸證がそれである。

發明

時珍曰く、鼠屎は足の厥陰の經に入る。故に治するところの病はみな

鼠瘻瘡に塗る。燒いて性を存して折傷、疔腫（時珍）諸瘡、大傷に傳ける【時珍】

の月經を通じ、死胎を下す。研末して服すれば、吹（時珍）乳癰を治し、馬肝の毒を解

を明にする【日華】煮て服すれば、傷寒復の發熱、男子（時珍）の陰易腹痛を治し、婦人

録曰く、張仲景、及び古今の名方に多くこれを用ゐてある。】瘰癧を治し、目

主 治 小兒の疳疾大腹。葱、豉と共に煎して服すれば時行、行、勞復を治す【別錄】

黃となり、疸となしめる。

して毒なし【時珍】曰く、小毒あり。食物中にあるものを誤つて食へば、人をして目

糞 弘景曰く、兩頭の尖（時珍）のものは牡鼠の尿である。】甘し、微寒に

附骨疽瘡に貼れば膿を追出す【時珍】

主治

皮 灰に燒いて癰疽の口が冷えて合はぬものを封ずる。生で刺いで

手赤（一）名大鼯鼠（二）作名鼯鼠。



〔鼯鼠〕
——鼠鼯

はのもので、一名（一）隱鼠とい
 今山林中に水生ほどの大い
 を計ね掘つて取るのである。
 常に地中を穿つて行く。それ
 色黒く鼻が尖つて甚だ強く、
 鼠のやうで大きく尾がなな、
 とで、一名隱鼠といふ。形は
 弘景。曰く、これは鼯鼠の
 五月に取つて乾かして燐く。
 であるのだ。
 時珍。曰く、田鼠は地中

集解

別錄に曰く、鼯鼠は土中に在つて行く。五月に取つて乾かして燐く。
 能く土を運（二）して空める。故にかにかる諸名があるのだ。

釋名

田鼠（一）禮記（二）音は憤（三）う音は憤（四）である。
 時珍。曰く、田鼠は地中

鼯鼠

音（一）は（二）偃（三）る（四）エ

別錄下品

科學和

名名

鼯鼠（一）名（二）偃（三）る（四）エ

Scaptochirus moschatus, A. M. Rodw.

壇上七部に記載してある。

【傷】野鼠屎を水で調へて塗る。(邵真人經方)

みなな鰯(イサナ)魚が變化したもので、蘆荻の根を殆んど嚙(か)ひ盡して了つた。これで見ると醜(みにく)
年、夏、秋に大水があつて、西(さい)黄(わう)河の大江に沿ふ地は野一面に鼯鼠(リス)が出た。
交(まじ)に變化する處と鷹とのそれやうだ。鴛鴦(ユウヤウ)の類の鳥である。(三) 隆慶辛未の
變(へん)化して怒となる『とあり夏小正に八月に鴛(ユウ)が鼠となる『とあつて、この二物は互
時(とき)珍(めづ)く、許慎は「鼯(リス)は伯勞(ハクロー)が變化したものだ』といひ、今には『季春田鼠

置いて射て取り、それを鷹の餌とする。陶氏は水牛のやうなものを引用してこれをし、目には極めて小さく、項が尤も短く、最も取り易いものだ。或は竹弓を仕掛けて、宗。曰く、脚が非常に短く、僅に歩行し得るもので、尾の長さは一寸ばかり、形は鼠に類し、肥つて膏が多い。早天の歳に田作物の害をなす。その頭曰く、處處の田に多くゐる。月令に、田鼠化して驚となるはこの物だ。土中にゐる。大きい牛ほどあるといふ物が、名は同じだが物は異ふのだ。土器。曰く、鷹は陰に地中を穿つて行き、日月の光を見ると死ぬ。深山の林木下

作(二) 大觀 = 僅子 但 =

類(一)黃州註。見部。蟲見。
生化部。見部。
草部。見部。
五七宗治年。穆隆曆明。

いさゝ水牛半ほどあるもので、狗を畏れる。現れるときは水災を主とする。『とあり、晉書時珍曰、按ずるに、異物志に『鼠母は、頭、脚は鼠に似て口が鋭く色蒼く、大彼地者はその肉を食ふ。

い。これは妄説を陶が誤つて信じたのだ。

頤曰。鼠は（二）滄州（一）及び（三）胡中（二）に産する。牛に似たものので、首は鼠のやうで足が黒く、大なるは千斤あり、多く水中に伏し、また能く水を握（キ）きとめて味を放つ。

と一。正の鼠になる。凶災の年に多く出るものだといふ。

似たるや、はより隱鼠と名けるので、その地のは鼠王であつて、その精溜せいりゅうが一滴に落ちるに似たり。肉はやほりにあつて、力があるが、尾上のみ白く、胸前、下脚は象に似て、灰赤色、に似る。

(二) 類甘草、胡、中外國。
見。E。部。毒。草。



竹狸

に醢を以てし、醢を煮るに醢
 うだ。燕山録に『羊を煮る
 地は多く食ふ。味は鴨肉あひの
 大いさ兎ほどのもので、そ
 方に産する。土穴に棲み、
 は竹根を食ふ鼠であつて、南
 時珍曰く、竹狸
 美なるを言つたのだ。

集解

竹狸時珍曰く、狸とはその肥をた有様を形したものだ、狸あひとそ

釋名

竹狸

時珍

竹

狸

(目綱)

科名 學名

はたねみ
 Evotomys rutilus (Pallus.)
 (定名) 科名 學名

研末して令嚙するが神效ある【時珍】記載は虞衡志にある。

壯

氣味

【甘し、寒にして毒なし】

主治

【咽喉痺痛一切の熱氣には、

だ。

陸機が『この物も五種の技能があるもので、蠅蛤と同じ名がある』『といつたのは誤ら山豆根を食ふ。土人はその腹を取り、乾して薬に入れ、鼯鼠と呼ぶ』といつた。鼯鼠は小根を食ふ。田に棲み、鼯鼠は大きくして山に棲む。范成大は『寶州の鼯鼠は草鼯鼠の前の兩足を交へて舞ふ。好んで栗、豆を食ひ、鼯鼠同様作物に害をなすが、大きく、頭は兔に似て尾に毛があり、青黄色だ。善く鳴き、能く人のやうに立ち、形は鼠より大い。』

集解

を取つて筆に作る。俊もやほり大の意味だ。

になつた。蜀地方ではこれ鼯鼠といひ、その毛西の地方で轉じて鼯鼠になり、鼯鼠の形は鼠に似て、鼠載は唐韻にある。時珍曰く、音は俊（シユ）である。鼯鼠載は廣雅にある。鼯鼠音は啗（シナ）である。鼯鼠記

鼠



釋名

碩鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

栗、及び松皮を食ふので、夷人は栗鼠、松狗と呼ぶ。『といつた。羅願はて』の鼠は

釋名

栗鼠(爾雅翼)

松狗

時珍曰く、

科名 和名 綱目 鼠 貂 (二)

料名 科名 Martes zibellina, (Linne.)

なる【時珍】

頭骨

主治

主治

野雞瘡。煮て食へば肥美である【藏器】

氣味

【時珍】甘し、平にして毒なし。按ずるに、飲膳正要に【肥

時珍曰く、

皮は寒く、肉は温く、湯が透るぬいだ。

る、形は獺のやうだ。夷人は掘り取つて食ふ。魏志に『大秦國に産する鼯鼠』と

集解

藏器曰く、土撥鼠は西番の山澤の間に生ずる。土に穴を穿つて策を作

科名 料名 鼯鼠 (Thom.)
Seiurus vu'g
arsiman 'Ichirious
水(日)重(廿)月(一)

『それ以上は物の性の相感である。』



冰

味

【つぎ、つぎ、つぎ】

王

嬰

【中】を精し、氣を益し、味を平

鯨（珍時）

王撥鼠(拾遺)

科舉和
功名名

Arctomy 科

クサカベ(木村重考定)
Arctomys sibiricus, Radde.

スバカノ木村重考定(

姓上

A black and white line drawing of a large, gnarled tree trunk. The trunk is shown in a cross-section, revealing a hollowed-out interior. The bark is thick and textured with many small, dark lines. The wood inside is also textured, with a prominent grain. The drawing is simple and sketchy, with a focus on the texture of the bark and the internal structure of the wood.

〔鼠婆土〕花不刺搭——

名
標

禮記

是は駝(駝)であ

る。蒼刺不花記載は正要にある。時珍。

曰く、按ずるに、唐書にある

ちの物で、醜態をはそつ物の肥えたる有

様をいつたものだ。唐韻に「は竹韻」

吾は僕朴(ふく)とある。俗に訛つて王撥

蒙古地方では基刺小花と

をける。

あるが、それは誤だ。胡人はまた令邦とも名ける。

狸と呼ぶ。或は狸を竹狸タケヌとす。ものとも

のて、古文にはこれらを鼯鼠といひ、遼東地方では

韓愈の文に所謂『禮鼠拱して立つてあるもの』も

『鼠を利りに體あり、人にして禮無し』とあり、

るやうな眞似をして穴に眞入する。即ち時に所謂

に坐り、人を見る、その前足を交へ、（二）拱（一）ひ、（三）提す。

黄鼠は、晴れぬ暖かいなときに出る穴の入口

[illegible]

卷一

禮鼠(韓文)

拱鼠(同上)

羅

音は漢

鼯鼠 音は舌を去聲に發音する。鼯鼠 音は生(イセ)を去聲に發音する。鼯鼠 音は舌

釋名

鼯鼠(綱目)

鼯鼠

音は生

(イセ)

を去聲

に發音

する。

鼯鼠

音は舌

を去聲

に發音

する。

科名 學名 和名

Mustela alpina, Gelder.

鼯鼠(綱目)

Putoricus fontanerii, A. M. Redw.

科名 學名 和名

(綱目)

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

て黒く熬つて出來上る。それを三日間火毒を出し、普通のやうに攤して貼る。

で手を住めずに攪き勻ぜ、水に滴して珠に成るやうになつたとき、黄臘一兩を下

になつたとき、黄臘一兩を入れた丹を炒に紫に焦し、煎火で一斤で慢火で煎し、水上で油を試みて散らぬやう

を退ける。大黃鼠鼯一箇を油を濯し、澄清して再び煎し、煎火で煎し、水上で油を試みて散らぬやう

を退ける。大黃鼠鼯一箇を油を濯し、澄清して再び煎し、煎火で煎し、水上で油を試みて散らぬやう

を退ける。大黃鼠鼯一箇を油を濯し、澄清して再び煎し、煎火で煎し、水上で油を試みて散らぬやう

時珍

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

鼯鼠

主 治 肺を潤ほし、津を生ず。膏に煎して瘡腫に貼れば、毒を解し、痛を止め

肉 氣 味 甘し、平にして毒なし【正】要に食へば瘡を發す『とある。

シ
ミ
北胡ノ方。
蒙古、

縣ノ地ナリ。
今陝西
西魏ニ
綏州見
ハ延州
土部墨
ノ

集解

と呼ぶ』とあるも、やはり黄鼠の類のものである。
人の足音を聞き別けて逃げ匿れ、なかなか捕獲し得ぬものだ。その地の者は瞎撞サツとあ、百感錄に『西北に黄鼠ハウソに類して、目が短く、性性狡カウく、善と吸キ——鼠といつた。抱朴子に『南海の白鼠は重さの數斤あり、毛は布になる』と
はやはり用ゐられる。銀といふ銀のやうな白鼠の色のもので、古代は鼯——音は畏れるもので、穴に能く入つて、北胡にはまた青鼠といふが、鼠を最も珍チン饌センとし、遂に遠方の地への贈オモにしたりが、今は一向に重要視しない。鼠を最も價チンになる。遼、金、元の時代には羊乳ヤウルクでこれを飼養し、それを上等の料理に供して、水はその穴に灌いで捕獲する。味は極めて肥美で、豚子ブタコのやうで脆ヒヤい。皮は喪サツを畜イクへて冬期を凌ぐもので、それぞれに小窖を作つて別に貯へてある。村落の者は子コのやうな状態のものがあるのは牝牡メスオスの場である。秋期に豆、栗、草木の實ミ、足タラシが短くして善く走り、極めて肥つたものだ。穴居するもの、その土窖ツカウに寢臺、れもある。遼地方で就中珍貴なものとしてゐる。形状は大鼠に類し、黄色のもの、つ時。曰く、太原、大同、延チン綏セに産し、また沙漠の諸地にはいづ



鼠 鼯 一口 廿一

膚を殺し、人をして惡瘡を患はしめる『とあり、醫
 ものはいづれもこの博物志に『人を食ひば
 瘡毒あ』といひ、左傳に『郊牛角を食ふ』とあり
 この物に食はれかぬか死に至るか、及
 ひ牛、馬等の皮を食ふと瘡に成つて死に至るか、及
 び、人、及

集解 鼯鼠は極めて細やかなので、人、及
 故に甘口といふ。現處に在る。

釋名 甘口鼠 鼯は鼠の最小なるもので、噛まれても痛くない。

科 學 和 名 鼯鼠 *Mus molossinus*, Temmink.
 科 名 鼠 鼯 拾 遺 (一)

鼯鼠 *Mus wagneri*,
 Evermann.
 鼯鼠 (日本) 鼯鼠 (日本)

止まる。(海上仙方)

乳香、沒藥、孩兒茶、血竭、各三分、入一錢、酒で調へて服す。立ち
 附方 新。一。【心腹痛】黃鼠の心、肝、肺、一具を陰乾し、互で焙じて末にし、

心肝氣味

臭し、微毒あり

主治

【心腹痛】 蟲を殺す【時珍】

れば蠱を殺す【時珍】

肉氣味

【甘く臭し、温いところ、小毒あり】

主 治

油之煎て瘡疥に塗

も折れない。世に所謂、鼠鬚、栗尾とこれを用いたのだ。

赤しといふものがそれである。その毫と尾と筆に作れるのもので、嚴冬に用ゐて色に赤を帯び、その氣は極めて隙臭だ。『貂^{うさぎ}に似て大きく、色黄にして黄、時^{うさぎ}形、鼠は似て身が長く、尾が太く、黄

集解

集解

日
○狂
○判

に如く「あゝ」あゝは即ち此の物のなすところである。

す。莊子に所謂「騷鼠を捕ふるは理麤」

捕へることに健はいもので、又、よく蛇へびを制

名けたのである。この物は鼠、及び禽畜を

ぶ。その色は黄赤で柚のやうだ。故にかく

廣雅に『鼠狼、即ち鼯なり。江東では鼯と鼯と呼

(エカ) である。地猴。時珍曰く、按ずるに、



鼠 狼
[鼠] 鼠

チノツカ
山ノトハ
楚ノ山



〔蛇〕

集解

谷、田、野に生ずる。取るに一定の時期はな
い。濕中にめしめしならぬ。
弘景曰く、野處の野中に時にこの獸が
で人へ刺すので獲れないものだ。能く虎の
耳中に跳ね入るものだから、鵲に遇ふと自ら

從つて苦く深い道理がある。
別錄に曰く、獾は楚山の川
に從ひ胃に蟲を食ふ。その文字を從ひ胃に

宗龍曰く、蝟皮は、胃逆を治し、
に似てあるから、鼠なる名があるのだ。

釋名

、按ずるに、説文には、鼯の字の象を形したものに足が鼠
毛刺(雅)鼠(時)曰。鼠。俗に蝟と書く。毛刺(雅)鼠(時)曰。鼠。

つて獸部に移し入れた。

舊は蟲魚部に編入されてあつたが、本書は爾雅に據

校正

種だ。孫恠は『鼯鼠は能く飛んで虎、豹を食ふ』といひ、談藪には『虎が敢て山林を畏れるものがある。蜀圖經に所謂虎鼠とは即ち鼯鼠であつて、やはり猊の中の一蛇は蜈蚣を制する。大小、利鈍だけか標準になるものではない、物はたまたその天氏てんしがこれを斥け、寇氏こしがそれを和したのが正しくない。蜈蚣は龍、蛇を制し、蜈蚣、蘇そ啄そくは『』とある。これで見ると陶氏の説は妄あやまりではないのであつて、蘇とあり、又、『鵲屎を中てる』とある。緯書には『火は金を煉るす。故に鵲は鵲を時珍ししん曰く、按ずるに、淮南子に『猊は虎をして申せしめ、蛇は豹をして止らしむ』宗そう曰く、唐本草の註に、陶氏の説を擯はなして當然だ。入つて來ても、甚だ怪しかつた。三尺も高い。猊がいかでそれに跳入れやうか。野俗の鄙言が遂に立派な學問の記述蚌はうとやうなものだ。虎の耳は雞卵も受け入れぬほどの狭いもので、且つ地上からだ。鵲聲を惡む。故に腹を反し啄を受けてそれを抱き捕らんとするのである。鵲の飼養する者もあつて、放ち去つても復た來るものだ。

正誤

す。或は煮汁にし、或は五味に淹けて炙いて食ふ。【小兒の驚啼】物で刺され
 つて鼻中に暗き、口に冷水を含む。【反胃吐食】猪皮を灰に焼いて酒で服
 て寒く。【千金】眼睫の倒刺、蛆皮、桑針、白芷、青黛等分を末にし、左右の目に隨
 綿飲で服す。【聖惠方】鼻中瘻の肉、猪皮を炙いて末にし、一回、綿で裏ん
 米飲で服す。【紫氏摘玄】鼻を塞いで衄を止める。【猪皮一枚を焼いて末にし、二錢を
大腸脱肛】猪皮一斤を燒き、磁石煨いて五錢、桂心五錢を末にし、二錢づつ
 を吐出するもの。【千金方】五色痢疾。【猪皮を灰に燒き、二錢を酒で服す。】毒
 調へて服す。【楊氏家藏方】血下。【蠱母下血】猪皮を焼いて末にし、水で方寸匕を服す。
 燐焦し、皮を去つて刺を留め、木賊半兩を炒り、末にして二錢づつを熱酒で
 て末にし、生油で和して塗る。【肘後方】血風下。【白刺の猪皮一箇を銚に入れて
 たのものを忌み、二十日後に桶の手當を加へ。【腸痔の蟲あるも】猪皮を燒い
 冷を犯さぬやうにし、羹、臘を以て養生する。絶對に雞、魚、猪、生のものを冷
 やや盡さたととき止め、三日間様子を見て更に熏する。三回にして永く瘡を癒さ
 てその中で調和し、取つて時を熏する。口中に烟氣があるで佳し。火氣が

字ニ大ニ飲ニ上ニ白
五ノ大ニ觀ニ病ニ作
別録ニ引くもの。

附方

五痔下血【新入。舊五、五、新八。】

解【藥性】

臺は、猧皮を三指ほど、熏黄を棗の大きいほど、熟艾（いんぐい）を用地に抗（たが）をつ性（せい）を存し、肉豆蔻（にくとう）を空腹に錢を熱米飲（いんぎ）で服するが妙だ。』とある。〇〇外焼いて

主治

【五痔、陰蝕で、赤、白、五色の血を下して血汁の止まぬもの、陰腫痛が腰背に引くもの。】酒で煮て殺す【本經】腹痛、疝積（せんせき）を療す。灰に焼いて酒で服す【別録】

毒なし【甄權曰く、甘し、小毒あり。酒を配するが良し。桔梗、麥門冬を畏る。

修治

皮 細に剉み、黒く炒つて藥に入れる。【氣味】苦し、平にして

は、これで觀るととますとます確なことで。ここにその誤を正して置く。

至るものだ『とある。鼯（かじ）と鼯（かじ）は發音が近い文字だ。猧の能く虎を制すといふところに咆（ほ）いいて毛を抜いて投げる。すると虎は必ず蟲瘡が生じ、潰爛（くわん）して死にに入らずして草薄に居るのは、木上に鼯（かじ）がゐるからだ。その鼠は虎が通るのを見

のだ。毒類集驗方

汁を簪で點入する。耐へ切れぬほど痒いが、二三回で癒える。尤も烏膽に勝るも

【附方】痘後の風眼【發すると兩脰が紅爛して哆^お涙するに、刺胃膽

病を治す】（寇宗奭）

主 治

【目】に點ければ涙を止める。水に化して痒瘡に塗る【（昨珍）】應食

(時珍)

心 肝 主 治 蠅 瘻、蜂 瘻、癰 瘻、惡 瘡、灰 に 焼 いて 錢 を 酒 で 服 す

腦 主 治 瘰 癧 (時珍)

る。

附 方 虎 爪 で 傷 め ら れ た と き 【】 刺 猬 脂 を 日 に 傅 け、香 油 を 内 服 す

疥 癬 に 塗 れ ば 蟲 を 殺 す (時珍)

主 治 腸 風 瀉 血 (日華) 溶 か し て 耳 中 に 滴 せ ば 聾 を 治 す (藏器) 禿 瘡、

脂 氣 味 肉 に 同 し (日華) 五 金、八 石 を 煮、雄 黃 を 伏 し、鐵 を 柔 に し 得

を 肥 し、胃 氣 を 理 し、人 を 食 せ し め る (孟詵)

黃 に 炙 いて 食 へ ば 人 を 瘦 弱 し て 諸 節 を 漸 次 に 主 効 有 る (藏器) 炙 いて 食 へ ば 下 焦

誤 っ て 食 へ ば 人 を 瘦 弱 し て 諸 節 を 漸 次 に 主 効 有 る (藏器) 反 胃 に は、

肉 氣 味 甘 し、平 に し て 毒 な し (藏器) 日 々、こ れ を 食 へ ば 骨 を 去 る。

(錄) 狂 犬 の 咬 傷 【】 蝟 皮、頭 髮 等 分 を 灰 に 焼 いて 水 で 服 す。外 藥 方

た や う な 状 態 に は、猯 皮 三 寸 を 焼 いて 末 に し、乳 房 に 傅 け て 兒 に 飲 ませ ず。(千 母 秘)

末にし、生蜜少量を和して灌ぐ【時珍】記載は心鑑、及び衛生方にある。

屎主治【主】蜘蛛咬に塗る【懷微】小兒の癩風、撮口瘡、及び急驚には、焼い

手主治【主】小兒の驚癇口禁【懷微】

一、錢を溫酒で服し、發作時に臨んで再服する【聖方】

附方【鬼瘡】進退不定なるには、胡孫頭骨一箇を焼いて研り、空心

頭骨主治【瘡瘡】湯にして小兒の癩癰、鬼魅寒熱瘡治【瘡微】

で貯藏し、火で熏じて食ひ、甚だ美味だといふ。

には【聖方】喜んててて癩瘡を喫ふ【時珍】又、巴徼地方では猴を捕獲して鹽

發明【時珍】曰く、異物志に『南方では、獼猴頭で酢を作る』とあり、臨海志

いよ佳し。肺に作つて食へば久瘡を治す【懷微】これ【時珍】を食へば瘡を辟ける【時珍】

肉主治【酸し、平にして毒なし】諸風勞には酒に醗すがいよ

げる。名けて舉父といふとあるがこの物だ。

『といひ、西山經に『崇吾之山、狀は禺の如くして臂長く、善く投げ

ほど、形狀は猴のやう、黃黑色で瘡、瘡が多、く、好く頭を齧ひ、右を舉げて人

貴西チ部
指ハ。今ノ
巴徼ハ。今ノ
西地。今ノ
廣方。今ノ
粵。今ノ
廣東。

(四) 崇吾之山、米詳。

ナキニキニ
 (五) 臂二臂二關節
 引氣ハ深呼吸。
 學名 Hylobates lar,
 Linne.
 和名 テナガ
 猿

ナ、今ノ四ノ者ノ地以
 西、今ノ四ノ者ノ地以



〔猿〕

は誤だ。臂骨で作つた笛は甚だ清亮な
 だからいふのだといふが、それ
 の長いものは、或はこの物は通臂
 長、能く引氣するところから壽命
 猿と似て長大なもので、その臂は甚だ
 猿と書く。川、廣の深山中に産する。
 猿引するものだから猿といふ。俗
 時珍曰、猿は善

附録

で梅に作つたものである。

宋時代には、文、武官の三品以上
 の階級に、被座を用ゐることを許した。この獸の皮
 だ、その尾を愛惜するもので、人が薬で射て毒に中
 ると自らその尾を毒に敷くといふ。世
 し、尾は長くして金色をなす。俗に金線と名ける。
 時珍曰、楊億の談苑に、猿は川峽の深山中に産し、
 其の形、大小は猿に類する。

盧ノ一ノ山ノ類十
註見草部唐十
類十

谷中に生ずる。猴に似て大きく、毛は長山
藏。曰、猿は(一)山南の山

集解

だ。

[猿]



を猿といふはこの形象から取意したもの
文は(一)と書いた形である。現に長毛古
するから猿に従ふといふ。西戎に生
の字はやはり柔に従ふ。或は、西戎に生
猿は(一)と書いた形である。現に長毛古
するから猿に従ふといふ。西戎に生
の字はやはり柔に従ふ。或は、西戎に生

やうで、藉き物になり、續いで織物になる
難逃の切(カ)と發音する。時、曰、猿は毛が長く、絨の

釋名

猿

(カ)の音松(カ)の音松(カ)の音松

遺拾

科名 Macacus tibetanus, David. ?
和名 木村重考(定)

科名

疫を辟ける。毎月草上に流れる月經を馬が食ふので永く疾病が無いとある。
皮。慎。微。曰、馬の疫氣を治す。時、曰、馬經に馬廐に母猴を寄へば馬の瘡



〔然果〕

は來るこが必ず確かだといふわけ。大なる
 る。殺されることも去らな。これを果然といふ
 頭を捕へると全群集つて啼いてそれについて來
 らその名を呼ぶ『といひ、羅願は』人がその一
 とも書く。仙猿。時珍。郭璞は『果然は目
 雖く。抗(リ)の(リ)豐(リ)の(リ)音がある。或は
 音は又(リ)である。或は抗(リ)の(リ)音がある。或は書

釋名

馬

音は遇(リ)である。抗

科名 和名 種名
 Cereopithecus aethiops, Linne.
 なる科

果(二)然拾遺

脂主治

瘡疥にこれ塗るが妙である【同上】

その皮に坐する【し臓器】
 氣味 缺主治

肉及び下を見よ。

和名 木村(重)曰く、
 Nasalis larva-
 tus, Geoffr.

主ノシ
 腹ヲ全
 リ。背ヲ
 君

このものだといふ。

時珍曰く、果然(一)は西南の諸山に産する。樹上に棲み、形は猿のやうで、面は白く、頬は黒く、髯多くして毛采は斑斕はんらんたるものだ。尾は身よりも長く、その末に岐があり、雨が降ると岐で鼻を塞ぐ。羣行するもので、老者が前少し少者が後随ひ、食物は互に相譲り、平相愛し、生前に家庭的に相聚り、死亡すればその喪に會するやうに集る。柳子所謂、仁讓、孝慈、たはこのことをいふのだ。

これを集めてて、梅に作る甚だ醜だ。爾雅に「仰鼻にして長尾」とあるは、長く柔く細く滑か、白質に黒文があり、蒼鴈そうあひの斑毛のやうな状態の毛は頭を過ぎ、鼻孔は天に向ふ。雨が降ると木の上にか拄つて尾で鼻孔を塞ぐ。その毛は自ら呼ぶものがある。形は猿よりも大きく、その體は三尺に過ぎないが、尾の長さは自藏じざう。曰く、按ずるに、南州異物志に、交州に、果然獸といふその名を

集解

猴と名け、俗に獼みと書く。

を然といひ、い、い、小なるを狢たといひ、雌といふといつた。南方の地では仙

似てゐる。これは同一物ではないかと思ふ。

を野人といふとある『ふとある。』とある。羅氏の説に據れば、後世の所謂、野女、野婆といふものにこれをつて初足になつたやうで、群行し、人に遇ふと手でその形を掩ふ。髪を被といふのだが、今の猩猩に關する説明は、獅といひ、甚しい差異がない。婦人が髪を被し又、羅の願の雅糞は古の猩猩に關する説明は、豕の如く、狗の如く、猿の如く、氏の話のやうなものではないであらう。

には行かぬので、また必ずしも盡く盡くが既にたひ能く言ふに似ても、鵲などのやうな人の形に似た猿の類のものである。三、豕と同であるが、大體に於て猩猩は

【猩】



【猩】

には『猩猩は言へないといひ、山海經には猩猩は能く言ふ』とあるが、郭泰の廣志に『猩猩は能く言ふ』とあるが、一斗に至つて止

(四) 毛屬ハ毛細物。

(三) 類ノ封臺ノ註ハ草見。草
類ノ交ノ註ハ草見。草
精ノ哀ノ註ハ草見。石部
水

仲間て肥えたるものを差出し、泣いてそれを送る。西湖ではその血を取つて毛屬(毛はけ)を
へられる。それを檻に入れて飼養し、いよいよそれを烹はうとする、彼等
んで罵つて去り、少頃してめたら来て相與(あひあ)にその酒を嘗め、穿き、その間に擲(な)
は、酒及び草(くさ)を道側に置く。する程、それを見、その人祖先の姓名を呼
やうでもあり、群をなして伏して行く。程、小兒の啼聲のやうでもあり、犬の吠える
人の如く、髪長く、頭、顔は端正で、聲は小兒の啼聲の如く、顔は人の如く、足も
彌猴(いほ)の如く、毛は黄にして、援の如く、耳は白溪縣(はくせき)の如く、山中に生じ、形は狗、及び
括してへば、哀牢夷、及び交趾、爾雅、逸周書以下數十説あるが、大體を綜
時。珍。曰く、猩猩は能く言ひ、未來を知る。猩猩といふやうな意味であ
る。

集解

釋名

猩猩 猩 猩 綱 (目) 科 學 和 名 猩猩 *Simia satylus*, Linne.
は本(生)に(て)いた。音。 猩猩 科 學 和 名 猩猩 *Simia satylus*, Linne.

飢えず、人をして善く走らしめ、窮年にも腰ふこことなく、以てて辟殺し得る【時参】記
【主 治】「これを食べれば味せず、

【氣 味】「甘く鹹し、温にして毒なし【性 味】「

だ、た一般に知られない。
あるところから見ると、野婆の印篆も不思議はない。この物にも功用は有るへ。譬
そのものらしい。又、雄鼠の印篆は符篆のやうな文があり、治鳥の腋下には鏡印が
時珍。この二説と前項の阮氏、羅氏の説とを合せて考へると、野女とは猩猩

る。

ばかりの印があつた。たゞ符篆として蒼玉のやうで、符篆に類似した文字があつた『とあ
こが、あつて、死んでから手で腰を押へ隠してゐるのを剖いて見ると、一寸四角
を蓋ひ、毎に男子に遇ふと必らず去つて交接を求め。嘗て勇敢な男に殺された
雌のみに群で吐がなく、山谷を下するこゝ飛、裸の如く、腰から下は皮があつた。
『野婆は南州に産する。黄髪、椎髻、裸形、跳足で、老婆そのものだ。
見める。その形状は、白色にして全身に衣襦がないといふとあり、周密の齊東野語には
附 録 野女 唐蒙の博物志に『日南に野女といふがあつて、群行して夫を

註(五)見。日南。石部玉ノ
註(六)見。南丹州。山獺ノ

鳥毛で梅を作ら、二枚連つてゐて、上は雄、下は雌である。能く變化して形を隱す鳥卵のやうな状態の策を作る。その内部分は光彩があり、體質の輕なもので、人の如く、長さ二丈餘、色黒く、目赤く、髮黄にして、深山の樹中に高さ三尺餘は附記に『南康山都といふ神がゐる。』

附 錄

して考證に備へる。

歸の阜魃、搜神記の治鳥と俱に相類するところの山怪である。ここにいづれも附記の山都、永嘉記の山鬼、神異經の山獠、（山獠、つらんた）玄中記の山精、海錄は事の山丈、文字指

鄧氏のいふものは北山經の山獠、（山獠、つらんた）述異

て食ふとある。予（珍）が按ずるに、

〔獅

で深淵に棲み、石を翻してて蟹を漁つて口を開いて笑ふやうに見える。好ん

〕獅

で全身に毛が生え、人を見る目を閉ぢては『山都は、形は馬來人種（馬來人、マレー人）のやう

といふとあり、又、鄧顯明の南記



海録雜事には『嶺南に一本足で踵が反り、手、足みな三本指のものがゐる。雄を

た輝文ともいふ。これと呼べば虎、豹を取らせ得る』とある。

白澤圖には山の精は、形狀は鼓の如くして色赤く、一足である。名をカキとひひ、

の名を魅といふ。その名を呼ばると人を犯せないのである。『たとある。』

抱朴子には『山精は、形は小兒の如く、獨足で後に向ふ。夜喜んで人を犯す。そ

夜出て晝伏す。千歳の蛇は能くこれを食ふ』とある。

玄中記には『山精は人のやうなもの、一本で長さ三四尺、山蟹を食物とし、

る。

て病に罹らせ、また住居を焚かれるので、その地者は敢てそれを犯さないのである。』

一尺許りのものだ。好く伐つた木や人の鹽を盗んで石蟹を炙いて食ふ。能く人をし

永嘉記には『安國縣に山鬼といふがある。形は人のやうで、脚が一本で長さ

ない。毎に澗の中澗はで蝦、蟹を取り、火のある處へ炙いて食ふ』とある。

を被り、髪髪はの長さ五六寸の物がゐる。能く呼び嘯いて聲を出す。その形を現はさ

劉義慶の幽明錄には『東昌縣の山岩の間に、人のやうで長さ四五尺、裸身で髪

ナ者。柳縣ノ今ハ舊山治

北者ハ保定縣ノ今ハ屬ス。河

ものだ。ただ爆竹の爆ける音を畏れる』とある。

呼ぶものだ。人がそれを犯し觸れば寒熱を發する。蓋し鬼魅である。所在にもある。その名を自ら蝦蟹を捕り、人間の間に住居へ来て炙いて食ふ。名を山獠さんろうといふ。その名を自ら、相身あいにしで、又曰く、東方朔の神異經に『西方の深山に長さ一丈餘の人がある。』

た。

が、やはりこれに類するものだ。又、木客鳥といふがあるが、それは禽部に記載し能く人間と交易するが、その形を見せない『現に南方に鬼市といふがある。』
い、た、手、脚の爪が鉤かぎに利とい。絶岩の間に棲み、死ぬばやほりやほり發はつする。な

木客。又曰く、『幽明錄に『南方の山中に生ずる。頭面、語言は全く人間に異なら風がある』とある。』

ける。人を見たと笑ひ、その行くところは風の如きもので、これが現ると天下に大
山獠。時曰く、北山經に『山獠は、形は犬のやうな面は人のやうで、善く物を投

う

ので、見ることに罕まれだ』とある。その状態から考へると木客、山獠の類のものと

肝を食ふものだから驅除したのだから。その性は虎、柘を畏れるところから、墓上の
は戈を執つて墟に入ら、以て方良を驅つとある。『固は好んで亡者の
方相氏に書く。固は一方良と書く。』

集解

科名
學名
和名
未詳
未詳
未詳

固 (綱) 目

て人の癰疥に貼る。能く蟲を引いて出す。頻に易へて瘡を取る【(癰)】熱し
肉

氣味

【主】毒なし

治

妖に勝つだけだから敢て近かな。自ら敢て

に大抵、正人、君子は徳が抱朴子、西陽狙子、諸書の記載
づれ人も人に害をなすもの。ただ、白澤圖、玄中記、精怪の類は、
又、治鳥もや、この類のものだが、禽部に記載し得るものがあつたと思ふからである。
觸れ研究して見たならば、必ず能く制し得るものがあると思ふからである。
の蟪蛄はこれを食べるといつてあるは、治法の意味ではないかと思ふからである。

蟪蛄

めのみではないのであつて、右の諸説中に、その名を呼ばなければいけない、千歳ふことが知らなかつたのだ。此に備へて記載したわけは、博く物を知るに、郎諸神などと呼んで祀るといふ有様だが、蓋し其の本来の實體がやかやうな物だといふ非常な害をなす。そこで法術でも驅除し得ず、醫藥でも退治し得ず。五通神、七に入、勝手に淫亂を振舞つて人に疾を起させ、火を放ち、物を竊み、人家に對し、今俗に所謂獨脚鬼がそのものである。近來處にこれが、能く形を隠して人家の手(形)が謹で按ずるに、諸説は少しの差異はあるが、大體に於て怪類のものだ。

『とある。

は人家に入つて能く物を竊んで戶外に出し、早魃は人家に入つて能く物を竊んで歸文字指歸には『早魃は山鬼であつて、これが棲む處には天が雨が降らぬ。女魃これに遇つたとき描へて瀾の中へ投げ込め早が除ける』とある。
で、目は頂上に在る。風のやうに行走するものだ。これが現れると大早するが、裸形のも神異記には『南方に魃といふがゐる。一名早母といひ、長さ二三尺、裸形のも山丈といひ、雌を山姑といふ。能く夜中人の門を叩いて物を貰ひに来る』とある。

(三) 敦陽之山、未。

類(一) 白麋ノ州註ハ見ヨ。草部草。

び開明の南北、東南海外にいつれも視肉といふがあつて、郭璞の註に『聚肉であつたが、棄てても一も向に害がなかつた』とある。又、山海經には、^{敦陽}敦陽の山、及びは董儀が屋を撒いて土を掘つたと一肉塊を得た。術士は、それは大歳^{たいさい}だといふもので、これを食へば多力になるといふその物だ』とある。田九成の西湖志に、いなく、血がなしい小兒を得たが、^{おそ}懼れて埋めて了つた。これは白澤圖に所謂封指集解。時。曰く、按ずるに、江隣幾雜志に『徐積は(一)廬州^{ろしゅう}の邊で手に指

科名 和名 未詳
 科名 和名 未詳

封

(綱目)

主治 【】 氣味 肉

味の甘く酸し、温にして毒なし。たつた。ある。

け、人の志をして壯ならしめる【白澤】 食つた。煮て食つたが味は狗のやうだつた。敬叔はこれ彭侯と名ける。敬叔が大樟

黒狗のやうで尾がな^い。烹て食へ^る。千歳の木には買^ひ賈^うと^{いふ}精がある。形状は豚は形状は。形^は状^はは^{いふ}精^があ^る。千^さ歳^の木^には^か買^ひ賈^うと^{いふ}精^があ^る。形^は状^はは^{いふ}精^があ^る。形状は

は

時珍曰く、按ずるに、白澤圖に「木の精を名けて彭侯と^{いふ}。形状は

集解

彭侯綱目
 科名 學名 和名 未詳
 名 名 名 未詳

は邪を辟ける方薬に入れたのであらうが、その方法は傳を失した。その物はや李娥といふ識つてゐて、その丸には方相腦を用いたといふから、その物は鬼物であつて、古代には人の想像でさざざの姿のものにしておつた。昔、費長房もいづれもいふ。魅といふ。二目のものをば魅といふ。死人には關係するから此にある、即ち罔兩である。藥石と關係はないのだが、死人には關係するから此に下につて死人の腦を食ふものだ。しかしだ柏をその首に挿めば死ぬといつたな獸を得た。二童子に逢つて訪ねて見ると、それは弗述といひ、また蠶と名け、地あるはこの物だ。述異記には「秦の時に陳倉の人が獵に出て、豕のやう、羊のやうに石虎を樹て柏を植ゑる。國語に「木石の怪は變、罔兩、水石の怪は龍、罔象」と

二。類。赤。陳。腐。魔。ノ。京。部。註。山。見。草。

本草綱目人部第五十二卷

本草綱目獸部第五十一卷下終

へるといふ。これはまた蟲魚の屬にして封に類するものだ。

大い小兒の臂ほどの腹があつて口、目がなく、足が三十あり、炙いて食
れなだけである。又、海中にある一種の土肉なるものは、正黒にして長さ五
やうに生ずる『とある。いつれも封の類であつて食へるものだが、ただ一
て、形は牛肝の如く、兩目があつて食つて盡きることなく、尋で復た舊の

附註

本草綱目十一種 明の李時珍。

證類本草一種 宋の唐慎微。

開寶本草一種 宋の馬志。

本草拾遺八種 唐の陳藏器。

名醫別錄五種 梁の弘景註。

本草蒙筌一種 明の陳夢錫。

嘉祐本草四種 宋の掌禹錫。

日華本草二種 宋の大明。

唐本草一種 唐の蘇恭。

神農本草經一種 梁の陶弘景註。

移し入れ、種一から玉石部に移し入れた。

十種とし、また分類を加へぬことにした。舊本の二十五種から、本書にては五種を眼器部に

のたけを詳し、その惨忍、邪穢なるものを略して各條の下から切り棄て、通計三

人が用いた經驗があり、いづれも遺て行かぬもので、ただ人道に害なきもそ

薬となると稱するに至っては、まことに殘忍極である。今この部では、凡そ

と區別される意味が現はれてあつたのだ。後世方士の土が、骨、肉、膽、血、みな

李時珍曰く、神農本草には人の物はただ髪うぶの一種だけであつて、そこを人に物を

本草綱目人部目錄第五十二卷

作ル。大觀ニ驚チヲ細ニ

煎膏は肉を長し、瘡血を消す【大明】

悶、血運、金瘡、傷風、血痢を止める。薬に入れるには、焼いて性を存して用ゐる。

【本經】雞子黄と合せ煎じて消かして水に、小兒の驚熱、百病を療す【別錄】

【別錄】人々の驚、小兒の驚、大の瘡を療す。仍て自ら神化に瘡す

【五味】主

氣味【苦】し、温にして毒なし【別錄】

を存して用ゐるが、やはり良し。

時珍曰く、今一般に、皂水で洗淨して晒し乾し、礮に入れ固濟して煨いて性

浸し、漉し出して瓶子に入れ、火で赤く煨き、放冷して研つて用ゐる。

の頂心から剪下したものとだ。丸薬、膏中に入れて用ゐる。先づ苦參水に一夜

【修治】髮とば、男子二十五年までの疾患なくして顔貌紅白なる者

ある。

僅たる『とある被は首飾のこととて、髮を細く作るものだ。即ちこの髮のこととて、篇の字のあるところを知らなかつたのは、たの攻究の粗漏である。毛萇の詩傳に『被』したのはいづれも誤である。且つ顧野王は蘇恭の時代の生に存した人だ。恭が玉

り、百病を療する。

雞子黃に雞へて熬り、良久して出る汁を兒に與へて服させるのである、髮熱を去す。弘。曰景。く、俗間でママ嬬母が小兒のためたに作る雞煎は、その父の頭梳ママいた亂髮を去す。

利用しただけである。

た。これはいづれも補陰の效驗であつて、椒を用いたのはその物の下に達する力を入れた。入れて黒く煨ママいて研み、空心に錢一つつ酒で服し、髮を長く黒くするといふ。又、老唐方でも、自己の亂髮を洗淨し、兩つつ川椒粒を入れて泥固し、たを存し、豆ほどの三九つを服して選精丹と名け、頭を白くならなくするといつた。を療し、心ママ發の血を去るのである。劉安君は、己の髮と頭所分ママを合せて焼いて性ママを發し、時珍ママ曰く、髮は血の餘である。故に能く血病を治し、陰を補し、驚癇

發明

す。【(蘇恭)】瘀血を消し、陰を補するに甚だママ捷ママだ。(靈寶)

は、轉胞、小便不通、赤痢、嘔ママ腫、狐尿刺、尸疰、疔腫、骨疽、癰瘡を療す。小兒驚癇、血を止める。鼻衄ママは、灰に焼いて吹ママけママばママ立ママるママ【(別錄)】燒炭、小便不通、【主】治、【效驗】五淋、大、小便不通、

氣味

【苦】微温にして毒なし

丙ニ作ル。吹之ヲ吹

援證してあつて、やはり自ら道理がある。しかし文字が多いかいから此には採録せぬ。
 壽命の長短とは關係なく、遺傳と環境と環^{うかん}應^{おうえい}とに由るだけだ『といひ、古今の説を
 又、昆^{こん}齋^{さい}吳^う玉^{ぎよく}は白髪を作つて『髪^{かみ}の白くなくなるには遲^{おそ}早^{はや}、老少はあるが、いつづれも
 又、齒^はは數^{かず}叩^{たた}かゞといつた。いつづれも精^{せい}を攝^{しやく}し、腦^{のう}を益^{えき}するの理である。
 君は『髪を落ちぬやうにするには、頭^{あたま}を満^み干^{かん}通^{つう}梳^し』といひ、又『髪は多く梳^しが
 れぞれ道理はあるが、終^{はつ}局^{きよく}は經^{けい}に因^よつて分類する方法の確^{たつ}なるに及^{およ}ばない。劉^{りう}安^{あん}
 鬢^{はな}がなくして眉^{まゆ}、鬢^{はな}に異^いなりが『説明は同じくなくいつづれ、女^{にょ}子^し、宦^{くわん}人^{じん}は
 木^も氣^きを稟^{りやう}けて側^{わき}に生^はずる。故^{ゆゑ}に男^{おとこ}子^しは腎^{じん}氣^きが行^いつて鬢^{はな}が、女^{にょ}子^し、宦^{くわん}人^{じん}は
 火^か氣^きを稟^{りやう}けて上^{うへ}に生^はずる。鬢^{はな}は腎^{じん}に屬^{ぞく}し、水^{すい}氣^きを稟^{りやう}けて下^{した}に生^はずる。眉^{まゆ}は肝^{かん}に屬^{ぞく}し、
 氣^きの榮^{えい}は以^{もつ}て眉^{まゆ}となり、血^{けつ}の榮^{えい}は以^{もつ}て鬢^{はな}となる。』とあり、類^{るい}苑^{えん}には『髪は心に屬^{ぞく}し、
 龍^{りゆう}木^{もく}論^{ろん}はこれ^{これ}を人^{じん}退^{たい}といつてある。葉^{えつ}世^せ傑^{けつ}の草^{そう}木^{もく}子^しには『精^{せい}の榮^{えい}は以^{もつ}て鬢^{はな}となり、
 血^{けつ}は水^{すい}の類^{るい}である。』とある。今^{いま}の方^{かた}家^けが髪^{かみ}を血^{けつ}餘^{じよ}と呼^よぶは蓋^{しか}しこの意味に本^{ほん}くのだ。
 り、滑^{くわく}壽^{じゆ}の註^{しゆ}に『水は高原に故^{ゆゑ}に腎^{じん}の華^けは髪^{かみ}に在^ある。髪^{かみ}は血^{けつ}の餘^{じよ}であつて、
 主^{しゆ}り、腦^{のう}は髀^ひの海^{かい}であり、髪^{かみ}は腦^{のう}の華^けである。腦^{のう}が減^{へん}ずれば髪^{かみ}が素^そくなる。』とあ

かまびすき

頭垢を芥子一粒ほど納入して涙を取る。(摘方)【酸漿を吐するもの】漿水で頭垢
 飛絲の目に入りたる【さ】頭上の白屑少量を拵れば出る。(物類相感志)【赤目腫痛】
 竹木で肉を刺したと【さ】出ぬには、頭垢を塗れば出る。(劉涓子)に同じ。(いづれも集簡)
 苦參末を酒で調へて傳ける。(懷中)【蜂臺の瘰癧】頭垢で封ずる。【蟻蛇の瘰癧】頭垢、
 和して傳け、同時に梳を炙いて汗を出して封ずる。(いづれも金方)【蜈蚣の瘰癧】頭垢、
 蠟皮等分を灰に燒き、水で一盃を服す。口瘰するときは灌ぐ。○犬咬瘡の重發した
 品【方】自死の肉の故頭巾の中の一錢水を服して吐き取る。(櫛大の毒)頭垢、
 を棗核ほど含んで汁を嚙む。能く死入を起たしめる。或は白湯で服するものもよし。(小
 頭垢毒を塗る。(肘後方)【菜毒、肺毒】凡そ野菜、諸肺肉、馬肝、馬肉の毒には、頭垢
 り、再び一盃で合定して紅く煨き、火毒を出して研つて擦る。(楊氏)【小兒の緊唇盛
 頭垢、枯槁を研り勻ぜ、猪膽で調へ、紙膏にして貼る。(いづれも集簡)【下疳瘡】蠶繭に頭垢を盛
 る。男子の頭垢を桐油で調へ、隔紙膏にして貼る。(いづれも集簡)【臍癰】生じ瘡
 梳垢五丸を酒で服せば退消する。【婦人の足瘡】年を経えぬ若風瘡と名け

【乳婦】婦人の乳。衛生寶鑑。瘰癧を治す。汗が出て立つるに瘰癧を治す。汗が出て立つるに瘰癧を治す。

【倒流水】水で服し、左右に暖に臥して汗を取る。世に效がある。或は胡椒粒を

【乳】婦人の吹乳。百齒霜を無根水で梧子大の丸にし、三丸つづつを食後に屋上の

少量を水で服す。【小兒の哭】方は上上に同じ。【百鬼魅】方は上上に同じ。【乳】小兒の

【頭痛】頭痛を豆ほど水で服し、【外臺】外臺を盛つて服す。【小兒の疳】小兒の疳を

【水】梧子大の丸にし、一丸を飲んで服す。【傷寒】傷寒の瘰癧を初に勞せぬやうにするに、頭を焼いて研り、

【勞復】勞復の預防。【傷寒】傷寒の瘰癧を初に勞せぬやうにするに、頭を焼いて研り、

【附方】天行勞復。【頭痛】頭痛を東核大にして一箇を含むが良し。【瘰癧】瘰癧を

【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。

【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。

【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。

【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。

【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。

【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。【瘰癧】瘰癧を治す。

豆ほじとを煎じて一、二益を服すれば效がある。(華濟方)

耳 塞 (華 日) 學 和 名 名
Ear wax 名 名
みく せ

釋 名

耳垢 (綱目) 腦膏 日華 (泥丸脂 時珍) 耳は耳は腎の竅であつて、腎氣が通ずれば
右の上から耳に入ら、化して耳塞となる。故にこれを塞といふとある。
塞はなにか、寒れが氣が不通となる。故にこれを塞といふとある。

氣 味

【氣味】鹹く苦し、溫にして毒あり

主 治

【主治】顛狂、鬼神、及び酒を嗜むもの【大明】蛇蟲、蟻咬に瘡されたるに

附 方

は、これを塗るが良し【時珍】新 六。蛇蟲の瘡傷【人耳垢を蛇蝎で和して塗る。黄水を出し盡して
立ち癢える。(華域方)】破傷中風【病人耳中の膜、并に爪上を刮つた末を用ゐ、
睡で調へて瘡口に塗る。立ち癢に效がある。(備門事親方)】抓瘡を水で傷めたもの【腫
して忍び難きには、耳垢で封する。一夜にして水が盡く出て癢える。鄭師甫は余

白きももは臍直し、爪惡くして、色澤は非難す『あつゝある。

【しな葉、しん鹹く丹】

【附註】

分婉を催し、胞衣を下し、小便を利し、尿血、反逆易、内、破傷中風を治し、

舊三、新二十七。

附方
舊三、新二十。
【法】
太上交科に
常に庚辰の
日に手の爪
を去

三戸、九疊みな威する。名けて斬る。とふ。一、ま、甲寅の日に、ま、三、

申を剪る兵あるは、
【脚氣】の病、手足、
足つ甲を削ぐと少く
肉

西で開へて曲す。取つて出す。子(こ)の(の)身(み)を(を)療(りやう)ふ(ふ)は、枝(えだ)の(の)風(ふう)を(を)草(くさ)に(に)せ(せ)る(る)事(こと)。

[illegible]

して復た行らしめて瘡が自から紅く活き。蓋し劫^ニ剋^ス。ある。けれども伏毒が心に宜しく、酒、麝を以てその力を發すれば、腎の經に竄^ニ入^リて毒氣を發出し、熱が發出する。或は變倒するものである。この場合物を服用するが、とある際に、外部風寒、骨餘の冒され、腫脹が閉塞し、血が澀つて行かず、毒も齒なるものは腎の標、骨餘のあつて、瘡の場合、毒が腎から出て發せんと揚してゐるが、しかし、一概にこれを用ゐては甚しき害^ニ患^スすることがある。それも時珍曰く、近世では、人牙を用ゐて瘡の陷^ニ伏^スを治し、神品として稱

發明

【時珍】

治す。藥に入れるには焼いて用ゐる【乳】乳癰のまだ潰れぬもの、瘡癰を治す。

氣味

【甘く鹹し、熱しに毒あり】

主治

【勞を除き、瘡、無毒の氣を治す】

する。【その數に及ばぬに由る】といつた。

兒が變蒸し、蝨齒するは、花が苗に易るやうなもので、三十六齒に及ばぬものは蒸平が衡を得て眞牙が生え、四十に生えて腎氣が衰へて齒が槁れ、髮が落ちる。『錢乙は』小が素なる。男子は八ヶ月で齒を生え、八歳にして齒が彫れ、二十四にして腎氣が

十一にして腎氣が平衡を得て眞牙が生え、四十九にして腎氣が衰へて齒が槽れ、髪を主り、齒は骨之餘であつて、女子は七个月で齒が生え、七歳にして齒が齦れ、二時。曰く、兩旁なるを牙といひ、その中間のものを齒といふ。腎は骨

釋名

牙 齒 (日) 華 學名 和名 牙、齒 Teeth

けは止まる。試験上效を認めた。(簡便方)

一 錢をつつを粥飲で服す。(聖濟總錄) 【鼻】血に出る齧指甲を刀で刮り、細末にして吹薑を炮。白礬を枯らし、敗皮巾を灰に燒いて各一兩を末にし、二日同乾。積年の瀉血【あらゆる薬も效なきには、人指甲を炒りし、麝香と各二錢半、各半】甲を灰に燒き、貝齒を灰に燒き、龍骨と各半兩を末にし、日三四回點ける。(聖惠方) 甲を刮つて細末にし、乳で和して點ける。(集簡方) 【目】に珠管を生じたるもの【手爪】大の丸にし、一粒づつを目中へ入れらる。(聖惠) 【目】に花醫を生ずるもの【刀で爪疾いづれども木賊で爪甲を取りつた末、朱砂末等を研り勻せ、露水で搗ぜて芥

人糞別錄（大便時珍曰、人糞なるものは糟粕の變化したるもの

釋名

人糞を附す——

人尿別錄（學名 Human feces. 學名 糞）

る。仁壽仁齊直指方（

ある方では、川烏頭、硫黄、人牙を煨き、これを末にして酒で服用す。やはり妙であ
當歸、麻黄を酒で煎じ、たもて服用し、外用としては薑汁で糊を和して傅ける。○又
左の方を用ゐる。人牙を煨き、穿山甲を炙き各一分を末にし、これを二服に分け、
ぬもの頭が四んで沈んし、疼まず、熱無く、内植散を服して起さぬには、必ず
各等分を末にし、麝香、輕粉少量を入、油で調へて傅ける。重指方（陰疽の發せ
名ける。普濟方（漏瘡、惡瘡）【水が乾き、肌を生ずる。人牙灰、油髮灰、雄雞内金灰と
水を出すには、人牙を焼いて性存し、麝香少量と末にして吹く。これに佛牙散と
だ潰れぬもの【人牙齒を火で煨いて研末し、蜜水で一文字を調へて服用す。】乳癰の

場合には、麝香を入れて温酒で服す。その效神の如し『とある。〇〇無價散——人牙、
に、積血で調へて一錢を服す。涼藥を服したために血が滯つて倒陥したものの
固濟して煨ふき、火毒を出して研末し、出づるころが思はしからずして黒陷するもの
で、自出でしむべきものである。人齒の脱落したものを、多少に拘らず互たがひに
れば倒膿であつて、宜しく肌を温めて熱氣をして復た行いつめ、斑いばを
出でて風寒に外部を襲はれたために、或は黒く變じ、或は青紫となるものを治す。
少量を入れ、生錢を温酒で服す。〇〇間規の疹論には『人牙散は、痘疹が方に
【附方】
新二、舊一、
【麝倒瘡】錢氏の小兒方では、人牙を焼いて性を存し、麝

上、いかで人牙で能く復た治しやうか』といつてある。
に歸するものは宜しく人牙散を用うべし』といつたが、そもそも既に腎に歸した以
陷れる。非常に警戒すべきことである。高武の痘疹管見は『左伸恕は「變黒して腎
る。苟もこれを誤用するならば、鬱悶し、聲が啞し、反つて救ふべからざる状態にあ
り、熱、昏、紫泡の證を呈するものの場合には、毒を解し、虚を補すべきものであ
在つて昏ひん、紫泡の證を呈するものの場合には、毒を解し、虚を補すべきものであ
痺塌しやうたふして化膿が不能とな

へて飲ませれば解す。世俗にこれを地清といふ。（寇宗奭衍義）【勞極蒸骨】また伏連

その末二三匙を坑中に入れ、新汲水で調勻して良久して澄清し、それを少つゝの順

【大熱狂渴】乾いた陳い尿を末にし、陰地の清な黄土（い）に五六寸の小坑を作り、

て火毒を出して研末し、新汲水で三錢を服用す。なほ退かぬときは再服する。（斗門方）

汗を發せず、また事不省なるには、人中黃（じんちゅう）を大礮（ひ）に入れて泥で固濟し、半日煨く

【金（方）熱病發狂】奔走してて癲狂のやうでもあり、鬼神を見るやうでもあり、

【附方】勞復、食復、尿を灰に燒き、方寸匕を酒で服す。（千金）

實熱を解す。飯に和して丸にして丸にたものは痰を清し、食積を消し、陰火を降す。（震亨）

【主 治】天行熱狂、熱痰中毒、惡瘡（大明）、熱毒、濕毒。大いに五臟の

方法に比すれば更に妙である。

泉水のやうに清んで全く穢氣（穢）がなくなる。年久しきものほど佳し。竹筒で滲取する

瀝し取り、その汁を新甕（しんそう）中に入れて枕（まくら）で覆ひ、一年間土中に埋めて取せば、

【汪機】曰く、棕皮、綿紙（めんし）の上に黄土を鋪き、養汁をその土上に澆（澆）ぎ、淋（淋）して清汁を

取り、晒し乾して用ゐるものだ。

を養中ようちゆうに浸して立て春に取出し、風の當る場所に懸けて陰乾し、竹を破つて甘草を

震亨しんかう曰く、人中黄は、竹筒の中に甘草末を入れて兩端を竹木で塞ぎ、冬到にそれ

と名ける。

中毒を治す。これを養清と名ける。皂莢さいけいを浸して天行熱疾を治するを人中黄の

大。明。曰く、臘月に淡竹を截り青皮を去り、それを浸漚して汁を取り、天行熱疾の

な瘰癧れいぎを。

黒くして苦いものだ。それを黄龍湯と名ける。瘰癧病で死に垂たんなたるものを瘰してみ

い土地で、空罌くうぎの口を塞いで糞中に納れ、積年にしてそれを溜たる汁を取るが、甚だ

近

養清ようせい 名 釋 黄龍湯わうりゆうとう (弘景) 還元水げんげんすい (菽園記) 人中黄じんちゆうわう 弘景曰く、城市に近

蒸勞復じやうらふく、癰腫ようしゆう、發背、疔瘡しやうそうの起ぬもの【時珍】【】

むがいよいよ善し。新なるもので丁腫を封すれば一日に根が爛れる【蘇恭】【】

を解するには、末に搗こき、沸湯を沃そそいで服用す【別錄】【】

【治】 主 苦し、寒にして毒なし【時珍】【】

だ。故に文字は米に從ふの會意である。

三服で效がある。(海上名方)【痘瘡の起らぬもの】痘瘡の起らぬものは、痘瘡倒靨、及び灰
 蘿蔔の中に入れて、火で三炷香の間煉つて取り出して、三錢つづつを黄酒で服す。
 すものだ。これに越王國の方である。(米類鈴方)【噎して食物の下らぬもの】人尿を
 一錢、錢の外野の乾いた人尿三錢を末にし、五更に薑片に麝けて食ふ。能く死人を起た
 錢を水で服し、井に鼻中に吹く。(千金方)【噎隔反胃】諸藥の奏效せぬには、眞阿魏
 瀝、姜汁(姜汁)と勻して服す。(丹溪心法)【鼻衄の止まぬもの】人尿尖を灰に燒き、一二竹
 【嘔吐痰心煩し、骨蒸するもの】には、人中黄を末にし、毎服三錢を苦根汁(苦根汁)、竹
 の方は神妙なるものである。如何がしい人物に浪りに傳へてはならぬ。(外臺秘要)
 するに、坑を作つて尿三升を燒き、夜間三升に漬け、少しづつ減じて服す。
 毎早朝一小升を服し、日暮に童便(童便)一小升を服す。瘡を度とす。既にして常服
 【骨蒸熱勞】人尿の乾けるも取つて燒いて外を黒くし、水中に入れて澄清し、
 もなくなる。それを毎早朝一合を服し、正午に再服する。神效がある。(張仲景方)
 月六日の麴半餅を盛つて封じ、密室中に四日間置けば、いづれも消けて惡氣
 傳戸とも名ける。この方が甚だ效驗がある。人尿、小便各一升、新粟飯(飯)五升、六

釋名 漫素問(小便)問(綱)酒(綱)目 還元湯 時珍曰、尿は尸に

人 尿 奴吊の切ヨ(ウ)の發音 和名 尿 學名 Human urine

兒の鬼紙頭を治るには、灰に焼いて臘豬脂で和して塗る【時珍】瘡を治るには、肉を食し、面を印字を除き、一個月にして瘡を【瘡】小

小兒胎尿(綱)目 和名 胎尿 學名 Fees of young born infant

ぜ、新汲水に化して服す【生編】日にして癰を癒せる【問氏】心腹急痛【死せんとするに】は、人尿を蜜と共に搗りまき、方寸匕を酒で服す【後方】惡の咬傷【左盤龍】即ち人尿で厚く封ずる。數するには、いづれも糞汁一升を飲めば活さる【後方】瀰肉肺の毒【人尿を灰に焼とるもの】で、やはり此の方が宜し【難經】野葛【毒】山中の毒菌【死せんとすに汁を飲み、并に塗る。】たある。一種は射罔箭を箭鐵に塗

ける。この二種は纔に皮肉を傷れば、洗膿が爛れ、死ぬ。これに中つたときは、直焦銅を用いて、箭鏃せんさくを作り、嶺北の諸處で、蛇、毒整物の汁を筒中に取り、てて、毒箭鏃を廣の夷人は飲む。破は槍湯せんたうと名ける。蘇そ恭きやう【毒箭の毒を解す】三種ある。交、廣の夷人はとす。新養汁しんようじゆを水に和して服す。或は乾いたものを焼いて、未にし、漬けて汁を視してはならぬ。この方は神驗あるもの。外げ秘要ひやう【諸毒卒そく惡あく】熱悶して死せんは、尿尖七箇を灰に燒き、水で調へて頓服し、温に覆ふて汗を取れば、瘰癧する。輕に消する。金きん【蠱毒、あらゆる毒に塗る。金方】毒蛇の咬くは入つたところには、人糞を雞子の大いさほど服し、并に塗る。金方【毒瘡腸出】乾人尿末を粉こなせば入る。金方【鉞瘡出血】止ぬ。人尿を燒き研つて傳ける。金方【馬血の瘡に入つたところには、人糞を厚く封ずれば、人尿腫する。金方】瘡瘻出しやうろう血【鉞瘡出血】止ぬ。和して傳ける。金方【酒で一寸寸を服す。鬼頭瘡きとうそう】小兒瘻ろう後ごの陰脱いんだつ人尿を赤く炒つて未にし、一日二回、酒で一寸寸を服す。金方【外げ秘要】産後さんごの陰脱いんだつ人尿を赤く炒る。人尿を裏んで貼る。必ず蟲が出た。金方【十便良方】小兒の唇緊しんきん人尿灰を傅け、で口ならぬ。金方【疥で口、鼻を蝕するもの。唇、頰を穿つてある。綿

時珍曰、小便は性温であつて寒ではな。これを飲めば胃に入り、脾の氣に隨（つ）せ。陰火動（う）の弊（い）が如（く）き熱蒸は服藥は無益の（い）だ。小便以外では除けな。

つた。尿を服し、何ゆゑに多（い）を性寒だか多（い）く服するは宜しくいへ（い）か。凡（い）で人尿を服し、四十餘年に及んであつた。且老健にして他病して他病（い）な。か（い）て容貌四十位に見えるで、そのわけを（い）ねて見て、常に惡病があつて、人の教（い）を震亨曰、小便は火を降すところが甚だ速だ。嘗て見（い）た一老婦人は、年八十を過（い）が寒である。故に熱の方中に用ゐてあるの（い）だ。

つかない。氣血が虚して熱なき場合には就中多く服しては宜しくい。この物は性が血（い）が寒し、人をして帶病を發せしめるものだ。しかし一般にはやはりそれに氣が物を壓し下す。七七日以上飲むものがあるが、それは過多である。恐らくい（い）間惡（い）宗爽曰、溺は童子のものに限るが佳し。産後一盃を温すれば、敗血、は（い）り多くは癒（い）る。葱、豉と合せて湯にして服するがよい佳し。

發明

弘景曰、初に頭痛を起したときには、直ちに人尿數升を飲めば、や

中（い）時珍（い）を（い）療（い）す（い）【時珍】

陰を滋くし、火を降すことが甚だ速だ【震亨】蟲を殺し、毒を解し、瘡、運絶するを療じ、吐血、鼻衄を止める。皮膚の皴裂、難産、胎衣不下、蛇、犬咬して服す【藏器】勞渴を止め、心を潤し、血悶熱狂、撲損瘀血が内に在つて鬼氣挂病の停久なるものを去るにこれを服するが佳し。冷を恐れるときは熱湯に和し、聲を益し、肌膚を潤ほし、大腸を利し、陳を推して新しきを致し、咳嗽肺痿、尤み良し【別錄】久嗽の氣上失聲、及び癥積滿腹に主效がある【蘇恭】目を明に氣味【鹹し、寒にして毒なし】主治【積滿腹に主效がある】寒熱頭痛、溫氣。童男のものが出『といつてある。』地氣上つて雲となり、天氣下つて雨となる。故に清陽は上竅に出で、濁陰は下竅に氣化すれば能く出るのである。陰陽象論に『清は天となり、濁は地となり、粕は大腸に入り、水汁は膀胱に滲入する。膀胱は州都の官、津液の府であつて、氣精を通調して下に膀胱に輸る。水道は閘門であつて、水穀を分泌するを主り、水道を飲めば胃に入り、精氣を遊溢し、脾に輸り、脾氣は精を散じて上に肺に歸し、水道從ひ水に從ふの會意である。方家でこれを輸廻、還元湯といふは隱語であつて、

つて浸し、一夜露して甘草を去り、早朝に頓服する。或は甘草末一、二錢を入れて共に破
 頰赤く、氣急するに、童便を頭、尾少量を去つて五合に大粉甘草一寸を四片に破
 燒餅を食つて壓する。一、二ヶ月餘で全癒する。(童便)【久嗽涕唾】肺痿で時時寒熱し、乾
 童男の便を用ゐ、排尿の初と終とを薬とて中間のものを取り、日に二、三回進め、乾
 服して神が驗があつた。(童便)【男子】婦人の性證は童女の便を、女に女は自
 小便の臭氣を聞いて瘡をさるもの。台州の丹仙觀の張といふ道士はこれを病み、自
 二、十日後は蟬(せみ)のやうな蟲が身内に居り、常に出て十歩の内に病入
 す。かくて後は常に自己の小便を取つて服す。二十日、重さは五十日更に瘡を
 の童便五升を一升に煎じ取り、蜜三匙を和して二、三碗を服し、半日を更に服
 て温服する。(聖濟總錄)【熱病咽痛】童便三合を合を止め止む。(童便)【骨蒸熱】三、四
 附方 舊七、新三八。【極端なる頭痛】童便一合、蓋、心半合を五分まで煎じ
 附の薬の中に加へる。その氣が相從つて格拒の患を去るもの『だ』とある。
 く、乾嘔して水を飲まねば、尿、猪膽汁、人尿、寒の物を白通湯、薑、薑、
 效がある『とあり、又、成無己は『傷寒少陰證で下利して止まず、脈逆して脈な

に服し、日に二、三服を進め、寒い氣候の際には重湯で温めて服す。久ししして自ら
へて水道を助ける。使用するには、一、蓋をついて、或は非汁、二、點を入れて徐
下の子から取り、その童子には、烹炮^{ほうほう}の肉食、酸の食物^{たべもの}を、絶ち、多く米飲^{まいしん}を與
を滋くし、火を降し、瘀^お血^{けつ}を消し、吐血^{とつ}、諸血^{しよけつ}を止め、その效甚だ速だ。蓋し、陰
の吐血^{とつ}、略^{りやく}血^{けつ}には必ず童子小便^{せうせんに}を用ひ、その效甚だ速だ。蓋し、陰
の效^{こう}、愈^いすれば愈^いする。たゞ、瀉^{りやく}を飲めば、百に一も死なないが、若し寒涼
めなもので、毫^{ごう}髮^{はつ}のでもあれば、必ず効血^{こうけつ}し、既に滲^{しん}入すれば愈^いし、愈^いし、
按ずるに、褚澄^{しよてい}の遺書^{いしよ}に『人の喉^{のど}に痰^{たん}があれば、効血^{こうけつ}して死する。喉^{のど}は物を停
するである。

る。小便と血とは同類のものだ。故にその味は鹹くして血に走り、諸種の血病を治
り、濁るものは氣となり、濁の清めるものは津液となり、清の濁るものは小便とな
く肺病を治し、火を引いて下する。凡そ人の精氣^{しんき}は、清めるものは血とな
つて上に肺に歸し、下に水道に通じて、膀胱^{ぼうくわう}に入る。これはその舊路である。故に能

處に移し、道上の熱土を掬つて、臍上を攤ふて窩を作り、人をしてそれにて溺を満たさ
 く、結局除けな^い。(聖惠)【中咽】夏期に人が道途中で熱死したるには、急陰
 二匙を入れ、攪ぜて白沫を去つて頓服する。碧綠を吐き出させて妙である。白蜜
 蜜を和し、煎沸して頓服する。(簡便方)【瘡諸瘡】瘡の疾を新久を問はず、童便一升に蜜
 に煎じ乾し、放冷して任意に食ふ。(聖惠方)【癰疽】癰疽の疾を新久を問はず、童便一升に蜜
 して水で血を洗淨し、膏淨し、膏淨な銅に入れて一重は肝、一重は杏仁を鋪き盡し、童便で共
 せしめる。(肘後方)【下痢休息】下痢を去つて粥で炒つて研り、猪肝、一、二片を切に溺
 童子小便を服すれば止む。(聖惠方)【卒然腹痛】腹痛を去つて粥で炒つて研り、猪肝、一、二片を切に溺
 人溺を一回に一升を服す。下血し、片塊が二、三日に出る。(蘇恭本草)【絞腸痧痛】絞腸痧痛は、
 らしてはならぬ。三、四回に絞す。(聖惠方)【癰疽】癰疽は、諸藥にて療そぬは、
 に止む。(聖惠方)【消渴の重きもの】衆人の溺坑中の水盞を取つて服す。病人に知
 溺、薑汁を和勻して一升を服す。(日華子)【齒縫血】血童便を温熱にして含めば立
 【肺痿咳嗽】鬼氣病【停久臭溺】を日々に温服する。(聖惠方)【吐血、鼻洪】鼻洪は、
 服するもよし。一日一、二回。熱物を食ふことを忌む。(姚和衆集)

互で煨（い）いて用ゐる。

ことだ。風と日光とで久しく乾いたものを良しとする。薬に入れるには、いづれも
人白中白時珍（しん）曰く、滓（ざい）をを（を）に（に）いふ。これは人溺（にやく）の澄んだ下の白滓の

釋名

白濁 唐本草（草和名）（き）音は魚動の切（て）ある。
Sediment of human urine.

草【時瘡腫痛】熱重尿に瘳三分を入れ、一日二三回洗へば效がある。（救急方）
下す【人溺一升に葱、薑各一分を入れて煎じ、二三沸して熱飲すれば下る。（日華本草）
諸薬の毒を解す【小兒尿を乳汁に和し、二升を服す。海上方】分婁（わ）を催し、胞を
入二升を煮（ゆ）沸（わ）して飲む。（千金方）【土菌の中毒】合口椒の毒入尿を飲む。（肘後方）
腹痛するには、童子（こ）子便を取（と）り、日に二升を服するが良し。（楊氏產乳）【胎兒死（し）】
して兩腋下を洗ふ。一日數回洗へば久しくして自ら癒える。（集簡方）【傷胎血結心
れは眞氣を以て邪熱を退け去るのである。（聖濟方）【腋下狐臭】自己の小便で熱に乗
【赤目腫痛】自己の小便を熱に乗じて拭し、洗つて目を少頃の間閉むる。こ

聖惠方(方)【解毒】の久しく經過したるもの童子小便を熱に乗じて少づつ頻りに滴す。恐がある(陳無本集)(原)【あらゆる蟲の耳に入るととて】「さ」小便を少づつにつつ滴入する。坐つて浸し、同時に烏雞屎を炒つて酒に浸して服す。かくなせねば毒のため死ぬれ。蓋の整傷【蛇が人の足に纏ふ。肘後方(方)】蜘蛛咬毒【久くして臭い人溺を大甕の中に入れ、良し。蛇が人の足に纏ふ。肘後方(方)】直ちにそれ尿せしめれば解ける。(肘後方(方))。尿せしめるがつた。○千金方では、蝮蛇の傷を治するには、婦人をして痔上に尿せしめて淋く。盛つて一夜浸せば瘰癧を温めて潰ける。(千金)【小便を温めて潰ける。千金】人に手指を咬まれたとき【瓶に熱尿の中にあるもの】【小便を温めて潰ける。千金】新尿を二三升頓服する。千金(方)【刺の肉をし(千金方)】火燒悶絶人事不省なるには、新尿を二三升頓服する。千金(方)【刺の肉を用ゐ、屢實驗上效を奏したといつた。外科發微(外)】杖瘡腫な。童便を服するが良れるが、童便は臟腑を動ぜず、氣血を傷らず、萬に一失も誤る戦地で多く用ゐるが、或は發熱し、煩燥し、口渴するものならんば、ただこの一物(風を服する他の薬に及び療血の有無を問はず、いつくれこれをも服するがよし。若し腸腹し、或は痛み、

ル。(一)皮、一木亦ニ作

めてて摻る。果に效があつた。陸氏經驗方(方)。走馬牙疳【小】便盆内の白屑を取下して、瓷瓶(びん)に淨(きよ)く白を煨(わ)き、黄蘗(わうばく)を蜜(みつ)で炙(い)き焦(こ)し、末にして等分に氷少量を入れ、青皮(せいひ)で拭(ぬぐ)ひ中(ちゆう)に勻(ひと)ぜて用ゐ、出る涎(せき)を拭(ぬぐ)ひ去(は)る。數回にして癰(よう)を癒(な)さる。集簡方(方)。小兒(せうに)の疳(かん)口(こう)【小】兒(せうに)の瘰癧(れんげん)七分、枯礬(こらん)三分を研(ひ)す。陷(おち)つたものか白く出る。備事(びし)門(もん)觀(くわん)。(方)。口(こう)【小】兒(せうに)の舌(した)に生(な)じし瘰癧(れんげん)【瘰癧(れんげん)】瀉(げ)七、三、錢(せん)を温水(ぬみず)で服(の)す。果氏集驗方(方)。疔瘡(ていそう)倒(たふ)し。千金(せんじん)方(方)。鼻(び)中(ちゆう)の息(いき)肉(にく)【肉(にく)】人中(にちゆう)白を互(たがひ)で焙(ほ)じ、一錢(せん)つづつを温水(ぬみず)で服(の)す。い出て出る水を瘡口(そうこう)に滴(た)入(い)る。鐵原證治要訣(てつげんしやうぢいようけつ)【小兒(せうに)の霍亂(かくらん)】尿(せ)末(まつ)を乳房(にゅうぼう)につけて煨(わ)つたものか一の孔(こう)が生(な)じ、深(ふか)さ五分(ごぶん)ほどになつて異常(いじやう)に痛(いた)む。は、人中(にちゆう)白を煨(わ)尿(せ)を丸(まる)になるまで煎(せん)じ、小豆(こまめ)粒(つぶ)どつづつを一日(いちにち)三服(さんぷく)する。千金(せんじん)方(方)【脚氣(けうき)で満(み)人(にん)】新汲水(しんきつすい)に化(か)し、鼻(び)中(ちゆう)に注(つ)いで、鼻(び)中(ちゆう)に化(か)し、新汲水(しんきつすい)に化(か)し、頭(かぶ)痛(いた)人(にん)中(ちゆう)白、地龍(ぢりゆう)を炒(い)つて等(たう)分(ぶん)を末(まつ)にし、羊膽汁(やうたんじつ)で芥子(かいし)の火(ひ)を去(は)つたものか一の丸(まる)にし、一錢(せん)つづつを正(ただ)しく服(の)す。立(た)ち上(あ)るに效(きう)がある。經方(けいほう)【方(ほう)は上(かみ)に同じ。偏(へん)、偏(へん)】五七(ごしち)日(にち)にして住(す)まぬは、人中(にちゆう)白を新互(しんご)で煨(わ)き、麝香(じやかう)少量(せうりやう)を入(い)れて、温水(ぬみず)で調(たう)へ【二錢(にせん)つづつを温水(ぬみず)で服(の)す。聖惠(せいゑい)方(方)】諸(しよ)瘡(そう)の出血(しゅつけつ)【方(ほう)は上(かみ)に同じ。鼻(び)腫(しゆ)の止(とど)まぬもの】

附方

舊一、新十四。

【大衄、衄入衄】

人中白一兩、雞子大、綿五兩を燒いて研り、

とある。これはいづれも血を散する證である。

『たが、張潤之が人中白の薬で治療する直ちに止つた。いづれも再發しなかつた』

は器から水を傾け注ぐやうに鼻血が出て白衣が紅く變じ、頭が空然たる有様だつ

りであつたが、張思順が人中白散を用ゐて即時に血が止つた。又、延陵の鍾官榮か

火を降すの證である。張果の醫説に『李士常衄に苦んで僅に喘ゐて奏效するは、

走らするものであるからである。現に一般に舌諸瘡を病むものに用ゐて奏效するは、

時珍曰く、人中白は、相火を降し、瘀血を消す。蓋し能く潤下して血を走

便中から出すものだ。蓋し膀胱なるものはこの物の故である。

發明

震亨曰く、人中白は、能く肝火、三焦の火、竝に膀胱の火を瀉して小

膚の汗血を治す【時珍】

疾【大明】火を降し、瘀血を消し、咽喉、口齒に瘡を生ずる疳匿、諸發の出血、肌

灼【唐本】瘡【唐本】燒き研つて惡瘡を治す【蘇恭】傳尸熱勞、肺痿、心膈の熱、羸瘦、渴

氣味

【鹹、し、平にして毒なし】大明曰く、涼なり。主治【鼻衄、湯火

發 明 時 珍 曰、
古 人 惟 人 中 白、
人 尿 取 つ て 病 を 治 し た の は、
そ の 血

明發

○時
○分

心を清し、天年を延べ、壽命を益す【壽考成】

五臟を安し、三焦を潤ほし、痰飲を消し、骨蒸を退け、堅塊を軟げ、目を明に

【時珍】腎水を滋くし、丹田を養ひ、本に返し、元に還し、根に歸し、命を復し、

(狂狷)

氣味

吳王

【虛勞冷疾、小便遺數、漏精白濁】

お却つて温に癒すに於ては

それを計つて人々を敗たものである。況や火煉を經れば性質

か、全然正しい方法に合はない。その名稱と實際と合致するわけがあるか。利益

しつたに皇水で澄し、晒したものを陰煉といひ、燻いたものを陽煉といつてゐる。

やまら　陰陽の方法である。世間一般の醫師は秋朔に取らずして、人の溺れを難收

[illegible]

たてあつて、下へ尋ねる重くつなつたものゝをけりたり。是が人名を稱して付けたる懸は

朝てそつ上で喜し、完全になつたとき、收し、上尊にある標くものかが秋

覺せて登生し、
かゝ散回樂反し、
幸^{さち}とて、
文條^{ぶんじょう}書し、
賊未^{もろ}を破^{やぶ}し、
一重^{いちじゆう}の
紙^しを灰^{かい}に上^{のぼ}せ

で攪ぜ、澄んでから清液を傾け去り、かく二三回繰返してから秋露水一桶を入れて
 嘉謨。曰。秋石は、秋期を須て童子溺を取り、毎缸に石膏七錢を入れたる素條
 の。方土は、鹽を爐に入れて煨ていて、偽物を作るから注意する必要がある。
 へて精致に製したのも秋水をいふ。これは蓋し海水で鹽を煎じると關條に微つたも
 をもやはり秋石と名け。これもまた精氣の餘だといふ。再びそれに蒸溜の方法を加
 色が白くして、質の堅いもの。近來は一般に人中白を煉つて白質にしたもの
 時。秋氷。曰く、淮南子に「丹號して秋石といふ」とある。その

釋名

秋石 (菱) 空

學名 和名 空 (菱) 秋石
 A drug manufactured from human urine.

缸の白垢を洗淨して研末し、二錢つきの白湯、或は酒で服す。(痘疹便覽方)
 三分、麝香一分を和勻して貼る。就中神效がある。【痘疹煩熱】人中白、或は老黃、
 李提領の方である。又ある方では、尿桶中の人尿桶の自垢を火で煨ていて一錢、銅綠、
 中に入れ、鹽泥で固濟して紅く煨いて研末し、麝香少量を入れたる。これ

中の虚である。水煉したもののは陰中の陽であつて、水を得て燒り、曝せば潤ふて干離り、水に入れば釋けて形體がなくなる。蓋し質が去つて味が存するのだ。これは凝火を得て凝方、象ねて至薬となるのであつて、火煉したもののは陽中の陰であり、火を得て凝煉【陰陽二鍊丹】世間で鍊る秋石はただ火鍊の一法だけだが、この薬は必ず陰陽二鍊

くすれば功が更に大なるものだ（經驗良方）

す。その薬は常に火に近づけて置いて置く必要があり、或は時にまた火で三五日養ふか。大の丸にし、五七七つから漸次に十五丸まで増し、空心に溫酒、或は鹽湯で服れて煨き、かくて二三兩を取つて二回研つて粉のやうにし、煮た菜瓢（うやひん）で和して綠豆たものが即ち人中白である。それを好き確（たし）子に入れ、十分に固濟して炭爐の中にい下から火を焚いて煮る。酒は少しづつ冷便を添へる。かくて煎し乾の固めて風の通らぬやうにし、乾いてから小便をその鍋に七分目まで入れ、窺ひその鍋の口の上に深い互饒（うたう）を載せ、その接目を紙筋を石灰に杵き込（こ）んだもので泥り用、——更に多ければ尤も妙である——先づ一箇の大鍋を空室中に拵（たづ）へて据（た）え、冷勞虚（れいろうきよ）の者もこれを服すればやはり壯盛になる。その法は、男子の小便石を

に露^{つゆ}して乾^{かわ}いたとき乳汁を添へ、かくて日精、月華を四十九日間取り、その日數
 は雪^{ゆき}のやうに白くなる。それを潔に洗して香しく濃く乳汁で和し、日中に晒し夜間
 して研り、河水に化して紙を七層にして濾過し、それを熬と秋石になり、その處
 換へて七回火をかき、然る後に男のものと女のものを秤つて平均に和して一處に
 互確を用ゐて固泥^{かひ}で鹽濟して鐵線^{てつせん}で縛り、一炷^{しょう}の香間火^{かうかんか}にかけ、その都度鐵線
 のもろを忌ませる。尿が鉈^なに滿るを待ち水で攪^かぜ澄して人中白を取り、各陽城
 の石を聚める。潔淨なる飲食物^{じやくぶつ}及び鹽湯を與へ、葱、韭^{しゆ}、薑、辛辣^{しんりく}のもの、
 法——童男、童女の潔淨にして體氣に疾病なきものから、沐浴し衣を更^かへさせて各一
 し、棗肉で和して梧子大の丸にし、二十丸つづの鹽湯、溫酒で空心に服す。○秋石
 ば補益する。秋石一兩、蓮肉六兩、吳川椒紅五錢、小茴香^{せうかうかう}五錢、白茯苓二兩を末に
 子大の丸にし、空心に三十丸つづの鹽湯で服す。【水類^{すいりゆう}方^{ほう}】秋石五精丸【常服すれ
 なるを治す。秋石、白茯苓各四兩、蓮肉、炭^{すすき}各二兩を末にし、蒸棗肉で和して梧
 服す。】鄭氏家傳方^{ていしけいでんほう}【秋石四精丸】色欲^{しよく}の過度で心氣を損傷し、小便數
 末にし、百沸湯^{ひやくふいとう}一盞、井華水^{けいけすい}一盞、煮た糊で梧子大の丸にし、一百丸つづの鹽湯で

【方】秋石交感丹【白濁遺精を治す。秋石一兩、白茯苓五錢、兔絲子を炒つて五錢を
 白茯苓一兩と末にし、^{糕糊}で梧子大の丸にし、五十九つをつつを人參湯で服す。^{仁仁}仁仁直指
 膏、蜜、油、やうな状態のものもを治す。秋石、鹿角膠を炒り、桑螵蛸を炙き各半兩、
 直指秋石丸【濁氣が清を干し、精が散して膏淋となり、黄、白、赤、肥騷んにしてして

（楊氏願真堂經驗方）

に離けて食つてもやほり小補がある。）。味は鹹く苦い。それれ肉を
 降す。前記の場合に升騰せぬものは普通の秋石であつて、味は鹹く苦い。それれ肉を
 い。即ち秋石の精英である。これを服すれば腎水を滋くし、元陽を固くし、痰火を
 て火を退けて冷ます。その蓋上に升起したものが秋であつて、味は淡くして香し
 ものだ。少くしててもなぬ。少くれば升せぬものだ。かく底の刻から末の刻に達し
 蓋上で升騰し、水で徐々に擦る。その場合多くしてはなぬ。多ければ結晶せぬ
 の時間を經て、秋石の色が玉のやうに白く見るととき再び研り、再び前のやうに燈
 ともある。それを鐵罐に入れ、上を鐵蓋で蓋ふて鹽泥で固濟して升騰させ、三炷香
 で淋して鍊る。かく七回繰返すとその色が霜のやうになり、或は一斤ほど取れる水
 下し、河水一桶に入れて攪ぜ化して紙を隔てて淋過し、た復た下し、再び水

つれも無情が變異したのも、魚、蛇、蟹がみな石に化すは有情の變異で、
の書に記載されてある實圭が石に化し、老樹が石に化したといふやうなものは、
はいつれも精氣が凝結する結果である。故に格物論に『石は氣の核だ』とある。羣
る。かの星が隔ちて石となり、沙淋、石淋、及び釋氏の顛顛が結して舍利子となる
ば凝結して石となるのだ。牛黄、狗寶、鮮答の如きは瘰癧の病で、
時珍曰く、人間が専心する癖となり、それが瘰癧を病むやうになれ

集解

癖石 (綱目) 石癖 學和 名 石癖 學和 名 石癖
Calculus in the human body.

石が溺に隨つて出るものである【大明】嘔病吐食。俗に澀飯病と名ける【藏器】
氣味 鹹し、溫にして毒なし【主治】石淋を水に磨つて服すれば、碎

同關係だ。

ので、正に滾水に酸を結し、鹵水を煎とるなり、小便を煉つて秋石となる
時珍曰く、これは淫慾の人の精氣が鬱結し、陰火が煎煮して遂に堅質となつたも

なものだ。それを取收めて用ゐるのである。

集解

藏器。曰く、これは石淋患者の尿中から出るもので、あだか小石のや

校正

玉石部より此に移し入る。

淋石 (宋嘉祐) 和名 膀胱石。 *Bladder stone.*

ることとを教へられ遂に癒えた。その陰陽を和したのである。(王濟明語方)。
へられて癒えた。時にかしき復た作^{つく}たが、又、陰煉秋石を大豆黄卷の煎湯で服す
瘡^{かさ}が生じ、熱氣^{ねつき}が再^{また}と上つたが、ある道人に數^{かず}壯灸するを教
る。(醫方摘要) 丹を服して發熱したのもある人は、伏火薬を多く服して腦後^{のうご}にあ
つを空心に醋湯で服す。(摘玄方) 【食反胃】 噎^{おんげん} 錢^{せん} 秋石一 秋石一つを白湯で服するが妙であ
【摘玄方】 赤、白、真秋石を研末し、蒸棗肉と搗いて梧子大の丸にし、六十九つ
ただ秋石を飲食に^す拌ぜ、腫脹が消いて、かから鹽を確に入れて煖いて少しづつ用ゐる。
【】 達したと取^とつて貯へて薬に調合する。(劉氏保嬰堂經驗方) 【腫脹を忌むもの】

經^り。穴^り名、風^り府^り。後^り三^り誤^り、

葬する石のやうな塊があつた』とある。これはいつれも癩癰が頑凝して石と成つて完全な觀音像が包まれてあつたといつた。『たゞ、醫書にはある者癩癰を病み、死後火に焼けてあつたが、死後火葬する心の中にも、示寂後火葬する心だけが化せずして、佛像のやうな状態で金でも石でもないやうに融結したのだ』とある。宋濂は『ある僧は、大般三昧の法を行つてゐたが、つて眺め入つてゐるのであつた。蓋しこの女は山水を愛する癰があつて、それが凭つた。鋸で切開いて見ると、中は晝いたやうな山水があつて、旁に女が欄に坐して掘れたと、肌膚がすべて盡てた心だけが石のやうに堅くなく、女が現れた。掘れば、頭心癩癰の石に化する。當然なことである。程子遺書に『波斯人が古墓を發そのために俱に化したものだ。かやうに人間の生ける形體すら全く石に化すると、に當ると遂に化して石になつた。蓋し石氣を吞納するところが久しくして、に陷入し、三年経つて掘り出したとき、蓋しはさなから活けるのやうであつたが、風穴に分たず、それで無情に入つたものだ。宋史の記載に、石工が石を採る際に石穴にある。世説の記載に、貞婦が山に登り夫を望んで石となつたところ、蓋し志に

ス
リ
(一)
獨
疾
ノ
肝
屬
之
ヲ
被
指
獨

了解される。これを眼に點けるのだから當然相宜しかるべきわけではないか。血は
てある。又。曰く、上には乳汁となり、下には乳汁となる。故に乳汁は血なることが
肝が藏し、脾が血を受け、視力が生ずるのだ。蓋し水が經に入つて血に成るの
宗。曰く、人乳汁が目を治する功多きは何かといへば、人は心が血を生じ、
常に人乳を服した。故に百歳餘にして身體がやうに肥えてゐた。
弘景曰く、漢の張蒼は年老いて齒が無く、妻妾百數人を置き、
【發明】乳れば涙を止める【大明】氣を益し、癰瘰を治し、皮膚を悦くし、毛髮を潤ほす。眼中
の弩肉を去る【蘇恭】濃煎汁を合せて服用するが神效がある【別錄】雀屎を和すれば目の
毒を解するには、肥白にして人をして飲ませ、悦澤ならしめ、目赤痛で涙多きを療す。(一)
補し、人をして肥白にして飲ませ、悦澤ならしめ、目赤痛で涙多きを療す。(一)
【氣味】甘く鹹し、平にして毒なし【大明】涼なり。【主治】五臟を
小兒がそれらを飲めば吐瀉して疳癰となる。最も有毒なるものである。
の、涎の如きものならんばいづれも用ゐてはならぬ。妊娠中に出来る乳は忌憚といふ。
婦人の乳の白くして稠きものを取るが佳し。色の黄赤なるもの、清んで膿穢なるも

る。聖惠方

乳を飲むが良し。千金。【あ】あらゆる蟲が耳に入りたるとき【人乳を滴らせれば直ちに人
は人を殺す。ただ人乳汁一升を飲めば立ちに癒える。】金匱要略。【牛、馬の中毒人
神效がある。】摘玄。【蛇を噉ふ牛の毒蛇を噉ふ牛は毛髮が後に向ふもので、その
出盡る。千金方。】臍腹に生じた瘡人乳、桐油等を和勻し、我翳わが翳で掃いて塗る。
【人乳汁で麴を和して傳ける。曉方なる手を觸られぬほど出
二粒ほどを共に煎沸し、牛黄ぎゅうわうを米粒ほど入れて與て服す。】劉涓子遺方。【鹽を粟
に分服すれば利す。】劉涓子遺方。【初生兒の尿せぬもの人乳四合、葱白一寸は乳前にせん浸し、四
蒸熱して洗ふ。聖惠方。】初生兒の尿に瓶にして煎しめ、稀稠適度の煎して瓶に貯へ、日
色せしめ、稀稠適度の煎して瓶に貯へ、日々に數回ける。或は乳連るを浸し、
人乳三合、金飲む。千金方。【眼熱赤腫】人乳半合、古銅錢十文を銅器中なべで磨つて
して服す。范汪方。【失音不語】人乳、竹瀝各二合をを温服する。摘玄。【月經不通】日

ノ竹瀝片云フ。
(三)シ

熊、し、薬を修治する場合は、戒の、性、命を修する人が、いづれも
 を、遠ける。それは、その不潔のため、陽を損じ、病を、生ずるから、
 明發 時移、く、婦人が、月經期に、入れば、惡液で、腥穢に、なる。故に、君子は、これ

の傷、及び前鋏に入るもの主たる効果がある【藏器】

月經衣 主治 金瘡の血の湧出するに、は、炙き熱して磨す。又、虎、狼、

氣味 平、鹹、辛、平、毒、無【性味】
主治 女勞復、疔、瘰癧、疥、癬、疥、癬、疥、癬【主治】
（貴臣）

だ。醫學を學ぶものはかやうなものを産む婦人もある。これ等はまた異常中の尤なるものゝ如く、五、六、十、十六で子を産む婦人もある。妻は六十餘で一女を生んだといふが子産を産むこともあり、遼史の所載の平江の蘇達卿の女は十二で懷妊したといふやうに、二十一、二十二、三十、四十の椿記室所載の平江の蘇達卿の女は十四にして天癸が初めて來り、四十九歳にして天癸が絶えるが通常であるが、人は胎數月經があつて子宮を忽ち大いにつつて胎を取ればぬのもがある。これは盛胎といひ、俗には垢胎と名ける。受。

婦人月水

(宋嘉祐)

名和
名和

4215-175455
Mensural discharge.

Mensural discharge.

月經衣を附す

月經衣を附す

名錄

月經(鼎峯)

天癸素問(開)

噤口

白紅

釋名

月經(素問)天癸(素問)紅鉛

下は海潮に應ずる。陰類である。血を以て主とする。その血は上は太陰に應じ、

に一回行か常態であつて、或は先じ、或は後れ、或は通し、或は棄^さは病である。

一生ずる水で邪家^{やけ}がこれを紅鉛といふは出^でる。婦人の經は一個月の經は一個月の經は天癸といふ意味だ。天癸は天一の故にこれを月を以て主とする。その血は上は太陰に應じ、下は海潮に應ずる。月には盈^み虧^かがある。

のだ。一生行らずして受胎するものがある。これは暗といふものだ。受胎後にいふもので、俗に按季と名ける。一年に一回も同行するものがあつてこれば避年といふところがある。これが耳から出血するだけかぬばかりならよく逆行といふのだ。三ヶ月に一回も行はねば眼、或は血し、吐血したた逆行期にただ吐き出し、古人はいつれとも言及してないが、心得て置く。

が瘡に入らるゝ【刺馬傷】婦人月水を入るが神效がある。能僧集驗方
 は肉中に聚血あるには、婦人月經衣を灰に燒き、方寸匕を酒でて服す。千金方【馬血】
 もものだ。だ。だ。月水、尿汁を服すれば解す。博物志【箭鏃が入りたる】
 焦銅で毒藥を作り、それを鏃にうつける、その箭に中れば沸爛して須臾に骨が壞れ
 燒いて性を存して研末し、麻油で調へて傅ける。【藥箭の毒を解す】交州の夷人は
 陰瘡【月經中を忌まらずして房事を行ひ、陰物の潰爛せるは、處女の血衣を互上での
 けば易へる。潰れたものはその四圍を封する。五日にして瘡を癒す。千金方】男子
 皮、疥癩根等分を末にし、婦人月經衣を水で洗つてその汁で和し、腫上に傅けて乾
 びに五寸深さに埋める。張華博物志【癰疽發背一切の腫毒。胡燕土、胡鼠登土、榆白
 聖草方】婦人をして嫉妬せしめぬ法【法】婦人の月水衣に蝦蟇を褰み、廁の前一尺の地
 し、一錢の水で調へて服す。口に入れば瘡を癒す。その見の大小を量つて加減する。
 えぬものを用ゐる。千金方【小兒の驚熱するには、月候血を取つて清燄を和
 【霍亂困驚】童女の月經衣を血共に灰に燒き、方寸匕を酒でて服す。あらゆる方で
 血衣に和して燒灰し、一二日同、方寸匕を酒でて服す。三日にして瘡を癒す。孟詵必效方

【附方】吐血の止まぬもの【その吐出した血塊を取り、黒く炒つて末

新

方

用た諸方のうち、ただ理に悖らぬものだけを下に收附する。

は天罰を免れ人間で、必ずその報を受くべし者共だから責めるまでもない。血を

虐兵殘賊の更に更に殘忍の甚しきものは、酒に入血を飲むものもあるが、それ

ない筈である。この方の創始者は甚しい殘忍な人だ。恐らく子孫が續かぬであらう。

もそも燥を潤し、狂犬を治する薬は他に夥しくあるのだ。この物に限つたわけは

血を飲んで潤ほすといふけれども、人は刺し取れるわけに行かない。で、

人

卒にか潤してはならぬ。

時珍曰く、肉乾を炙るは燥病であつて、

發明

も血を刺し取つて熱する【臈（臘）

身上に麩片が起るもの、又、狂犬の咬傷で寒熱して發せんとするものには、いつ

氣味】鹹し、平にして毒あり【主

治

ることは、いづれも精靈の極である。

死したとさ、血が化して碧となつたこと、人血が土に入つて年久しく經てば燐とな

これをして煉つて白汁とするは、陰毒を陽の純なるものとなるのだ。其弘が思

【虎、狼の傷瘡】月經衣を焼いて末にし、一日三回、方寸匕を酒で服す。(腫藏瘡)

人

血

(遺) 拾

英名

Human blood.
ひとち、ひとち、ひとち

集解

時。曰。血はやばり水のやうなもので、水、穀が中焦に入つて分泌し、毫蒸してその精微を化し、上に肺に注いで中に流溢し、外に布散し、中焦別に汁を受けて變化して赤くなり、隧道に行つて全身にその力を及ぼす、これが血である、命けて營氣といふ。血と氣とは名を異にして類を同するもので、清めるもの、營といひ、濁れるものは衛といふ。營は陰に行り、衛は陽に行り、氣は煦むものと主り、血は濡らすと主る。血は、體は水に屬し、火を以て用となすものと故に『氣は血の帥なり』といふのであつて、氣が升れば丹り、氣が降れば降だ。故に『氣は血の帥なり』といふのであつて、氣が寒すれば凝り、火が活すれば紅くなり、火が死すれば黒くなり、邪が陽を犯せば上逆し、邪が陰を犯せば下流する。蓋し人身の血はみな脾に生じ、心に攝し、肝に藏し、肺に布いて胃に施化するものである。仙家

承けて取つて器中に密封し、數塗り、效を取つて止める。（肘後方）【凍臙腫】婦人
る。（千金方）身、面、粉、人精、合を青竹筒に盛つて火上で燒き、その汁を器に
【方】新、三、善【麝香】人精で麝香白を和して塗る。數日にして瘰癧を

出血、湯火瘡に塗る。（時珍）

氣味【甘】、溫なり【主治】麝香を和すれば瘰癧を滅する。（弘景）【金瘡

瘻が生じ、愧心が動けば汗が生じ、怒心が動けば精が生ずるのだ』といつた。

て、氣が聚れば水が生ずる。故に人の身に食心が動けば津が生じ、哀心が動けば
鮑景翔は『神は氣の主であつて、神が動けば氣がそれに隨ひ、氣は水の母であつ

じ、その年を促めるは愚の甚しいものだ。誰を尤もやわめけるな。按ずるに、

嘔し服食せしめ、それを鉛と呼び、秘方としてゐる。放恣に貪淫にして穢滓を甘

すに、童女と交婚せしめて女の精液を飲ましめ、或は己の精にその天癸を和して吞

らである。故に血が盛なれば精が長じ、氣が聚れば精が盈つる。邪術家は愚人を誑

れば化せぬものだから損して喪つても一升までにはならぬ。精を蝕といふは、精は血に非ざ

るときは、心の腎の働が交差せずして腎水が上らなくなることから、津液が乾いて、故に遠くは近唾に如かず、近唾は唾せざるに如かずといふのである。人に病ある顔色が、橋ね。若く久しく唾するならば、精氣を損じて肺病となり、皮膚が枯涸する。氣を納め、清水が靈根に灌ぐといふ。人は、能く終日唾せねば精氣が常に留つて、それが臓を灌し、肢體を潤する結果となる。故に修養家は、津を嚥み、それと鹽泉となり、聚つては華池となり、散しては津液となり、漿と玉體いんたいといふ。これと溢れとなり、腎液は舌下に流入して靈液となる。道家ではこれを金漿、玉體いんたいといふ。は四、腎液は舌下に流入して、二、竅は心氣を通じ、二、竅は腎液を通じ、心氣は舌下に流下して神水に變ず。時珍曰く、人の舌下に

釋名

靈液(綱)目

神水(綱)目

金漿(綱)目

唾津口

英和名 唾津口 Saliva 英名 唾津口 和名 唾津口

人精、汁を頻りに塗る。【湯火傷灼く】痛まず、癒を易く、痕を無くする。肘後では、

集解 時珍曰、く、涙は肝の液である。五臟、六腑の津液はみな目に滲す。

眼淚(目)綱和名一名一なみだ

氣味【鹹し、毒あり。飲食にこれを入せば人を生ぜしめる】(時珍)

なる。故に『汗をばへ血なく、汗をばへ血を無』しといふのである。

集解 時珍曰、心汗、出於內、在胸中、血氣不和、外泄爲汗、

汗 (綱目) 英和名 汗のあせ Sweat.

【附方】
去り、次に牙^が垢^うで封^{ふう}じてし^ま護^{まも}る。甚^はだ妙^{めう}なるものにて、且^{かつ}腫^{しゅ}痛^うせぬ。(醫方摘要)
【毒蛇の咬傷】先^{まづ}小便^{せうべん}で血^ちを洗^{せん}ひ齒^はにば、人^{ひと}齒^は

頭、及び惡刺を出し、癰腫を破る【蘇恭】
 蟻を蝕に墜る【時珍】
 三

附方

氣味

鹹し、溫にして毒なし

主治

【黑^{くろく}】^二和して研つて塗れば、^一箭

釋名

齒垢

齒

垢

と發音する。
（キ）居近切

（宋）嘉祐

英和名

Tarter.
はかす、一名

そく

便で血を洗ひ去り、直ちに口中の唾を取つて頻りに塗る。^{（楊排醫方摘要）}

を去り、熱水で數回手を洗ふ。かくすれば十日餘で癒える。【毒蛇^{どくさ}の齧^{かみ}傷^{きず}】急に小

ば清く、^{（肘後方）}腋下^{うでした}【氣^き】自己の唾を腋下に擦り、數回擦つて指甲^{さう}でその垢

の發^は癩^{しか}【白^{しろ}梁^{りやう}米^{まい}粉^{こな}を鐵^{てつ}錘^ちで赤く炒つて研末し、衆人の唾で和して一寸厚さに傅けれ

に唾^{つば}を盛り盛^もり満^みて、少量を著けて指を浸す。一日にして瘡を癒える。^{（千金方）}【手^て】、それ

【附方^{ふはう}】代指腫^{たいしゆ}痛^{いた}【腫^{しゆ}に白^{しろ}砂^さを和して嚙^はぜてて腕^{うで}子^こに作り、それ

見ると鬼は眞に唾を畏れ、^{（新四）}【いとある。】いとある。

ものであつたらしい。そこで大いに唾し、それを賣つて千錢を得たといふ。これ

いだけた。「と答へた。急にそれをつとて羊になつた。恐らくそれは變化の

暖ヲム熱氣ハト
ク(一)呵氣吐ハ
ナトキ口近

であつて、天はこの火に非ざれば物を生ずること能はず、人はこの火に非ざれば生

一【發明】時珍。曰く、醫家の所謂、元氣、相火、仙家の所謂、元陽、眞火は同一

血たをたしめる【時珍】

せしめれば、久くして經絡が通透する。又、鼻衄、金瘡には、それを嘔すれば能く
めしめるが甚だ良し。凡そ人の身體、骨節痛するは、人をして更に呵あに
【主治】下元の虚冷には、日に重女をして、一定時に衣を隔てて氣を臍中に進

人 氣 (綱) 目 英和 名 呼吸のいき Breathe.

め、醫を生ぜしめる【時珍】

【氣味】鹹し、毒あり。凡そ母が哭して泣なに墮おせば、子をして時ときを傷

て、あたかも飢上の水うづわみづが滴るやうな關係である。

揺ゆき、搖ゆけば宗脈そうみくが感じて液道が開け、津が上に溢れるから涕泣が出るのである。腑が
るもの、で、凡そ悲、哀、笑、欬すれば火が中に激し、心の系が急して腑がみな

入つて燐となり碧となるやうな關係である。

星が圓ちて右となり、虎が死ぬと目が光が地に墜ちて化して白右となり、人血が地に
る。魄は陰に屬し、その精が沈淪して地に入り、化してこの物となるのだ。ややは
聚つて生るであつて、散ずれば死ぬ。魄は天に昇り、魄は地に降るのであ
必す再び穢死者を出す。蓋し人は陰、陽の二氣を受けて形體を成し、魂、魄が
り取れば手に入るものだが、やや遅れると深く入つて了ふのだ。掘らずに置くと
時珍曰く、これは穢死者の直下にある穢炭のやうなもので、即時に掘

釋名

人魄 (目) 和名 Human spirit. 英名

庸人である。ただ眞似事をした位では、到底やうな效驗のありやうなことはない。
家が祖氣を取るといふはこの法をいふのである。但し彼等の徒はいづれも氣饒せる
時(珍)が按ずるに、これは吾が徒の浩然の靈氣を内に養ふといふことであつて、符
が、その效はかやうなものである。況や穀を絶ち、天年を延へるや『とある。

を以て男は左、女は右をを嘔すれば卒安を得る。そもそも氣は無形に出でるものだから蛇に傷けられてもこれを嘔すれば癒える。百里を隔てた處に在つて遙に我が手或は形を現し、石を擲ち、火を放たれても、これを禁すればなみ自ら絶える。或は法は大疫の患者と同牀どうだに臥して傳染せず、精魅ある者に遇ひ、或は聲を聞き、痕を嘔すれば伏して退き、蛇、蜂を嘔すれば動かなくなる。吳越のある禁咒きんじゆ行氣ぎの虎、入らなくなく、箭矢を嘔すれば矢が反つて自を射り、犬を嘔すれば吠えず、虎、その湯を手で探ることが出來、金瘡を嘔すれば血が自ら止み、兵刃を嘔すれば刺して氣を以て水を嘔すれば水が逆流し、火を嘔すれば火が遙滅し、沸湯を嘔すればく、水上を行くべく、以て水中に居るべく、以て百病を治すべく、以て命を延ぶべく、以てある。故に善く氣を行ふものは、以て飢渴きよくを避くべく、以て年を延ぶべく、以て水を行くべく、以て氣を行ふも、氣を食ひ、冬は北方の黒氣を食ひ、四季を通じて中央の黃氣を食ふもまた大いに效胎息といふ。或は、春は東方の青氣を食ひ、夏は南方の赤氣を食ひ、秋は西方の白氣を食ふ。習つて自由出來るやうになつたば千數まで増して數へる。これならぬ。六、五五の數の順に數へて止め、そこで微かろかに吐く。耳に聞えるやうにしてはなら

釋名 時珍曰、許慎は『骨は肉の核である』といつた。靈樞經には『腎は

人骨 (遺拾) 英名 Human bones.
和名 人骨

ば癰を。外秘要

【聖濟總錄】牛の腹病で死せんとするものを婦人の陰毛を灰に焼いて飲服し、同時に陰毛を洗つた水を飲む。

死せんとするには、婦人の陰毛を灰に焼いて飲服し、同時に陰毛を洗つた水を飲む。【陰陽易病】病後の交接で卵腫し、或は腹に縮入して絞痛し、

新二。

附方

【時珍】

【主 治】男子の陰毛は蛇咬に主效がある。口に二十條を含んで汁を嚥めば、毒を腹に入らしめな【藏器】横産、逆産には、夫の陰毛十條を焼いて研り、猪膏で和して大豆大の丸にして吞む【千金方】婦人の陰毛は五淋、及び陰陽易病に主效

陰毛 (遺拾) 英名 Hair of the sexual organ.
和名 陰毛

げ。鬚(一)ノ下ノ下ノひ。

合はせて朕が意を表はさうといはれた。
帝は古』は、疾を治すべしといつたさうだ。今、朕も鬚を剪つて興へ、薬に
藥に燒いて功臣に賜ふに『といふ句がある。又、宋の呂夷簡が疾んだとき、仁皇
はつて服ませ、太宗皇帝はそれを知りて、遂に自ら鬚を剪つて灰に燒き、それを賜
ふといつた。太宗皇帝はそれを知りて、遂に自ら鬚を剪つて灰に燒き、それを賜
止。』
【發明】微。曰く、唐の李勣が病んだとき、醫師が『鬚灰を取つて服すれば止
るを母といふ。』詳細は亂髮の條を見よ。
【主治】燒き研つて癰瘡に傳ける【懷微】
【釋名】時珍。曰く、鬚上にある鬚といひ、頤下にある鬚といひ、兩頰にあ
る鬚(一)は、神魄を安する。驚怖、鬚を定めるには、水に磨つて服
す【時珍】

鬚(一) 鬚 證(類) 英和名 英名 Pearl. け

主治

靈の集るところである。修煉家では『坎を取つて離を補し、その純乾に復して聖胎時珍。曰く、人の頭は圓なる蓋と蓋の如く、隆にして天に象り、泥丸の宮、神合はぬものではないのである。

泥丸ハ腦ヲ指ス。

藏。曰く、これは天生、天賜のものだ。一身の骨を蓋するもので、顱門の未だ

十字に解けたものとで、方家でその名を婉曲に呼んだだけ。

【釋名】腦蓋骨(綱目) 仙人蓋(綱目) 頭顱骨 志曰く、これは死人の頂骨の

天蓋 (宋開寶) 英名 Bones of the human skull.
和名 しちかづ

香瓜仁を炒り乾し、末にして好酒で服用す。痛を止めること極めて速だ。(扶壽精方) 焼いた人骨の砕けたものを末にして掺る。(辟瘟神方) 死んだ童子の骨を煨え、酒で調へて服す。豫め桐木片で并定して置く。立ちに效がある。(醫林集要) 【臍瘻】接骨【焼いた童子の骨一兩、乳香二錢、紅絹一寸四方を灰に焼いて末にし、熱杖刑を受けて腫れず、瘡とならぬ。久しく服すれば皮もやば厚くなる。(醫林集要)

法。受ケテモ損傷セズ方

附方

新四。

【代杖】

人骨を焼いて末にし、空心に三錢を酒で服すれば、

のである。枯骨知なしといひか言へやうぞ。心ある人は十分考ふべきことである。
で裏んで收めせると、痛は遂に止んだ』とある。氣の相應するとはかやうなる綿
寒^さをたのだ「といひ、その骨を尋ねさせたとき、ただ床下にあつたので、湯で洗つて
ろが二年経つて復た痛むといひ出したが、その時、張は「それは取り去つた骨が
酒で麻酔させて肉を破つて骨一片を取り去り、膏を塗つてやるとそれです。瘡をた。と
滲み込むといふ。又、た何とて西陽俎に『ある者が腰を損じたとき、張七政が薬
人の骨を食ふとは何とてあらう。父の骨は親の子が血を刺して瀝^はせば
さやうなものではあるまい。且つ大も食はば食はないのである。しかる人は
報を獲たものであるが、方伎者は利欲の心から人骨を収めて薬餌とする。仁術は
時。珍。曰く、古人は暴ぜられた骨を掩ふてやると仁徳として、
毎に

發明

主治

臍^{うへ}瘡。

【骨、接骨、

いれども焚き棄てたものを取る】
(機器)

じてある。原本を見よ。

骨を主とし、いひ、骨度篇といふがあつて、骨の大小、長短、廣狹を甚だ詳細に論

人 胞 (拾遺) 英名 The placenta.
な

【小兒の白禿】大豆、臍體骨を各灰に焼いて等分を臘猪脂で和して塗る。(姚和衆集驗方)
 絲硫黄一錢を末にし、陰乾した冬蘿蔔芽を煎つた水で洗つてから貼る。(劉松石保嬰堂方)
 共に焼いて研る。【劉氏經驗方】臍瘡濕爛うきん【人頂骨を燒き研つて二錢、龍骨三錢、紅棗等分を入り洗淨してから摻る。神效がある。】又ある方は、紅褐色の小さい紅棗等分を入り洗淨してから摻る。神效がある。(紅棗等分)
 然に起發する。【下疳】天靈蓋を煨いて研末し、先づ黃藥湯で瘡は瘡を自蓋を焼いて研り、三分を酒で服す。○ある方は、雄黃ゆうわう二分を入れる。その瘡は靈香の條を見よ。【痘瘡の陷伏】灰平になつて長ぜず、煩燥し、氣急するには、天靈蓋を研末して一錢つづの酒を温で服す。【孫氏集效方】【青盲で視力なきもの】方は龍腦隔てて封じ、水で升降し、楊梅色になつたとき冷まして取出し、豆をば去つてに效を取る。【聖惠方】【膈氣不食】天靈蓋七箇を用ゐ、一箇毎に黑豆四十九粒を層層にうつのを米飲で服す。【聖惠方】【諸瘧寒熱】天靈蓋を煨いていい研末し、水で一斗字を服して

體癰せ、心煩するに、は、天靈蓋を酥で炙き、黃連（黄連）と等分を研末し、一、二、三、回、半錢刺してその血の色（血の色）を見る。また黒くならぬものならば七日で瘥える。【小兒の骨蒸】針で大の丸にし、一、二、三、回、七、九、つ、つ、を飲（飲）んで服す。若し胸前に青脈が出たならば、針で○張文仲の備急方では、人頭骨を炙いて三、兩、麝香十兩を末にし、千杵搗いて梧子とほどを黄に炙き、水五升で二升に煮取り、三、回に分服する。起死の神方である。を見るがその效驗（上清聖應仙方）である。【虚損蒸】千金方では、天靈蓋を焼の大いせてはならぬ。蟲が下つて後は白粥で補ふ。數日後に夢に人が哭泣（哭泣）して別れ去る氣を聞かせ、また雞、犬、猫の畜類、喪中の人、婦人、一切の穢に觸れた物に見凡そこの藥を調合するに、は、豫め居室から遠い清い室に、病人にその藥するが、黒、白、色のものは難治である。しかしやはり傳染の患をば斷（断）ち得るものだ。が、急に擲（擲）へて油鎗（油鎗）に入れて煎じる。その蟲が青、赤、黃色のものならば治癒た、一、服を進め。曉方に再び進める。それ取り下す蟲物は、その形状さまざまであるへて服す。一、服で蟲が下らぬときは、（約）そ人が六、七、日ほど歩行する時間を隔ててて調

附方 萬一、新。【河車丸】婦人の瘵疾、勞嗽、虛損、骨蒸等證を治す。

紫河車、初産の男子のもの、一二具を用ゐ、長流水中^{ついで}でよく洗淨し、煮て細く擘いて焙じ乾しして研り、山藥二兩、人參二兩、白茯苓^{はくふく}半兩と末にし、酒糊で梧子大の丸にし、麝香で七日間養ひ、三十五丸をつつを鹽湯で溫服する。(類聚方)

【大造丸】吳球曰く、紫河車、即ち胞衣であつて、兒が胎中に孕まれてあるときとは臍に系かり、胞は母の脊の系につつて母の陰を受けけるもので、父精、母血が相合して生成し、眞元の鐘ころの氣を得るものであつて、超然として他の金石、草木の類のものでは實は先天の氣を得るものであつて、每にこれを用ゐてて效を擧げてゐるが、婦人に用ゐる歳の比すべきものではない。蓋しその自ら出るところに本いて各々類に従ふのである。子宮なる中妙である。蓋しその自ら出るところに本いて各々類に従ふのである。子宮なるものでは必ず女子を有せ、危篤にして將に絶命せんとするも、難産のも、一二服がこれをも服用すれば活かせる。その功の極めて重きこと百發百中である。久しく服すれば、造化を奪ふの功がある。目明に、鬚髮は黒くなり、天年を延べ、壽命を益し、造化を奪ふの功がある。耳聰(みみ)、目明に、鬚髮は黒くなり、天年を延べ、壽命を益し、造化を奪ふの功がある。

指
廣
三
西
入
桂
ノ
桂
ノ
遊
錄
に
は
『
八
桂
の
猿
人
は
、
諸
種
の
獸
類
が
子
を
産
む
と
自
ら
そ
の
衣
を
食
ふ
』
と
あ
る
。

い。琉球、幾ばくの相違がある。か。似寄つたものだ。
と。はい、な。人が人を食ふのであつて、ただ崔氏の禁を犯すだけの問題ではな
あし、薬に和し擣いて餌といふことは、人を以て人を櫛し、その類を取るのだ
は、や。銅山西に崩れ、洛鍾東に應ずる自然の理である。今またこれを蒸煮し
は、社廟、汚水、井、竈、街巷にはこの物が禁制となつた』とある。按ずるに、こ
る。烏、鵲が食へばその兒が悪死する。火中に棄つれば兒が瘡爛するのだ。近來
もし緒、狗に食はれるとその兒は顛狂になる。蟲蟻に食はれるとその兒は瘡爛に
徳の吉方に藏むべきもので、深く埋め緊く築いて置けば生れた男子が長壽であるが、
と同じ意味だ。人類のするところではない。崔行功小兒方に凡て胎衣は天徳、月
が集つて『啖』とある。か。か。諸種の獸類が子を産むと自らその衣を食ふ
張師正の倦遊錄には『八桂の猿人は、男を産むとその胞衣を五味で煎調し、親族
按ずるに、隋書には『琉球國では、婦人が出産すると必ず子衣を食ふ』とあり、
れるものである。その説明はその方の項に詳記する。
だが、その方の薬味は平、柚のものであつて、人胞を加へてやうやくして服す

者は病後に聲が出なくつたが、これを服して氣壯にして聲が出るやうになつた。
にして已に衰憊してゐたが、これを服して壽九十に達して尤も強健であつた。
して二劑にして體、貌が頗る異り、續けて四人の子を生んだ。ある婦人は六年十六
をなすといふが目的である。ある人の弱を病んで陽事大痿したものが、これを服
合の意味は、大體に於て金、水の二臟を以て生化の原とし、河車を加へて大造の功
冬、人參、五味子、三味は生脈散と名け、いづれも肺の經の藥である。この方配
升あり降あるわけとなる。故に地黄と共に用ゐて固本丸といふのである。又、麥門
る。しかしその性は降があつて升がないのだが、人參を加へて元氣を鼓動すれば
天、麥門冬は能く肺氣を保護して火を炎せしめず、肺氣をして下行して水を生ぜしめ
すれば少陰に走るもので、白飛霞はこの四味を以て天生水丸としたものである。
生地黃は血を涼じ、陰を滋くするもので、茯苓、砂仁の力が加へてあり、黃蘗と共に
味通じて足の少陰の經の藥である。古方には陳皮を加へて補腎丸と名けたものだ。
ふるに、杜仲を補し、腰を強くし、牛膝を益し、骨を壯にするもので、四
加ものだ。龜版、黃蘗は陽を補し、陰を補するもので、河車の佐としたのである。

とが少なくない。蓋し邪火は只だ能く火を動さるだけ、物を生ずるとして、は不可能な
 ○世間の醫士は陽藥を用ゐて滋補するが、ただ益なるのみならず、害をなすて
 で煮た糊で丸にする。男子の遺精、婦人の帶下にはいづれも牡蠣あか粉かいふ二兩を加へ、
 空心に鹽湯で服す。冬期には酒に、夏期には五味子七錢を加へ、各鐵器てつに觸れぬや
 うにして末にし、地黄と共に酒を入れたれ、米糊こめかを小豆大の丸にし、八九つを
 去り、人參を蘆あしを去り、各一兩二錢、夏期には五味子七錢を加へ、各鐵器てつに觸れぬや
 をば去つて用ゐず、地黄を膏かうに杵こいて、天門冬てんもんとうを心を去り、麥門冬ばくもんとうを心を
 砂仁六錢、白茯苓はくふくろう二兩を入れて、絹袋きぬふくろに盛つて、互たがひに揉もみ入いれ、酒で七回煮、茯苓ふくろう、
 炙あいて一兩半いちりゅうはん、牛膝ぎうけつ二兩を去つて、酒に浸して炒つて一兩半、杜仲とちゅうを去つて、酥そ
 も妙である。黄わう蘆ろを皮を去つて、酒に浸して、石上いしじやうで磨こ淨し、蒸じやう熟じやくし、酥そが浸ひ
 して酥そで黄わうに炙あいて二兩、或は童尿どうにせに浸して、石上いしじやうで磨こ淨し、蒸じやう熟じやくし、酥そが浸ひ
 する。氣力が尤も完全で、且つ火毒がない。敗船はいせん尿にせに浸して、石上いしじやうで磨こ淨し、蒸じやう熟じやくし、
 ぬ、米泔まいせんで洗淨して新瓦しんわで焙ばうして乾し、研末けんまつし、或は淡酒たんしゆで蒸じやう熟じやくし、搗こき、
 用もちひ、故に大造丸と名ける。紫河車ししか、具ぐ、男おとこには女胎にょたいを、女めには男胎なんたいを、初はつ産さんのもの

【釋名】命時。曰く、胎が母の腹に在つては臍が胞に連り、胎息は母に隨

初生臍帶 (遺) 拾 The umbilical cord.
英名 臍のな
和名 臍帯

ものである【時珍】

熱病はこれを飲めば立ちに效がある【臍器】反胃久病には、一鍾を飲む。蟲が出る
て歇まず、狂言し、妄語するもの、頭上の無辜病、髮堅ち、臍^{ひん}痞する等の證。天行

【氣味】辛し、涼にして毒なし【主治】小兒の丹毒、諸熱毒發で寒熱し

つて埋め、三五年後に掘り出して取つて藥にする。

【修治】水のやうになつたものである。南方の地では、甘草と諸藥を和して餅^{ひん}に盛
て藏^{かく}。器。曰く、これは衣を地下に七八埋め、化^{くわ}けて水になり、澄^{てい}徹^{てつ}に

胞衣水 (遺) 拾 Placenta-water.
英名 臍のな
和名 臍帯

卷之二十一

行けるやうになつた。(諸證辨疑)

いた場合はこれを用ゐられないといふ。これは殺場に於ける救急の法であつて、めて效はあはれども、但し再び他の薬を用ゐると必ず傷爛する。先に他の薬を敷極

【發明】

時珍

曰く、北虜の戰場中で、多く人膽汁を取つて

【氣味】

【主 治】

【人瘧】

戸

連

瘧疾

人

膽

(拾遺)

英名

The human gall.

一名ヒトノクビ

【主 治】

【時珍】

名、(一) 地下至ハ宮刑ノ獄

と。瘧疾に下る者は、この法は必ず心得べきことである。故に此に附記する。

尋ね出して粉に搗き、酒で服せると數日ならずして瘧を癒えた。『これを観る

ところから流血が甚しく、月を經ても合はなかつたが、ある人が、その切落した勢を

【釋 名】

陰至

時珍曰く、人の陰莖は藥物ではな

い。陶九成輯録の記載に

六 (一) 神關ハ 臍上ノ

勢 (綱) 目 英和名 一名 (ハコ) The human pinis.

妙であらう。(海上方)

は硃砂少量を入れる。(保幼大幸)

【痘風赤眼】初生小兒の臍帶血を熱に乘じて點ける

にその本身から剪下した臍帶を灰に燒き、乳汁で調へて服す。痘患を免れ得る。或

錢、膏歸の頭一末、麝香二字を摻る。(辛)効心經

【解】胎毒の預解 小兒の初生 日三

附方
新三
【臍汁の乾かぬもの】を落しにた臍帶を綿で裹み、燒き研つて一

三。新。

附方

傳け【る】(在) 知

主治 燒いて末にして飲服すば瘡を止めめ【る】(酸器)【胎毒を解す。】臍瘻に

あつて、臍の意味は齊である。

の物は心、腎の中に當つて、前は(二)神關に直り、後は命門に直るから臍といふので

乾乾いて自ら落ちる。瓜の蒂が脱ちやうなものだ。故に人に命の幕である。そして。

ふ。胎が母の腹を出入する臍帯を既に剪つて、一點の眞元が命門、丹田に歸し、脐が

人 (The human flesh. 英和名 ヒトニク)

で二人を治し得る。(聖惠方)

つを綿に裏んで鼻中に納れる。直ちに癒える。男子は左に、女は右に納れる。一丸つなるには、人膽は、人砂、雄黄、麝香等分を末にし、醋糊で綠豆大の丸にし、一丸つ不定に、通草湯を用ゐて服す。(いれども普方にある) 【鬼瘡で病狀の進退するもの】 【不定黒きものは、瘡を治す。いづれも末にして五十粒を服し、瘡は陳皮湯ちんぴとうを用ゐて服し、満て、麝香少量を入れ、竈の突上で陰乾して、一半の青きものは瘡を治し、一半の瘡を盛る 【生人膽に糖米を盛る】 【連年の瘡】 【噎食して下ぬるもの】 【生人膽に糖米を盛る】

附方

子なすことではな

といふものもある。これは戦争中に於ける勝手な振舞ふりまわに過ぎぬといひながら、君には、人を殺してその膽を取り、酒に和して飲んで『人間を勇壯にする薬だ』など、膽を收めて乾して用ゐて、害にはならない。い。か。し。も。す。る。と。殘ざん忍にんな軍人などの中

(一) 遮へ、今ノ遮東。

それ本頭は黒く、豕は遠にゐるもの、白く、水に食するもの、二本あつてみても同じもの、ではあるが、風土、氣習に因つて自然に、一様に、様でない。李時珍曰く、人は性を乾坤に禀けて、形を一一氣に因むものの、目が横に、足は

方民綱目 (Inhabitants of different localities)

であるものか否かは判らないが、姑く巻末に附記して博識の人に俟つ。
 のだといふ。かまいたを蜜人といふ。陶氏が記載したやうなものがもしも
 したものが少量を服すると立ち癒えた。これは彼の中にもやう多くなはな
 した。百年経つて後、その棺を開いて見ると、屍は蜜に成つてゐて、肢體を折傷
 ので、國人はそれを石棺に殮め、中に蜜を満てて骸を浸し、棺に年々蜜で埋葬
 した。か、一個月ばかり経つと大、小便までみな蜜になつた。やがて死んだ
 を捨身して衆生を濟度せんといふ時。曰く、按ずるに、陶九成の輟耕錄に、『天方國に、年七八十で、

英名 A mummy.
 和名 みい
 目 (綱) 伊乃木

かやうなるものは人間性を有たぬ盗賊のこととて、誅を加へる價值さへもない者だ。
 『は古』來兵亂の際には、人肉を食つて想肉と呼び、或は兩脚羊と稱へた『とある。
 と高く古の古の上に出でたものだ。如何にも感^だしいとてである。又、陶九成の輟耕錄
 に入てはならぬ』と仰せられた『とある。嗚呼、聖帝の教に關する疑慮はそ
 ることこれより甚しきはない。自今かかる者あつた場合には、表彰すべき者の例
 なり、肝を割いたその上には子を殺すといふやうな者も出て來るわけだ。肝を割くやう
 も蒙らうといふやうな者も出て來るわけだ。表彰でも受けて特別に賦役の免除で
 ら、わび^{わび}奇矯^{きけう}を街^{まち}つて世を驚^{おど}かし俗を駭^{おそ}し、表彰でも受けて特別に賦役の免除か
 こともあるが、その事柄も、今やうな後世になると、愚昧の徒の一時的に激發か
 は、懇切の至に如何にも已むを得ぬことであつて、氷に臥し股を割くといふやう
 手は、親^{かん}に事^かへては、病あれば拜して良醫に托する。天に呼び神に禱するに至つて

て痺し、土氣を得るところが多い【記載は宋史集にある】

い。墳^{（一）}の民は皆にして方である。金氣を得るところが多い。原隰^{（二）}の民は豊にし

り、水氣を得るところが多い。丘陵の民は國にして長く、火氣を得るところが多い。

山林の民は毛あつて瘦せ、木氣を得るところが多い。川澤の民は黒くして津があ

である【記載は孔子家語にある】

】堅土の人は剛、弱土の人は懦、塹土の人は細、息土の人は美、耗土の人は醜

あり、その氣は悍勁、その人の聲は雄である【記載は括弧にある】

の氣は駢^{（三）}烈、その人の聲は捷である。○徐州はその音は角、宮、その泉は酸に甘が

平、靜、その人の聲は端である。○雍冀はその音は商、羽、その泉は辛に鹹があり、そ

人の聲は塞である。○兗豫はその音は宮、徵、その泉は甘に苦があり、その氣は

である。○梁州はその音は商、徵、その泉は苦に辛があり、その氣は剛、勇、その

荆揚はその音は角、徵、その泉は酸に苦があり、その氣は慄^{（四）}、輕、その人の聲は急

の音は角、羽、その泉は鹹に酸があり、その氣は舒連、その人の聲は緩である。○

九州^{（五）}を殊にし、水泉各、風聲を異にし、氣習の剛柔が同じくない。○青州はそ

（一）墳。山、岡、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

石部ノ註、

食つて勞せず、その病は多く痿痺であつて、その治に宜きは導引、按摩である【素問】素問は難を痺であつて、その治に宜きは微鍼である。○中央は地本にして濕し、その民は難を撃る處で、その民は酸を嗜んで肥を食し、理緻にして色が赤い。その病は多く聚寒で滿を生じ、その治に宜きは灸焔である。○南方は地下く、水土弱く、その病は聚寒で滿を生じ、その治に宜きは乳食する。その病は地高く、陵に居り、風寒く米冽であつて、その民は野處して乳食する。その病はにして脂が肥えてゐる。その病は内に生じ、その治に宜きは毒藥である。○北方は陵に居り、風多く、水土が剛彊であつて、その民は衣を著けすして褐を著け、其食は黒くして理疎く。その病は瘡瘍が多く、その治に宜きは砭石である。○西方は東方は海に濱し、水に傍る魚鹽の地であつて、その民は魚を食ひ、鹹を嗜み、である。されば方民を集め部に附録し、醫診の參考にする次第である。水土にそれぞれの差異があれば、その人の生、長、氣、息がやより殊るわけ營養とが異れば同様に行かぬ勢である。故に五方、九州の相違があり、葉樹の粗と羅紵の美服とでは肌膚に玉石の相違がある。居處の腥く、草に食するものは麋鹿の肉食と藜藿の粗食とでは腸胃に天淵の

がそれである。脈とは一生涯經水の不調なもの、及び崩帶の類のものがそれである。塞つたものである。角とは角のやうな物があるので、古代に陰挺と名けたものは、竅が小さいもの、即ち實女である。鼓とは竅が全然なく、鼓のやうに皮で絞と螺とは、牝の内部が旋つて物があり、螺のやうな構造のものである。紋と

【角、脈、鼓、螺】

得、非女は陰氣の塞りたるを得たものであるかと思ふ。五不女とは、螺、非女は母たることが不能であるのは問題だ。これは非男は陽氣の虧けたる五種とし、坤を母とするは常理であるが、五種の非男は父たることが不能であり、五とし、氣化の感ずるところであつて、全然その關係が別の問題だ。そもそも乾を父とら、塊を生めば天下が饑荒するといつたが、これは社會人事に就いて論じたのだか肉を主り、三人女を生めば國が淫して政を失し、十子を生めば諸侯が位を競ひ、人が多くはこれらも臆度であつて確見ではない。王氷の玄珠語には『三子を生めば太平を辨じ、高陽生の脈訣には脈の縱横、逆順を以てて品、胎形を別けたが、恐らずる方が疑はしいのである。王叔和の脈經では脈の左、右の浮、沈で男、女、男、

21
二
二

史記に『陸終氏の娶つた鬼方の女は、孕んで左脇から三人を出し、右脇から

【ある男陰が脊に生じ、女の陰が生ずるの類のやうなものであるか】

か。これには子臓に氣を授けるが、駢^{つばな}に生ずるの系に不同があり、宋史の記載から産し、額から産し、背から産し、背から産し、脚^{つばな}から産するものがあるが、胎

五月にして帝を生んだとある。

五月で生んだとある。『搜神記』は『黃帝の母は名を附實といふ。妊娠二十
いれも妊娠四ヶ月で生れたとある。『三十三國春秋』は『劉嬖の母は妊娠十
んだ。劉嬖の母は妊娠十三月で生んだとある。』漢書には『堯、及び昭帝は

『獠人は妊娠七ヶ月で生れるとある。』晉書には『符堅の母は妊娠十二月で
』黃牛^{うし}羌^{きやう}人は、妊娠する事八ヶ月で子を生んだとある。』博物志には

るものは多くは成育し難い。七は變ずるか八は變ぜないのである。〇〇博物略
現に妊娠七ヶ月で子を生まむものがあつて、多くは成育するが、八ヶ月で生

してもかやうに久しきに至るわけはなさうに思はれる【

云々。特殊ノ器ヲ所ル奇
ニシテ奇恒ノ奇ハ孤奇
ノ意ヲ入ル奇ハ孤奇

北。者宜昌縣ノ西ニ湖峽
ノ誤、黃牛羌名ナハ黃
在

つて長さ一尺餘の髪が生えた』とある。○草木子には『元の正年間、京師の
は宋の宣和の初年、米節の妻は年四十にしてある夜、^夜が痒くなり、翌朝に至
含んで契を生んだのも、いづれも夫なくして孕んだの』とある。○宣政錄に
史記に『姜源は巨人の跡を見て、それを履んで棄て生んだ。有^て姦^て氏が鳥卵を

【かゝ

變易があるの、で、女國では自ら孕み、雄雞が卵を生むの類やうなわけはあるま
を出し、男に子して兒を産むものもあるが、何故であらうか。それはその氣脈に時
は妻^{さい}として感し、思女は夫あらずして孕み、婦女にして髪を生じ、男子にして種^こ
陽は生じ、陰は長ずるが、孤陽は生ぜず、獨陰は長ぜざるが常理である。かしこ
し、兒が勝られ生れて俱に恙なかつた。

時珍曰く、吾朝の隆慶五年二月、唐山縣の民婦が妊娠して左脇が腫起

から出生し、瘡の瘡は随つて合した。その子の名を佛記兒といつた』とある。
化中、宿州の婦人は妊娠して脇やうに腫れ、臨月に及んで兒がその癰成
て、五歳にして山に入つて道を學んだ』とある。○瑯琊鈔には『吾が明の朝の成

○嵩山記には『陽翟やうたつのある婦人は、妊娠三十月にして子を生ま、母の背から出が、釋迦しやくぢやは摩耶まゐの右脇みぎわきから生れた』といふが、やはりこの理である『とある。浮屠氏ぶとて、瘡かさが合あして母子共に悲かななかつた。屈雍くゑいの事實の旁證となるので、浮屠氏ぶとに、は『書田しよたんの尉ゑう舎しやの左旁さへに住すまんでゐた町人の妻が生んだ男は股髀ふでの間から出と瘡かさになり、兒こがその瘡かさから出て、母子共に平へいであつた』とある。〇〇野史よしの時、常山じやうしやんの趙宣ぢやうせんの母は普人ふじん將しやうとなり、名なを胡こと見みたつた額上がくじやうに瘡かさがあつて、兒こは李宣りせんの妻樊氏はんしは義熙ぎぎ年間に懷妊くわいにんして生れたかゝつたが、額上がくじやうに瘡かさがあつて、兒こを母、子こを安やすかだといつてある』とある。〇〇異苑いゑんには『晉の時に魏興ゑいけいから出たが、その母は自みづか若じやくとして何等畏れ痛むところもなく、今では瘡かさが已やに癒なをら南なんの屈雍くゑいの妻王氏わんしは去き年十月二日を以て男兒なんにを生み、右みぎ腋あきの下、小腹せうはくの上かたやうなものだ』とある。〇〇魏志ゑいしには『黄初六年、魏郡ゑいこんの太守たうしゆ孔羨くせんの上表じやうへうに汝には必ず尤物ゆうぶつがある。修己しゆきの背が拆はけて西さいが生れ、簡狄かんてきの胸が拆はけて契けいが生れ三人を出し、その六人の子孫に千年の間國を傳へた。天の將に興さからんとする

○李時珍曰、く、吾が明朝の隆慶二年、山西の御史朱熹の疏に『靜樂縣の李良雨は妻張氏を娶つて四年になつたが、後貧窮をしてその妻を去り、自身は他人が止んでゐれば傭ひに罷^{つか}れてゐた。』と云ふ。元正月、たままた腹痛をし、時に人々が覺えず退縮し、腹に入つて入る婦人の戸になつた。次の月には水も經行つて來たので、魏襄王の三十三年、女子が化して男子となつたものがあつたといふ。

『二十四孝』

漢書に『哀帝の建平中、豫章の男子が化して女子となり、越中^{こくちゅう}の男子が化して女子になり、嫁いで一子

測入からあるものである【】

事は關係させたまはるが、かしこその臟腑、經絡の變の機微なることは社會化すれば賢人が位を去り、女が男に化すれば人となつて男となつて男が女に化すか、政が行はれるか、人か、王となつてある。『春秋澤澤』には『男が女に化

ノ意ナリ。一。蒙古人ノ達官ト略シテ、
義花ノ達官ト略シテ、
義花ノ達官ト略シテ、
義花ノ達官ト略シテ、

ではあるまいか。京房の易占には『男が化して女となると女が淫刑が濫れるからだ。女
をもつものは何故であらうか。それは乖氣が妖を致し、變亂して常に常に反するもの
の賦性は一定して變らないのが常理だが、しかし男が女に變化し、女が男に變化す
男は生れて覆ひ、女は生れて仰ぐ。水に溺れた場合もやゝ通ひで、陰、陽、

塊を産した。剖いて見ると一人の兒で、肢體、毛髮悉く具つてゐた』とある。
西の歲、横の淫。淫の儲孔方は忽ち膨脹を患ひ、慣として數月經つと脇から一
めて分娩した。その男は逃げ去つた』とある。〇〇西樵野記には『明の嘉靖
た青果を賣る男が孕んで子を産んだ。産婆が取上げて七人まで男へ始
を食へやうになつてから止つた』とある。〇〇宋史には『宣和六年、都城に
の、徳秀自ら乳を與へてゐたが、數日にして徳秀の乳の中から渾が流れ、物
から渾が出た』とある。〇〇唐書には『元徳の兄の于樵は親を喪つた乳
たばかりだったので、下男の李善といふものが自ら乳を哺せると、ために乳
家悉く疫死して、ただ一人の孫だけが生き残つた。その孫は生れて數十日
一、三、達婦は髭鬚の長さ一尺餘になつた』とある。〇〇漢書には『南陽の李元は

テ居ル。御集ノイフ書ヲ出
ニ見サシテ、陳ハ怪ル
カ五ノ在物ノ名、

賢婦が化して貞石となるは、有情から無情へゆくものだ。○世説には

譚子化書に『老楓が化して羽人となるは、無情から有情へゆくものだ。

【かであらうか】五西の怪となるやうなものであらうか

となるといふやうに、心の變ずる結果は變ぜぬけに行かず、孔子の所謂、物老虎

いか。それとも譚子の所謂、姪の者は化して婦人となり、至暴の者は化して猛虎

れる。その靈を得れば物が人に化し、その靈を失へば人が物に化するのではあるま

は何故であらうか。これは人もやはり太虚中の一物であつて、いづれも氣もある

」人は物に異なるが常理であるが、しかし人が物が人に化するものがある

で死んだとある。

』僖宗の光啓二年春、鳳翔の郡^縣女子朱^氏は化して男となり、十日ばかり

の元嘉二年、女子が化して男となつたものが燕にあつた。○『唐書に

郡の女子唐氏は漸次に化して男となつた。○『南史には劉宋の文帝

七八に至つて性氣が完全になつた。○『又孝武帝の康初年、

○晉書には『惠帝の元康中、安豐の女子周世靈は漸次化して男となり、

(一) 鳥
指入
鳥嶺
下馬
來半

になる。と耳を翼にして飛び去り、蟲物を食ひ、陸方に近くまた還つて来て故の夜○南方異物志には『嶺南の溪中に飛頭鷺といふがある。項に赤痕あり、夜は北方に比肩民といふがあり、半體相合し、送^ひに食ひ、送^ひに望むとある。』
山海經に『三首國は一^{三首}身三首である。』崑崙^{クワン}の東に在る『とある。』爾雅に

民と同例に論するわけに行かぬ。とはいひ、しかしやはり異なることである【
垂尾の民がある。これは邊^{ヘン}餘氣の生ずるところで、鳥獸と同じく、吾が同胞の
人^{ウツ}は四肢、七^セ竅^{キョウ}を具へるが常理である。しかし荒裔^{クワン}の外には、三首、比肩、飛頭、
た』とある。

は『漢末に馬が人を生み、名けて馬異と呼んだ。長ずるに及んで胡地へ逃亡し
拾ひ取つて覆ひ抱くと一^一兒^ニが生れた。後に徐國を繼^ついだとある。』○異説に
博物志に『徐^セの王^ワの母は卵^ワを棄てたところか孤獨の老母が
すもてはあまるか【

これは神異の憑^つるものがあつて、或は感^{かん}通^{つう}するものがあるか、たまたまにやうな結果をな
あるまいか。又、人にして卵^ワから生れ、馬^{うま}から生れる者もあるは何故であらうか。

はその視聽、言動が邪思に觸れ、形に隨つて感應してやうな結果をなすものであれば、
しかし人にして蟲、獸、神鬼、怪形、異物を産む者のあるは何故であらうか。これ
【參同契に燕、雀は鳳を生ぜず、狐、兎は馬を字すず』とあるが常理であるが、

に變ずる』とある。

りあつた』とある。○抱朴子には『狐、狼、獾くわん、三百年にしてみな能く人
一沙門が化して蛇となり、樹こを繞めぐつて抽き出たところを見ると、長さ二丈ばかり
女二十餘人悉く化して虎になつた』とある。○隋書には『文帝の七年、相州の
病死したので、牛を殺し、客を招いてその牛を食はせたと、食つた者が男、
く感じてゐるうちに、越められた處が悉く白くなつた。ところが突然その見が
五六人の兒に牛を牧はせてゐたが、その兒が日に牛に越められて悲だ
沃けたので果さなかつた』とある。○顧微の廣州記には『直隸陽縣の徼民は十年
宗の元和二年、商州の役夫が化して虎になるところだつたが、大勢の者が水を
んとしたがい、擡もつへられて止んだ。しかし虎の毛が生がえてゐた』とある。○又『
虎となる』とある。○唐書には『武后の時、柳州の左史が病のため虎に化せ

刊行所

暴

罰

氣

振替口座東京一六四・一三七八
電話日本橋五一・六七八

東京市日本橋區通三丁目八番地

印 酬 著 氣 賀 林 一

東京市日本橋區通三丁目八番地
和田利彦

東京市日本橋區通三丁目八番地 眞木 鈴海

翻監 寧修 者集
鈴 白 井 光 大 郎
真 木



註頂 國譯本草綱目 非賣品 (第二十冊)

日-4147

3 1378 00771 0190



7710190

京 出 版
東 春 陽 堂

